九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

―XXV―

福岡県筑紫野市所在遺跡群の調査

本 文 篇

1 9 7 8

福 岡 県 教 育 委 員 会

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

―― XXV ――

福岡県筑紫野市所在遺跡群の調査

1 9 7 8

福 岡 県 教 育 委 員 会

序

九州縦貫自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の調査は昭和51年度に終了し、本書はこのうち、昭和49年度に調査を実施しました道場山1・2地点の調査報告書であります。ここからは、弥生時代の甕棺墓・木棺墓などの墓地遺構と、住居跡・貯蔵穴などの生活遺構を主として検出しております。自動車道路建設に伴って筑紫野市内からは多数の貴重な遺跡が発見されており、本書はこの筑紫野市所在の遺跡群としては第6冊目にあたります。

報告書発刊にあたり、発掘作業に従事していただいた地元名位、整理作業にご尽力いただいた関係各位に対し，ここに心からお礼を申し上げるしだいです。

昭和53年3月31日

福岡県教育委員会
教育長　浦　山　太　郎

例　言

1．この報告書は、九州縦貫自動車道路建設予定地内の遺跡について行なった事前調査のうち、筑紫野市所在遺跡群で、昭和48年3月～4月に調査を実施した道場山1地点と、昭和48年5月～8月に調査した道場山2地点の調査報告書である。

2．発掘調査は、日本道路公団の委託事業として、福岡県教育委員会が実施した。

3．本書の執筆はつぎのとおりである。

Ⅰ……川述昭人
Ⅱ……川述昭人
Ⅲ　1……川述昭人
　　2　(1)……川述昭人
　　(2)A……橋口達也
　　B……永井昌文
　　C……橋口達也
　　D……橋口達也
Ⅳ　1……川述昭人
　　2……川述昭人・平ノ内幸治
　　3……川述昭人

4．人骨の鑑定は九州大学医学部教授永井昌文氏の御協力を頂いた。

5．昭和48年度に行った九州縦貫自動車道路関係埋蔵文化財の調査は主として瀧竜二主事と、石山勲・酒井仁夫・川述昭人・中間研志の各技師が担当し、昭和49年度は主として山本文和主事と、栗原和彦・石山勲・酒井仁夫・川述昭人・上野精志・児玉真一・中間研志・池辺元明の各技師が担当した。

6．道場山1地点の遺構実測は関係調査員・調査補助員が全員で行った。甕棺の実測は橋口達也・近沢康治・中野恵子が行い、このうち、76号下甕を北九州市立歴史博物館の武末純一が、45号・50号・70号甕棺を和歌山県立紀伊風土記の丘職員が実測した。他の遺物実測は橋口達也が実施した。製図は遺構を芦塚照子が行い、その他は橋口達也が行った。2地点は遺物実測を川述昭人が行い、このうち石器の実測・製図を平ノ内幸治が行った。製図は芦塚照子が担当した。写真撮影は、遺構を川述昭人が、遺物を岡紀久夫と前田次郎が行った。

7．本書の編集は川述昭人が担当した。

本　文　目　次

頁

Ⅰ　はしがき …… 1

Ⅱ　位置と環境 …… 3

Ⅲ　道場山1地点の調査 …… 7

1　調査の経過 …… 7

2　調査の内容 …… 9

(1)　弥生時代の遺構 …… 9

A　甕棺墓 …… 9

B　箱式石棺墓 …… 90

(2)　弥生時代の遺物 …… 92

A　甕棺 …… 92

B　人骨 …… 171

C　着装品 …… 172

D　副葬品 …… 174

Ⅳ　道場山2地点の調査 …… 183

1　調査の経過 …… 183

2　調査の内容 …… 185

(1)　弥生時代の遺構と遺物 …… 185

A　木棺墓 …… 185

B　土坑墓 …… 188

C　甕棺墓 …… 192

D　住居跡 …… 195

E　袋状竪穴 …… 196

F　その他の遺構 …… 208

(2)　古墳時代の遺構と遺物 …… 235

A　方形周溝墓 …… 235

(3)　歴史時代の遺構と遺物 …… 236

A　土坑墓 …… 236

(4)　その他の遺構と遺物 …… 239

3　小　結 …… 250

図 版 目 次

道 場 山 1 地 点

本文対照頁

PL. 1 (1) 道場山1地点遠景（東から）…… 9
(2) 道場山1地点北側崖面発掘前近景（北から）…… 9
2 道場山1地点全景（東から）…… 9
3 道場山1地点全景（南から）…… 9
4 (1) 道場山1地点近景（東から）…… 9
(2) 道場山1地点近景（南から）…… 9
5 (1) 1号甕棺墓…… 9
(2) 2号(左)・3号(右)甕棺墓…… 9
6 (1) 3号甕棺墓人骨出土状態…… 9
(2) 4号甕棺墓…… 9
7 (1) 8号甕棺墓…… 15
(2) 10号甕棺墓…… 15
8 (1) 11号甕棺墓…… 15
(2) 13号甕棺墓…… 15
9 (1) 14号甕棺墓…… 15
(2) 15号甕棺墓…… 21
10 (1) 16号甕棺墓…… 21
(2) 17号甕棺墓…… 21
11 (1) 19号甕棺墓…… 21
(2) 20号甕棺墓…… 21
12 (1) 21号甕棺墓…… 21
(2) 21号甕棺墓人骨出土状態…… 27
13 (1) 22号甕棺墓…… 27
(2) 23号甕棺墓…… 27
14 (1) 24号甕棺墓…… 27
(2) 25号甕棺墓…… 27
15 (1) 26号甕棺墓…… 27
(2) 28号甕棺墓…… 33
16 (1) 29号甕棺墓…… 33
(2) 30号甕棺墓…… 33

PL. 17 (1) 31号甕棺墓…… 33
(2) 32号(左下)・33号(左上)・34号(右上)・35号(右下)甕棺墓……33・37
18 (1) 33号甕棺墓…… 33
(2) 34号甕棺墓…… 37
19 (1) 36号甕棺墓…… 37
(2) 39号甕棺墓…… 43
20 (1) 38号甕棺墓…… 37
(2) 40号甕棺墓…… 43
21 (1) 40号甕棺墓壺出土状態…… 43
(2) 42号甕棺墓…… 43
22 (1) 43号甕棺墓…… 43
(2) 45号甕棺墓…… 47
23 (1) 46号甕棺墓…… 47
(2) 49号甕棺墓…… 51
24 (1) 48号甕棺墓…… 47
(2) 48号甕棺墓人骨・貝輪出土状態…… 47
25 (1) 48号甕棺墓人骨・貝輪出土状態 …… 48
(2) 48号甕棺墓貝輪出土状態…… 48
26 (1) 50号甕棺墓…… 51
(2) 55号甕棺墓…… 51
27 (1) 62号甕棺墓…… 59
(2) 63号甕棺墓…… 59
28 (1) 64号甕棺墓…… 59
(2) 65号(上)・66号(右下)甕棺墓…… 59
29 (1) 70号甕棺墓…… 63
(2) 71号甕棺墓…… 63
30 (1) 72号甕棺墓…… 63
(2) 73号甕棺墓…… 63
31 (1) 71号(左)・74号(右)甕棺墓…… 63
(2) 74号甕棺墓…… 63
32 (1) 75号甕棺墓…… 67
(2) 82号甕棺墓…… 71
33 (1) 84号甕棺墓…… 71
(2) 85号甕棺墓…… 71
34 (1) 86号(左)・56号(右下)甕棺墓……71・55

PL. 34 (2) 87号甕棺墓…… 75
35 (1) 89号甕棺墓…… 75
(2) 90号甕棺墓…… 75
36 (1) 93号甕棺墓…… 81
(2) 102号甕棺墓…… 85
37 (1) 96号甕棺墓…… 81
(2) 96号甕棺墓貝輪出土状態…… 81
38 (1) 100号甕棺墓…… 85
(2) 100号甕棺墓下甕…… 85
39 (1) 100号甕棺墓鉄戈出土状態…… 85
(2) 100号甕棺墓鉄戈出土状態近撮…… 85
40 (1) 97号甕棺墓…… 81
(2) 102号甕棺墓…… 85
41 (1) 104号甕棺墓…… 89
(2) 109号甕棺墓…… 89
42 (1) 110号(左)・111(右) 甕棺墓……89・90
(2) 110号(右)・111号(左)甕棺墓 ……89・90
43 (1) 1号箱式石棺墓…… 90
(2) 2号箱式石棺墓…… 90
44 甕棺① 13号・14号上・14号下・15号甕棺……15・21
45 甕棺② 17号上・17号下・18号・19号甕棺…… 21
46 甕棺③ 20号・21号上・21号下・22号甕棺……21・27
47 甕棺④ 23号・26号・27号上・27号下甕棺…… 27
48 甕棺⑤ 30号上・30号下・31号・32号甕棺…… 33
49 甕棺⑥ 33号上・33号下・34号上・34号下甕棺……33・37
50 甕棺⑦ 36号上・36号下・39号上・39号下甕棺……37・43
51 甕棺⑧ 37号・40号・41号上・42号下甕棺……37・43
52 甕棺⑨ 48号上・48号下・60号上・60号下甕棺……47・55
53 甕棺⑩ 62号・63号上・63号下・71号上・71号下甕棺……59・63
54 甕棺⑪ 86号上・86号下・96号上・96号下甕棺……71・81
55 甕棺⑫ 100号上・100号下・110号下・112号上・112号下甕棺……85・90
56 甕棺⑬ 11号・16号・29号上・29号下・35号上・35号下甕棺……15・21・33・37
57 甕棺⑭ 38号上・38号下・43号甕棺・40号甕棺内出土土器……37・43
58 甕棺製作工程① 接合面観察…… 95
59 甕棺製作工程② 接合面観察…… 95

PL. 60　甕棺製作工程③　タタキ目痕…… 95
61　鉄戈・鉄矛・鉄戈付着蓆…… 174
62　(1)　鉄戈着柄部（表）…… 174
(2)　鉄戈着柄部（裏）…… 174
63　貝輪 …… 171
64　48号甕棺人骨着装貝輪…… 172

道 場 山 2 地 点

PL. 65　(1)　道場山2地点遠景（南から）…… 185
(2)　道場山2地点東部地区近景（南東から）…… 185
66　(1)　道場山2地点南斜面部近景（南東から）…… 185
(2)　道場山2地点丘陵頂部周辺近景（南から）…… 185
67　(1)　道場山2地点南斜面裾部周辺近景（南東から）…… 185
(2)　道場山2地点西部地区近景（東から）…… 185
68　(1)　道場山2地点頂部周辺近景（西から）…… 185
(2)　道場山2地点頂部から北部全景（南から）…… 185
69　(1)　道場山2地点丘陵北側裾部全景（西から）…… 245
(2)　道場山2地点丘陵北側裾部近景（西から）…… 245
70　(1)　1号木棺墓（西から）…… 185
(2)　2号木棺墓（西から）…… 185
71　(1)　1号木棺墓副葬小壺出土状態（西から）…… 185
(2)　3号木棺墓（南東から）…… 187
72　(1)　4号木棺墓（北西から）…… 188
(2)　4号木棺墓西側小口の炭化材検出状態…… 188
73　(1)　1号木棺墓土層断面（東から）…… 185
(2)　4号木棺墓土層断面（東から）…… 188
74　(1)　1号土坑墓（東から）…… 188
(2)　1号土坑墓副葬小壺出土状態（東から）…… 188
75　(1)　2号甕棺墓…… 192
(2)　3号甕棺墓…… 192
76　(1)　5号甕棺墓…… 192
(2)　6号甕棺墓…… 192
77　(1)　7号甕棺墓…… 192
(2)　8号甕棺墓…… 192
78　(1)　9号甕棺墓…… 195

PL. 78 (2) 10号甕棺墓……195
79 (1) 1号住居跡全景（南から）……195
(2) 1号住居跡近景（南から）……195
80 (1) 3号住居跡（南東から）……195
(2) 1号袋状竪穴（南東から）……197
81 (1) 1号袋状竪穴……197
(2) 3号袋状竪穴……197
82 (1) 5号袋状竪穴土層断面……197
(2) 5号袋状竪穴……197
83 (1) 6号袋状竪穴……197
(2) 7号袋状竪穴……197
84 (1) 7号袋状竪穴土層断面……197
(2) 8号袋状竪穴……197
85 (1) 10号（手前）・11号（上）袋状竪穴……202
(2) 18号袋状竪穴……202
86 (1) 方形周溝墓……235
(2) 方形周溝墓周溝土層断面（西から）……235
87 (1) 周溝内土器出土状態……236
(2) 周溝内土器出土状態……236
88 (1) 4号土坑墓（西から）……236
(2) 4号土坑墓土師器出土状態……236
89 (1) 5号土坑墓土層断面……236
(2) 5号土坑墓（西から）……236
90 (1) 6号土坑墓（南から）……238
(2) 1号住居跡覆土中土師器出土状態……247
91 (1) 7号土坑墓（東から）……239
(2) 7号土坑墓土層断面……239
92 (1) 7号土坑墓（南から）……239
(2) 7号土坑墓土層断面……239
93 (1) 1号土坑（北西から）……244
(2) 1号土坑土層断面（南西から）……244
94 木棺墓・土坑墓・袋状竪穴出土弥生式土器……209
95 住居跡・袋状竪穴出土弥生式土器……210
96 甕棺　1号・2号・3号・5号・7号下・9号甕棺……192
97 甕棺と土師器　10号上・10号下甕棺・同溝墓出土土師器……192・235

PL. 98 (1) 1号住居跡出土石鏃①…… 215
(2) 1号住居跡出土石鏃②…… 215
99 (1) 1号住居跡出土石鏃③…… 215
(2) 1号住居跡出土石鏃未製品…… 215
100 (1) 1号住居跡出土石器類（スクレイパー・ドリル）…… 218
(2) 1号住居跡出土石斧・敲石・石庖丁・紡錘車…… 220
101 (1) 1号住居跡出土石核・剥片①…… 220
(2) 1号住居跡出土石核・剥片②…… 220
102 (1) 道場山1地点採集石器類①(石鏃・石核・スクレイパー・グレーバー)…… 224
(2) 道場山1地点採集石器類②（石斧・スクレイパー・紡錘車）…… 224
103 (1) 細石核…… 220
(2) 石　核…… 220
104 土師器…… 238
105 48号甕棺内人骨…… 47

挿　図　目　次

頁

Fig. 1　筑紫野市周辺弥生時代遺跡の位置（縮尺１/25,000）……2～3

2　道場山１・２地点周辺地形図（縮尺１/2,000　原図道路公団作製）……6～7

道　場　山　1　地　点

3　道場山１地点遺構配置図（縮尺1/50）……8～9

4　１号・８号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……10

5　10号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……11

6　11号・59号・80号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……12

7　13号・29号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……13

8　14号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……14

9　15号・53号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……16

10　16号・91号・98号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……17

11　17号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……18

12　18号・104号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……19

13　19号・20号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……20

14　21号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……22

15　22号・25号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……23

16　23号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……24

17　24号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……25

18　26号・74号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……26

19　27号・27′号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……28

20　28号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……29

21　30号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……30

22　31号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……31

23　32号・35号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……33

24　33号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……34

25　34号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……35

26　36号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……36

27　37号・38号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……38

28　39号・41号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……39

29　40号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……40

30　42号・102号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……41

Fig. 31 43号・44号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 42
32 45号・47号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 44
33 46号・49号・50号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 45
34 48号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 46
35 40号甕棺墓内出土壺実測図（縮尺1/3）…… 48
36 48号甕棺墓出土人骨と貝輪着装状態実測図（縮尺1/10）…… 48
37 51号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 49
38 54号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 50
39 55号・87号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 52
40 57号・64号・66号・73号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 53
41 58号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 54
42 60号・63号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 56
43 61号・62号・69号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 57
44 65・70号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 58
45 67号・68号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 60
46 71号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 61
47 72号・112号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 62
48 75号・77号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 64
49 76号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 65
50 78号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 66
51 79号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 68
52 81号・83号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 69
53 82号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 70
54 84号・85号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……70～71
55 86号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 72
56 88号・92号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 73
57 89号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 74
58 90号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 76
59 93号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 77
60 94号・103号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 78
61 96号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 79
62 97号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 80
63 99号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 82
64 100号甕棺墓実測図（縮尺1/20）…… 83
65 100号甕棺内鉄戈出土状態実測図（縮尺1/10）…… 84

Fig. 66 101号甕棺墓実測図(縮尺1/20)…… 86
67 105号甕棺墓実測図(縮尺1/20)…… 87
68 109号甕棺墓実測図(縮尺1/20)…… 88
69 110号・111号甕棺墓実測図(縮尺1/20)……88～89
70 1号・2号箱式石棺墓実測図(縮尺1/30)…… 91
71 道場山1地点出土甕棺編年図①(縮尺1/20)…… 100
72 道場山1地点出土甕棺編年図②(縮尺1/3)…… 101
73 13号・20号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 128
74 14号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 129
75 15号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 130
76 17号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 131
77 19号・22号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 132
78 21号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 133
79 23号・25号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 134
80 24号・27′号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 135
81 26号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 136
82 27号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 137
83 30号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 138
84 31・32号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 139
85 33号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 140
86 34号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 141
87 36号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 142
88 37号・43号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 143
89 39号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 144
90 40号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 145
91 41号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 146
92 42号・55号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 147
93 45号・50号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 148
94 46号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 149
95 48号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 150
96 53号・59号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 151
97 60号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 152
98 62号・63号・74号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 153
99 68号・73号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 154
100 70号甕棺実測図(縮尺1/8)…… 155

Fig. 101 71号甕棺実測図（縮尺1/8）…… 156
102 72号・96号甕棺実測図（縮尺1/8）…… 157
103 75号甕棺実測図（縮尺1/8）…… 158
104 76号甕棺実測図（縮尺1/8）…… 159
105 86号甕棺実測図（縮尺1/8）…… 160
106 100号甕棺実測図（縮尺1/8）…… 161
107 94号・102号・112号甕棺実測図（縮尺1/8）…… 162
108 109号・110号甕棺実測図（縮尺1/8）…… 163
109 11号・29号・35号甕棺実測図（縮尺1/6）…… 164
110 38号・49号・88号甕棺実測図（縮尺1/6）…… 165
111 甕棺口縁部実測図①（縮尺1/2）…… 166
112 甕棺口縁部実測図②（縮尺1/2）…… 167
113 甕棺口縁部実測図③（縮尺1/2）…… 168
114 甕棺口縁部実測図④（縮尺1/2）…… 169
115 甕棺口縁部実測図⑤（縮尺1/2）…… 170
116 貝輪実測図（縮尺1/2）…… 172
117 貝輪・銅釧実測図（縮尺1/3）…… 173
118 副葬鉄器実測図（縮尺1/3）…… 175
119 鉄戈実測図（縮尺1/3）……176～177
120 鉄矛実測図（縮尺1/3）…… 178

道場山2地点

121 道場山2地点遺構配置図（縮尺1/200）……184～185
122 1号・2号木棺墓実測図（縮尺1/30）…… 186
123 3号木棺墓実測図（縮尺1/30）…… 187
124 4号・5号木棺墓実測図（縮尺1/30）…… 189
125 1号土坑墓実測図（縮尺1/30）…… 190
126 3号土坑墓実測図（縮尺1/30）…… 191
127 1号・2号・3号・4号・5号・7号甕棺実測図（縮尺1/20）…… 193
128 1号・2号・3号・4号・5号甕棺実測図（縮尺1/6）……192～193
129 6号・8号・9号・10号甕棺実測図（縮尺1/20）…… 194
130 6号・7号・8号甕棺実測図（縮尺1/6）……194～195
131 9号・10号甕棺実測図（縮尺1/6）……194～195
132 1号住居跡実測図（縮尺1/60）……196～197
133 3号住居跡実測図（縮尺1/30）…… 196
134 1号・6号袋状竪穴実測図（縮尺1/40）…… 198

Fig. 135　5号・7号袋状竪穴実測図（縮尺1/40）…… 199
136　8号・9号袋状竪穴実測図（縮尺1/40）…… 200
137　10号・11号・13号袋状竪穴実測図（縮尺1/40）…… 201
138　14号・15号袋状竪穴実測図（縮尺1/40）…… 203
139　16号・18号袋状竪穴実測図（縮尺1/40）…… 204
140　21号・22号袋状竪穴実測図（縮尺1/20）…… 205
141　1号竪穴状遺構実測図（縮尺1/30）…… 208
142　木棺墓・土坑墓出土土器実測図（縮尺1/3）…… 209
143　袋状竪穴出土土器実測図（縮尺1/4）…… 211
144　1号住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）…… 213
145　3号住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）…… 214
146　表採・ピット出土土器実測図（縮尺1/4）…… 214
147　1号住居跡出土石器実測図（石鏃①）（縮尺2/3）…… 216
148　1号住居跡出土石器実測図（石鏃②）（縮尺2/3）…… 217
149　1号住居跡出土石器実測図（縮尺2/3）…… 219
150　1号住居跡出土石器・土製品実測図（縮尺1/2）…… 221
151　1号住居跡出土石核・剥片実測図①（縮尺2/3）…… 222
152　1号住居跡出土石核・剥片実測図②（縮尺2/3）…… 223
153　道場山2地点採集石器実測図①（縮尺2/3）…… 224
154　道場山2地点採集石器実測図②（縮尺1/2）…… 226
155　方形周溝墓実測図（縮尺1/40）…… 234
156　周溝内での石材と土器出土状態（縮尺1/20）…… 235
157　方形周溝墓出土土師器実測図（縮尺1/3）…… 236
158　4号・5号・6号土坑墓実測図（縮尺1/30）…… 237
159　4号・6号土坑墓出土土師器実測図（縮尺1/3）…… 238
160　7号土坑墓実測図（縮尺1/40）…… 240
161　山の口、桶田山遺跡出土土坑墓実測図（縮尺1/60）…… 241
162　8号・9号土坑墓実測図（縮尺1/30）…… 243
163　1号土坑墓実測図（縮尺1/40）…… 244
164　北側裾部遺構実測図（縮尺1/200）…… 245
165　北側斜面部土層断面図（縮尺1/30）…… 246
166　鉄器実測図（縮尺1/2）…… 246
167　住居跡埋土・周溝出土土師器実測図（縮尺1/3）…… 247
168　表採須恵器・磁器実測図（縮尺1/3）…… 249
169　銭貨拓影（実大）…… 249

表　目　次

道 場 山 1 地 点

頁

Tab. 1　道場山1地点出土甕棺一覧表……102～127

2　道場山1地点人骨一覧表……171

3　鉄戈一覧表……179

4　弥生時代鉄矛一覧表……179

道 場 山 2 地 点

5　弥生時代木棺墓・土坑墓一覧表……191

6　5号袋状竪穴層位名称表……206

7　7号袋状竪穴層位名称表……206

8　14号袋状竪穴層位名称表……207

9　袋状竪穴一覧表……207

10　石鏃一覧表……228～230

11　石器・土製品一覧表……231～232

12　石核観察表……232～233

13　1号住居跡出土剥片一覧表……233～234

14　7号土坑墓A－B層位名称表……242

15　7号土坑墓C －D 層位名称表……242

16　1号土坑層位名称表……245

17　北側斜面部層位名称表……246

18　道場山2地点出土土師器計測表……248

I はしがき

九州縦貫自動車道路建設に伴う発掘調査は昭和44年度に始って、昭和51年度には、大牟田市から、鞍手郡鞍手町までの全路線内の発掘調査を終了しました。

本報告書はこのうち、昭和49年度に調査を実施した道場山1地点と道場山2地点の分についてであります。道場山1地点は九州自動車道路建設に伴って県道5号線を1部つけ替えるため調査が必要となったものであり、工期との関係で、県教育庁管理部文化課技師の多数の応援を受けて4月26日に終了しました。ここからは遺構としては、弥生時代中期後半から後期初頭にかけての甕棺墓112基と後期のものと思われる箱式石棺墓2基が検出された。遺物としては棺内から、副葬品として鉄戈1本と、着装品としては2基分あわせて19個の貝輪が、また棺外から鉄矛1本が検出されました。

道場山2地点は本線にかかる分であり、5月8日から8月19日まで調査を実施して、1地点よりも古い時期の、弥生時代前期の木棺墓・土坑墓と甕棺墓が検出され、前期末の住居跡が検出されました。弥生時代の貯蔵穴の他、歴史時代の土坑墓も検出されています。

なお、当該地は1・2両地点とも調査直前まで墓地であり、部分的に墓地移転をまって調査を行うという箇所が少なくなかった。また墓標を消失した新墓が多数検出され、人骨も夥しい数にのぼったため道路公団、県開発公社職員とも協議をもち、火葬して湯町真光寺に納骨してもらいました。

なお、遺跡の調査関係者については、九州縦貫自動車道路関係埋蔵文化財調査報告Ⅵを参照されたい。

Fig. 1 筑紫野市周辺弥生時代遺跡の位置（縮尺 1/25,000）

II　筑紫野市所在遺跡群の位置と環境

道場山１・２地点遺跡は、福岡県筑紫野市大字武蔵に所在する。

本報告書は、九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告のうち、筑紫野市内所在の遺跡群としては第６冊目にあたり、位置と環境については既刊のものと重複するため、ここでは省略する。

なお、Fig. 1の遺跡地図は道場山遺跡周辺の弥生時代の遺跡である。このうち報告書が既刊のものはその報告書名を列記した。

筑紫野市周辺弥生時代遺跡一覧

1　剣塚遺跡
2　岩ノ木遺跡
3　脇田遺跡
4　桶田山遺跡　註１
5　大門遺跡
6　石狩山荘内遺跡
7　道場山１地点　註２
8　道場山２地点　註３
9　原口遺跡　註４
10　八隈遺跡　註５
11　鷲田山遺跡
12　畑添１地点　註６
13　山の口遺跡　註７
14　大刀町遺跡
15　若八幡神社
16　萩原遺跡
17　峯遺跡　註８
18　峯畑遺跡
19　修理田遺跡
20　二日市中学校校庭遺跡
21　五殻神山遺跡
22　カケ塚遺跡
23　野黒坂遺跡　註９
24　イカリノ上遺跡
25　高雄遺跡
26　吉ガ浦遺跡
27　柚ノ木遺跡
28　六本町遺跡
29　一本木Ａ遺跡
30　一本木Ｂ遺跡
31　久保山遺跡
32　宮崎遺跡
33　竹敷町遺跡
34　永岡甕棺遺跡　註10
35　永岡遺跡
36　大牟田遺跡
37　常松遺跡　註11
38　筑紫小学校校庭遺跡
39　筑紫倉吉遺跡
40　天神社裏山遺跡

註1　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告―Ⅵ―　福岡県教育委員会　1975
2　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告―XXV―　福岡県教育委員会　1978
3　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告―XXV―　福岡県教育委員会　1978
4　福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第10輯　「異例の古墳」　島田寅次郎　1935
5　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告―Ⅶ―　福岡県教育委員会　1976
6　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告―Ⅵ―　福岡県教育委員会　1975
7　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告―Ⅵ―　福岡県教育委員会　1975
8　「大宰府付近における弥生式系統遺跡調査」　中山平次郎　考古学雑誌第20巻第6号　昭和5年6月「鉾之記」　鹿島九平次
9　福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第1集　福岡県教育委員会　1970
10　福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第4・5集　福岡県教育委員会　1976・1977
11　福岡県筑紫郡筑紫野町常松遺跡調査報告　別府大学文学部考古学研究報告書1　1970　別府大学文学部

III　道場山１地点の調査

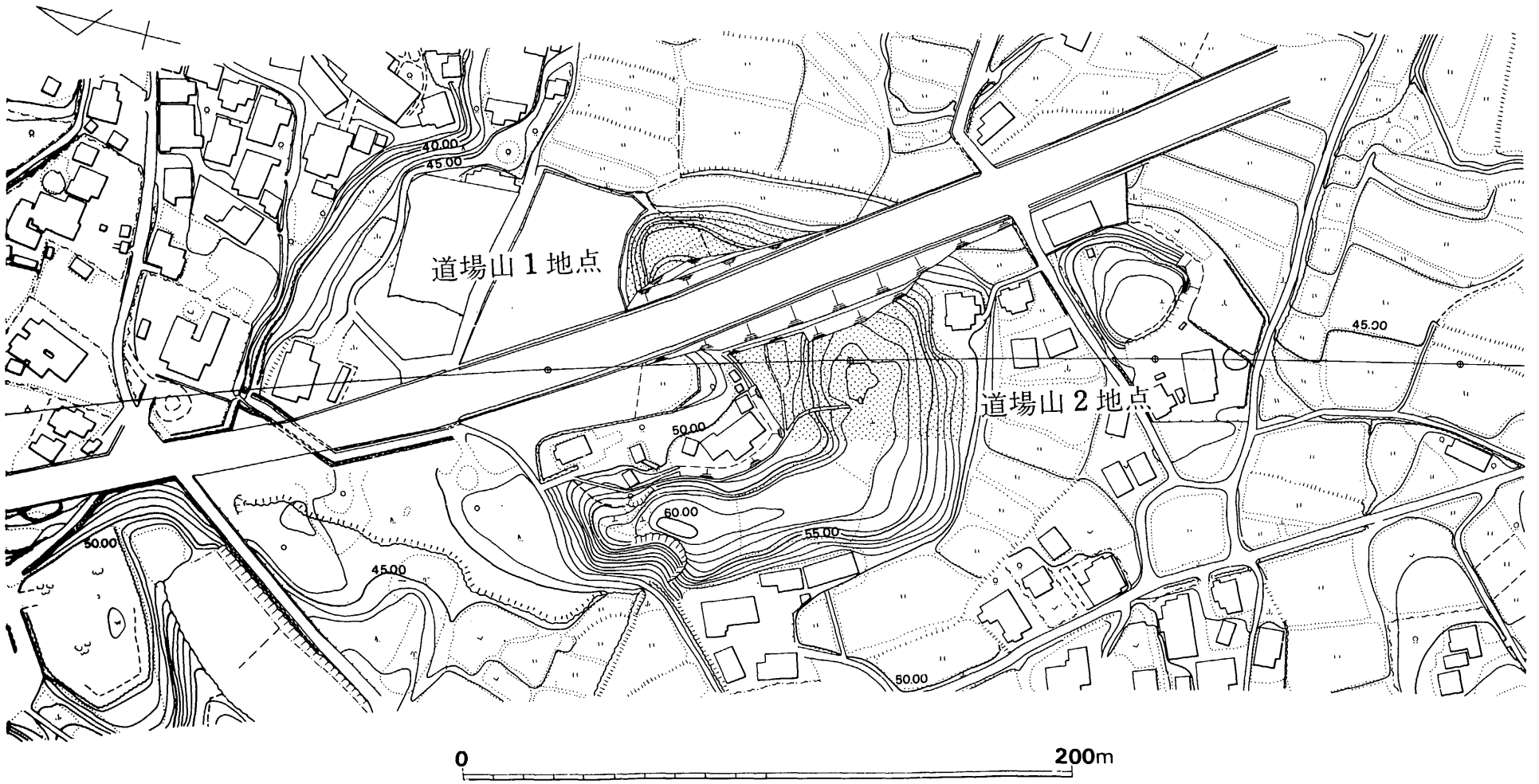


Fig. 2　道場山１・２地点周辺地形図（縮尺１/2,000　原図道路公団作製）

Ⅲ　道場山１地点の調査

1　調　査　の　経　過

1973年12月、当該丘陵北側の採土工事に伴って甕棺が破壊されようとしているのを、文化課関係者が発見し、工事を一時中断し、協議を重ねた。当地は九州縦貫自動車道路建設に伴う県道のつけ替え道路予定地であった。年があけて1974年３月７日、道路公団、業者と協議をする。その結果３月11日より調査を開始するという事になった。調査は３月中は酒井仁夫が担当し、４月１日からは川述昭人がこれを引き継いだ。道路開通時期を設定されたため、調査はこれに追われた。福岡県教育庁管理部文化課から、宮小路賀宏・前川威洋・浜田信也・橋口達也・森田勉・佐々木隆彦・新原正典等諸技師の応援を受けて４月25日に終了した。

調査の担当者は下記の通りである。

調査担当者	福岡県教育庁管理部文化課主査	宮小路賀宏
	同	栗原和彦
	福岡県教育庁管理部文化課技師	前川威洋
	同	石山勲
	同	橋口達也
	同	酒井仁夫
	同	浜田信也
	同	川述昭人
	同	森田勉
	同	佐々木隆彦
	同	新原正典
調査補助員		中牟田賢治
		次郎丸達朗
		川述公紀
		進博次
	国学院大学学生	三国博史
庶務担当者	福岡県教育庁管理部文化課主事	山本文和
	同　嘱託	因将太
整理担当者	福岡県教育庁管理部文化課嘱託	岩瀬正信
		近沢康治
		芦塚照子

中野恵子

以下に、調査日誌によってその経過をたどってみよう。

3月7日(木)　公団、業者と協議し、11日より調査を開始することとする。

3月9日(土)　北側及び南東側より全景撮影をとる。

3月11日(日)～16日(土)　表土剝ぎ作業を行って、多数の掘り方を検出。現代墓移転に関して湯町真光寺へ行く。全体トラバースの基準杭設定。

3月18日(月)～3月30日(土)　遺構掘りを行う。全体写真撮影をする。

4月1日(月)　本日より調査者は酒井から川述に変わる。甕棺の検出作業はほぼ終了しているため、実測のための杭うちをする。

4月2日(火)～6日(土)　遺り方続行し、実測を開始する。

4月8日(月)　雨のため中止

4月9日(火)～13日(土)　実測続行。写真撮影を行う。

4月15日(月)　実測続行。K100の下甕内から鉄戈が1本検出された。

4月16日(火)～18日(木)　実測続行

4月19日(金)　実測続行。K48から貝輪が17個検出された。

4月20日(土)　実測続行。九州大学の永井昌文教授が来訪され、貝輪と人骨のとりあげを行う。

4月21日(日)　実測続行。K96から貝輪が2個検出された。

4月22日(月)～24日(水)　実測を続行する。

4月25日(木)　本日をもって実測を終了する。

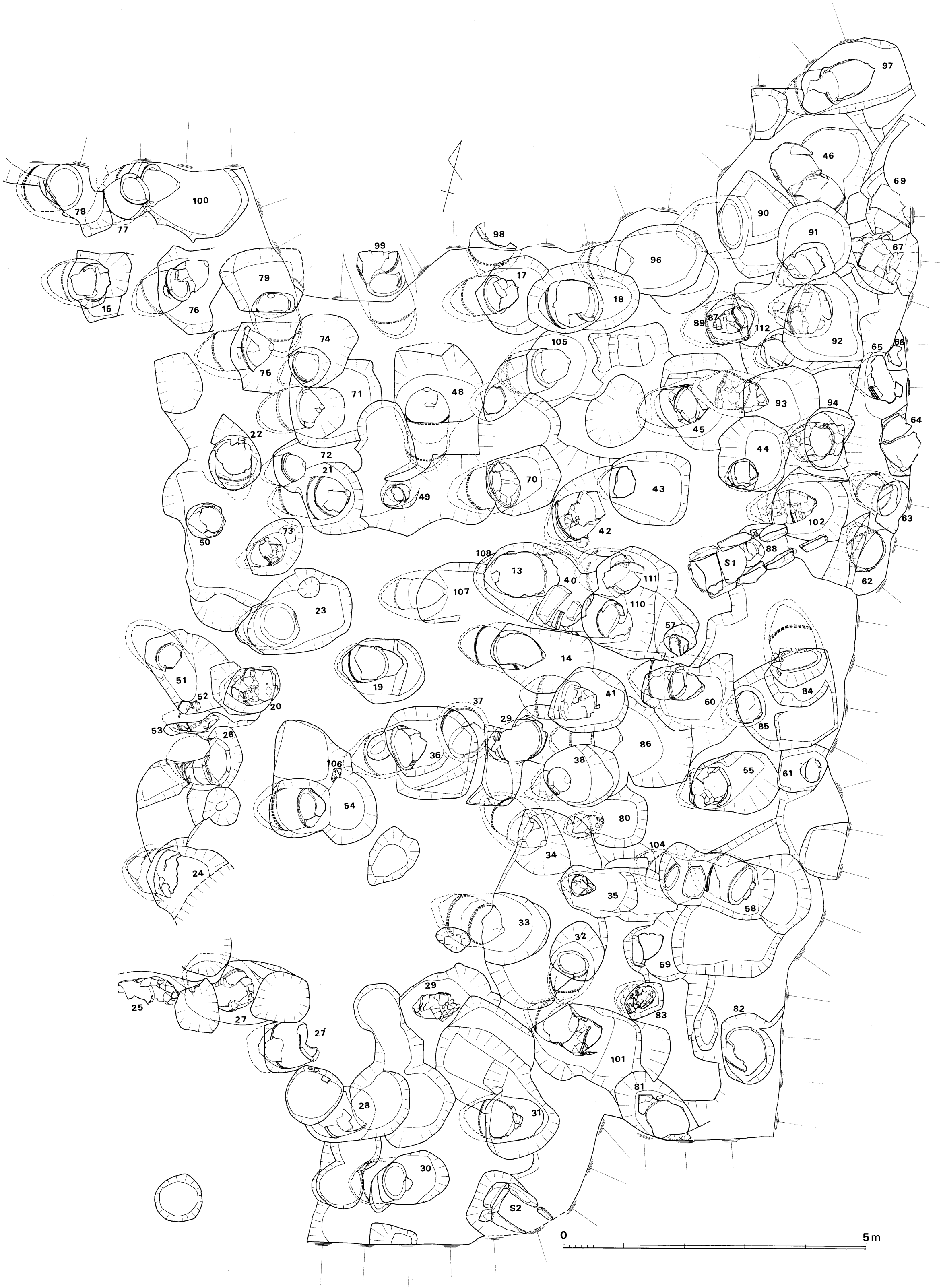


Fig. 3　道場山１地点遺構配置図（縮尺 1/50）

2　調査の内容

当遺跡は丘陵の東側裾部で、標高52m～45mの間に位置している。２地点とはもともと同一の丘陵であったが、十数年前の県道建設工事の際に丘陵東寄りにあたる１地点と２地点の中央部を切断されて現存しない。この切断部は当該地の西方に相当するわけであるが、遺構の出土状態を見ると、この切断面に近い部分にまでは遺構は拡がっていない。しかし、北側は土取り工事によって、すでに削りとられているため、もとの地形を知り得ないが、いくらかの甕棺墓が消滅した事は確実である。調査の結果総数 112基の甕棺墓を検出した。そのうち成人棺は63基であり、小形棺と小児棺は31基であった。棺内出土遺物をみると48号甕棺墓からは貝輪17個、96号甕棺墓から貝輪２個、100号甕棺墓からは鉄戈１本が出土した。また、棺外副葬品と思われる鉄矛が１本発見された。甕棺墓以外の墓制としては、箱式石棺墓が２基検出されただけである。

(1)　弥生時代の遺構

A　甕棺墓

１号甕棺墓（Fig.4 , PL. 5）

採土工事に伴って北側端部から検出された成人用の接口式甕棺墓である。墓坑はすでに消失しており、平面形は不明である。

棺は上・下甕とも甕形土器を用いており、上甕は下甕に比して小形である。合わせ目には粘土の目貼りは見られず、若干の間隙を有するものである。

２号甕棺墓（PL. 5）

採土工事に伴って北側崖面に検出された組合せ式の甕棺墓である。棺は上・下甕とも甕形土器の組合せである。

３号甕棺墓（PL. 5・6）

採土工事に伴って北側崖面に検出された組合せ式の甕棺墓である。下甕は甕形土器を用いており、人骨が良好な状態で検出された。

４号甕棺墓（PL. 6）

採土工事に伴って北側端部の崖面で検出された組合せ式の甕棺墓である。棺は上・下甕とも甕形土器の組合せである。

５号甕棺墓

採土工事に伴って破壊された。棺はすべて消失していたが墓坑底面の一部を確認した。

６号甕棺墓

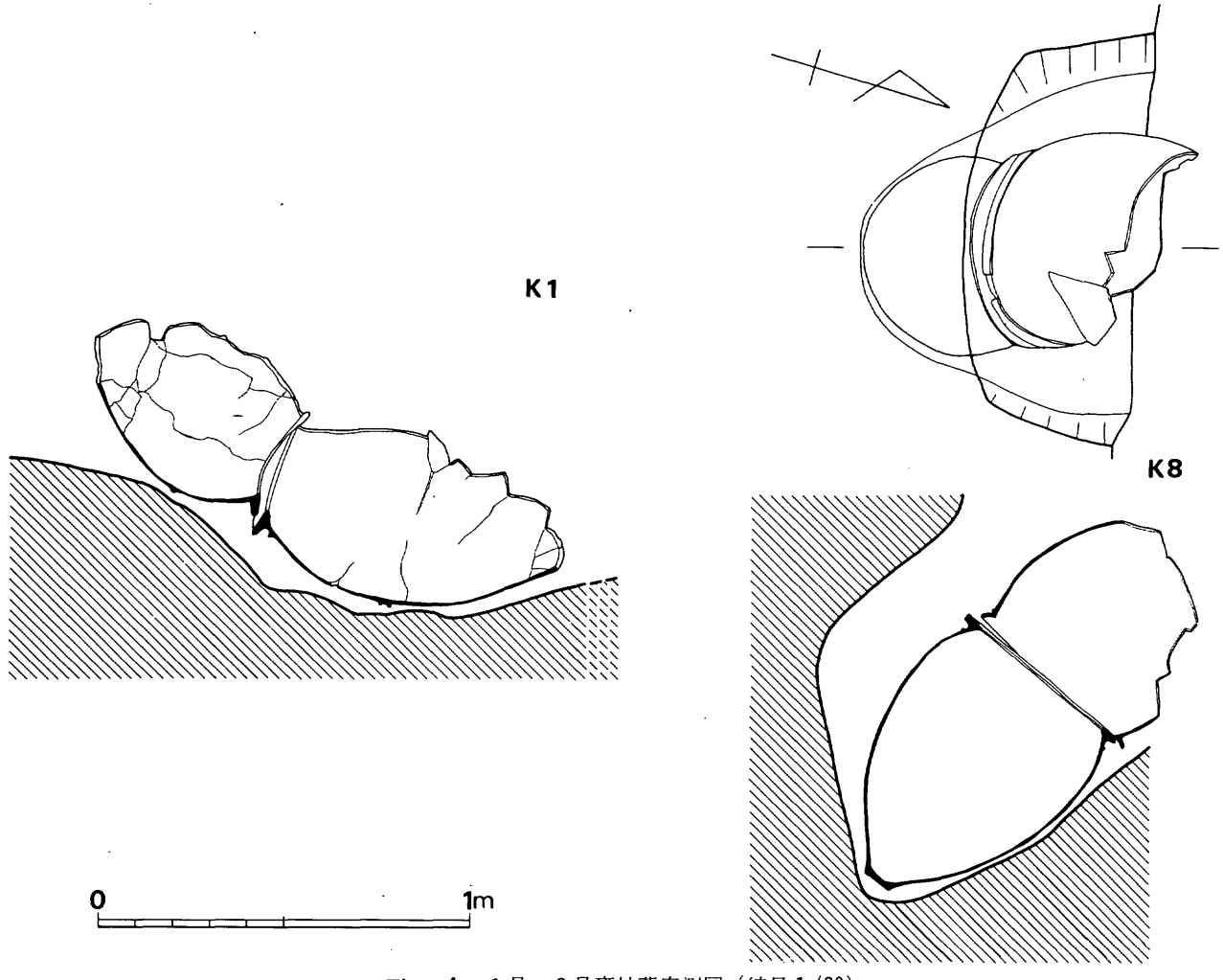


Fig. 4　1号・8号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

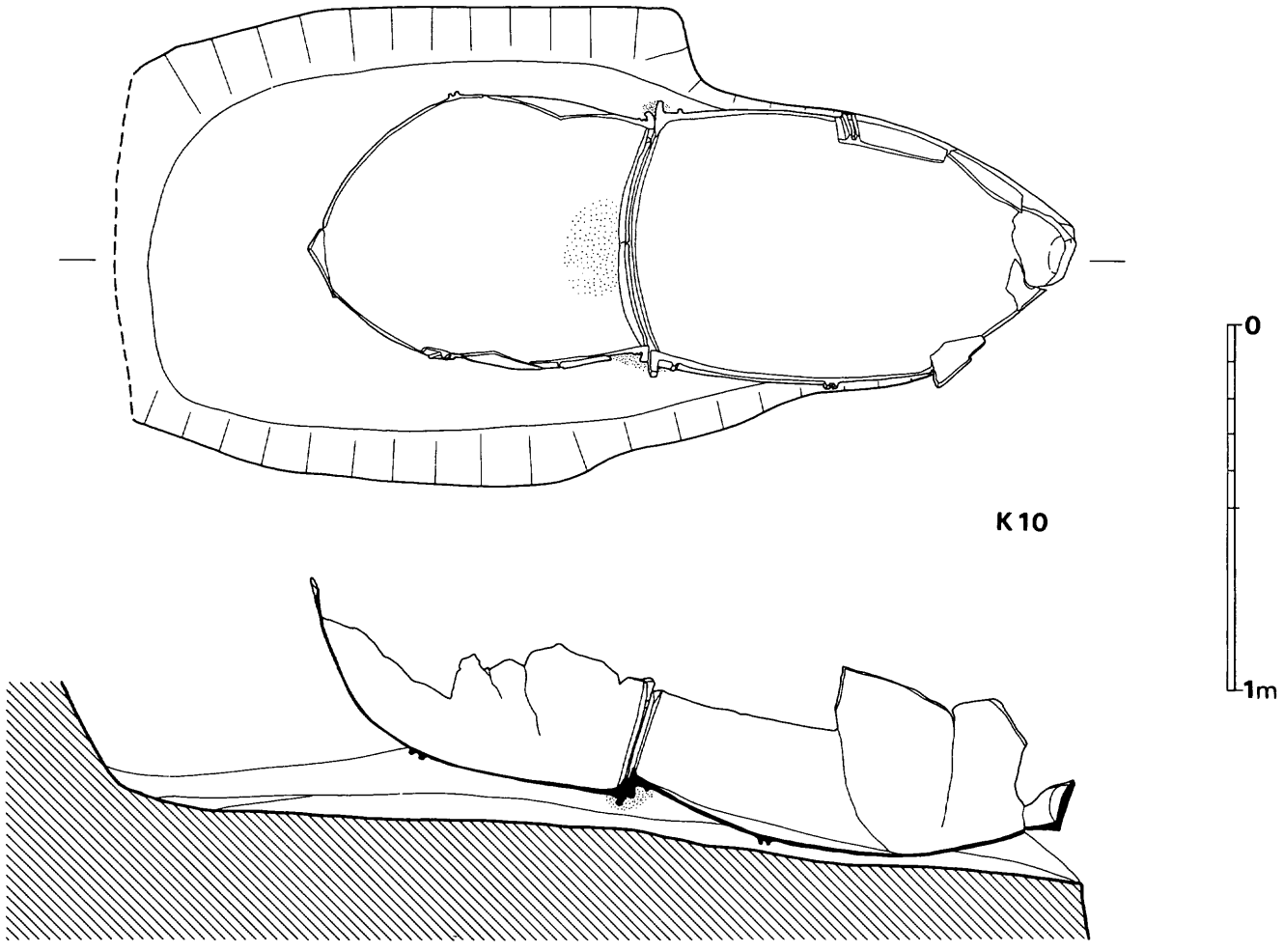


Fig. 5 10号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

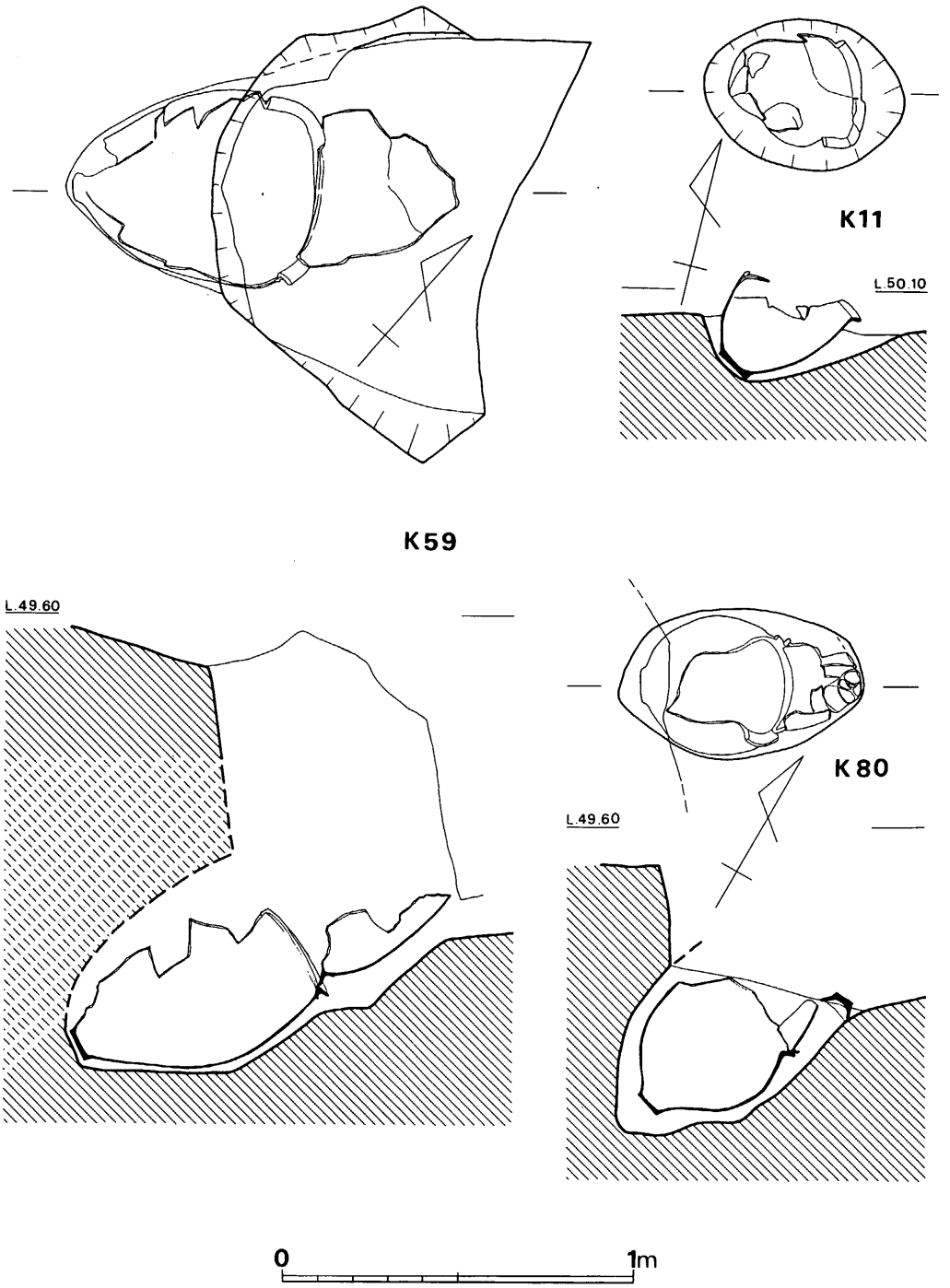


Fig. 6 11号・59号・80号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

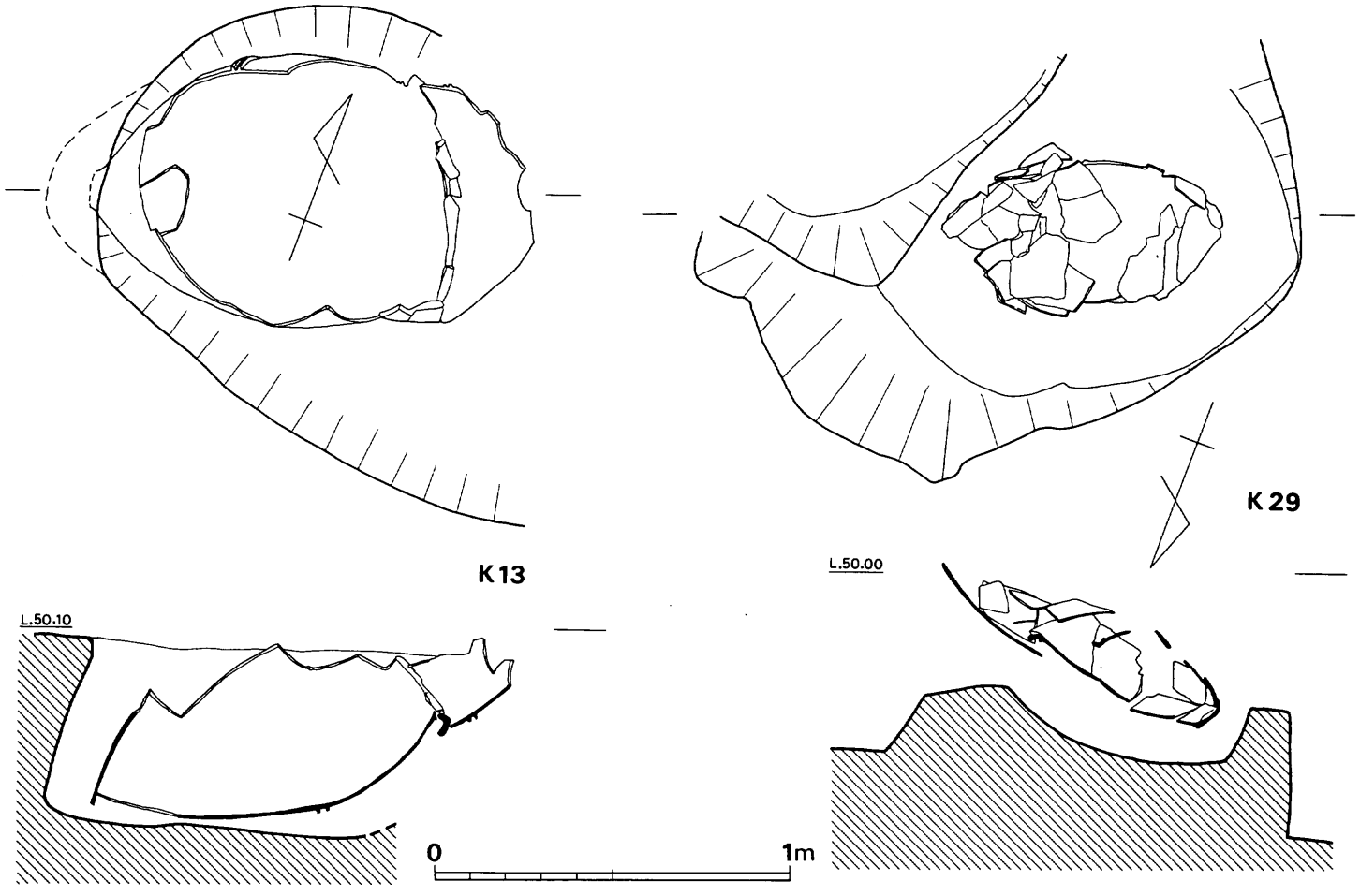
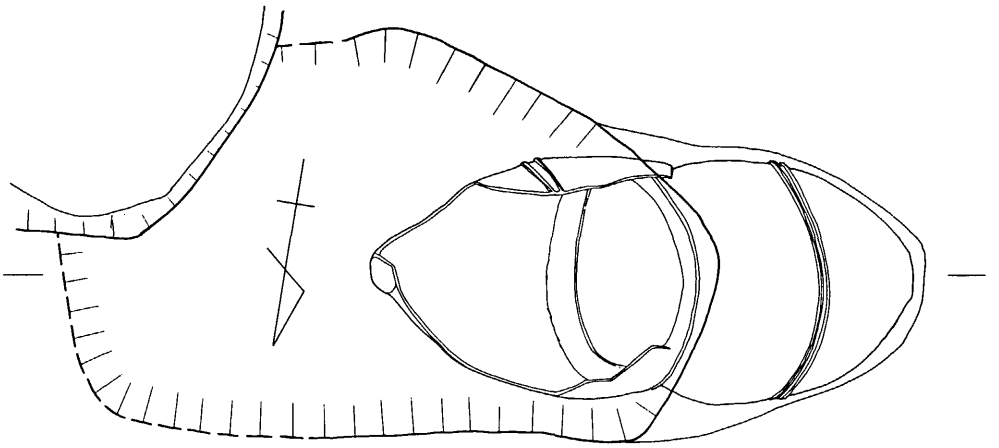


Fig. 7 13号・29号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）



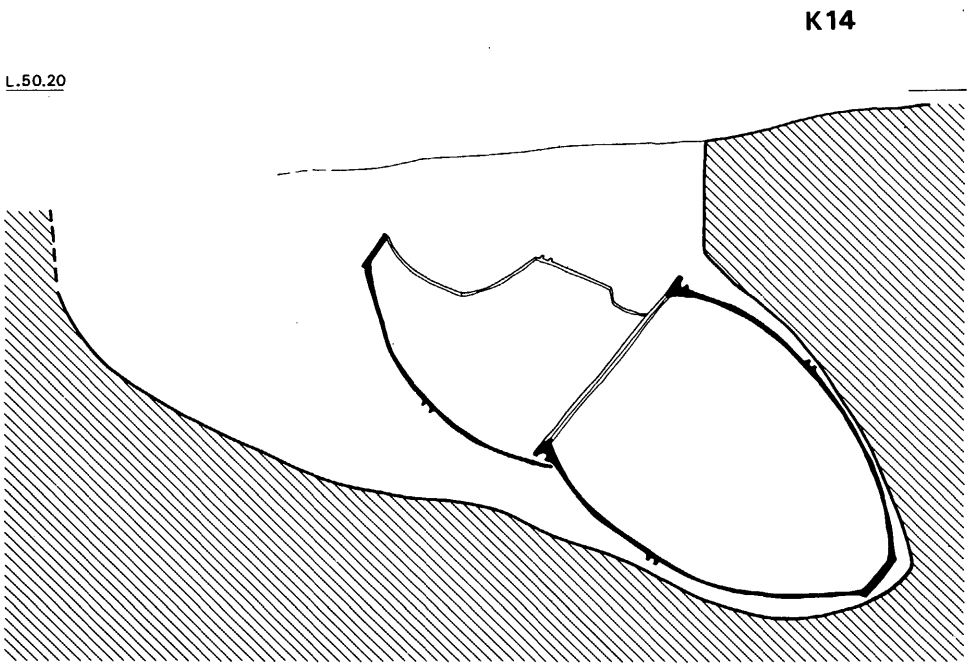


Fig. 8 14号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

採土工事に伴って北側崖面で検出された組合せ式の甕棺墓である。

7号甕棺墓

採土工事に伴って北側崖面で検出された組合せ式の甕棺墓である。

8号甕棺墓（Fig. 4 , PL. 7 ）

採土工事により削られた北側崖面の際に位置する接口式甕棺墓である。小形棺であり成人を埋葬するにはやや小さすぎるように思える。墓坑の平面形は不明であるが、西壁に横穴を穿って下甕を挿入している。

棺の上甕は後期初頭の甕形土器を用い、下甕は中期の甕形土器を用いるという興味深い組合せである。合わせ部には目貼り粘土はみられなかったが、人骨が遺存していた。

10号甕棺墓（Fig. 5 , PL. 10）

丘陵北端部の崖面近くから検出された。採土工事に伴って、上半部を欠損している。

成人用の接口式甕棺墓である。墓坑は縦1.5*m*、横1.3*m*の長方形を呈する。

棺はこの墓坑のほぼ中軸線上にやや斜位に埋置されている。ほぼ同大の甕形土器を組合せたものであり、接口部下面には粘土目貼りを施している。上甕の口縁部近くには15*cm*×25*cm*の範囲に朱が検出された。

11号甕棺墓（Fig. 6 ・109, PL. 8 ・56 ）

墓坑上面は削平されており、底面での平面形は楕円形を呈する。小児用の単式甕棺墓と思われるが、上面が削平されているのでこれを単式甕棺墓と断定はできない。棺は甕形土器を用いており、47°の角度で埋置している。

13号甕棺墓（Fig. 7 ・73, PL. 8 ・44）

丘陵の東西方向のほぼ中央付近に位置している。40号甕棺墓によって、墓坑は一部切られている。

成人用の接口式甕棺墓である。棺は半分以上を破壊されており、底部を欠損する。上・下甕とも甕形土器を用いているが、上甕は口縁部を打ち欠いている。なお接口部には粘土の目貼りはみられなかった。

14号甕棺墓（Fig. 8 ・74, PL. 9 ・44）

成人用の覆蓋式甕棺墓である。墓坑は花崗岩バイラン土の地山を長方形に掘り、西壁に横穴を穿って下甕を挿入したものである。墓坑の南東隅は41号甕棺墓の墓坑によって切られている。

棺はこの墓坑のほぼ中軸線上に32°の角度で埋置されている。上甕は口縁打ち欠きの甕形土器であり、下甕も甕形土器を用いている。前述した如く、墓坑西壁に棺が入るぎりぎりの規模の横穴を穿って下甕を挿入しており、下甕はこの横穴内にほぼ入ってしまう。上甕の下面は下甕を覆うが、上面は下甕内に入るものと思われる。接口部には粘土目貼りは見られなかった。

15号甕棺墓（Fig. 9 ・75, PL. 9 ・44）

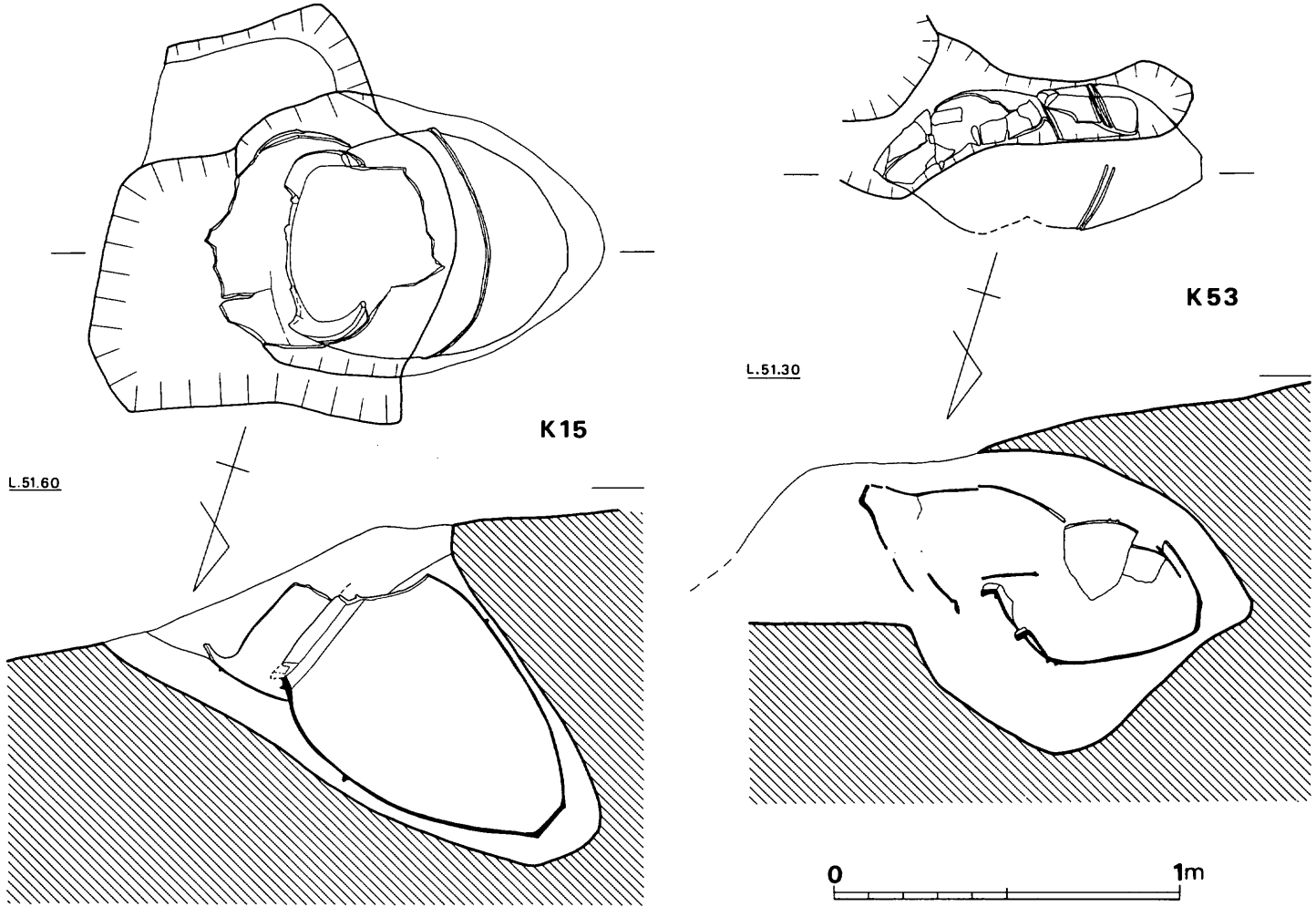


Fig. 9 15号・53号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

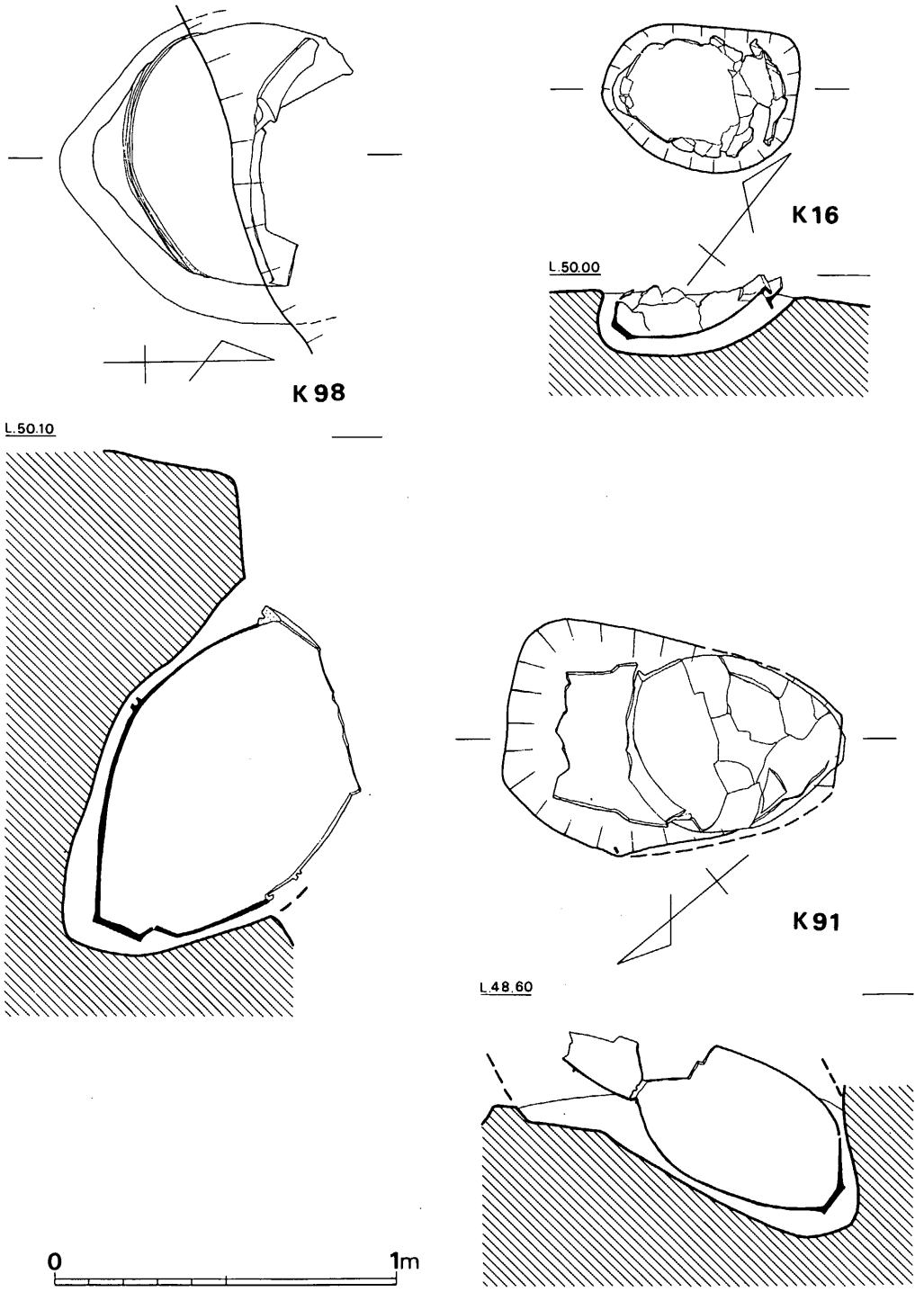
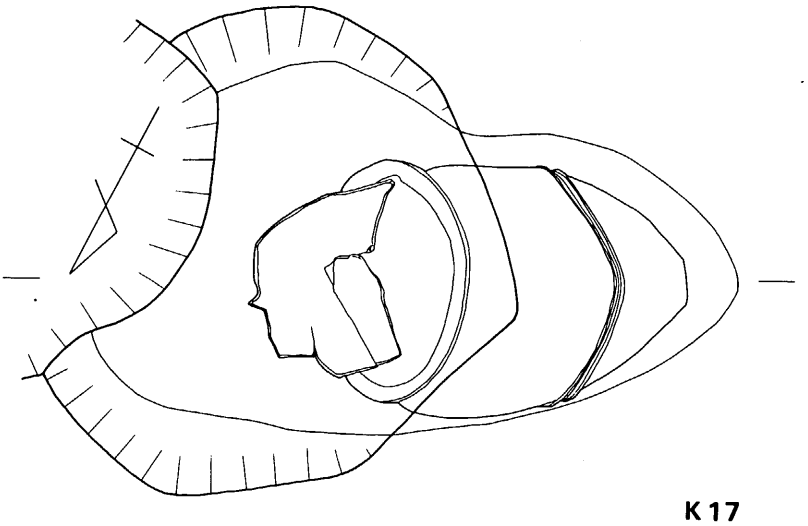


Fig. 10　16号・91号・98号甕棺墓実測図（縮尺１/20）



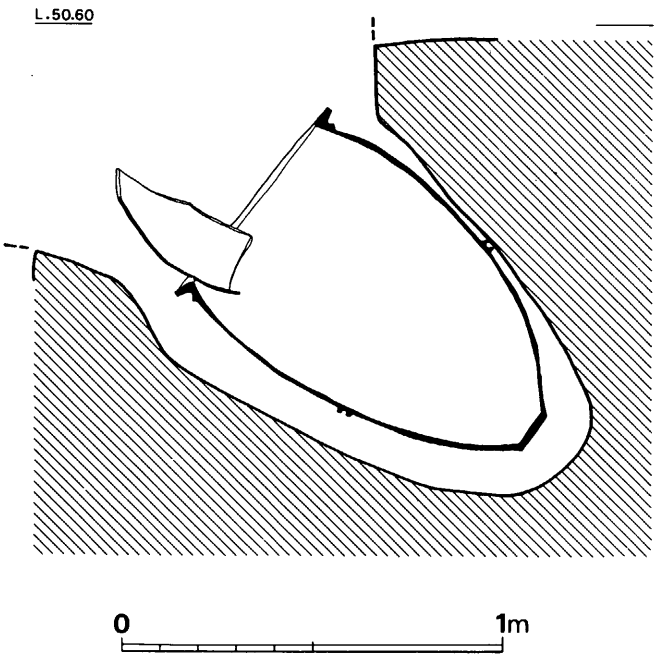


Fig. 11 17号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

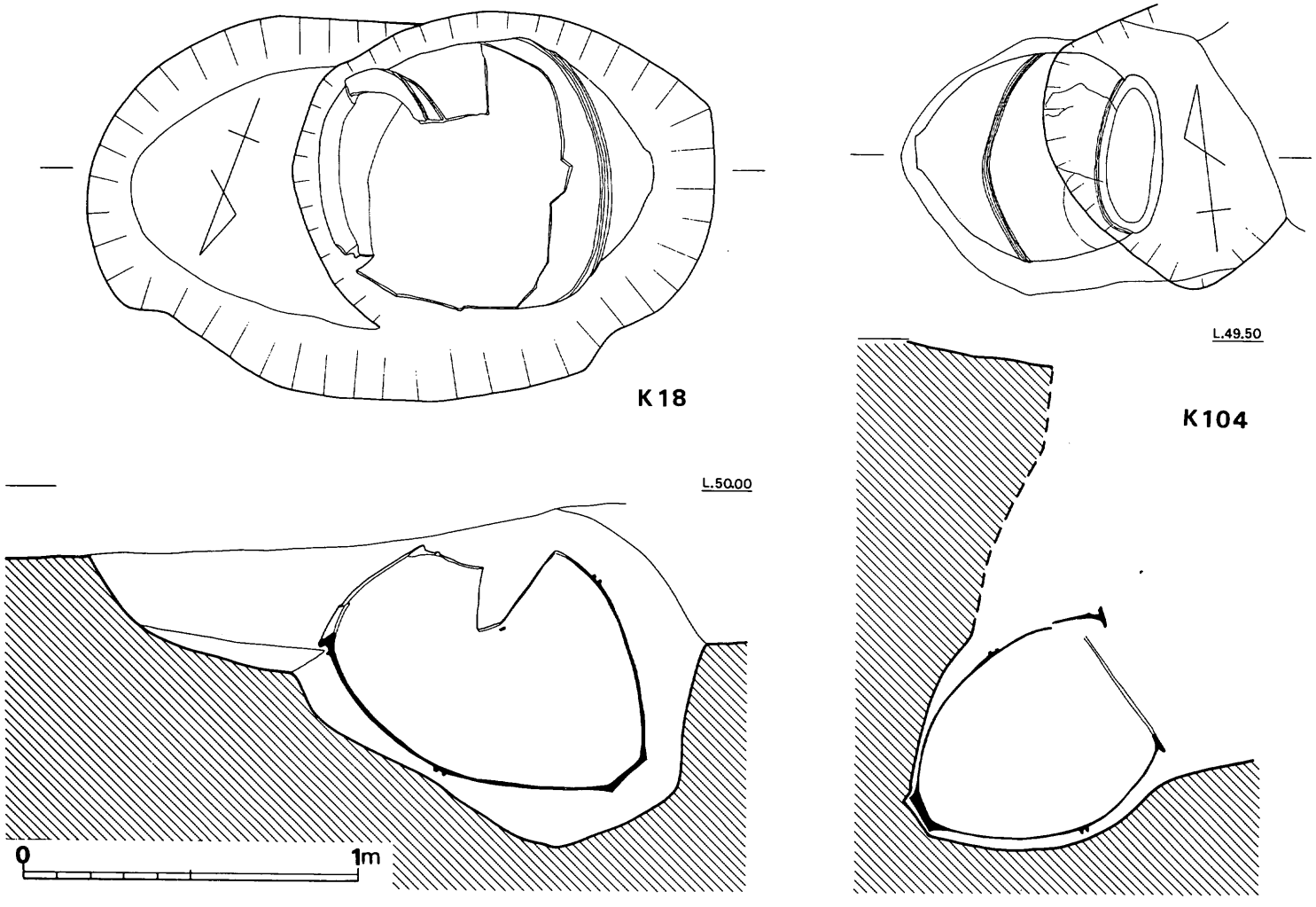


Fig. 12 18号・104号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

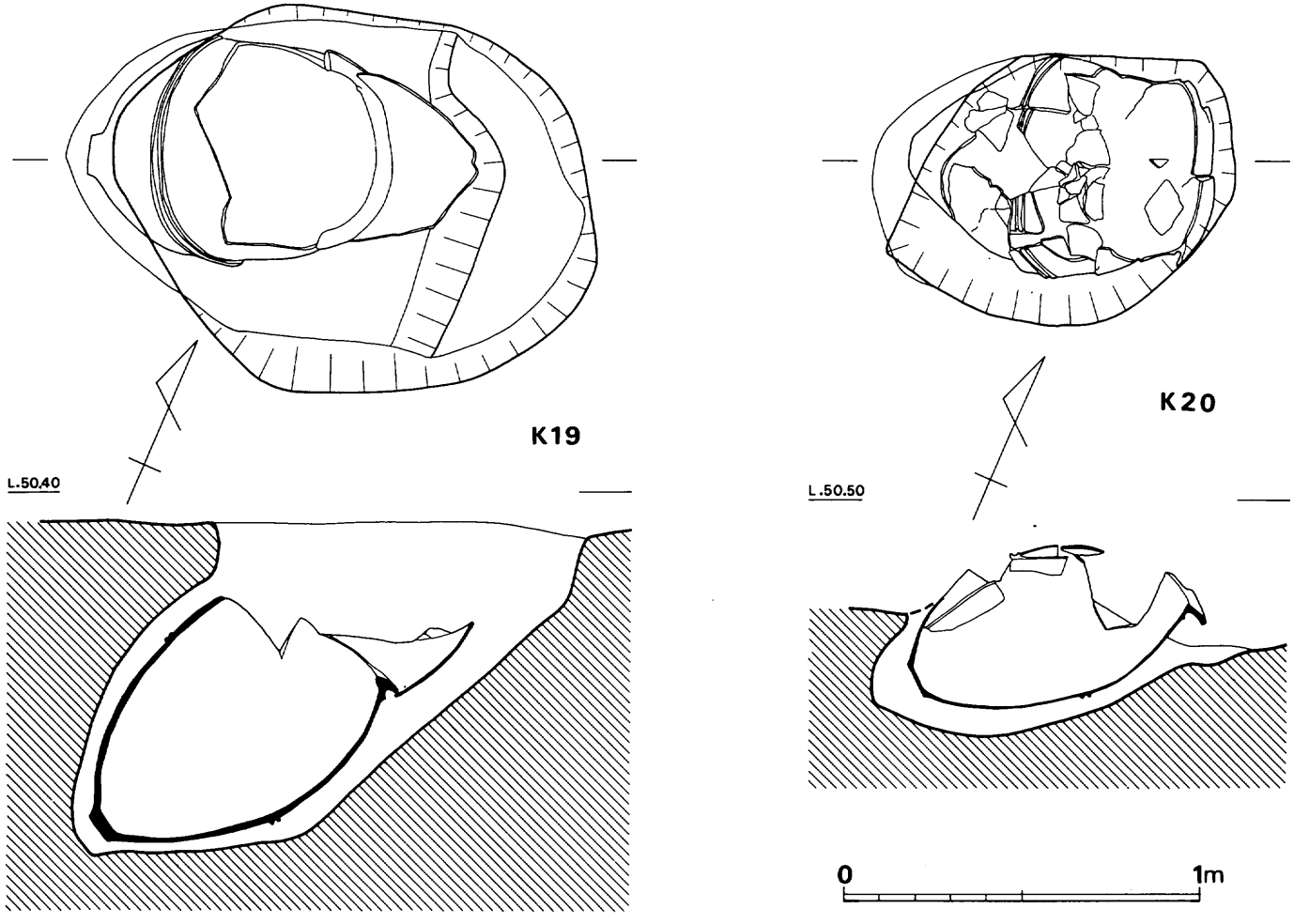


Fig. 13 19号・20号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

覆蓋式甕棺墓である。墓坑上面部を削平されており、この時に上甕の上半部と下甕の口縁部を一部欠損している。

棺の上甕は口縁打ち欠きの甕形土器を用い、下甕は墓拡に横穴を穿って、甕形土器の小形棺を挿入している。墓坑と挿入された棺との空間は、胴部下面では5cm、上面では2cm～3cmであり、狭い。棺の埋置角度は42°であり、かなりの急勾配である。

16号甕棺墓（Fig. 10, PL. 10・56）

11号甕棺墓と同様に削平を受けているため、墓坑上面と、棺上半部を欠損している。

小児用の覆蓋式甕棺墓である。墓坑は地山を掘削してつくられており、底部では横穴を穿っているのがわかる。棺を埋置するに際しては、地山と棺の間に5cm～6cmほどの空間を有している。

17号甕棺墓（Fig. 11・76, PL. 10・45）

成人用の呑口式甕棺墓である。墓坑東壁は18号甕棺墓によって切られている。墓坑西壁に横穴を深く穿って下甕を挿入しており、この下甕はほとんど横穴内に納まる。

棺の上甕は口縁打ち欠きの甕形土器であり、下甕も甕形土器の組合せである。下甕の口縁部の位置は墓坑を若干掘りくぼめている。下甕は39°の傾斜で、横穴の上方に偏して埋置している。

18号甕棺墓（Fig. 12, PL. 45）

成人用の単式甕棺墓である。墓坑上面は削平されており、棺も若干を破壊されていた。東壁に横穴を穿って棺を挿入したものと考えられるが、横穴の形態は他の横穴と異なって砲弾形を呈していない。墓坑底面は口縁部下に段を有している。

19号甕棺墓（Fig. 13・77, PL. 11・45）

成人用の覆蓋式甕棺墓である。墓坑上面は削平されており、上甕も若干を破壊されていた。墓坑西壁に横穴を穿って下甕を挿入している。

棺の上甕は、口縁部打ち欠きの甕形土器を用い、下甕も甕形土器を用いる組合わせである。

20号甕棺墓（Fig. 13・73, PL. 11・46）

単式の甕棺墓である。墓坑上面は削平されており、棺も上半部は破壊されて小片となっていた。棺は横穴を穿って挿入されていた事が知られた。墓坑と棺との空間は突帯部では4cmと狭いが、底部ではやや広くなる。墓坑の平面形は不明である。

21号甕棺墓（Fig. 14・75, PL. 12・46）

成人用の接口式甕棺墓である。墓坑は東壁の上半部を削平されているため旧状を変じているが、本来は隅丸方形を呈していたものと思われる。墓坑西壁に横穴を穿って下甕を挿入しており、この横穴内に口縁部近くまで納められている。

棺の上甕は口縁部打ち欠きの甕形土器を用い、下甕は甕形土器を用いている。棺は墓坑の中

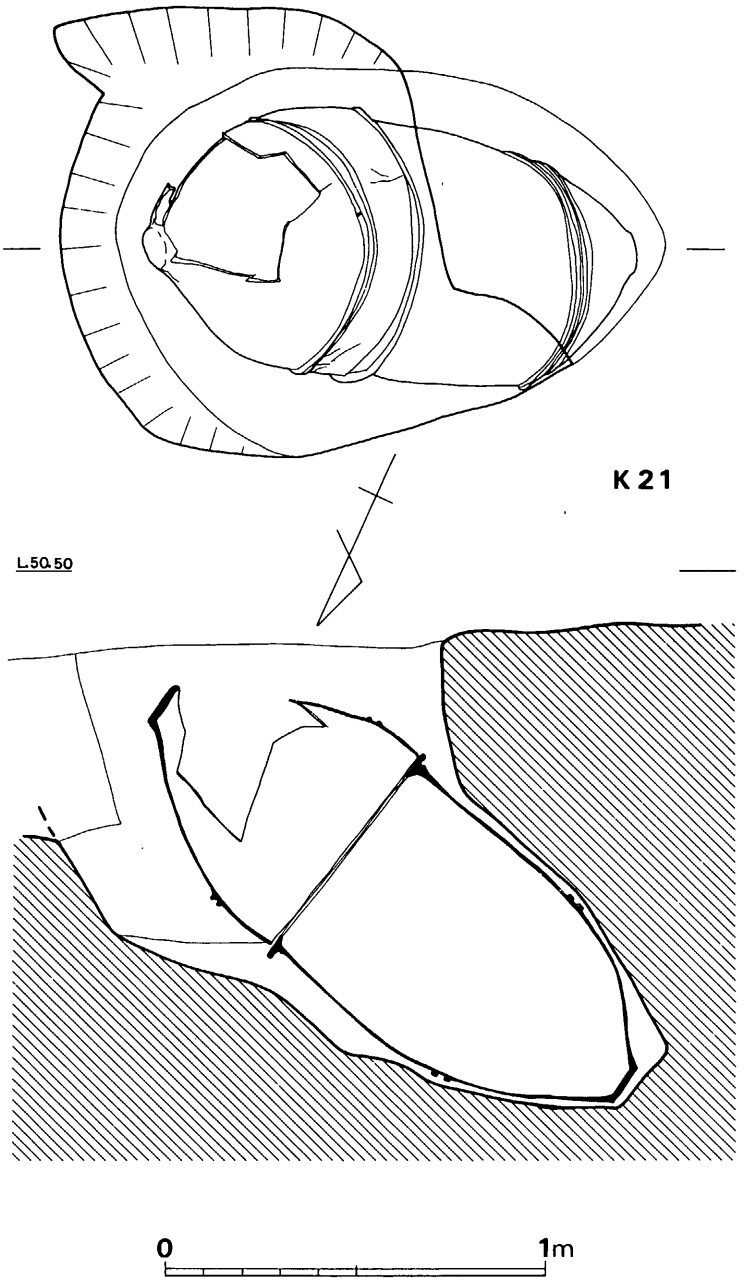


Fig. 14 21号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

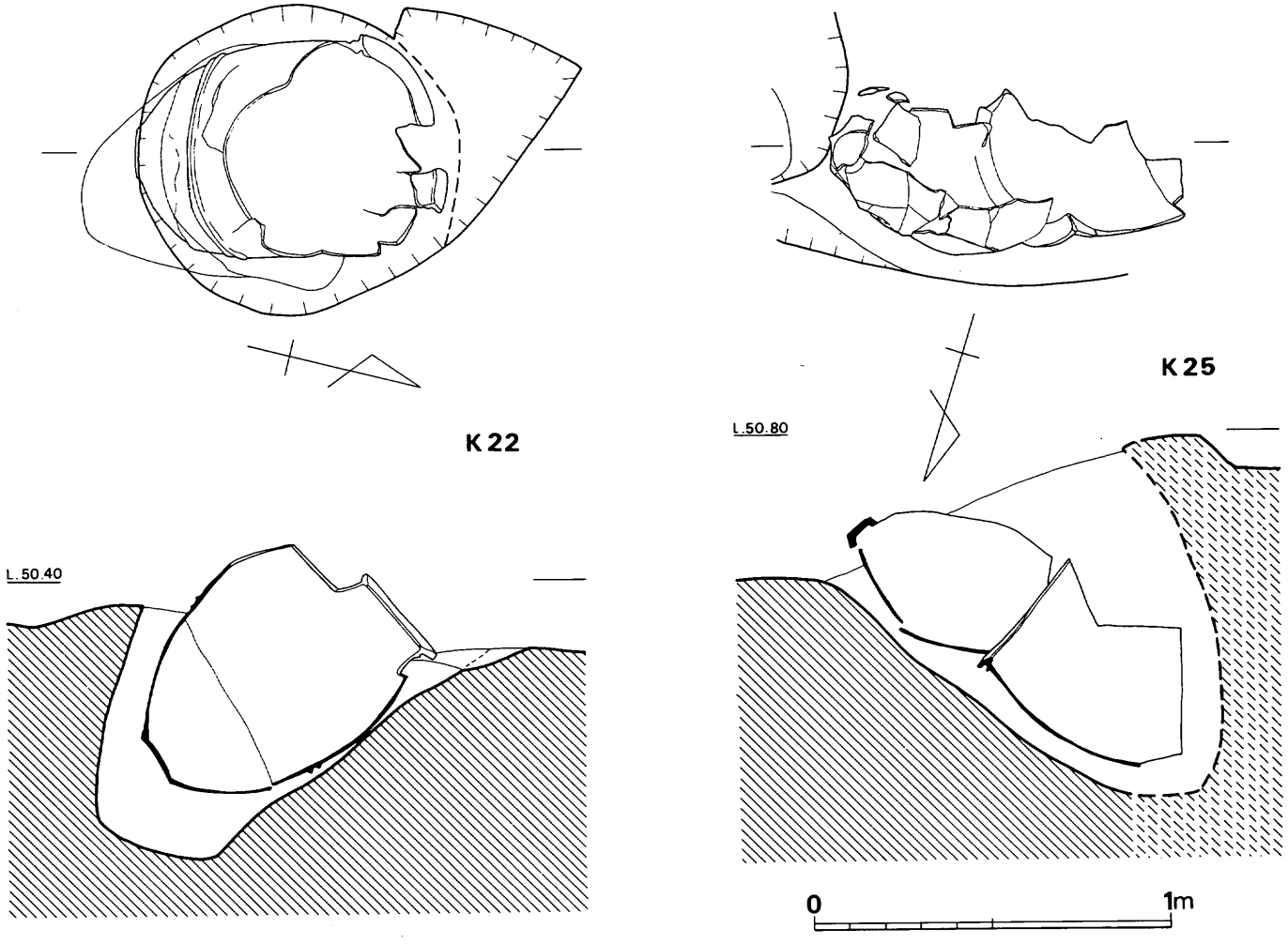


Fig. 15 22号・25号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

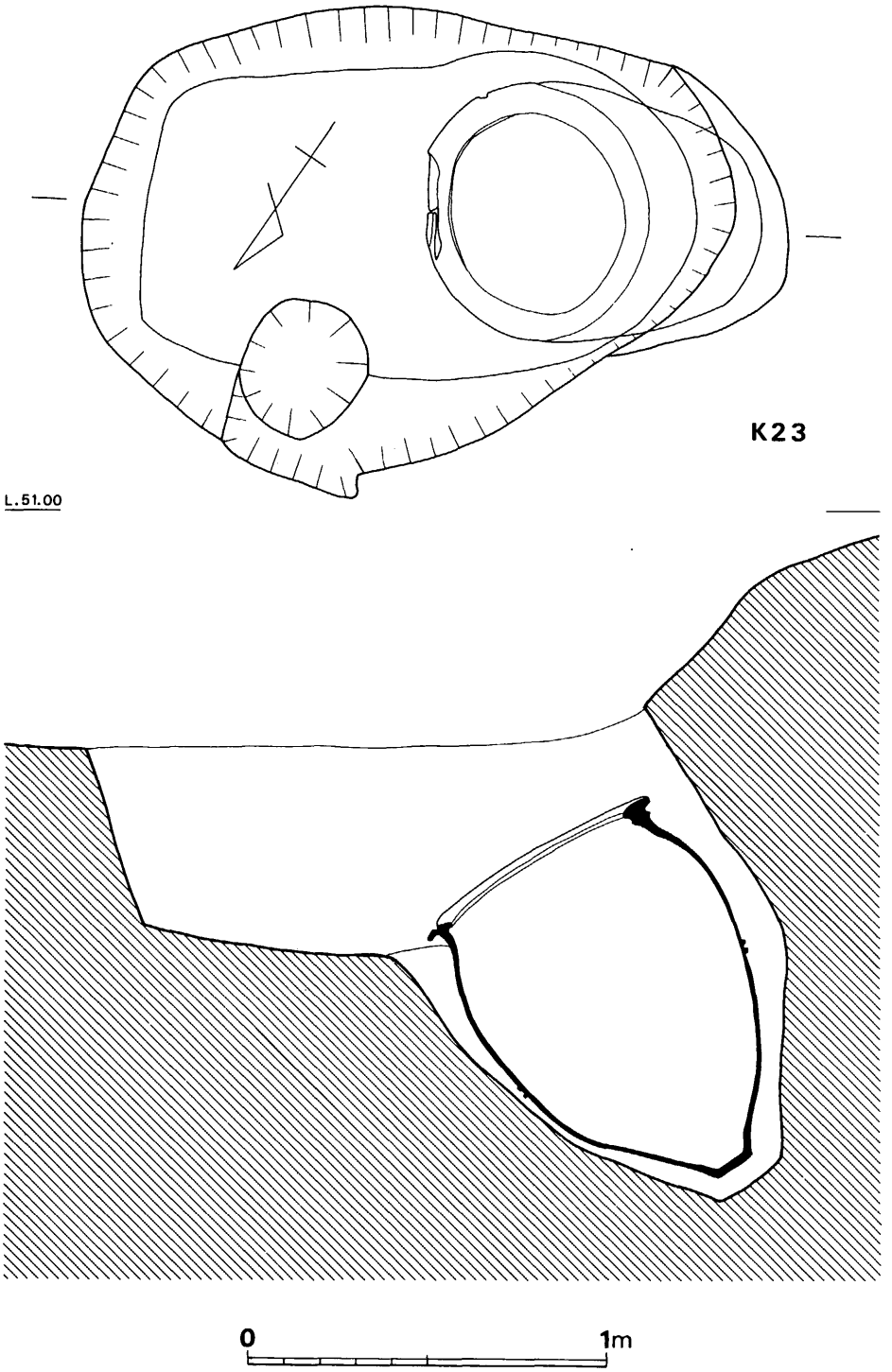


Fig. 16 23号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

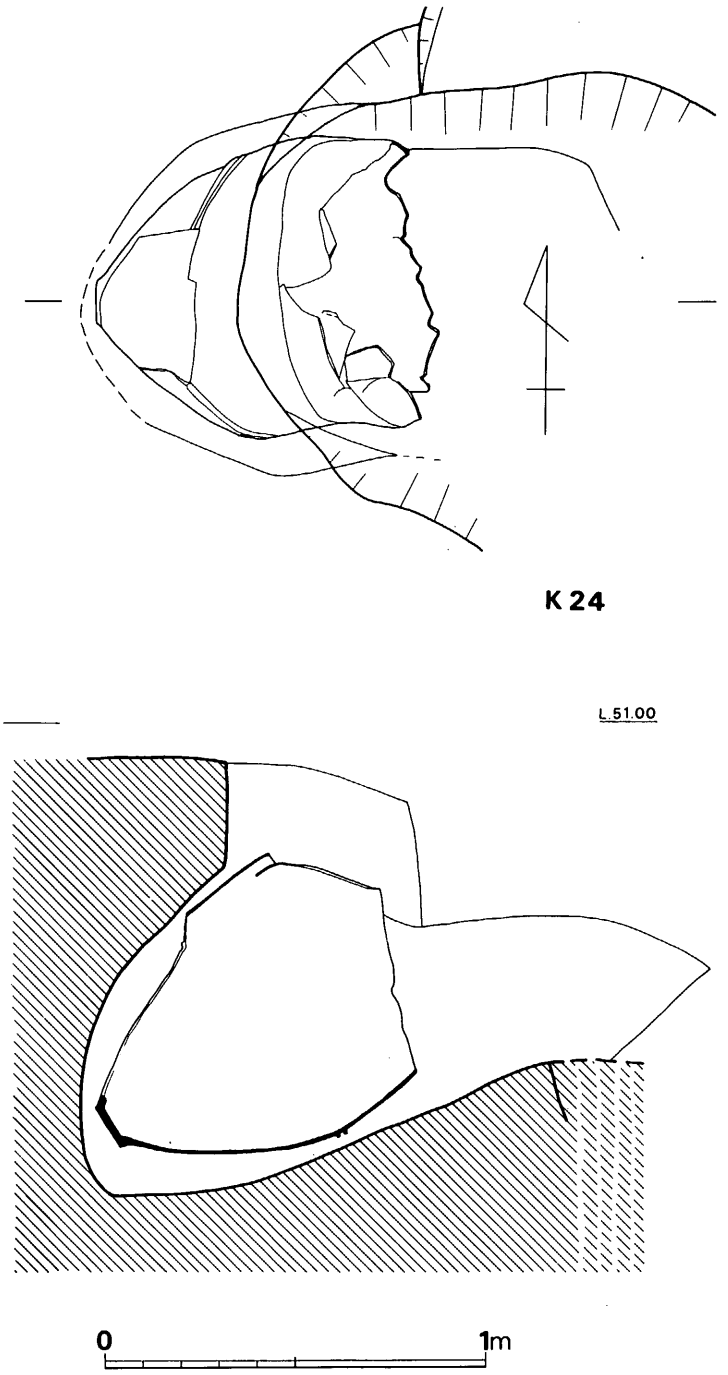


Fig. 17　24号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

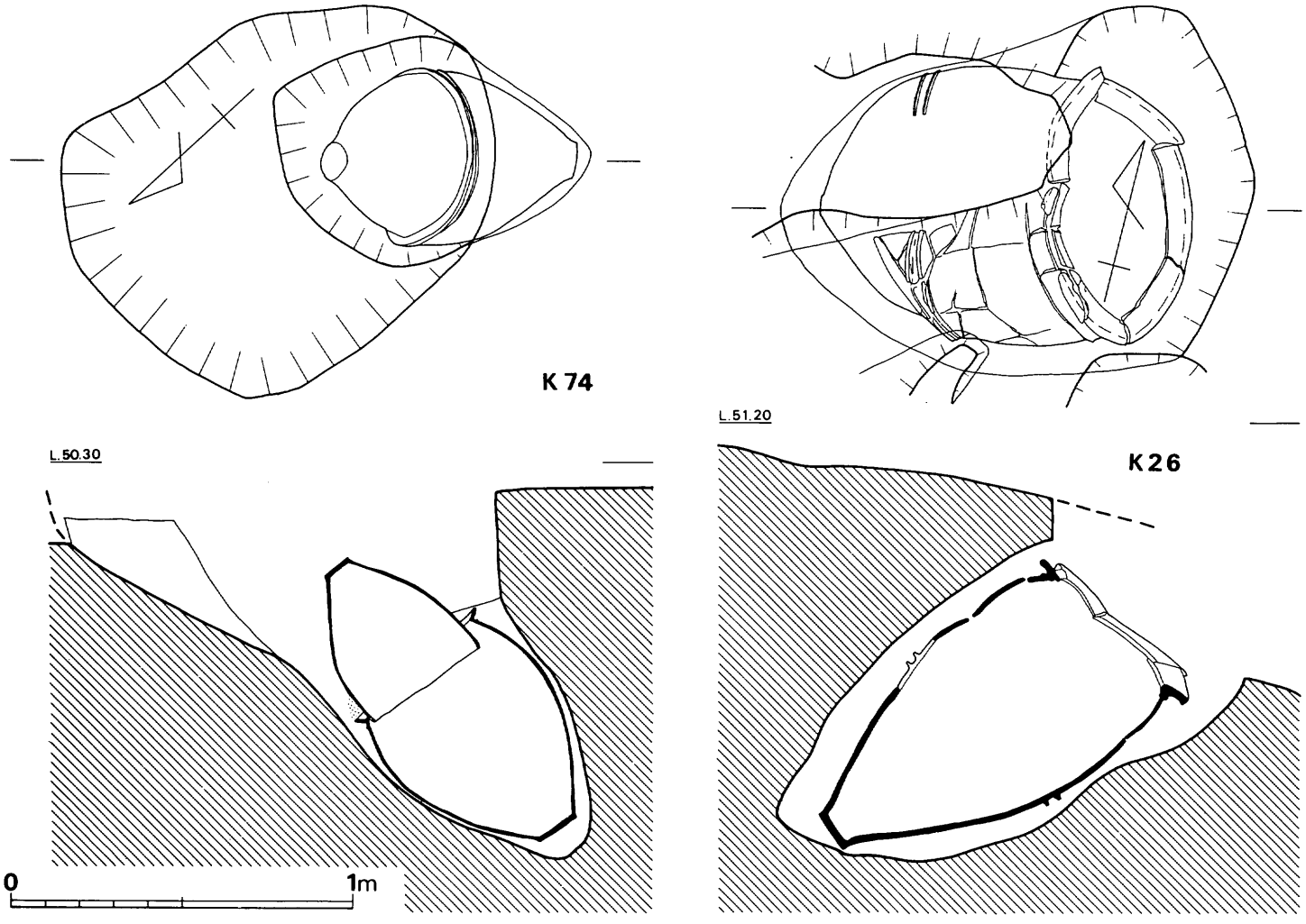


Fig. 18 26号・74号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

軸線上に39°の角度で埋置されており、下甕を挿入した横穴と棺の空間部はほんのわずかである。底部に相当する部分の墓坑は底部に沿って平坦である。接口部には粘土目貼りは特に見あたらなかった。下甕内の底部周辺には、頭蓋骨などを含む人骨が若干検出された。

22号甕棺墓（Fig. 15・77, PL. 13・46）

甕棺墓群の西側端部に位置しており、他との切り合いはない。単式の甕棺墓である。甕は器高80*cm*、胴部径60*cm*のものであり、小形である。墓坑と棺の両方とも上部を削平されている。棺は横穴を穿って挿入されており、37°の角度で埋置している。この際、横穴と、甕の胴部上の半部分は10*cm*の空間があり、底部周辺では20*cm*程の空間を生じている。

23号甕棺墓（Fig. 16・79, PL. 13・47）

成人用の単式甕棺墓である。甕棺墓群の西側端部近くに位置している。墓坑は花崗岩バイラン土の地山を長方形に掘り、東壁に横穴を穿って甕を挿入したものである。甕の口縁部は木蓋で被覆したと思われるが、現存しない。墓坑底面は2段掘りであり、口縁部直下に段を有している。棺は57°の角度で埋置されており、棺と墓坑の空間は底部は6*cm*、胴部下方は、ほぼぎりぎり、上方は10*cm*である。

24号甕棺墓（Fig. 17・80, PL. 14）

甕棺墓群の西側端部に位置する成人用の単式甕棺墓である。新墓のために墓坑と棺の一部を破壊されている。胴部上面は土圧のためか割れてずれ込んでいる。上甕に相当するものは一片も検出されていないため単式甕棺墓として取り扱った。35°の角度で埋置されている。

25号甕棺墓（Fig. 15・79, PL. 14）

甕棺墓群の南西端部近くに位置している。接口式の小形棺である。新墓を造る際に棺と墓坑の半分程を破壊されている。上甕は口縁部打ち欠きの甕形土器であり、下甕は甕形土器の組合せである。下甕は新墓を造る際に底部を削り取られている。

26号甕棺墓（Fig. 18・81, PL. 15・47）

甕棺墓群の西側端部に位置する成人用の組合せ式の甕棺墓である。墓坑は新墓を作る際に一部破壊されている。墓坑に横穴を穿って棺を挿入しているが、棺は土圧のため若干つぶれている。上甕は口縁部打ち欠きの甕形土器を用い、下甕は甕形土器を用いている。

なお、口縁周辺には粘土は見あたらなかった。棺は35°の角度で埋置されている。下甕の底部近くで人骨片を2、3片検出している。

27号甕棺墓（Fig. 19・82, PL. 47）

甕棺墓群の南西端部に位置する成人用の覆蓋式甕棺墓である。墓坑の東壁は新墓によって切られているが平面形は方形を呈するものと思われる。西壁に横穴を穿って下甕を挿入している。

棺は上甕は口縁部打ち欠きの甕形土器を用い、下甕は甕形土器を用いている。接口部の粘土目貼りは見られない。39°の角度で埋置している。

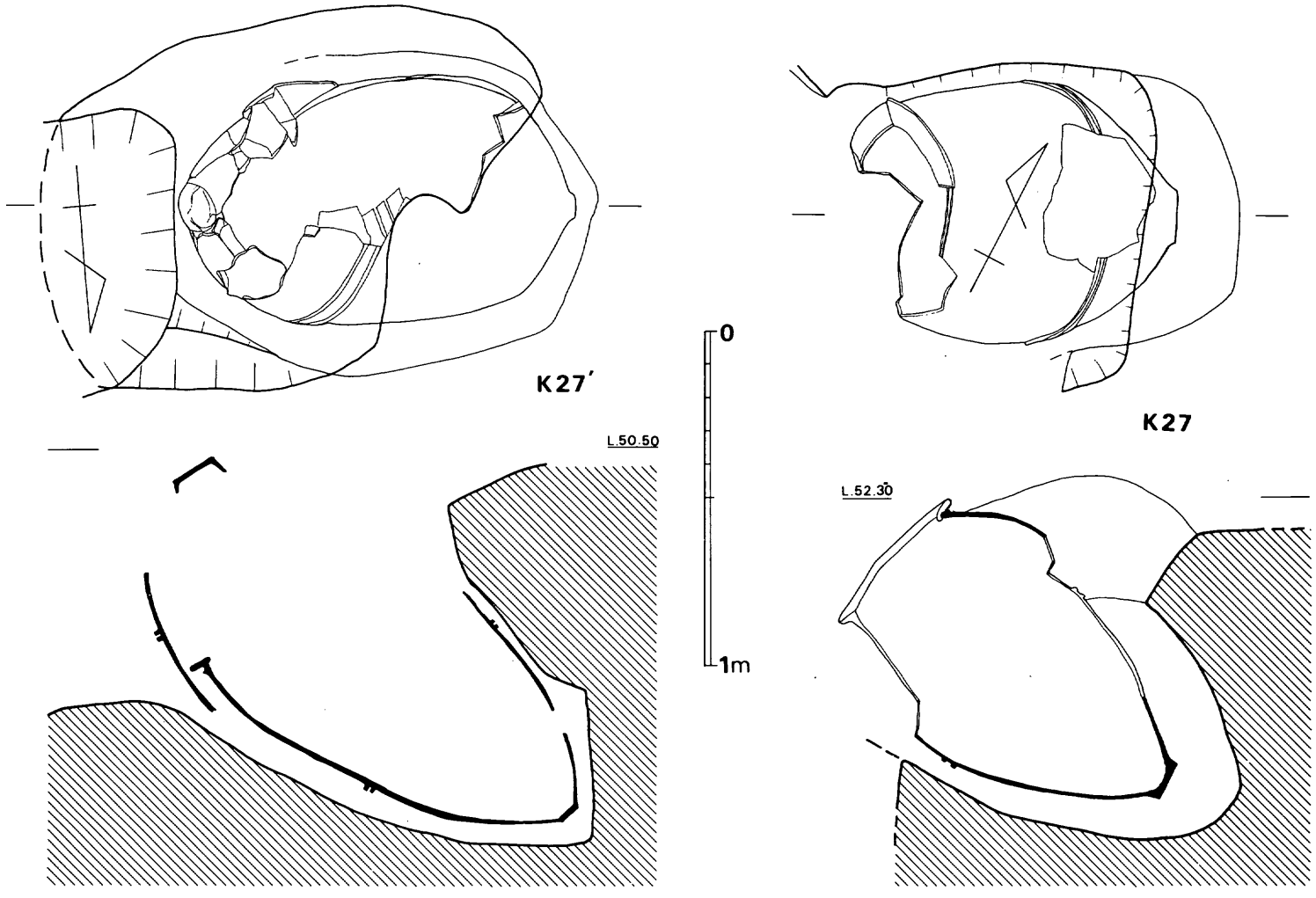


Fig. 19 27号・27′号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

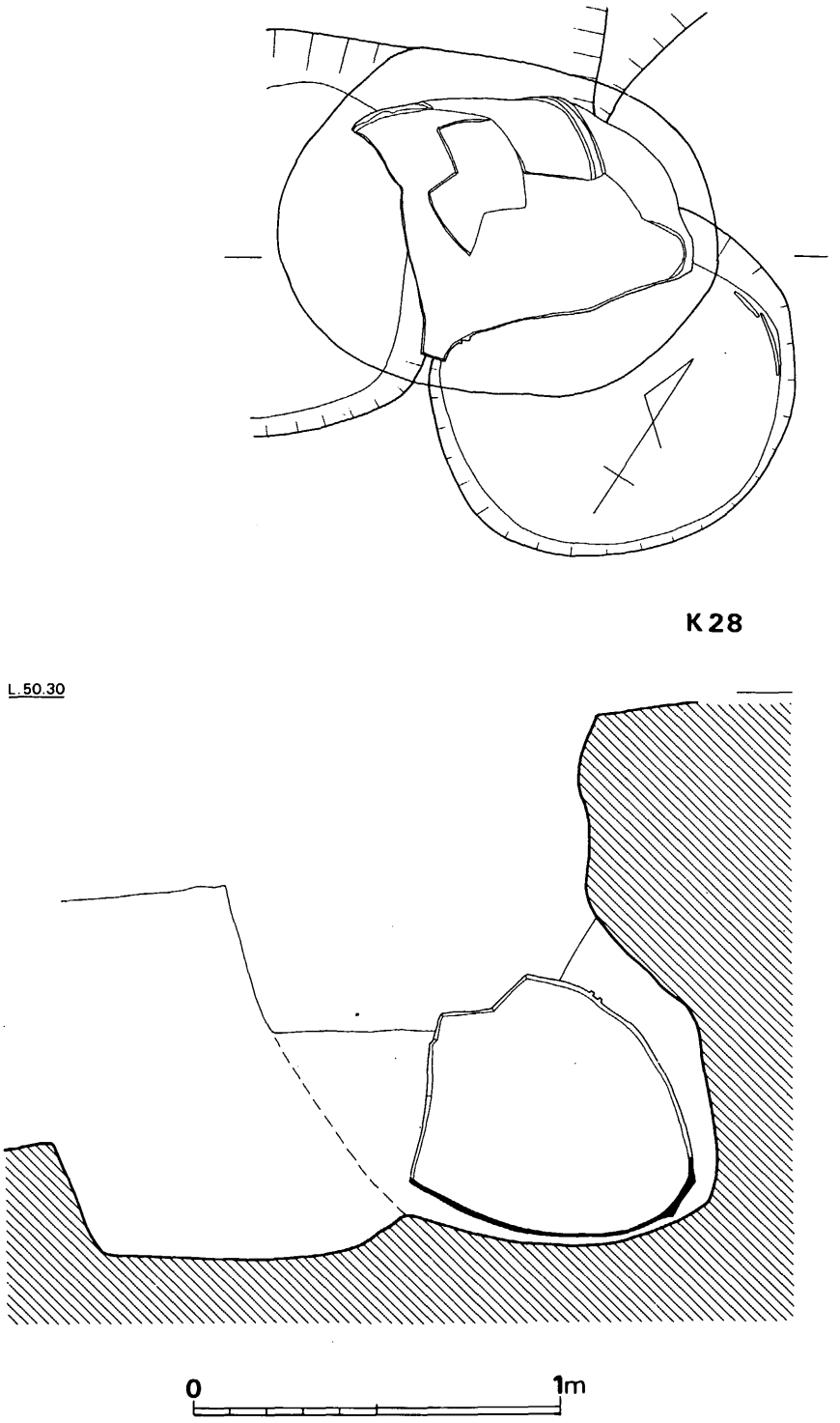
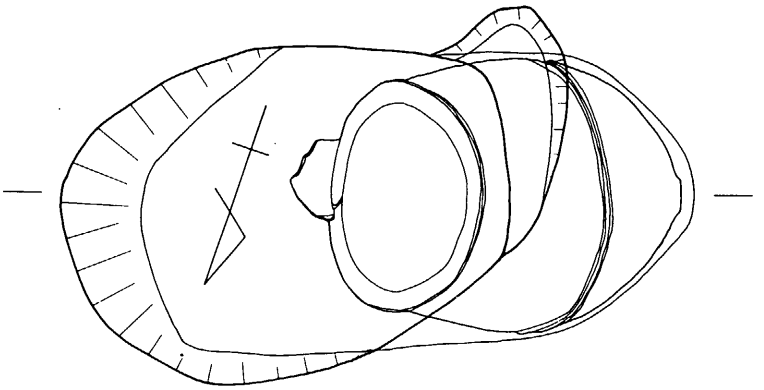


Fig. 20　28号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）



K30

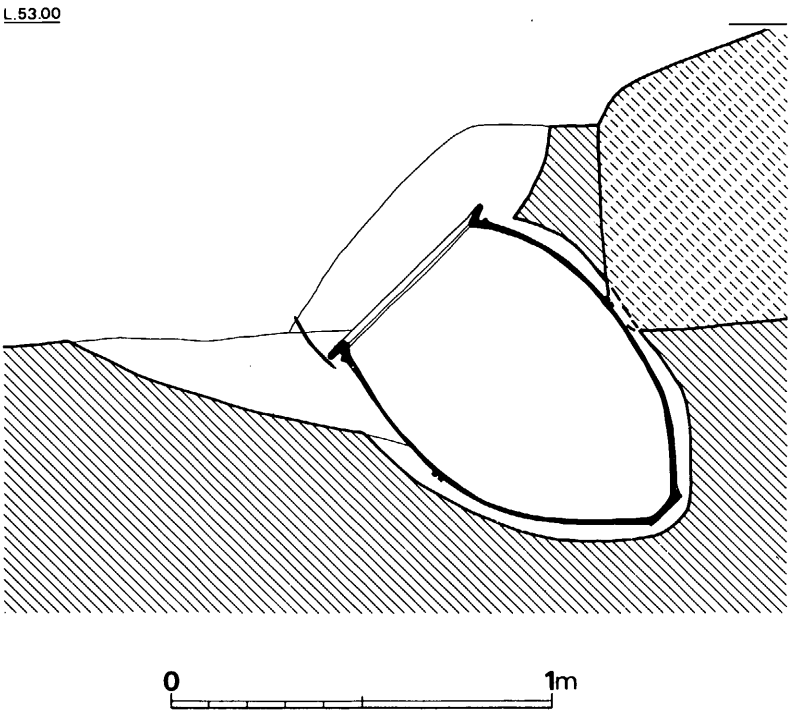


Fig. 21 30号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

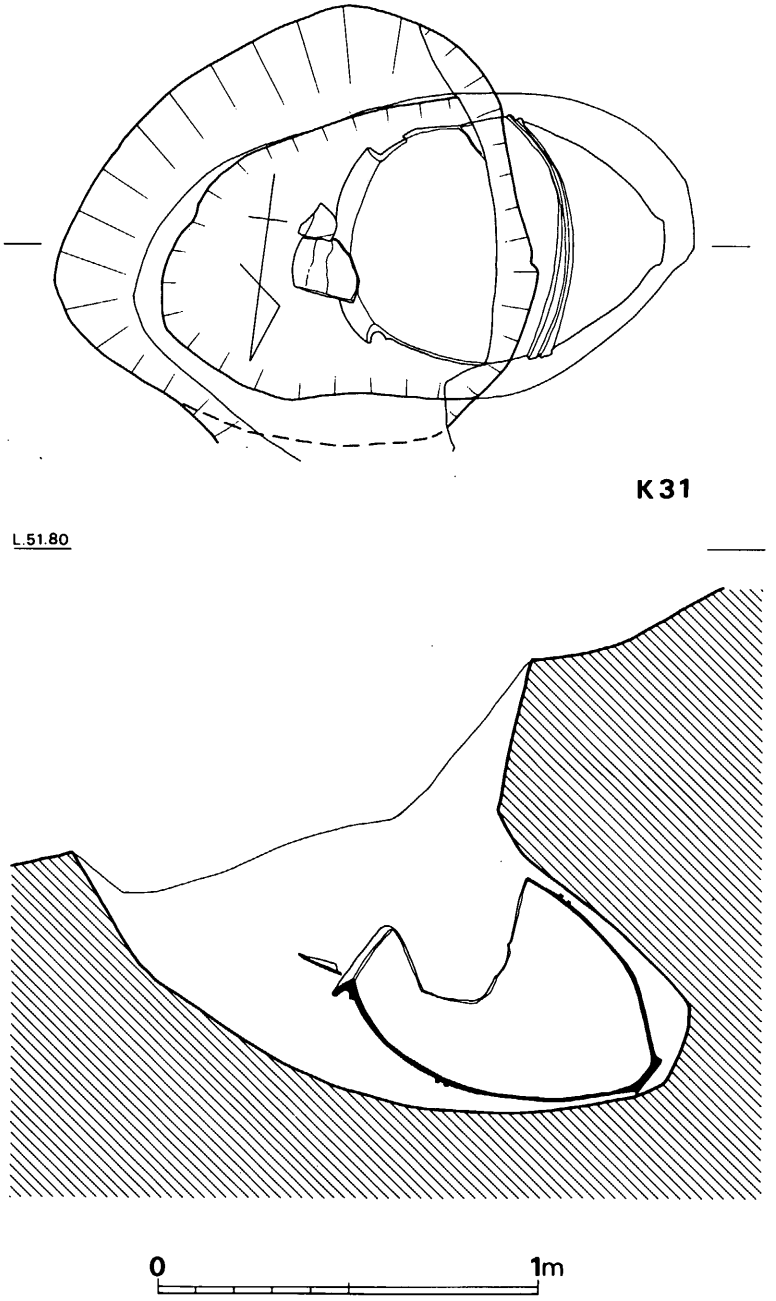


Fig. 22　31号甕棺墓実測図（縮尺１/20）

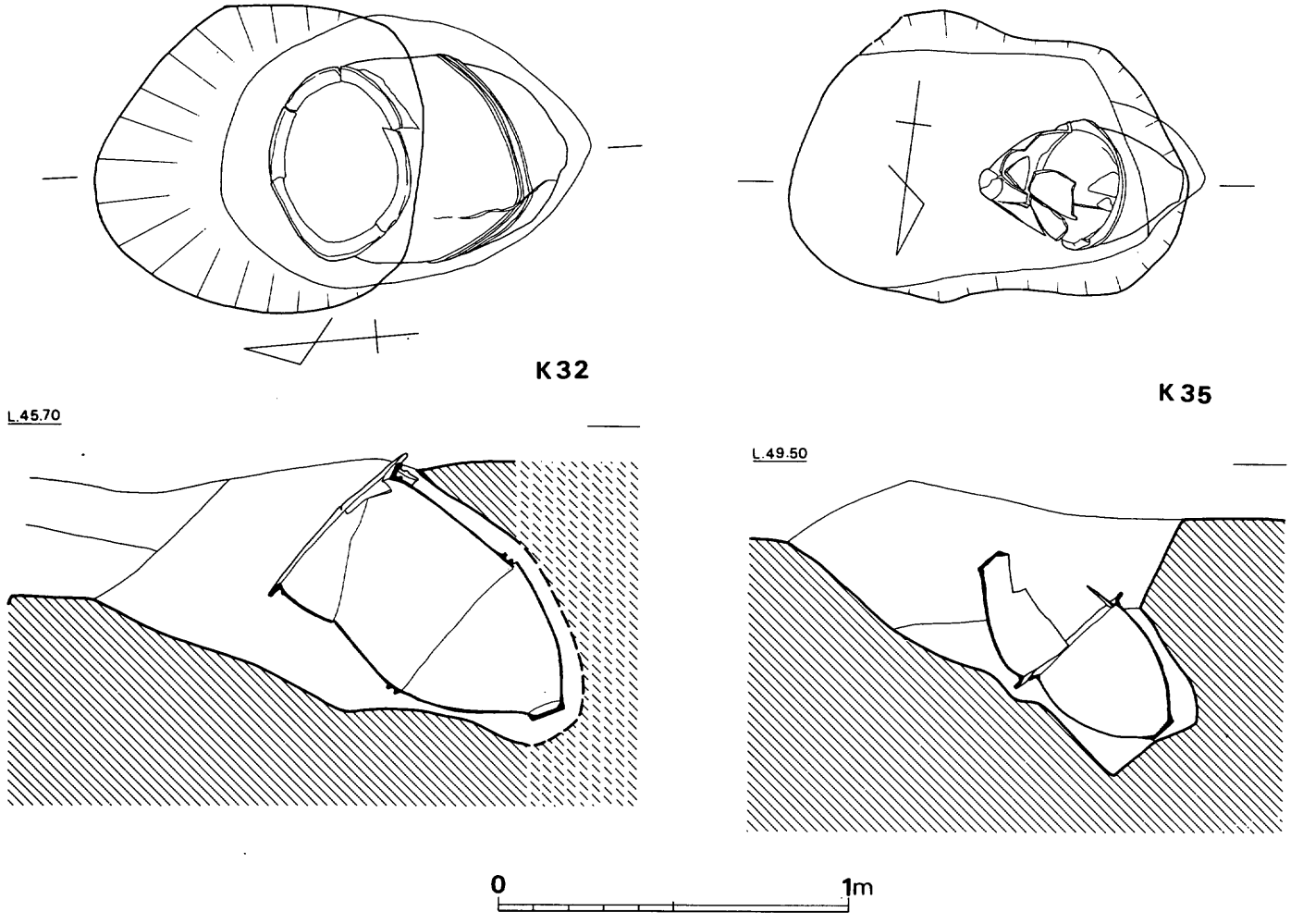


Fig. 23 32号・35号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

27′ 号甕棺墓（Fig. 19）

墓拡は新墓を造る際に半分を破壊されている。成人用の単式甕棺墓であろう。墓坑の形態は不明であるが横穴を穿って棺を挿入している。横穴と棺との空間部は他のものに比して広い。棺は34°の角度で埋置している。

28号甕棺墓（Fig. 20, PL. 15）

丘陵の南側裾部近くに位置している。墓坑と棺は新墓を造る際に切られており、全形は知り得ない。成人用の甕棺墓であり、最初単棺と思っていたが、下甕の埋土中から朱塗りの別個体の破片が見つかり、合わせ甕である事がわかった。従って上甕のみ朱塗りである。横穴を穿って棺を挿入しており、この埋置角度は32°である。墓坑上面からの深さは1.5mである。

29号甕棺墓（Fig. 7・109, PL. 16・56）

丘陵の南寄りの位置に所在する、小児用の覆蓋式甕棺墓である。墓坑は削平されており、甕棺も破壊を受けている。墓坑はその一部を土拡によって切られており、全形は不明であるが、残存部の状態から棺は墓坑の主軸から、はずれて埋置されている事がわかる。棺は上・下甕とも甕形土器の組合せであり、上甕は口縁を打ち欠いている。なお、棺に使用した甕形土器は煤が付着しており、このことから日常用器を転用した事がうかがえる。

30号甕棺墓（Fig. 21・83, PL. 16・48）

丘陵の最南端に位置している成人用の覆蓋式甕棺墓である。墓坑上面は削平されており、特に東壁側はその度合いが強い。墓坑の平面形は隅丸長方形を呈している。西壁は横穴を穿って下甕を挿入している。切り込み面は地山からでなく埋土から切り込んでいる。横穴は下甕の形状に沿って掘削されており、49°の角度で埋置している。

31号甕棺墓（Fig. 22・84, PL. 17・48）

丘陵南斜面の端部近くに位置しており、南接して2号箱式石棺墓が営まれている。成人用の接口式甕棺墓である。墓坑は北壁の一部を土坑によって切られており、平面形は不整形を呈する。切り込み面は埋土からであり地山に到達している。墓坑の西壁に横穴を穿って下甕を挿入しているが、この横穴は地山掘削によるものである。下甕は口縁部を打ち欠いた土器を用いており、32°の角度で埋置している。

32号甕棺墓（Fig. 23・84, PL. 17・48）

成人用の単式甕棺墓である。墓坑の形態は隅丸方形状を呈しており、墓坑南壁に横穴を穿って棺を挿入している。横穴は101号甕棺墓と切り合っているため、全形は不明である。棺は41°の角度で埋置されている。

33号甕棺墓（Fig. 24・85, PL. 17・18・49）

成人用の覆蓋式甕棺墓である。墓坑は楕円形状のものであり、西壁に横穴を穿って下甕を挿入している。この際、下甕はすべて、横穴内に納まってしまう。横穴はほぼ下甕と同大の規模

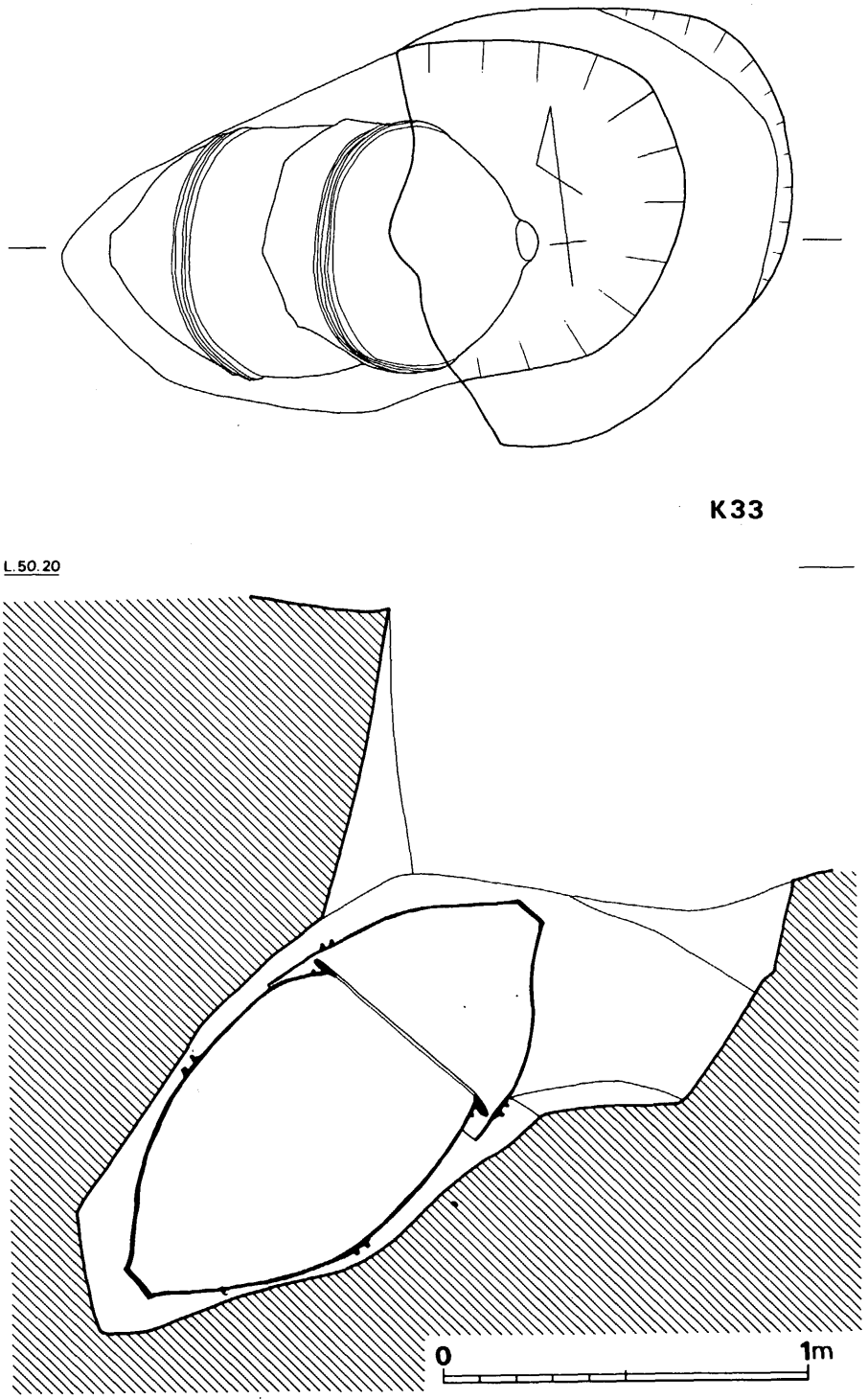


Fig. 24 33号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

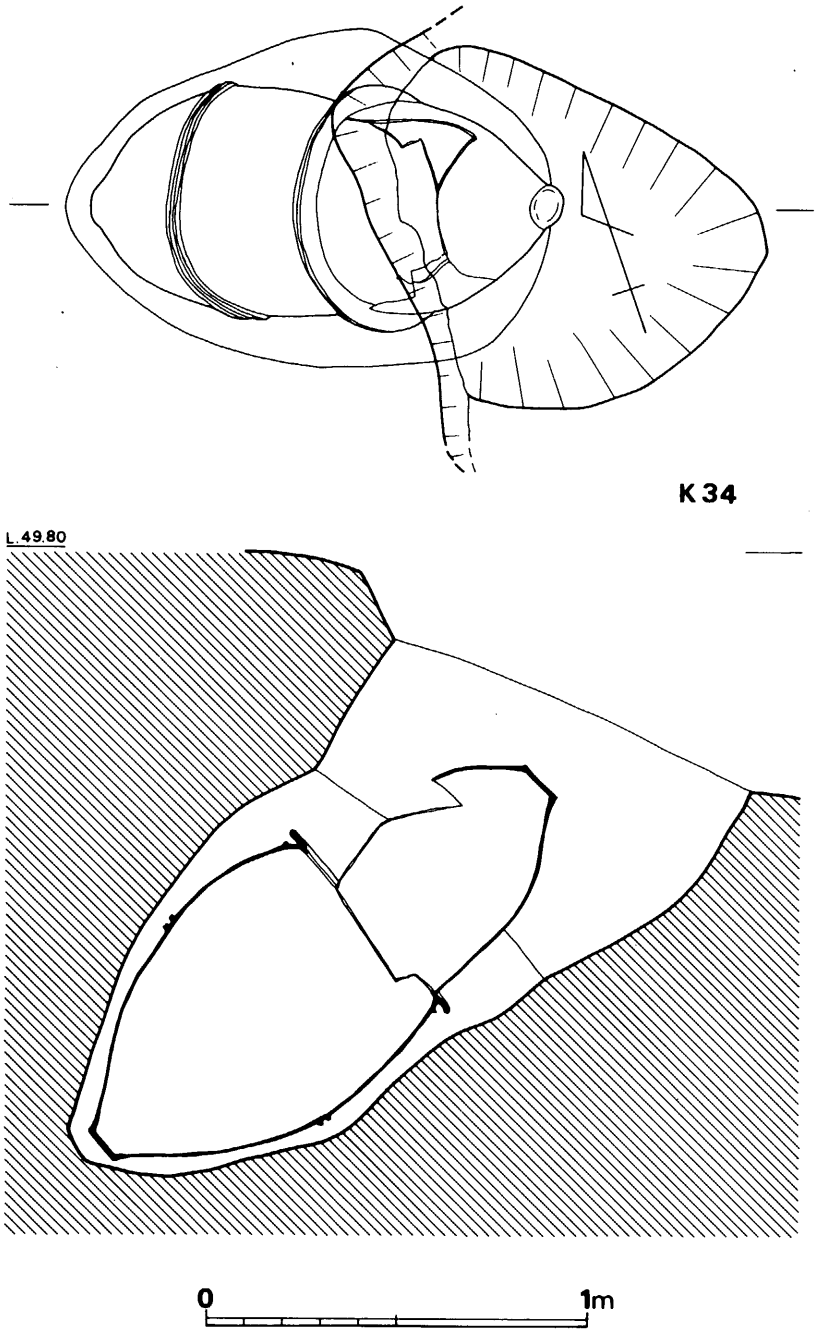
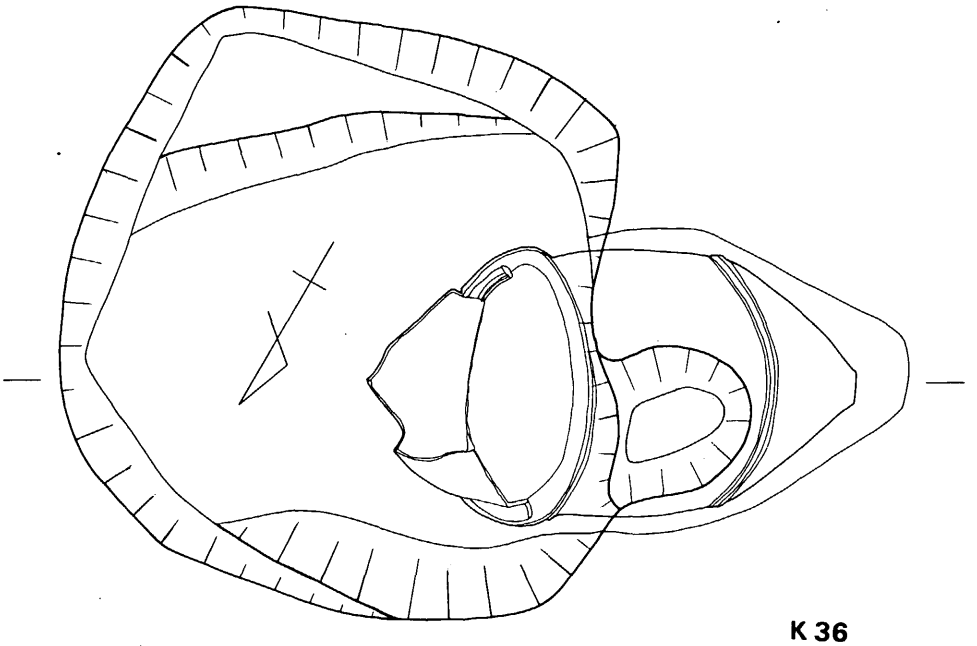


Fig. 25　34号甕棺墓実測図（縮尺 1 /20）



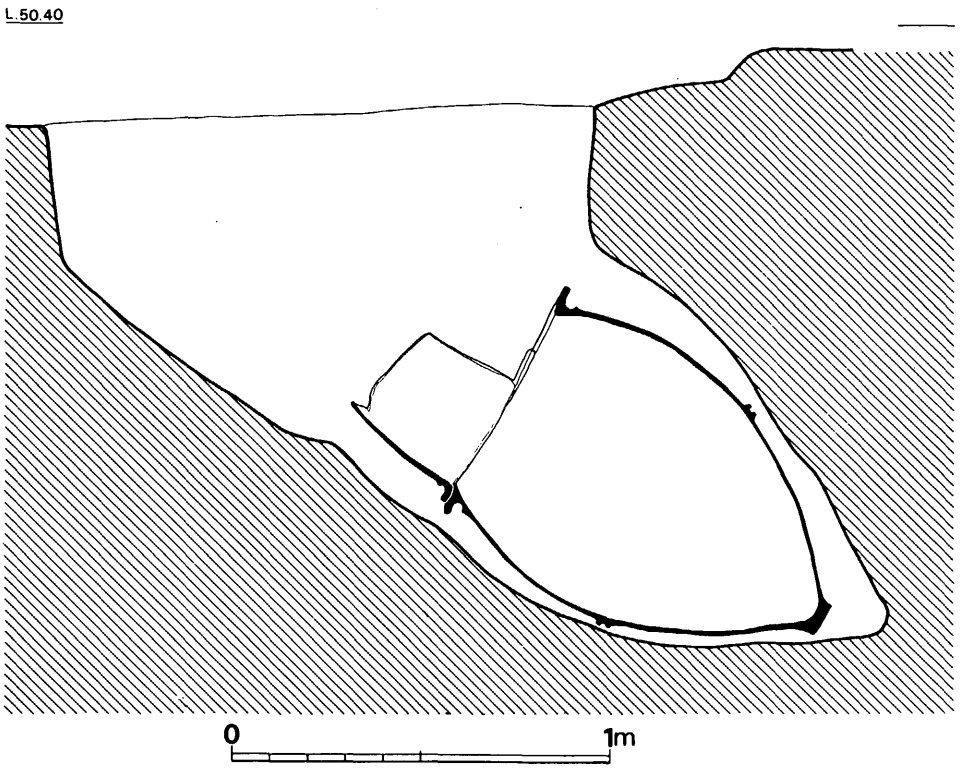


Fig. 26 36号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

のものであり、墓坑底面から、上端までは２mを測る深いものである。

棺は上甕には口縁打ち欠きの甕形土器を用い、下甕も甕形土器を用いている。上・下甕の接合部には粘土の目貼りは見られない。甕棺の埋置角度は42°である。

34号甕棺墓（Fig. 25・86, PL. 17・18・49）

成人用の呑口式甕棺墓である。墓坑は楕円形を呈するものであり、西壁に横穴を穿って下甕を挿入したものである。横穴は下甕の形状に沿って穿たれたものであり、墓坑底面から上端面までは1.65ｍである。

棺は上甕は口縁打ち欠きの甕形土器であり、下甕も同じく甕形土器という組合せである。下甕と上甕の若干はこの横穴内に納まってしまう。上・下甕の合せ目には粘土の目貼りは見られない。棺は40°の角度で埋置されている。

35号甕棺墓（Fig. 23・109, PL. 17・56）

小児用の接口式甕棺墓である。墓坑は1.1m×0.8mで隅丸方形を呈しており、短辺である西壁に横穴を穿って下甕を挿入する。横穴の形状は当該遺跡の大部分が、甕の形に合わせた砲弾状を呈するに対し、これは方形を呈するものである。

棺は上・下棺とも甕形土器の組合せであり、口縁部接口部にあたる墓坑底面は若干掘りくぼませている。棺は46°の角度で埋置されており、接口部に粘土の目貼りは見られない。

36号甕棺墓（Fig. 26・87, PL. 19・50）

甕棺墓群のほぼ中央部に位置している成人用の接口式甕棺墓である。37号甕棺墓に墓坑を切って造られており、これよりは先行するものである。墓坑の平面形は1.55m× 1.4mで南北にやや長い隅丸方形のものである。この墓拡西壁に横穴を穿って下甕を挿入している。横穴は下甕の形状に沿った砲弾状を呈しており、底部にあたる部分は狭くなる。下甕は横穴内に完全に納まってしまう。

棺は下棺は甕形土器を用い、上甕は深鉢形土器を用いている。下甕の中央部付近で頭蓋骨を含む人骨が遺存しているのが検出された。棺は35°の角度で埋置されている。なお、接口部には粘土の目貼りは見られなかった。

37号甕棺墓（Fig. 27・88, PL. 51）

36号甕棺墓の墓坑を切っており、これよりは新しい時期のものである。成人用の合わせ甕棺墓であるが接合の方法は不明である。最初は単式甕棺墓と思われたが下甕の埋土中から上甕の破片を検出している。墓坑の形は他の遺構と切り合っているため不明である。墓坑の壁面に横穴を穿って下甕を挿入しており、棺の埋置角度は54°と勾配は急である。

38号甕棺墓（Fig. 27・110, PL. 20・57）

39号甕棺墓の墓坑を切って造られている。小児用の呑口式甕棺墓である。墓坑の平面形は隅丸方形を呈しており、墓坑の西壁に横穴を穿って下甕を挿入している。墓坑は二段掘りである。

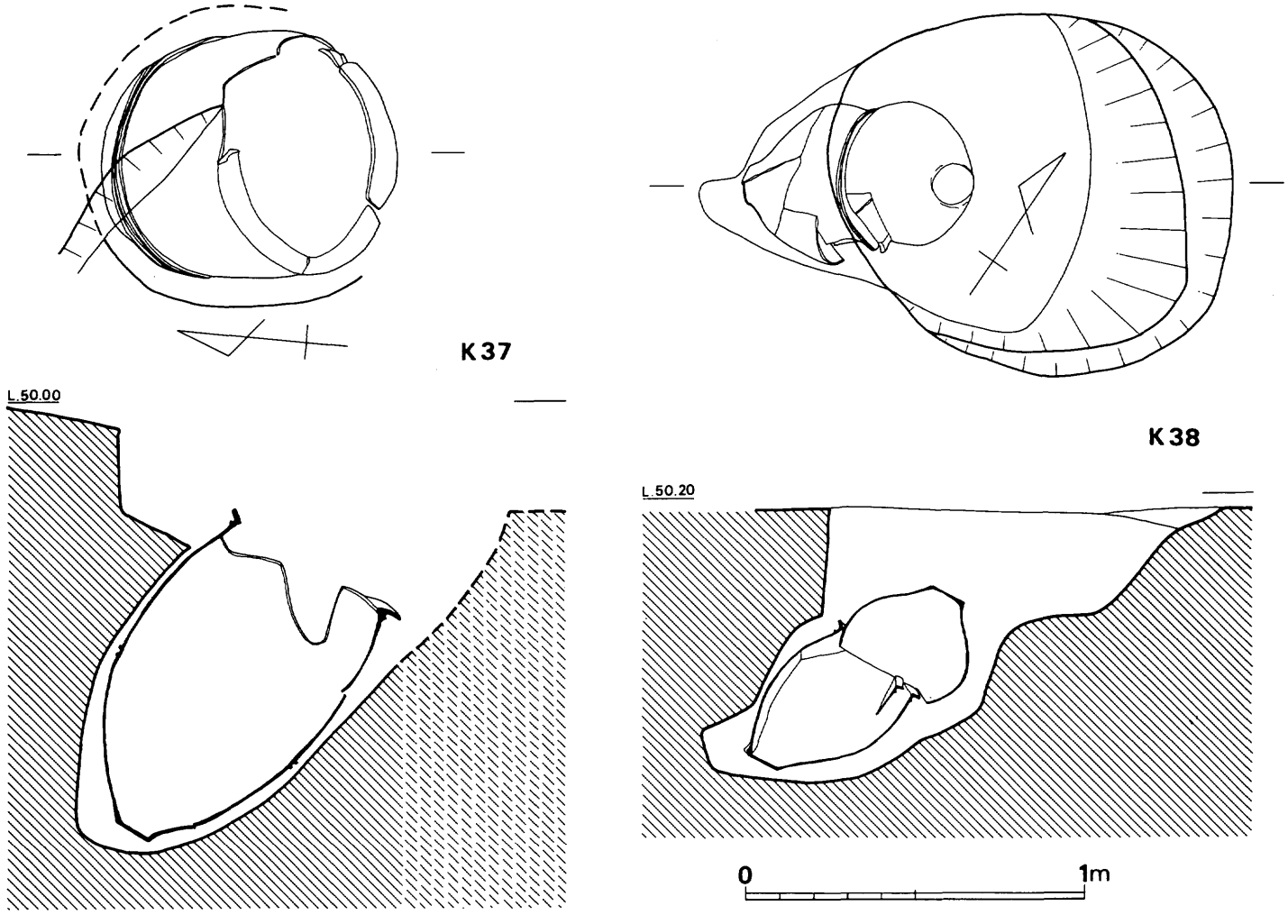


Fig. 27 37号・38号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

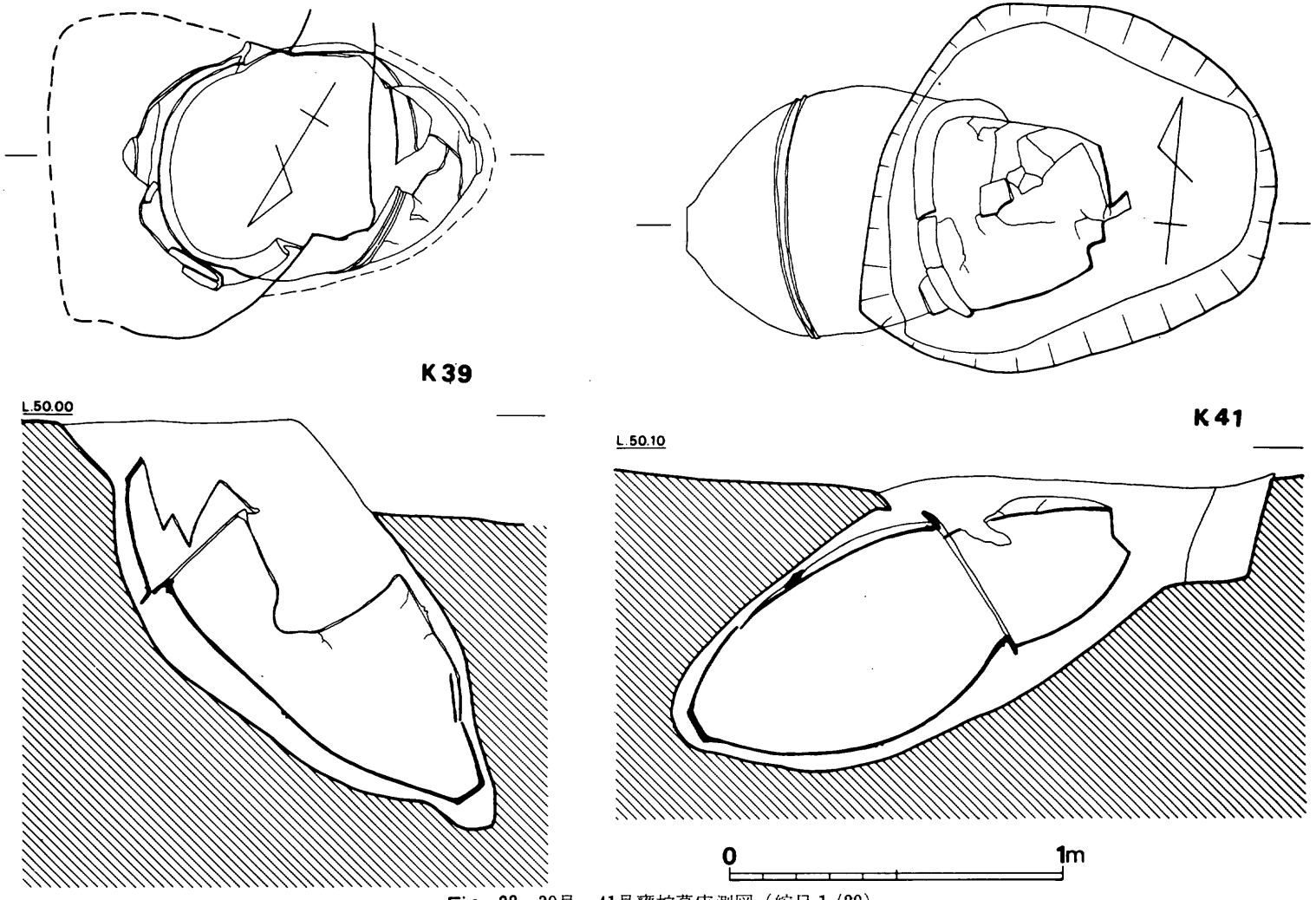
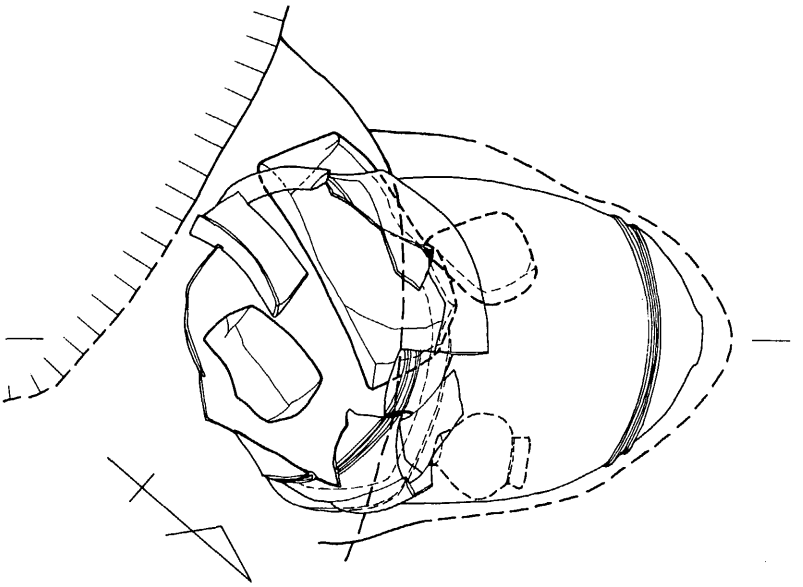
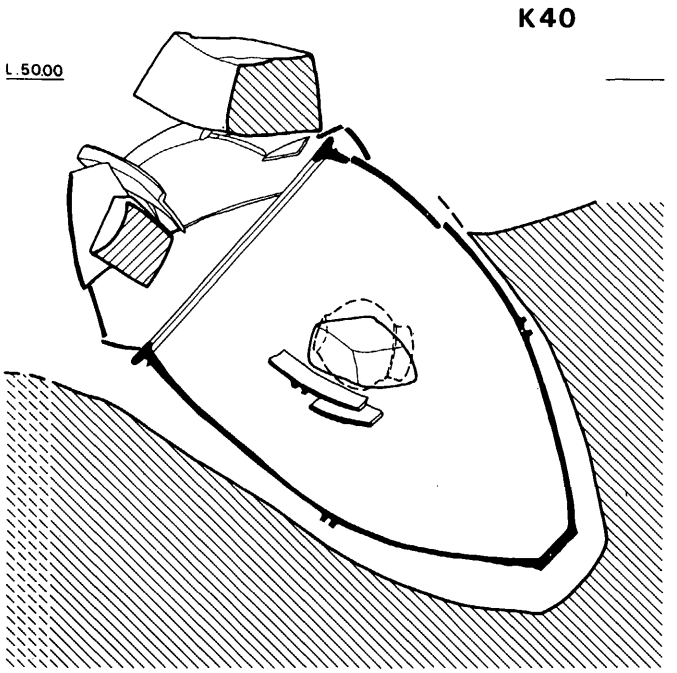


Fig. 28 39号・41号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）





0 1m

Fig. 29 40号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

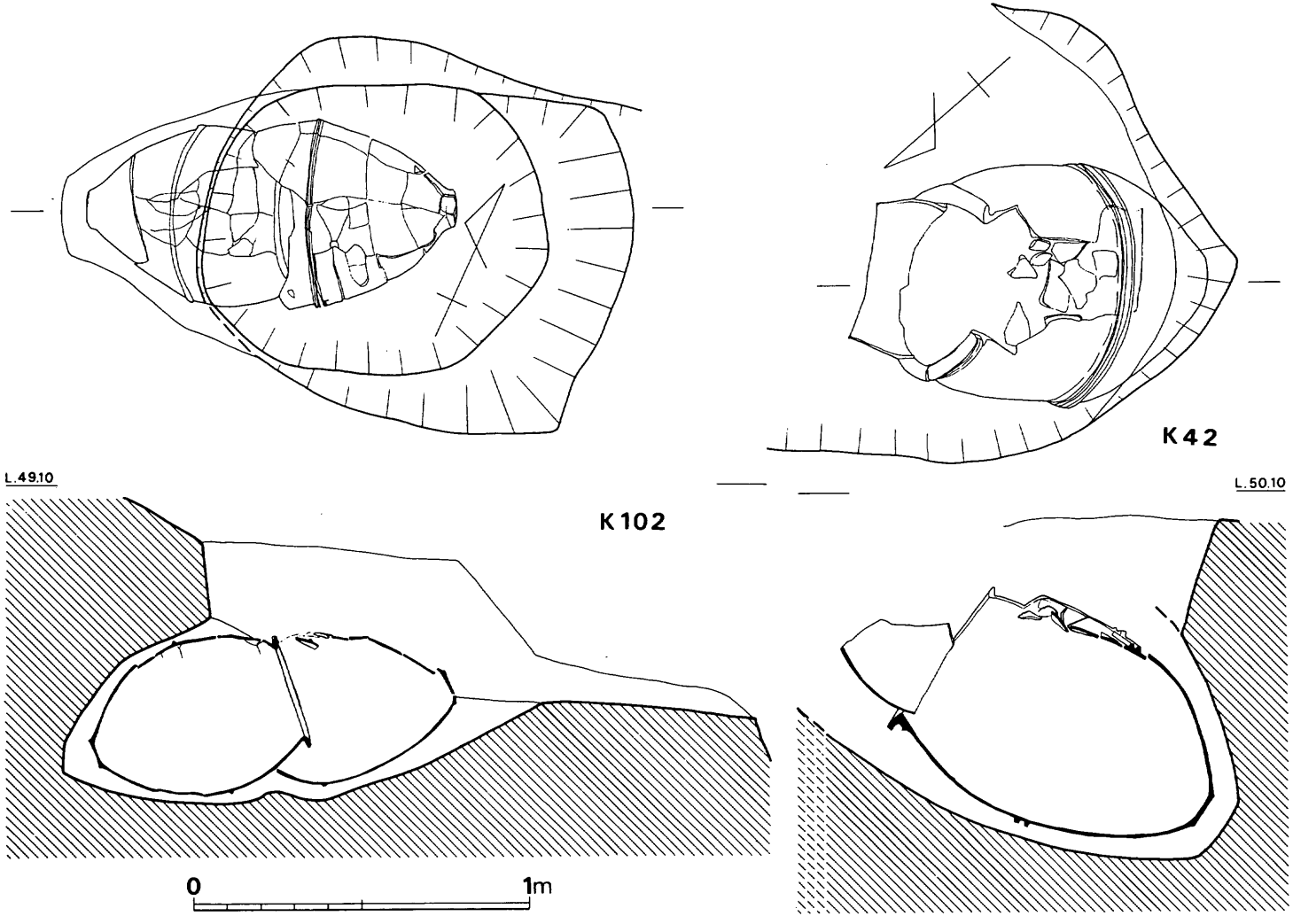


Fig. 30 42号・102号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

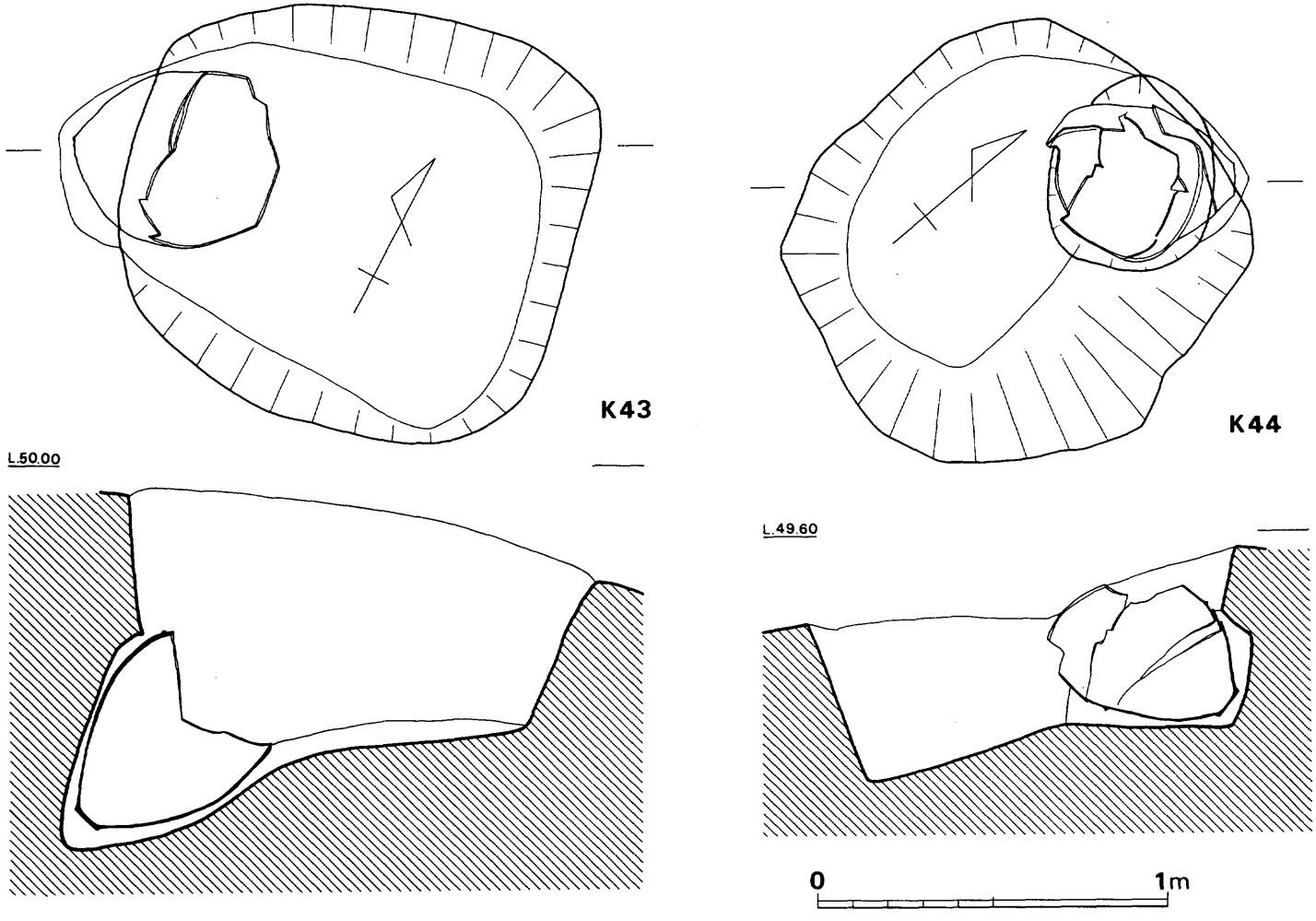


Fig. 31 43号・44号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

横穴の形態は底部に相当する部分は壁面に直角方向に小穴を有する。

棺の上甕は口縁打ち欠きの壺形土器を用いており、下甕は甕形土器を用いている。棺は墓坑の中軸線上に40°の角度で埋置されており、上下甕の合わせ目には粘土の目貼りは見られない。

39号甕棺墓（Fig. 28・89, PL. 19・50）

38号と41号甕棺墓によって墓坑を切られている。従って墓坑の形状は不明である。成人用の接口式甕棺墓である。墓坑西壁に横穴を穿って下甕を挿入しており、この下甕は土圧でややつぶされている。下甕の底面に相当する部分の墓坑はさらに狭く掘りくぼめられている。

棺は上甕は鉢形土器を用い、下甕には甕形土器を用いている。埋置角度は50°を測り勾配は急である。

40号甕棺墓（Fig. 29・90, PL. 20・21・51）

成人用の覆蓋式甕棺墓である。墓坑は切られているためその形状は不明である。墓坑の北壁に横穴を穿って下甕を挿入している。横穴は下甕の形状に沿った砲弾形を呈しており、直径は90 *cm*のものである。

棺は上甕は口縁打ち欠きの甕形土器を用い、下甕は当遺跡中では最も大形と思われる甕形土器の組合せである。上甕は破砕しており、下甕内に一部落ち込んでいる。この落ち込んだ上甕の破片上に壺形土器・石がのっており、このことから、この壺は棺内副葬品ではなく、棺外副品の落ち込みと考えられる。また上甕では棺内と、上甕上面に石が見られるが、これは、墓標的なものを想定する事ができるのであろうか。棺は43°の角度で埋置されている。

41号甕棺墓（Fig. 28・91, PL. 51）

成人用の接口式甕棺墓である。墓坑は台形状を呈しており、西壁に横穴を穿って下甕を挿入したものである。

棺の上甕は口縁打ち欠きの甕形土器を用い、下甕にも甕形土器を用いている。胴部の上面部は土圧のためつぶれている。棺は22°の角度で埋置しており、接口部には粘土による目貼りは見られない。

42号甕棺墓（Fig. 30・92, PL. 21・51）

成人用の呑口式甕棺墓である。墓坑はその大半を欠損しており、棺も上半部を欠く。墓坑の一辺に横穴を穿って下甕を挿入したものである。

棺の上甕は口縁打ち欠きの土器を用い、下甕には甕形土器を用いて約30°の角度で埋置している。上・下甕の接口部には粘土の目貼りは見られない。

43号甕棺墓（Fig. 31・88, PL. 22・57）

小形棺であり、単式甕棺墓と思われる。墓坑は埋土を一辺 1.2 *m* 程隅丸方形に掘りくぼめ、西壁に横穴を穿って棺を挿入している。この横穴部分は地山を掘削している。

棺は44°の角度で埋置されており、墓坑の主軸に対して棺の主軸は、ずれている。

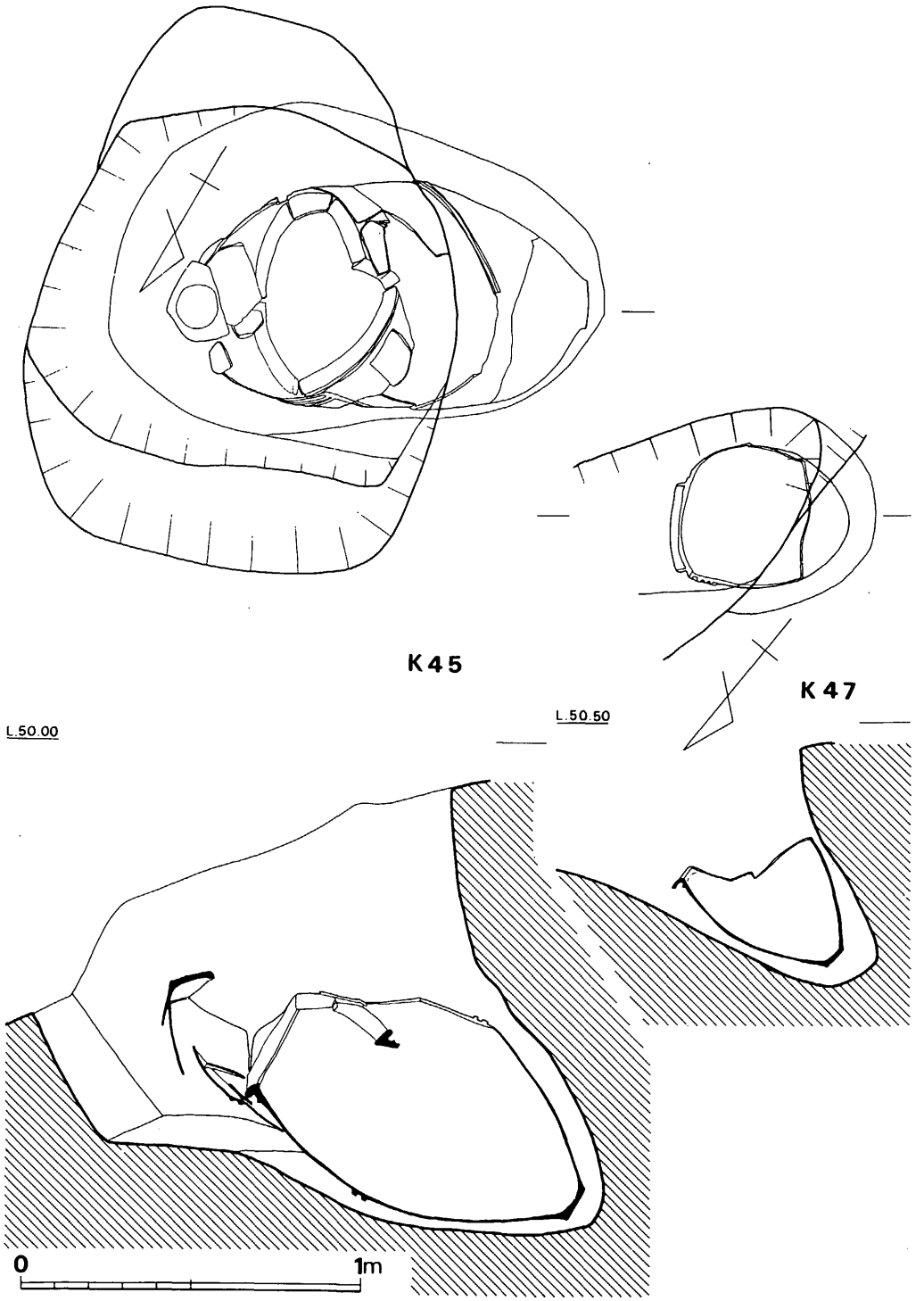


Fig. 32 45・47号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

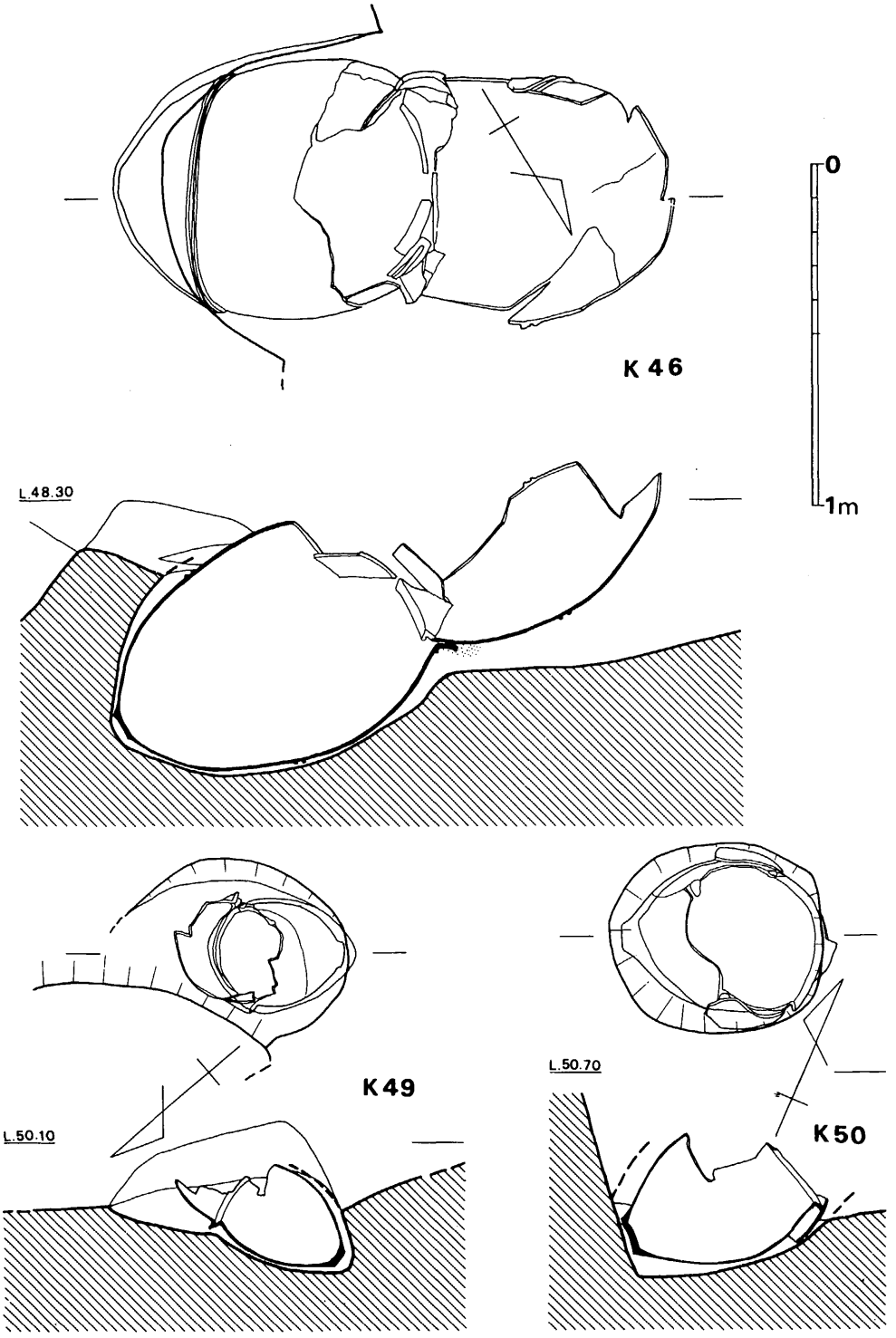
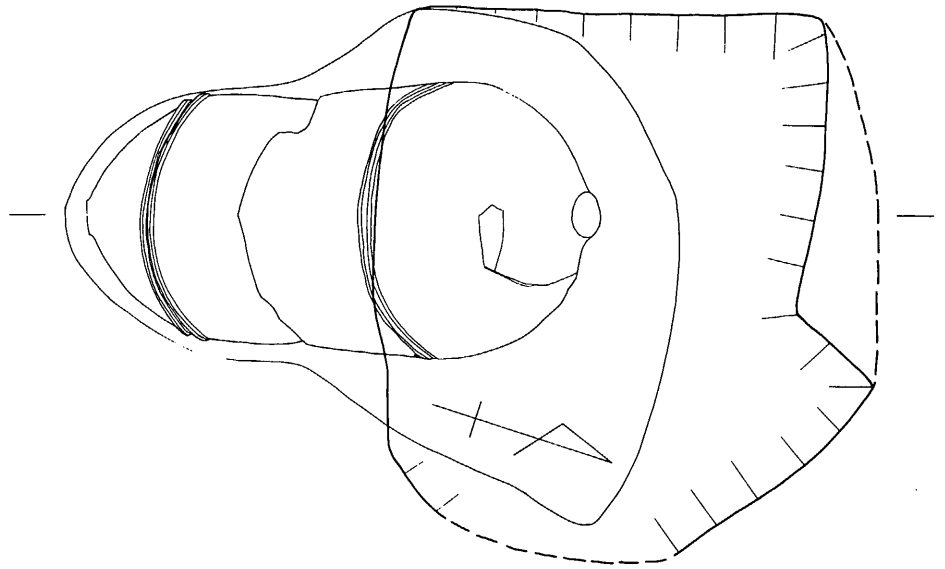


Fig. 33　46号・49号・50号甕棺墓実測図（縮尺 1 /20）



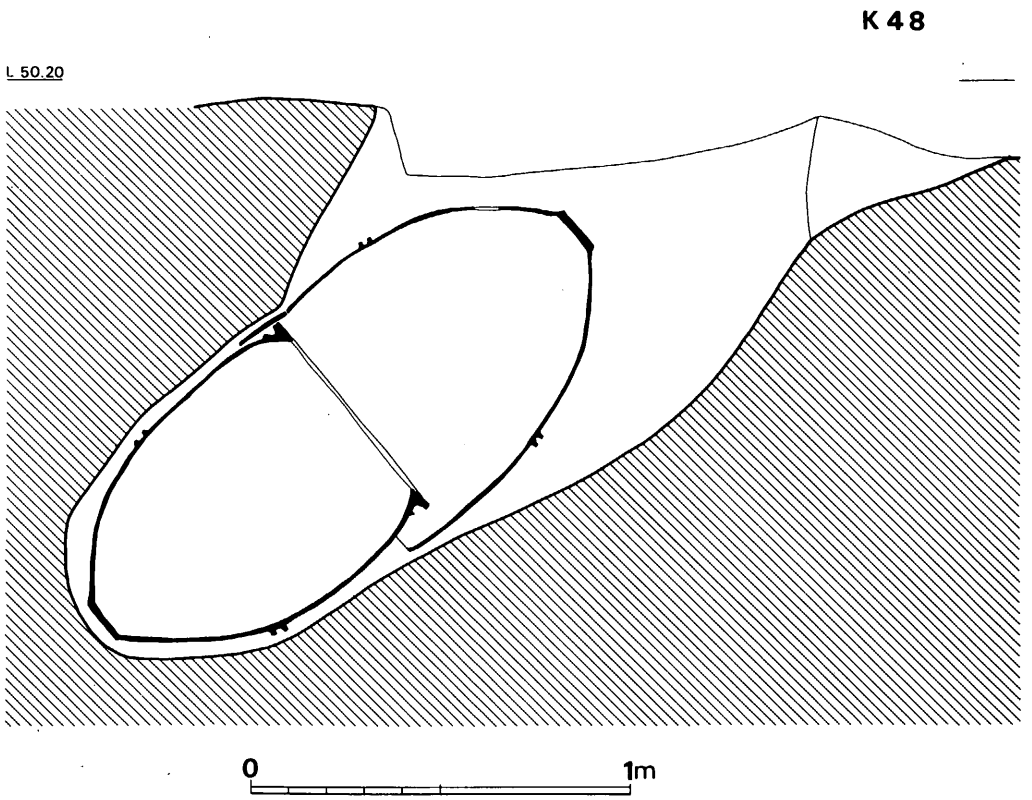


Fig. 34 48号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

44号甕棺墓（Fig. 31）

単式甕棺墓であり、小児棺である。墓坑は1.1m～1.2mで隅丸方形を呈する。墓坑の北壁に横穴を穿って甕を挿入している。上甕に相当する甕片を検出しなかったため単式甕棺墓としてあつかった。

棺は35°の角度で埋置されており、残存状態は不良である。

45号甕棺墓（Fig. 32・93, PL. 22）

成人用の覆蓋式甕棺墓である。墓坑は隅丸長方形を呈しており、西壁に横穴を穿って下甕を挿入している。横穴は下甕の形に沿った砲弾形を呈している。

棺は墓坑の主軸からややはずれて埋置してあり、上甕は口縁打ち欠きの甕形土器を、下甕は甕形土器を用いている。上・下甕の合わせ目には粘土の目貼りは見られない。33°の角度で棺は埋置されている。

46号甕棺墓（Fig. 33・94, PL. 23）

現存する丘陵の北側端部に位置している成人用呑口式甕棺墓である。墓坑はその大部分をすでに消失していたが一辺に横穴を掘って下甕を挿入しているのが知られた。この横穴は下甕が入るぎりぎりの大きさのものである。

棺は上甕として口縁打ち欠きの甕形土器を用い、下甕としては甕形土器を用いている。上・下甕の合わせ目には、底面でのみ粘土の目貼りが見られたが、本来は全面に施されていた事が考えられよう。棺の埋置角度は26°であり、他の棺に比してゆるやかと言えよう。

47号甕棺墓（Fig. 32）

丘陵北側端部の崖面から3mの所に位置する。48号甕棺墓の墓坑を切って造られておりこれよりは後出するものである。小児用の単式甕棺墓である。墓坑の平面形は不明であるが、一辺に横穴を穿って甕を挿入している。

棺は丹塗りの甕形土器であり、口縁部を一部欠損している。このため、現在は単式甕棺墓としているが、あるいは組合せ式甕棺墓であったのかも知れない。埋置角度は45°である。

48号甕棺墓（Fig. 34・36・95, PL. 24・25・52）

丘陵北端部の崖面から2m程南に位置する成人用の覆蓋式甕棺墓である。47号甕棺墓に墓坑を一部切られており、これよりは先行するものである。墓坑の平面形は東辺はややだれるが方形状を呈するものであり、南壁に横穴を掘って下甕を挿入するものである。上甕も若干この横穴内に納まる。横穴は下甕の形状に沿った形に掘られており、棺はこの中にぎりぎりに納まる。

棺の上甕は口縁打ち欠きの甕形土器を用い、下甕には、これよりやや小形の甕形土器を用いている。上・下甕の合わせ目には粘土の目貼りは見られない。下甕内からは人骨が検出された。頭蓋骨は下甕内に落ち込んでいた。出土遺物としてはイモガイを縦型にした貝輪が検出された。この貝輪は、右腕に15個、左腕に2個着装されており、この人骨は20代後半の女性である事が

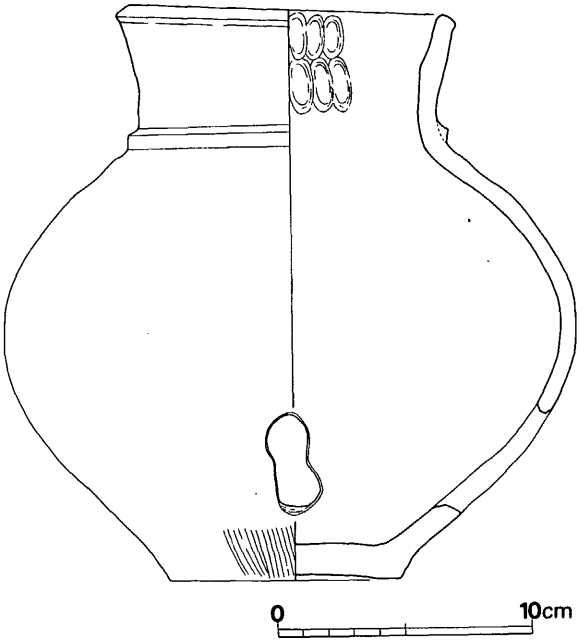


Fig. 35 40号甕棺墓内出土壺実測図（縮尺 1 / 3）

40号甕棺墓内出土壺(Fig. 35, PL.57)

甕棺内から検出されたが出土の状況から棺内副葬品ではない事は確かである。胴部の下方を焼成後に穿孔している。外面は丹塗りであり、内面は指なで調整を施している。口径13.5cm、器高22.7cm、胴部最大径22.7cmである。色調は褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の小砂粒を含む。

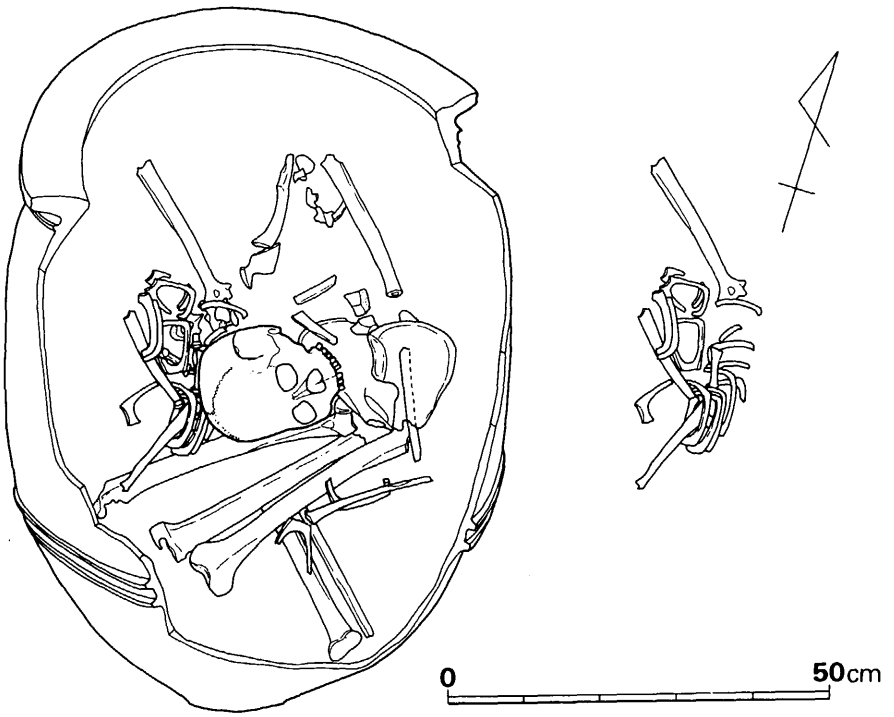
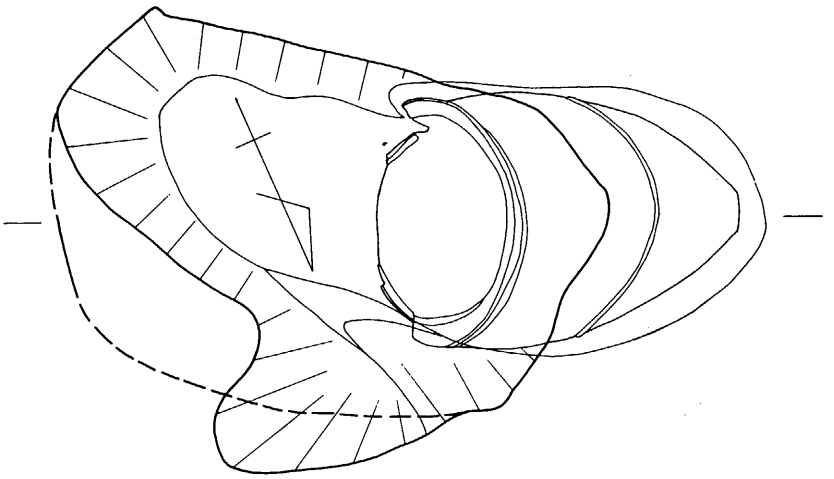


Fig. 36 48号甕棺墓出土人骨と貝輪着装状態実測図（縮尺 1 /10）



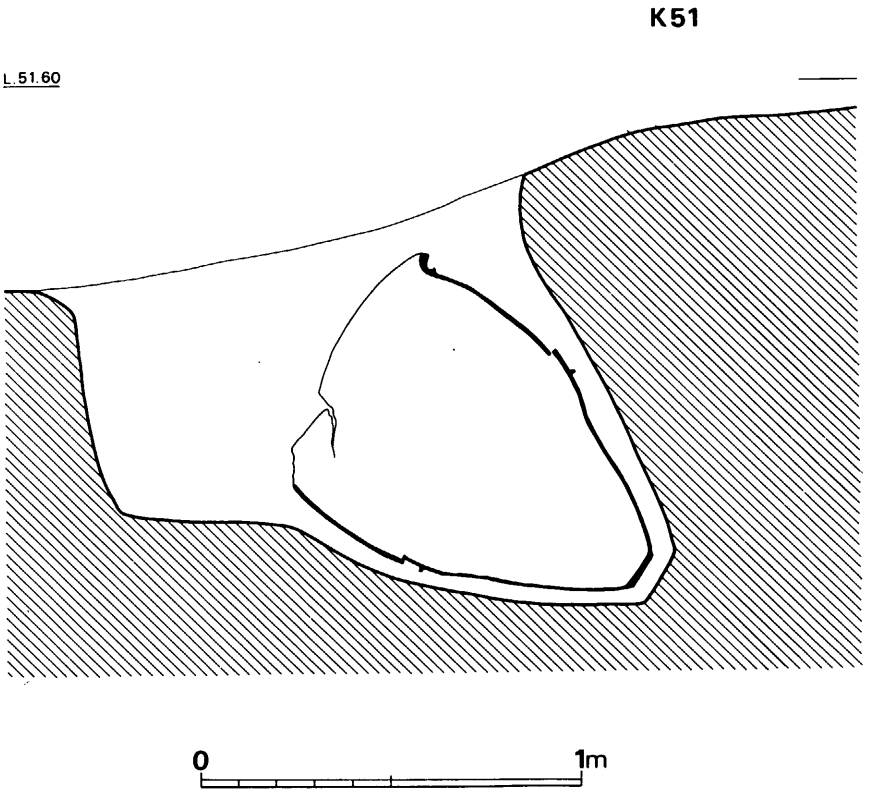


Fig. 37　51号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

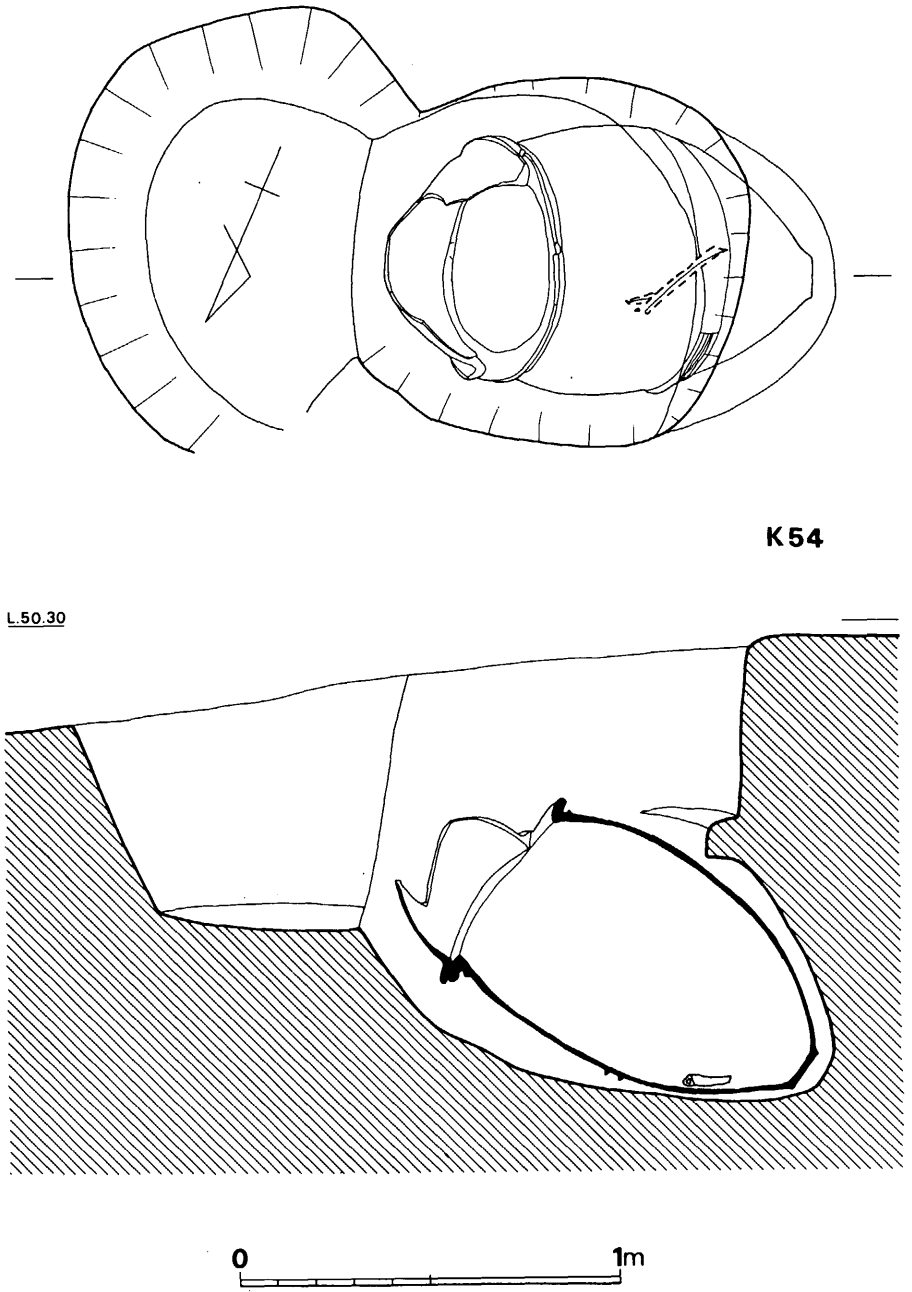


Fig. 38 54号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

判明した。棺の埋置角度は39°である。なお、人骨には布片が付着していた。

49号甕棺墓（Fig. 33・110, PL. 23）

48号甕棺墓の南に近接している。小児用の接口式甕棺墓である。墓坑の北半部は不明である。墓坑の北西壁に横穴を穿って下甕を挿入している。

棺は上・下甕とも甕形土器の組合せであるが上甕は半分以上を欠損しており、全形は不明である。埋置角度は36°であり合わせ目には粘土の目貼りは見られない。

50号甕棺墓（Fig. 33・93, PL. 26）

甕棺墓群の西側端部に位置する小形の覆蓋式甕棺墓である。墓坑は削平されており、それは棺にまで及んでいる。このため上甕の残存状態は不良である。

棺は上甕は口縁部打ち欠きの甕形土器を用い、下甕は同じく甕形土器を用いている。合わせ目には粘土の目貼りは見られない。埋置角度は24°とゆるやかである。

51号甕棺墓（Fig. 37）

甕棺墓群の西側端部に位置している成人用の単式甕棺墓である。墓坑は新墓を造る際に破壊されているため定かでないが、その残存状態から隅丸長方形が考えられよう。西壁に横穴を穿って甕を挿入している。口縁を塞ぐ施設として石蓋・木蓋などが検出されたわけではないが一応、単式甕棺墓としてあつかった。埋置角度は35°である。

52号甕棺墓

53号甕棺墓の下位に位置しているが、詳細は不明である。

53号甕棺墓（Fig. 9・96）

甕棺墓群の西側端部に位置する小形の覆蓋式甕棺墓である。墓坑は新墓を造る際に破壊されており、その平面形は不明である。西壁に横穴を穿って下甕を挿入し、上甕をかぶせている。このため横穴内に上甕の半分まで納まってしまう。墓坑底面は掘りくぼめられて深くなる。

54号甕棺墓（Fig. 38）

成人用の接口式甕棺墓である。墓坑は新墓を造る際に一部を破壊されているが、隅丸方形を呈するものと思われる。西壁に横穴を掘って下甕を挿入している。

棺は上甕として鉢形土器を用い、下甕として甕形土器を用いている。合わせ目には粘土の目貼りは見られなかった。下甕内からは脛骨が検出され、この人骨の下面にあたる甕の表面は赤くなっていた。棺の埋置角度は33°である。

55号甕棺墓（Fig. 39・92, PL. 26）

丘陵東側端部から1.5 *m* 程内側に入った所に位置する成人用の単式甕棺墓である。墓坑はわずかに崩壊して旧状を変じているが隅丸長方形状を呈している。墓坑の西壁に横穴を穿って甕を挿入している。埋置角度は28°である。口縁部を塞ぐ施設は何ら検出されていないが、上甕に相当する甕の破片すら検出されなかったため、単式甕棺墓とした。

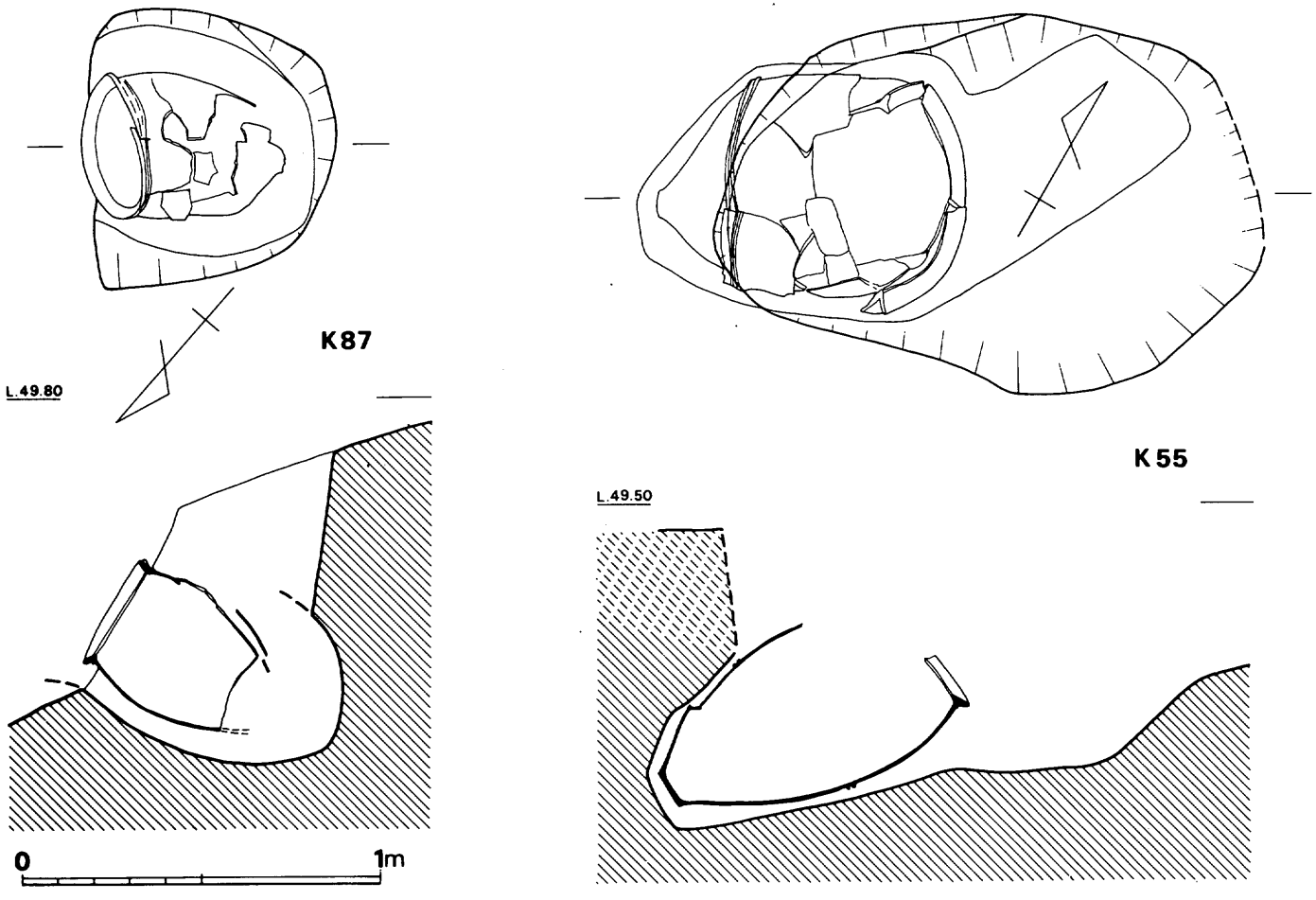


Fig. 39 55号・87号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

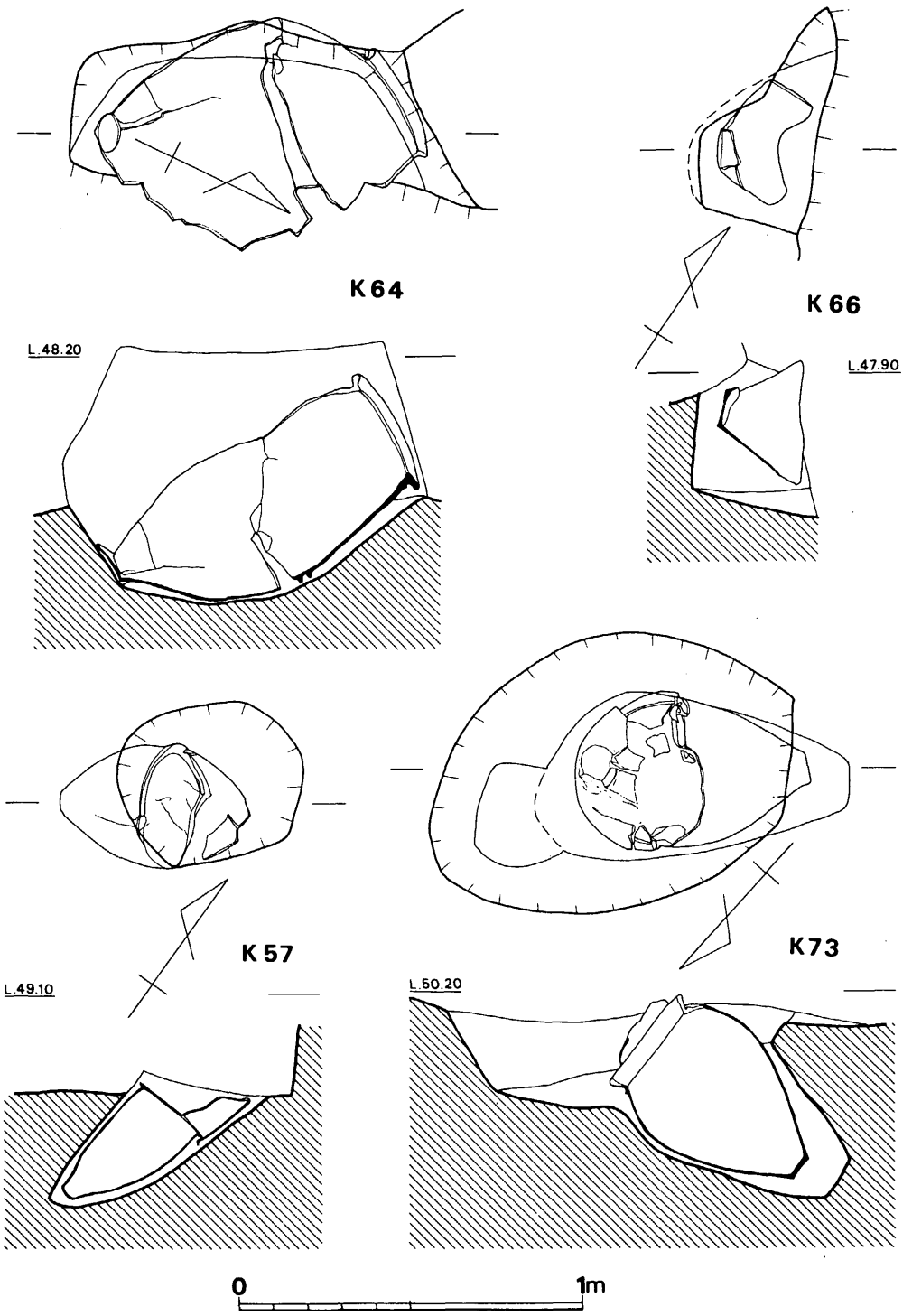
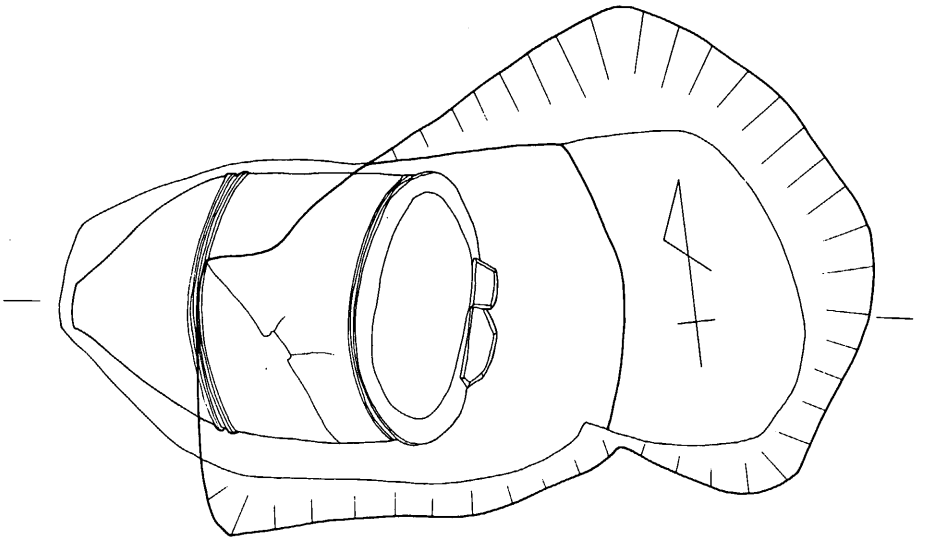


Fig. 40　57号・64号・66号・73号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）



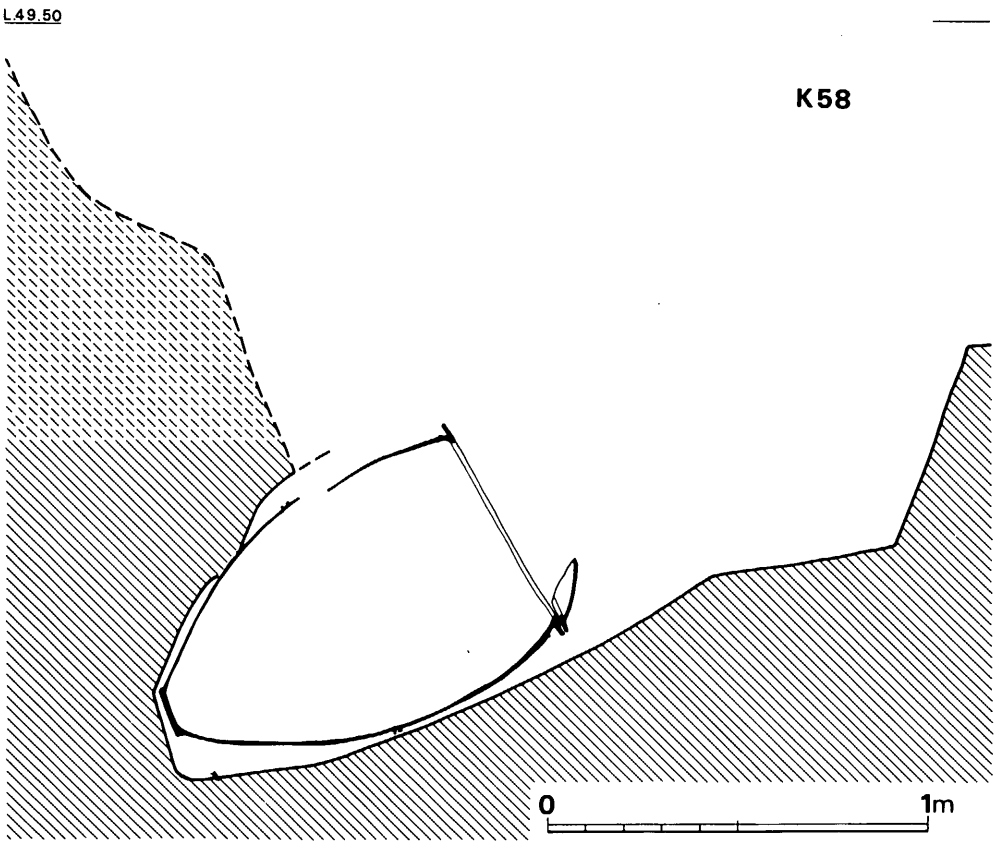


Fig. 41 58号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

56号甕棺墓（PL. 34）

60号甕棺墓の上部に位置しており、若干の横穴を有するが、甕の底部は横穴内に向くのでなく開口方向を向くため、二次的な移動を受けている事がわかる。甕棺墓を造る際に破壊されたものを寄せたのであろうか。丹塗りの土器片である。

57号甕棺墓（Fig. 40）

小児用の覆蓋式甕棺墓である。調査時は下甕を覆うような状態で検出されたが、上甕の残存状況は不良なため、あるいは接口式のものがずれ落ちたのかも知れない。墓坑の平面形は不整円形を呈している。西南部の壁面に横穴を穿って下甕を挿入している。横穴断面は下甕の器形に沿った形に掘られている。

棺は上・下甕とも甕形土器を用いており、合わせ目には粘土の目貼りは見られない。埋置角度は38°である。

58号甕棺墓（Fig. 41）

丘陵の東側裾部近くに位置する成人用の接口式甕棺墓である。墓坑上面は多少の出入りはあるが、ほぼ隅丸長方形である。西壁に横穴を穿って下甕を挿入しており、墓坑の底面は段がつく。

棺の上甕は鉢形土器を用いており、下甕は甕形土器を用いている。墓坑の主軸に沿って埋置されており、埋置角度は29°である。

59号甕棺墓（Fig. 6 ・96）

接口式甕棺墓であり、成人用か小児用かの区別をつけにくい小形棺である。墓坑は北東部分を削られているため、その全形は不明である。南西壁に横穴を穿って下甕を挿入しているものであるが、横穴の途中が崩壊しているため、その形状は定かでない。墓坑底面は長さ 50*cm*程の平坦面を有している。

棺は上・下甕とも甕形土器の組合せである。合わせ目には粘土の目貼りは見られない。

60号甕棺墓（Fig. 42・97, PL. 52）

成人用の覆蓋式甕棺墓である。墓坑は隅丸方形を呈しており、西壁に横穴を穿って下甕を挿入するものであるが、下甕の胴部突帯部分はこの横穴とぎりぎりの大きさである。墓坑底面は下甕の口縁部の位置で25 *cm*程の平坦面を有して壁となる。

棺の上甕は口縁打ち欠きの甕形土器を用い、下甕は同じく甕形土器を用いている。合わせ目には粘土の目貼りは施されていない。埋置角度は26°である。

61号甕棺墓（Fig. 43）

丘陵東側端部に位置している。小児用の甕棺墓であるが胴部中程から底部を残すのみであるため詳しくはわからない。

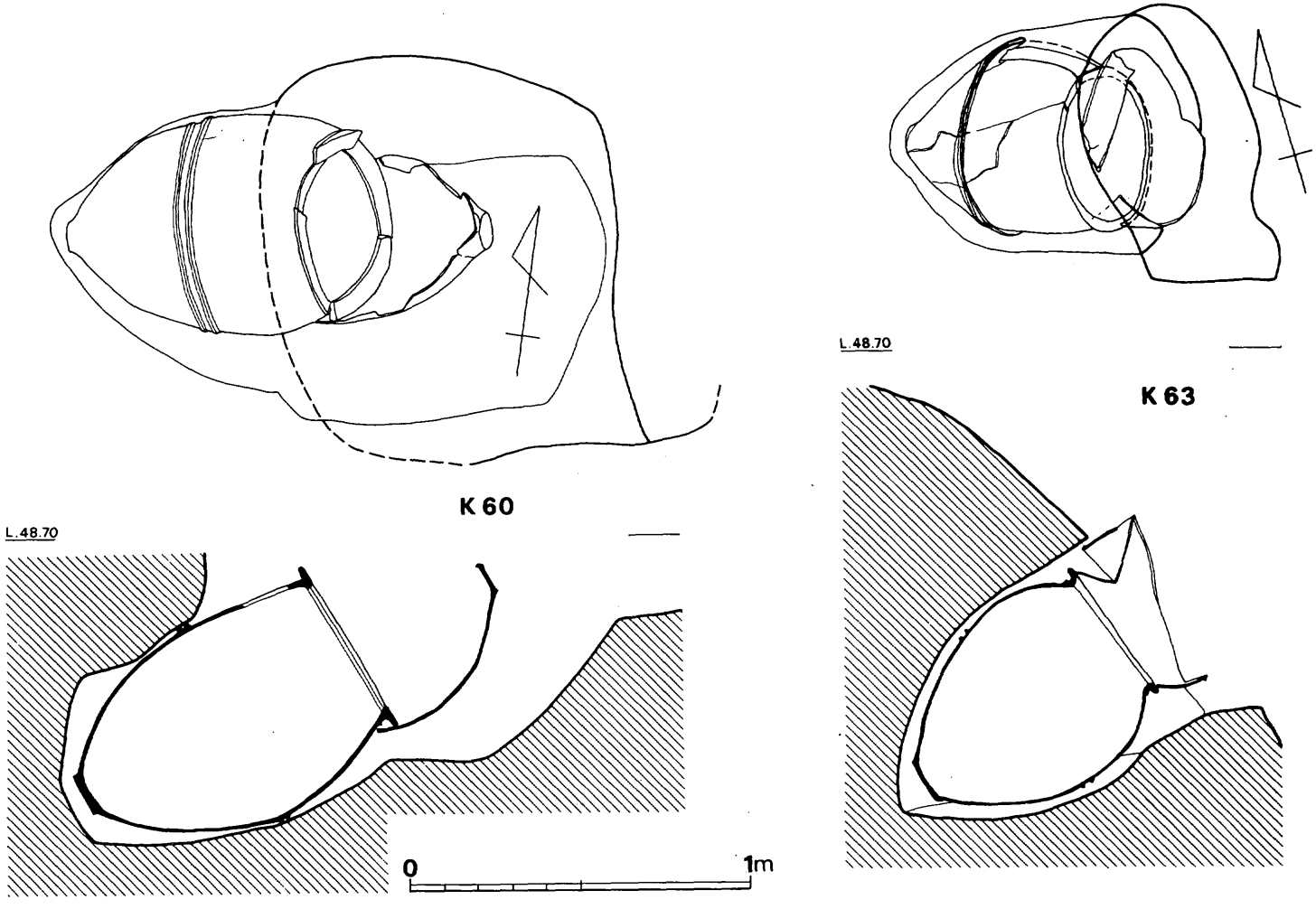


Fig. 42 60・63号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

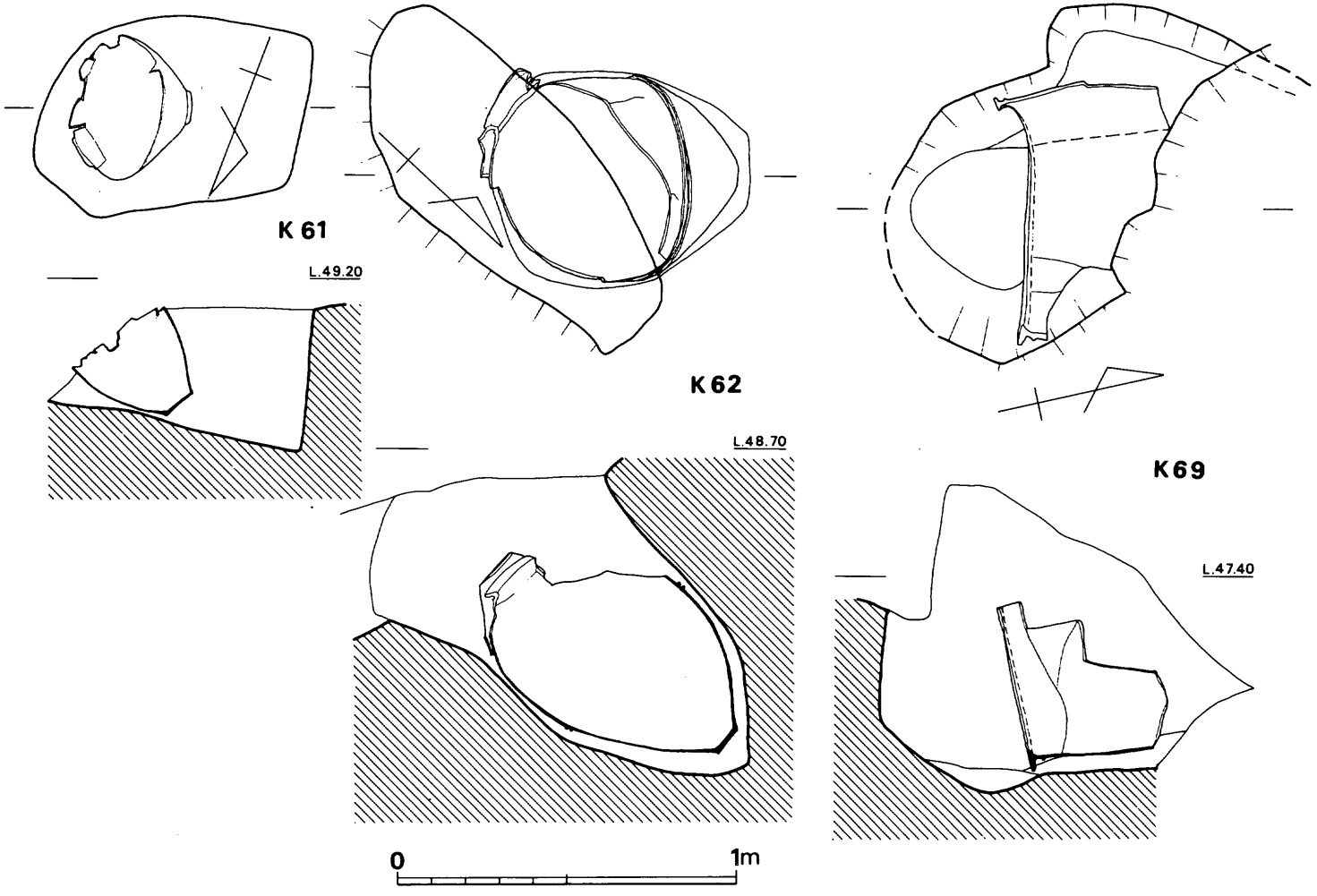


Fig. 43 61号・62号・69号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

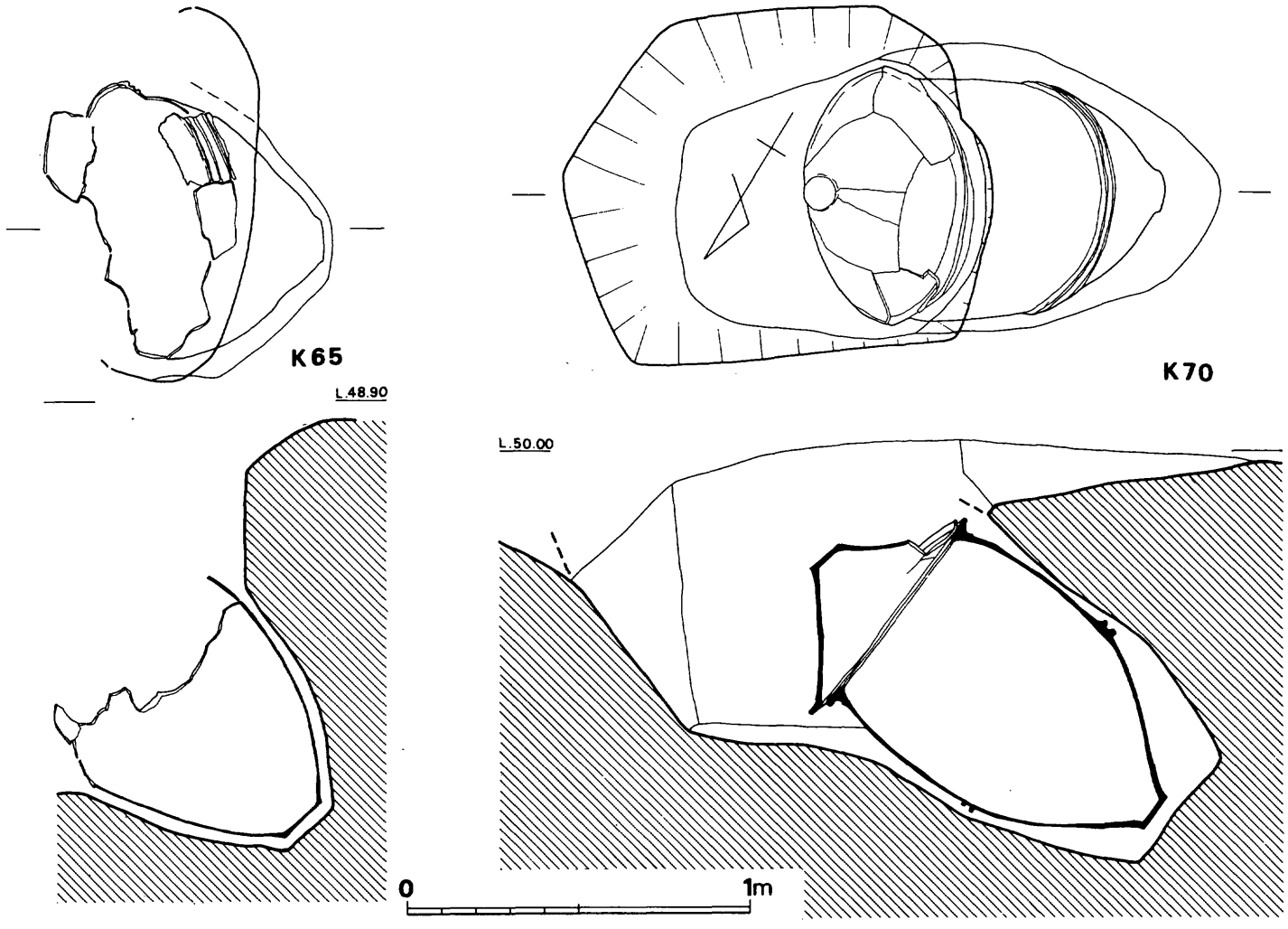


Fig. 44 65号・70号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

62号甕棺墓（Fig. 43・98，PL. 27・53）

丘陵東側裾部に位置する小形の覆蓋式甕棺墓である。斜面の端部にあるため、墓坑は削られている。北西方向に横穴を穿って棺を挿入している。横穴の断面形は棺の形に沿った砲弾形を呈しており、棺はこの横穴内にぎりぎりに納まっている。

63号甕棺墓（Fig. 42・98，PL. 27・53）

丘陵東側裾部に位置しており、墓坑の一部は崖面で切られている。小形の接口式甕棺墓である。墓坑西壁に横穴を穿って下甕を挿入しており、下甕はこの墓坑内にすっぽりと納まってしまう。横穴は砲弾形を呈しており甕との空間部は狭い。

棺の上甕は口縁打ち欠きの土器を用い、下甕には甕形土器を用いている。この合わせ目には粘土の目貼りは施されていない。棺の埋置角度は38°である。

64号甕棺墓（Fig. 40，PL. 28）

丘陵東側端部で63号甕棺墓の北に隣接している。墓坑と甕は削られていて、その半分近くを消失している。成人用の単式甕棺墓であり、墓坑壁面に横穴を穿って棺を挿入している事がわずかに知られた。

65号甕棺墓（Fig.44，PL. 28）

84号甕棺墓を切って造られている。墓坑・棺ともに破壊の度合いは著しい。墓坑壁面に横穴を穿って甕を挿入しており、底部外面は埋置前に剝離しており現存しない。棺はこの墓坑内の中央に43°の角度で埋置されている。

66号甕棺墓（Fig.40，PL.28）

丘陵東側端部に底部を一部残しているだけである。丘陵をカットする際に破壊し尽されており、詳しくは不明である。

67号甕棺墓（Fig. 45）

丘陵東側端部であり、北側崖面に近い位置に所在する成人用の単式甕棺墓である。墓坑底面は一部陥没しているためその断面形は定かでない。この陥没は68号甕棺墓が下部にあるためのものである。68号甕棺墓より後出する。

68号甕棺墓（Fig. 45・99）

67号甕棺墓の下部にあり、これよりは先行するものである。丘陵東側端部にあるため墓坑・棺ともに削られている。甕は横穴を穿って挿入されており、土圧でつぶれたり、または崩壊したりしている。成人用のものであるが、単式か組合せかの区別はつかない。

69号甕棺墓（Fig. 43）

68号甕棺墓の北隣りに位置する成人用の甕棺墓である。著しく破壊されているため不明な点が多い。

70号甕棺墓（Fig. 44・100，PL. 29）

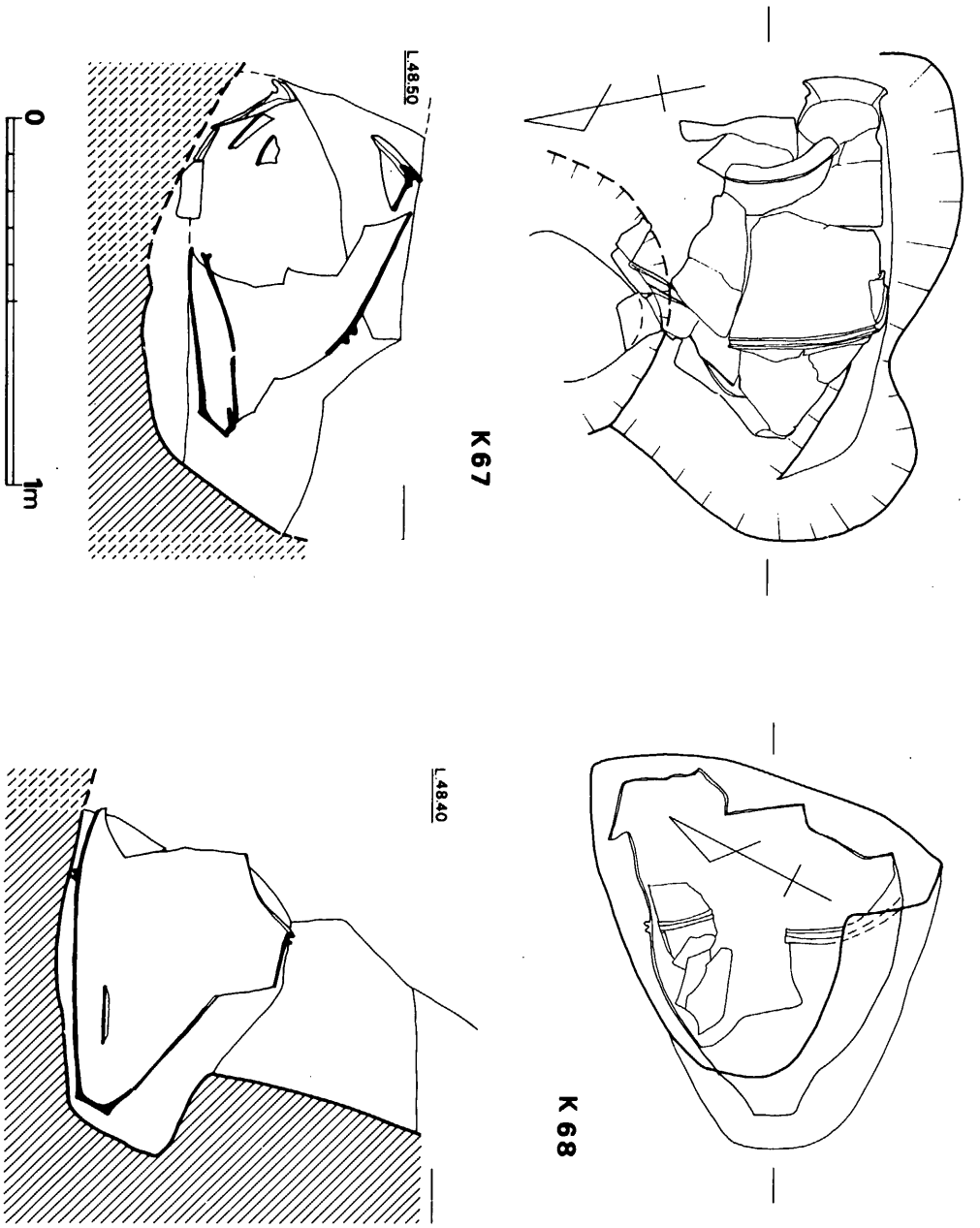


Fig. 45 67号・68号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

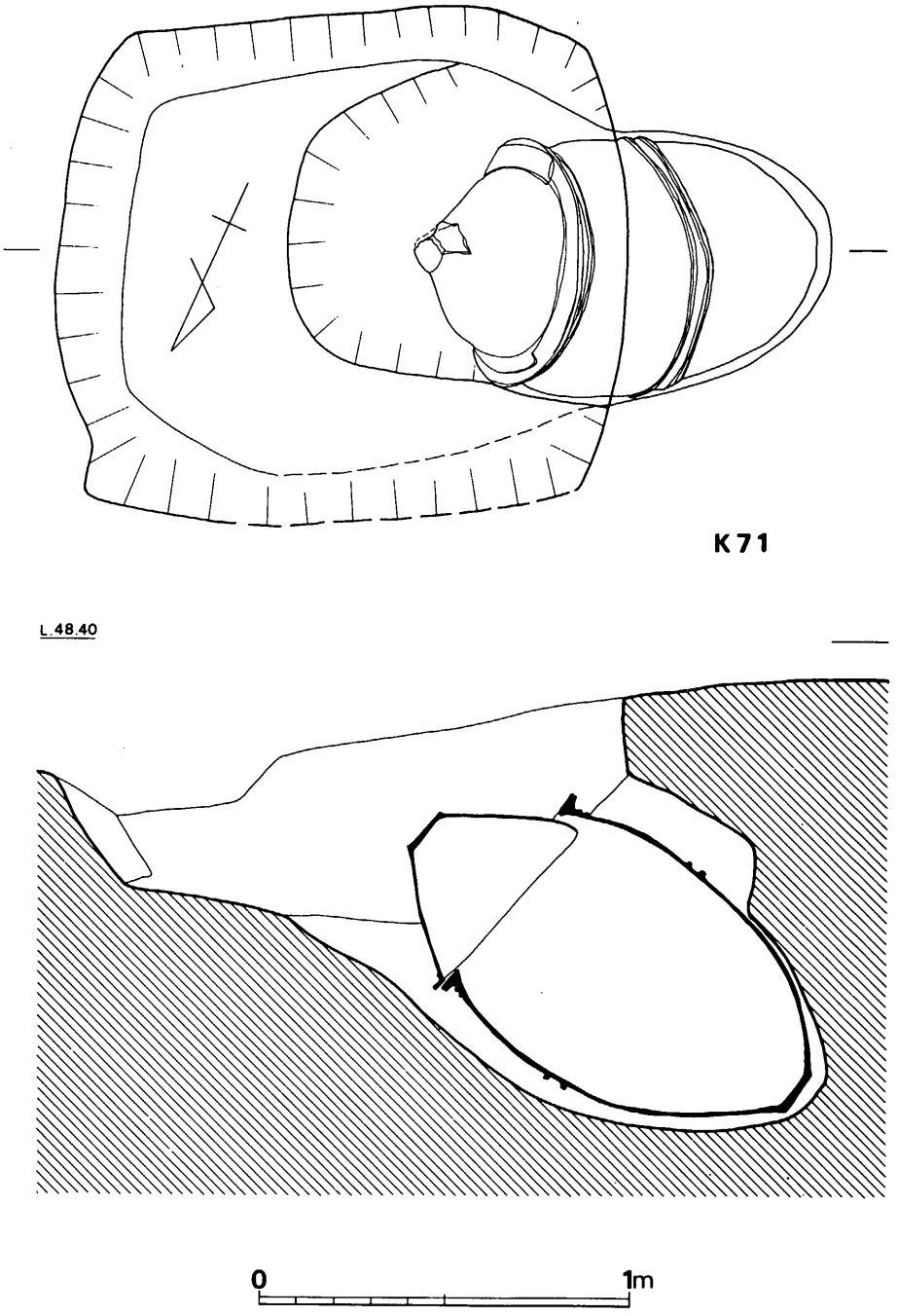


Fig. 46　71号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

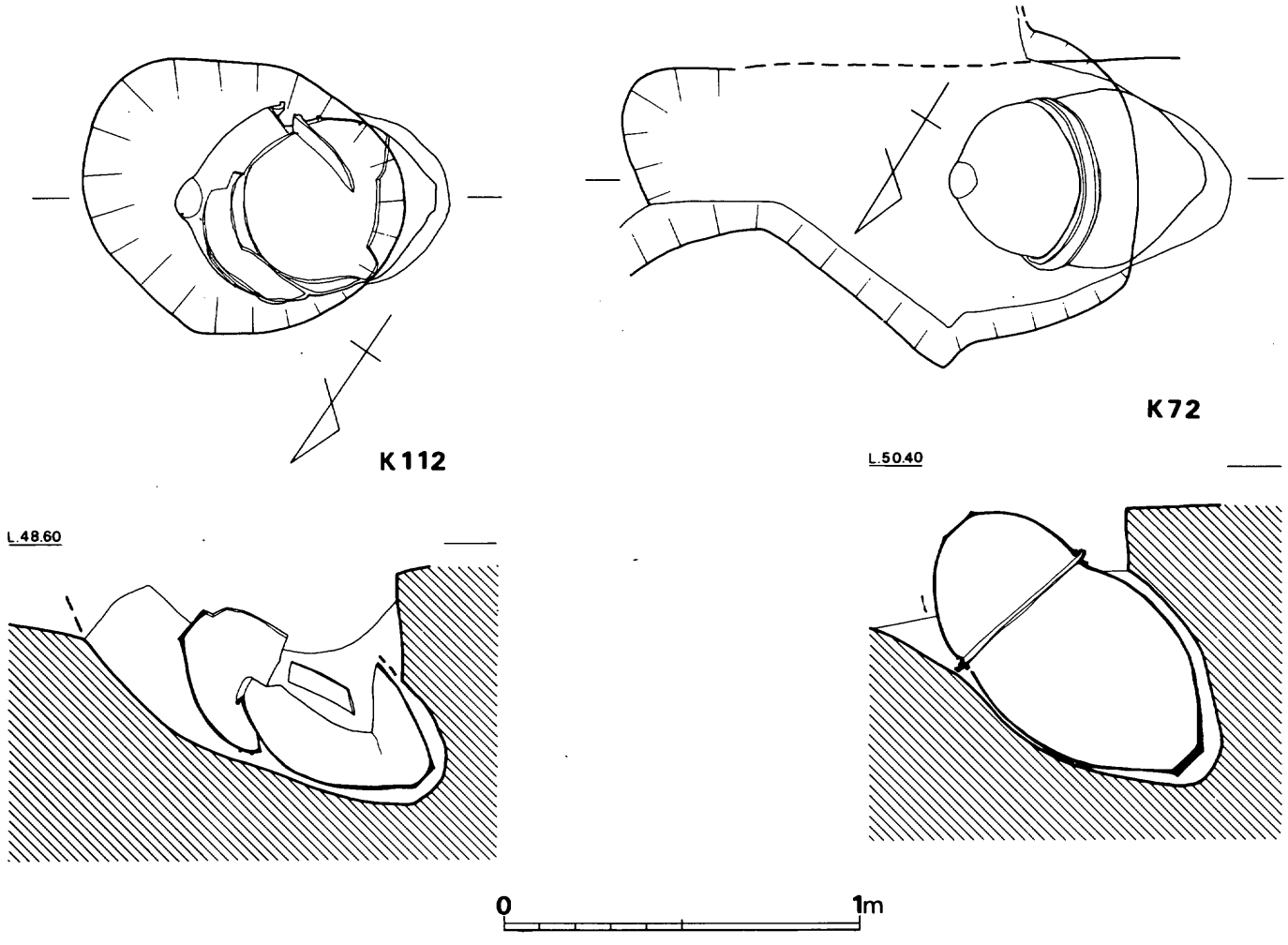


Fig. 47 72号・112号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

成人用の接口式甕棺墓である。墓坑は1.2 m ×1.0 m の隅丸長方形を呈する。墓坑の短辺である西壁に横穴を穿って下甕を挿入している。横穴の平面形は砲弾形を呈するが、断面形は長方形に近い形である。この横穴は奥行き70 cm 弱で深さは100 cmであり、下甕は口縁部近くまでこの中に納まってしまう。

棺は上甕として鉢形土器を用い、下甕としては甕形土器を用いている。この合わせ目には粘土の目貼りは見られない。棺の埋置角度は38°である。

71号甕棺墓（Fig. 46・101, PL. 29・31・53）

74号甕棺墓に墓坑を一部切られている。成人用の呑口式甕棺墓である。墓坑の平面は1.35 m ×1.55 mであり長方形よりもむしろ、方形に近い形状を呈する。墓坑短辺である北壁の中央部に横穴を穿って下甕を挿入している。この横穴は下甕の形状に沿った砲弾形を呈しているが、横穴上面の中ほどから開口部にかけては、やや広くえぐられている。

棺の上甕は鉢形土器を用い、下甕は甕形土器を用いている。合わせ目には粘土の目貼りは見られない。埋置角度は35°である。

72号甕棺墓（Fig. 47・102, PL. 30）

小形の接口式甕棺墓である。墓坑は切られているが、隅丸長方形を呈するものと思われる。

墓坑短辺の西壁に横穴を穿って下甕を挿入している。横穴の大きさは下甕をやや上まわる規模であり、墓坑底面の地山上に甕は密着している。

棺は上・下甕とも甕形土器の組合せであるが、上甕の方がやや小形である。上甕の内面は丹塗りである。合わせ目には粘土の目貼りは見られず42°の角度で埋置している。

73号甕棺墓（Fig. 40・99, PL. 30）

小形の覆蓋式甕棺墓である。墓坑の平面形は楕円形を呈しており、南西方向に横穴を穿って下甕を挿入している。墓坑底面は二段掘りとなっており、下甕の口縁直下に段がつく。

棺の上甕は鉢形土器を用い、下甕は甕形土器を用いている。平面実測時には割れ目が入りながらも現存していた上甕は断面図作成時には破壊してしまって実測不能となった。棺の埋置角度は41°である。

74号甕棺墓（Fig. 18・98, PL. 31）

小形棺を用いた呑口式甕棺墓である。墓坑は75号甕棺墓の埋土を切って造られており、これよりは後出するものである。墓坑の平面は隅丸長方形状を呈しており、北西に横穴を穿って下甕を挿入している。横穴は下甕の形に沿った砲弾形を呈しており、これよりは若干大き目のものである。

棺の上甕には口縁打ち欠きの甕形土器を用い、下甕には、これよりも大き目の甕形土器を用いている。合わせ目の下面にのみ粘土の目貼りが見られる。棺は墓坑の主軸とずれた位置に、49°の角度で埋置されている。合わせ目に目貼り粘土を用いるという丁寧なものであったが、

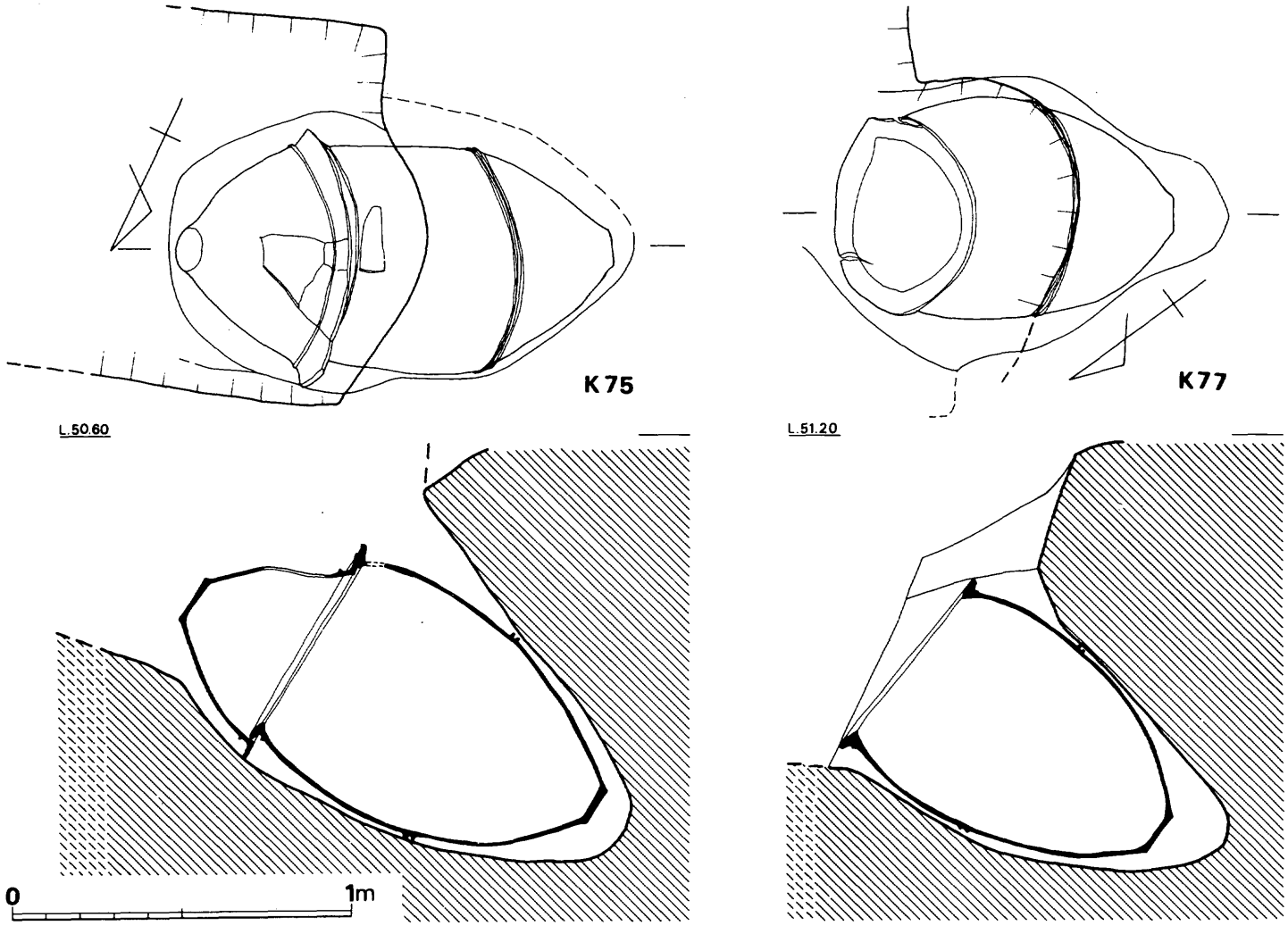


Fig. 48 75号・77号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

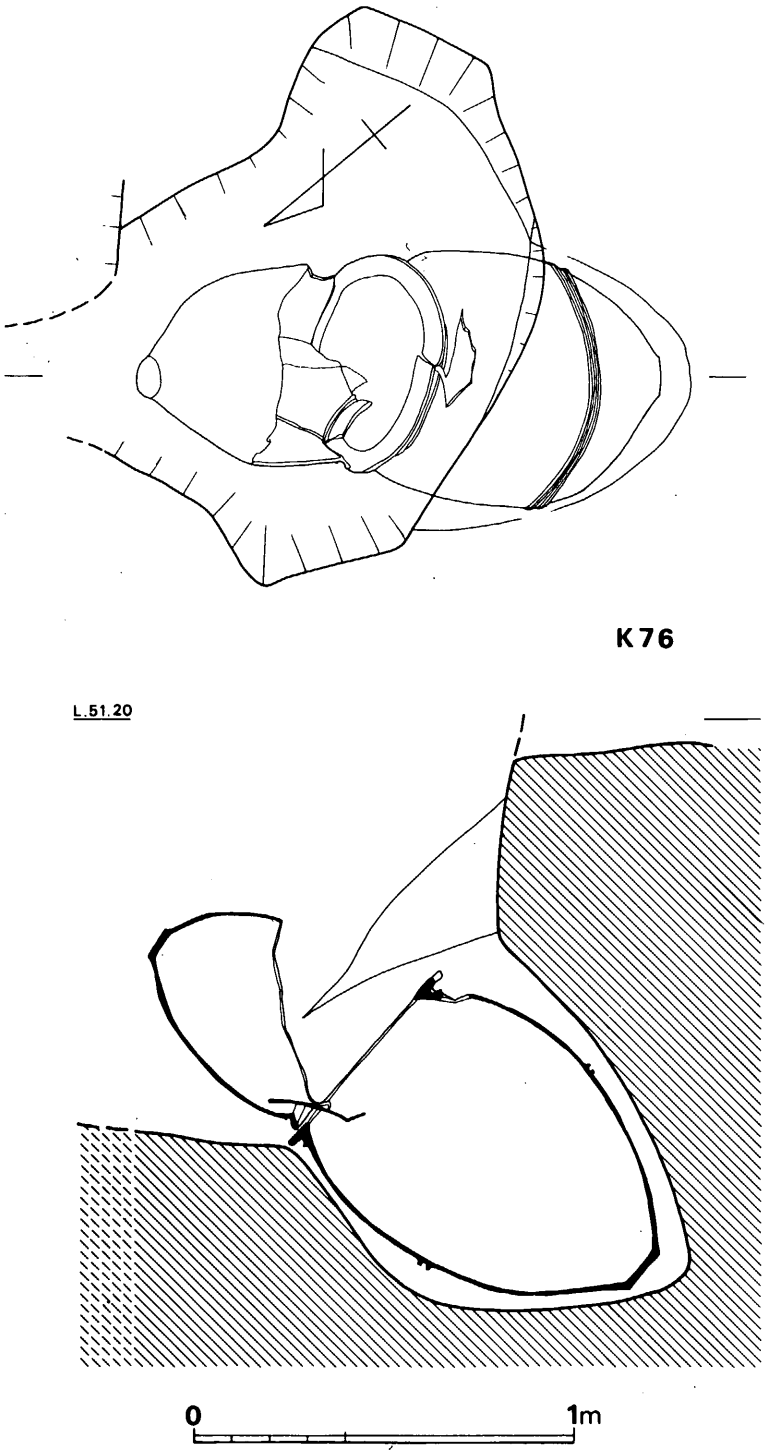


Fig. 49　76号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

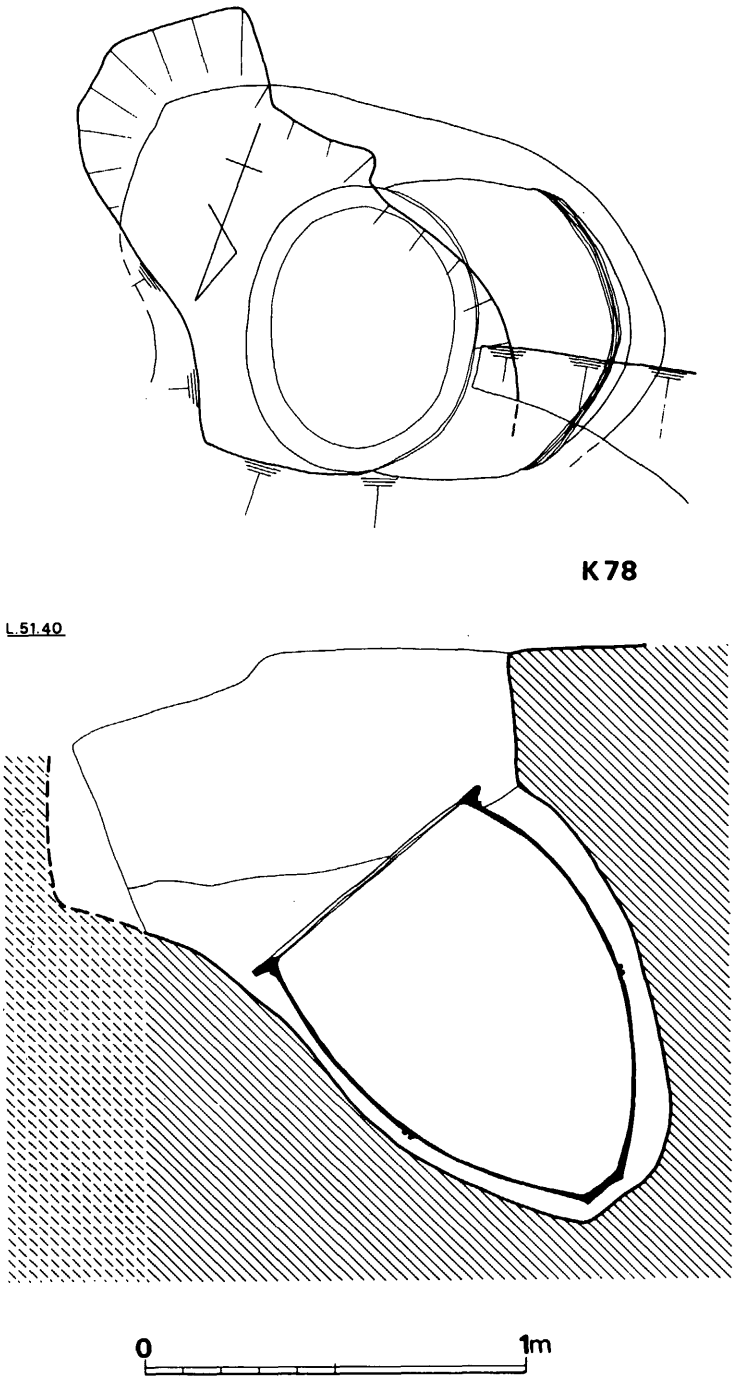


Fig. 50 78号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

人骨は遺存しておらず、副葬品もなかった。

75号甕棺墓（Fig. 48・103, PL. 32）

成人用の覆蓋式甕棺墓である。墓坑西壁に横穴を穿って下甕を挿入しており、その形は砲弾状を呈する。

棺の上甕は鉢形土器を用い、下甕には甕形土器を用いている。上・下甕の合わせ目には粘土の目貼りには見られず、30°の角度で埋置している。

76号甕棺墓（Fig. 49・104）

北側崖面から1.5m程度に位置する成人用の接口式甕棺墓である。墓坑は一部を切られており、上甕も若干破損している。墓坑南西壁の50cm程下った位置から横穴を穿っており、ここに下甕を挿入する。底面から上端までは1.5mの深さである。

棺は上甕に後期初頭に属する甕形土器を用い、下甕には中期の甕形土器を用いるという興味深い組合せである。合わせ目には粘土の目貼りは施されず、37°の角度で埋置している。

77号甕棺墓（Fig. 48）

100号甕棺墓の上部に位置しており、ここは現存する甕棺墓群の北側の端部にあたる。墓坑は採土工事のため破壊を受けておりその全容は不明である。成人用の単式甕棺墓である。墓坑南西壁に横穴を穿って甕を挿入している。この墓坑は甕が入るぎりぎりの大きさのものであり、底部方向のみ空間を生じている。棺は35°の角度で埋置されている。

78号甕棺墓（Fig. 50）

100号甕棺墓の西にあたり、当遺跡の中で北西のコーナーに相当する位置にある。成人用の単式甕棺墓である。墓坑の平面形は採土工事のため破壊を受けており、定かではない。西壁に横穴を穿って甕を挿入している。横穴の奥行きは40cmで、深さは墓坑上面から1.5mである。甕の埋置角度が52°と急勾配のため奥行は狭い。

口縁部を塞ぐための施設は検出されなかったが木蓋が考えられよう。目貼り粘土の痕跡も見られなかった。

79号甕棺墓（Fig. 51）

丘陵北側の崖面近くに位置する成人用の接口式甕棺墓である。墓坑は若干削られているが、平面形は隅丸長方形を呈するものと思われる。そしてこの墓坑の長辺にあたる南壁に横穴を穿って下甕を挿入したものである。横穴の奥行きは80cmで、墓坑底面から墓坑上端までは 1.5mである。甕はこの横穴にぎりぎりで納まっている。

棺の上甕は鉢形土器を用い、下甕には甕形土器を用いている。合わせ目には粘土の目貼りは施されず、墓坑の主軸に沿って40°の角度で埋置されている。

80号甕棺墓（Fig. 6）

小児用の接口式甕棺墓である。墓坑は若干削平されており、旧状をとどめないが、墓坑底面

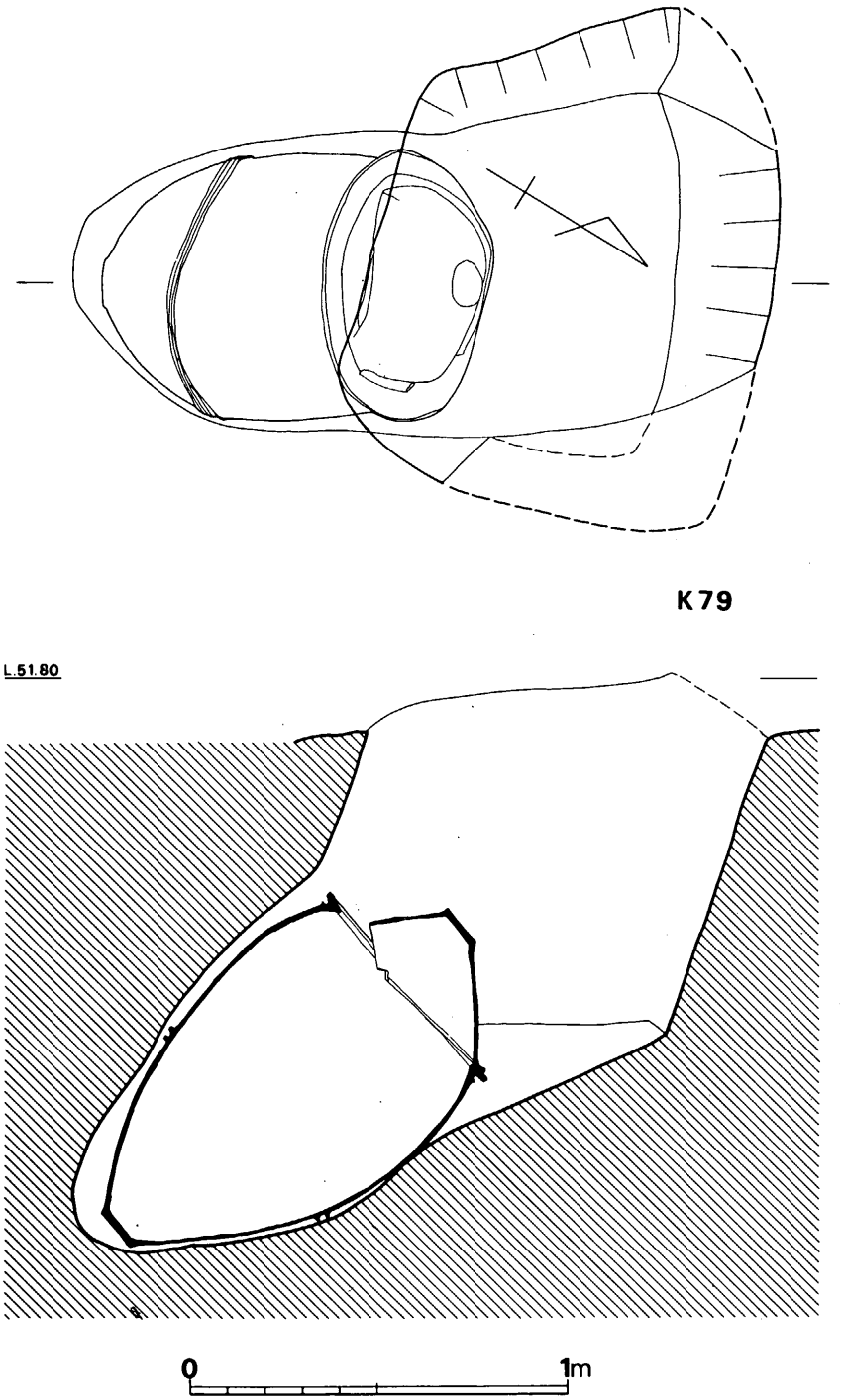


Fig. 51 79号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

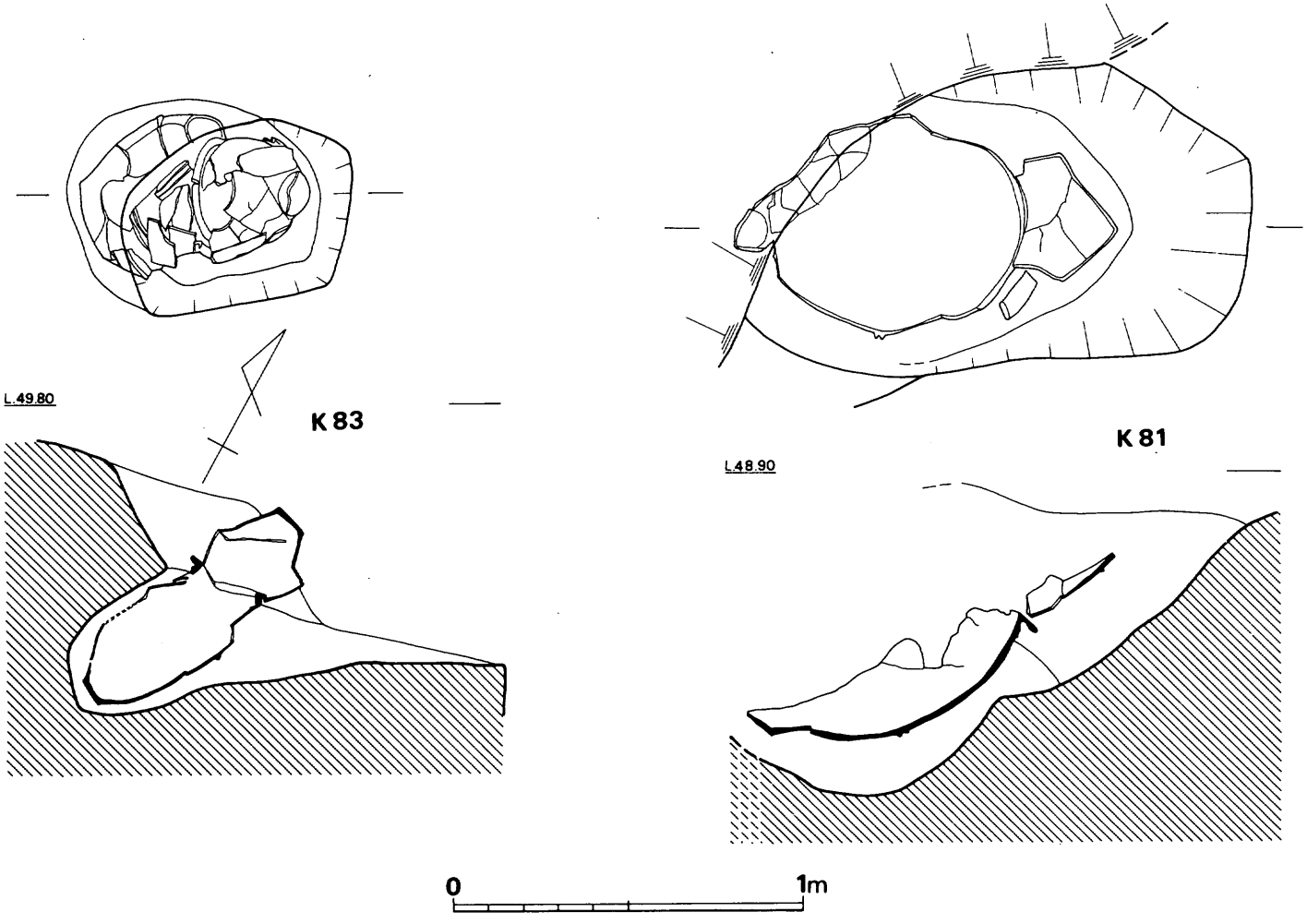


Fig. 52 81号・83号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

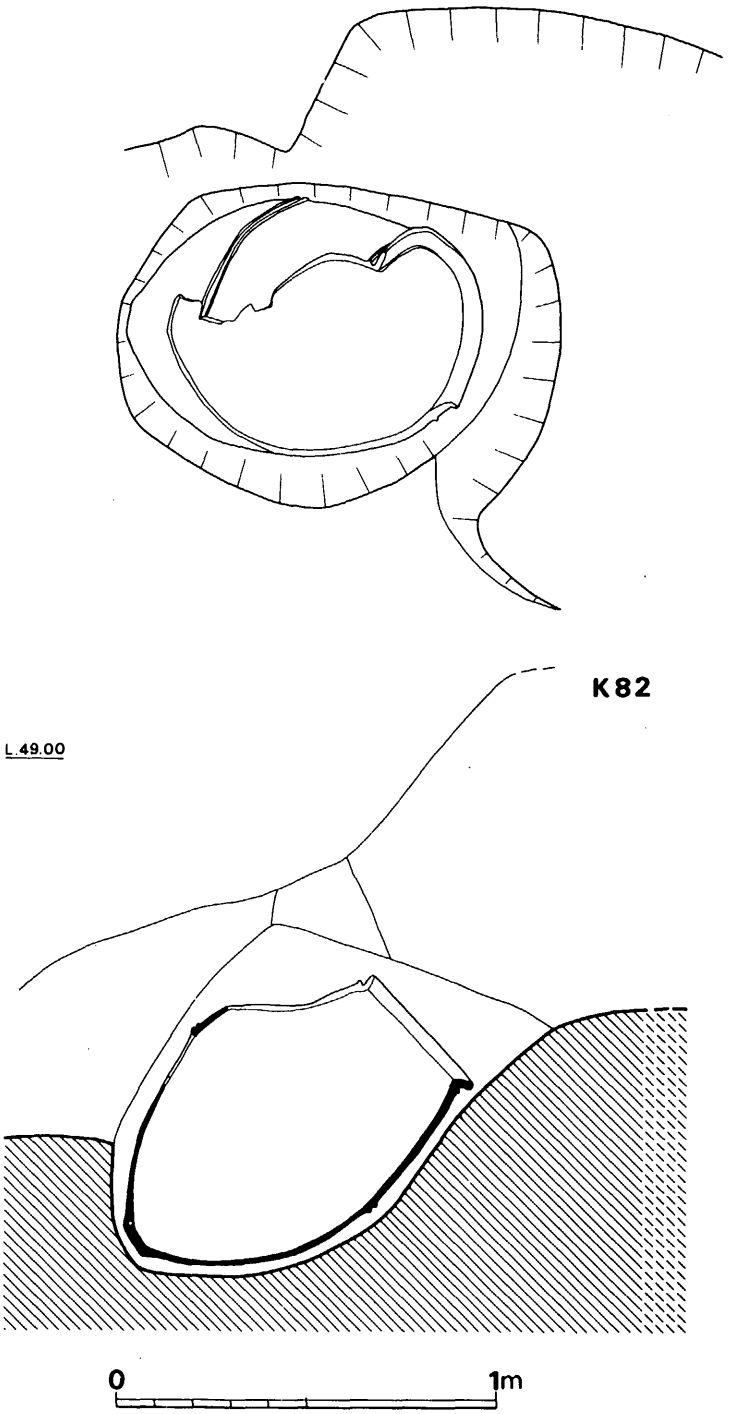


Fig. 53 82号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

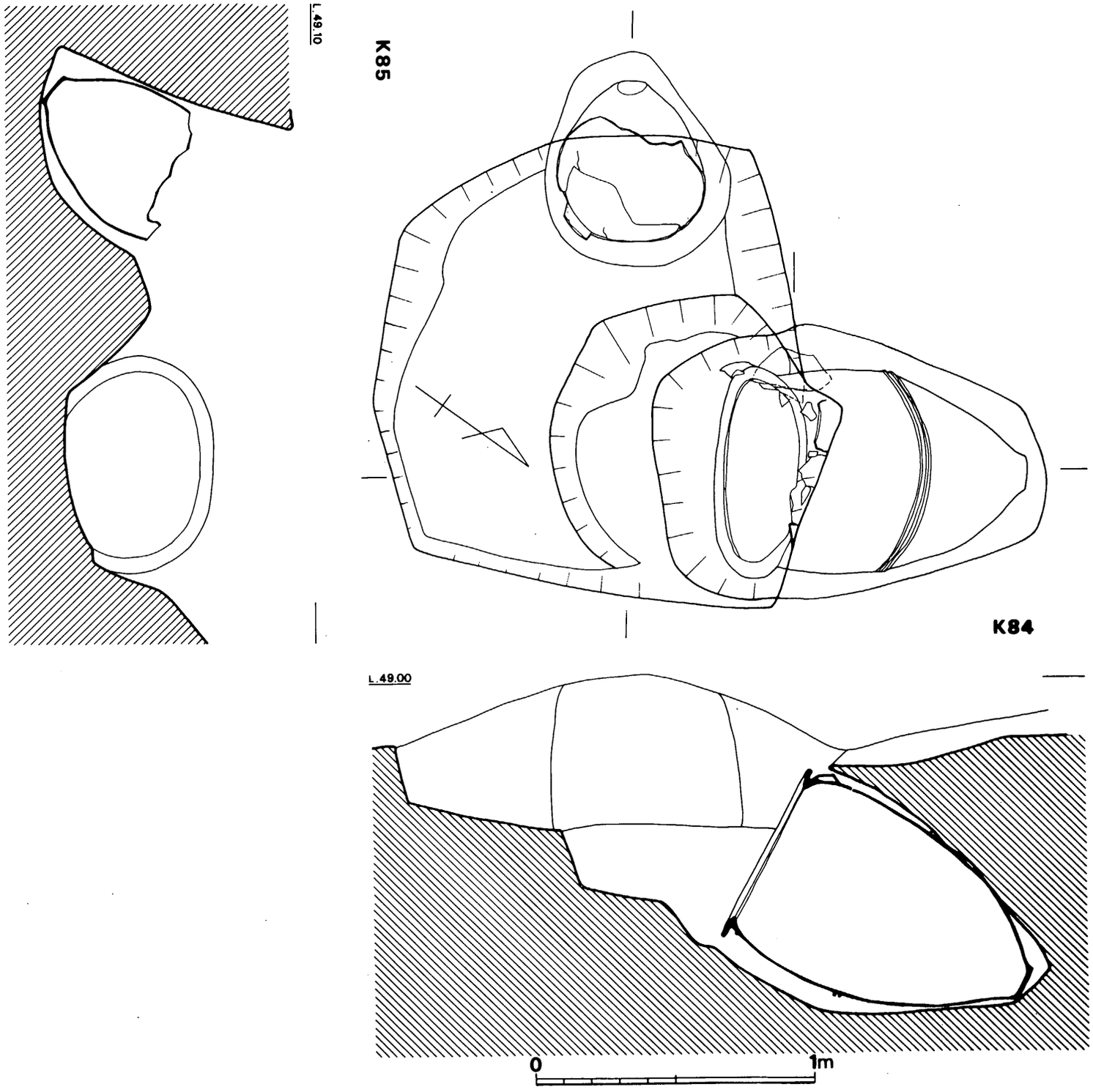


Fig. 54　84号・85号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

での平面形は楕円形を呈する。墓坑南西の壁面に横穴を穿って下甕を挿入しており、この墓坑内に甕はややゆとりをもって納まっている。

棺は上・下甕とも甕形土器を用いている。合わせ目には目貼り粘土は用いられておらず、41°の角度で埋置されている。

81号甕棺墓（Fig. 52）

甕棺墓群の南東端部に位置する成人用の接口式甕棺墓である。上半部は削平されて消失している。下甕の胴部から底部にかけての墓拡底面は深鉢状に掘りくぼめられている。

棺は上・下甕とも甕形土器を用いている。下甕内には頭蓋骨が落込んでおり、人骨片も検出された。

82号甕棺墓（Fig. 53, PL. 32）

81号甕棺墓の東隣りに位置する成人用の単式甕棺墓である。墓坑上半部と甕の上半部を欠損している。甕は横穴を穿って挿入しているのが断面から観察された。埋置角度は40°である。

83号甕棺墓（Fig. 52）

甕棺墓群の南東端部近くに位置する小形の覆蓋式甕棺墓である。墓坑南西壁面に横穴を穿って下甕を挿入している。

棺は上甕には口縁打ち欠きの甕形土器を用い、下甕には甕形土器を用いている。土圧のため棺はつぶれており、また墓坑前壁もその大半を削られていた。

84号甕棺墓（Fig. 54, PL. 33）

成人用の覆蓋式甕棺墓である。墓坑の平面は台形を呈しており、この長辺の東側に偏して横穴を穿って下甕を挿入している。この横穴は奥行き75cm、深さ90cmのもので、花崗岩バイラン土の地山を下甕の形に合わせて穿っている。墓坑と甕との空間は下面の胴部中央以上は7cmとややゆとりがあるが、それ以外の部分は、ぎりぎりの大きさである。

棺の上甕は口縁打ち欠きの土器を用い、下甕は甕形土器を用いている。合わせ目には目貼り粘土は施されておらず、27°の角度で埋置している。85号甕棺墓の埋置状態を見ると、84号甕棺墓と同一の墓坑に埋置していると思われる。

85号甕棺墓（Fig. 54, PL. 33）

84号甕棺墓と同一の墓坑に埋置された小形甕棺墓である。墓坑西壁で北西コーナーに偏して横内を穿って甕を挿入している。単式の甕棺墓であり、埋置角度は50°で勾配は急である。

86号甕棺墓（Fig. 55・105, PL. 34・54）

成人用の接口式甕棺墓である。墓坑の平面は1.6m×1.3mで隅丸長方形を呈しており、短辺でる。西壁に横穴を穿って下甕を挿入している。横穴は奥行き70cmで、墓坑上面までの深さは155cmである。

棺の上甕は鉢形土器、下甕は甕形土器という組合せであり、合わせ目には目貼り粘土は施し

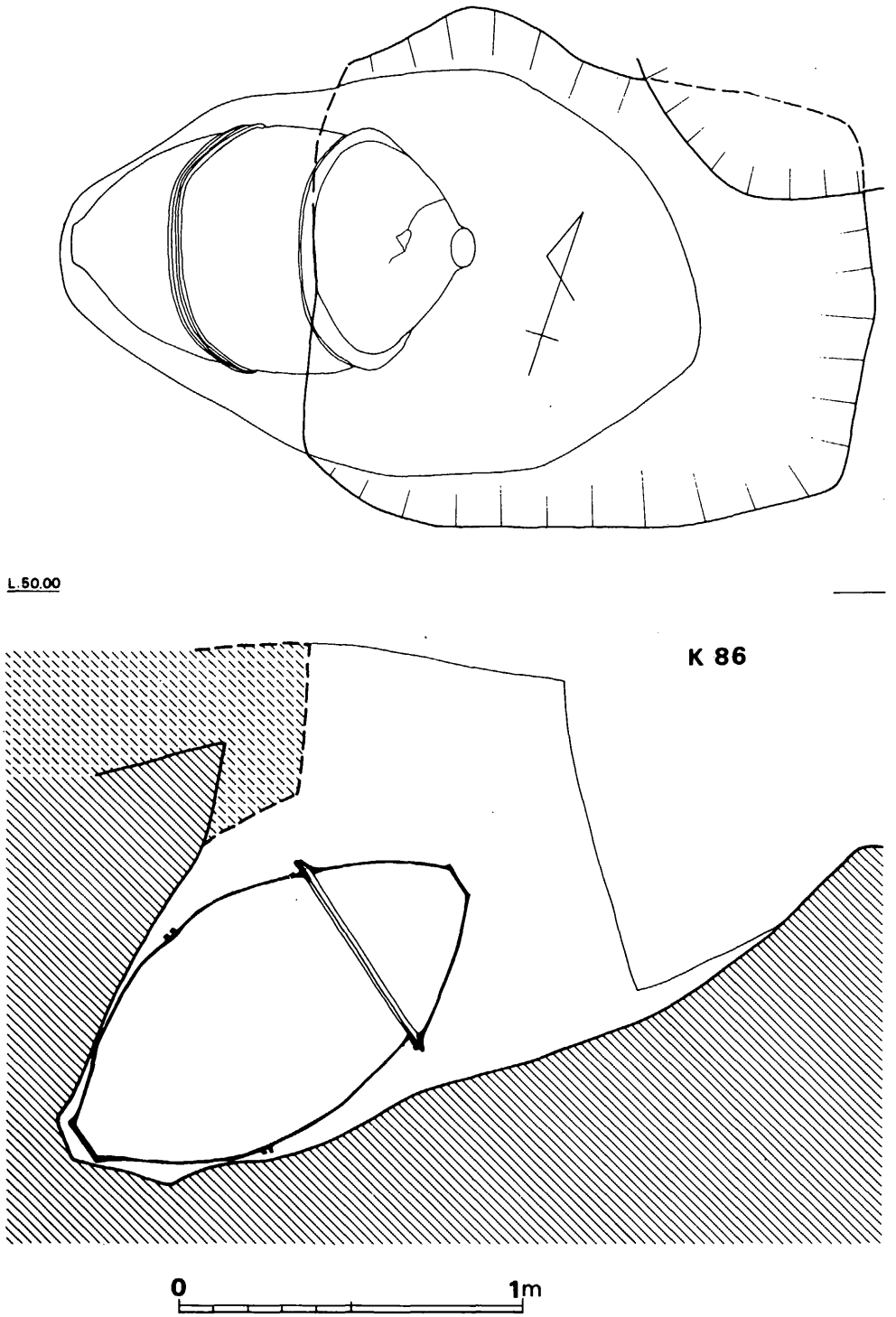


Fig. 55 86号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

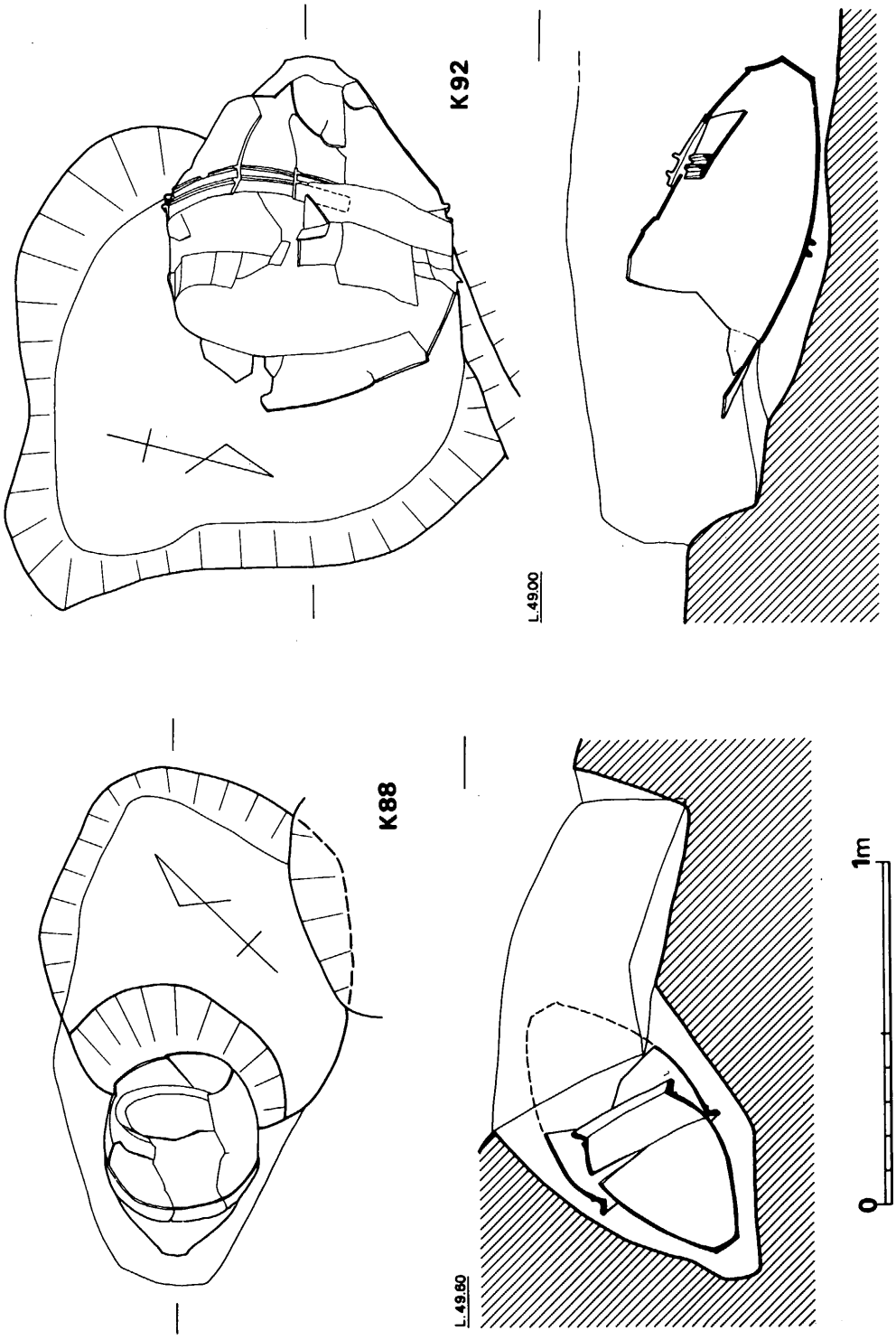


Fig. 56　88号・92号甕棺墓実測図（縮尺１/20）

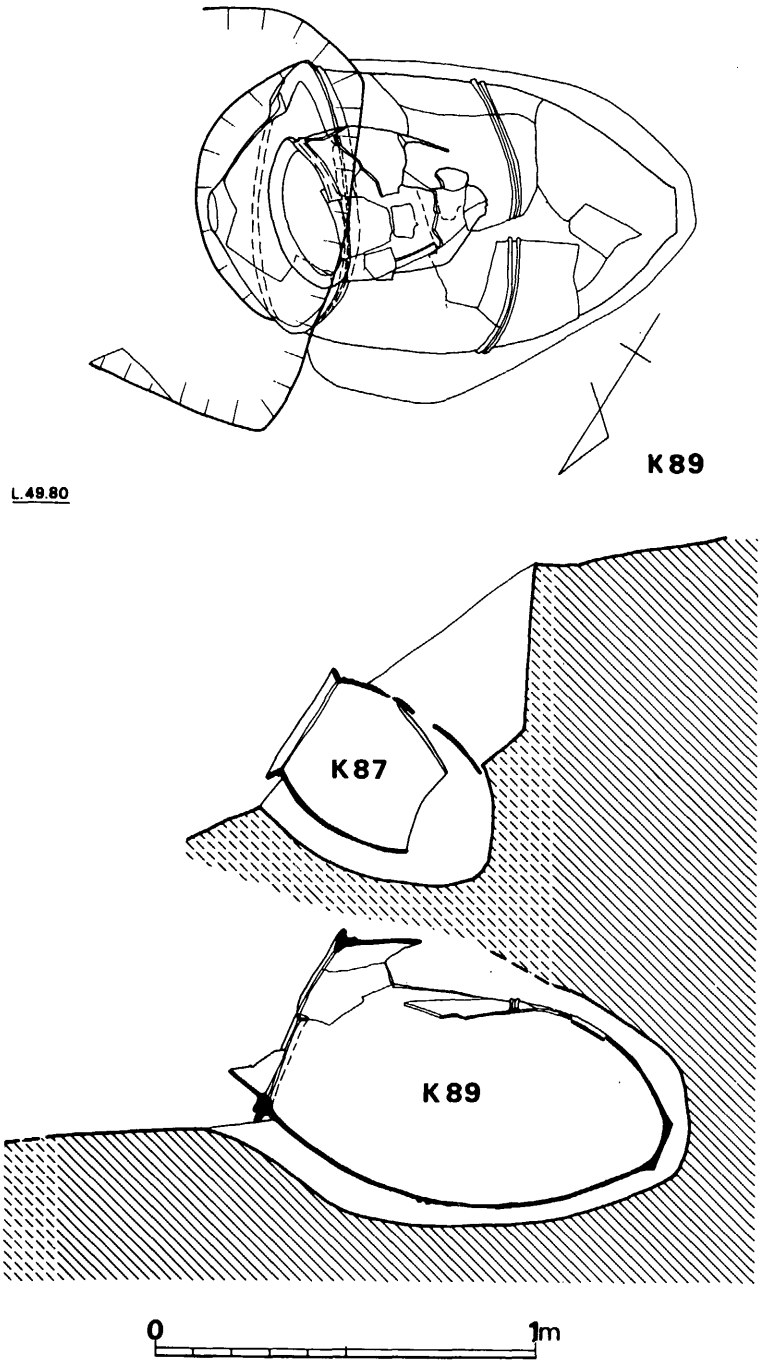


Fig. 57 89号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

ていない。37°の角度で埋置している。

87号甕棺墓（Fig. 39, PL. 34）

89号甕棺墓の上部に位置している小形の単式甕棺墓である。墓坑の平面形は不明であるが南西壁に横穴を穿って甕を挿入している。

棺の主軸は89号甕棺墓の主軸と若干ずれるが89号甕棺墓を意識して埋置しているものと思われる。

88号甕棺墓（Fig. 56・110）

小形の覆蓋式甕棺墓である。墓坑は一部を切られているが隅丸長方形状を呈している。墓坑南西壁に横穴を穿って下甕を埋置し、上甕をかぶせている。横穴は奥行き45 cm、深さ75 cmのものであり、棺が小さいため、上甕の半分までこの横穴内に納まってしまう。

棺は上・下甕とも甕形土器の組合せであるが上甕の方に大形品を用いている。合わせ目には目貼り粘土はなく、37°の角度で埋置されている。

89号甕棺墓（Fig. 57, PL. 35）

丘陵北側の崖面近くに位置する成人用の接口式甕棺墓である。墓坑は削平などによりその平面形は不明であるが南西壁面に横穴を穿って下甕を挿入しているのがわかる。上部に87号甕棺墓があるため横穴は陥没しており、その奥行きは不明であるが、深さは175 cmと深いものである。

棺の上甕は鉢形土器を、下甕は甕形土器を用いており、合わせ目には目貼り粘土は施されていない。成人棺にしてはゆるやかな20°という埋置角度であるが、これは上部に小形棺が所在するためと思われる。87号、89号甕棺墓の相互の関係は大きいと思われる。

90号甕棺墓（Fig. 58, PL. 35）

甕棺墓群の北東端部近くに位置する成人用の単式甕棺墓である。墓坑南西壁の上端から75の位置に横穴を穿って甕を挿入している。この横穴は奥行き70 cm、深さ100 cmであり、墓坑上面からは175 cmである。

棺は甕形土器を用いており、口縁部周辺には目貼りの粘土が見られる。木蓋をしたものと考えられるが腐蝕のため遺存していない。34°の角度で埋置されている。なお、当甕棺は91号・96号甕棺墓より先行するものである。

91号甕棺墓（Fig. 10）

90号甕棺墓の墓坑を切って造られており、これよりは後出するものである。覆蓋式の小形甕棺墓である。墓坑・甕ともに上半部を欠損している。墓坑の南西壁に横穴を穿って下甕を挿入している。

棺の上甕は口縁打ち欠きの甕形土器を用い、下甕には甕形土器を用いている。合わせ目には粘土の目貼りは施されず、41°の角度で埋置している。

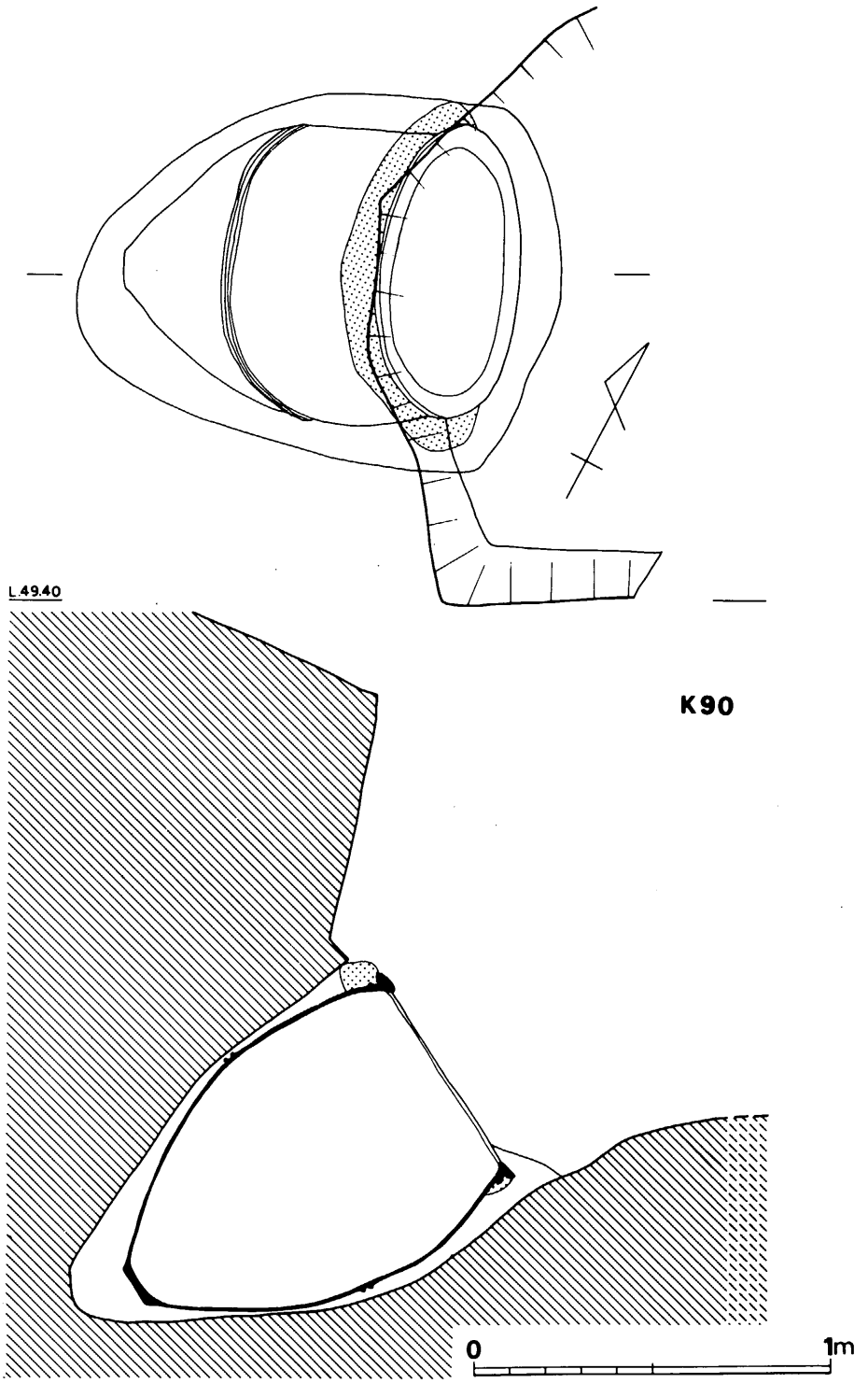


Fig. 58 58号・90号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

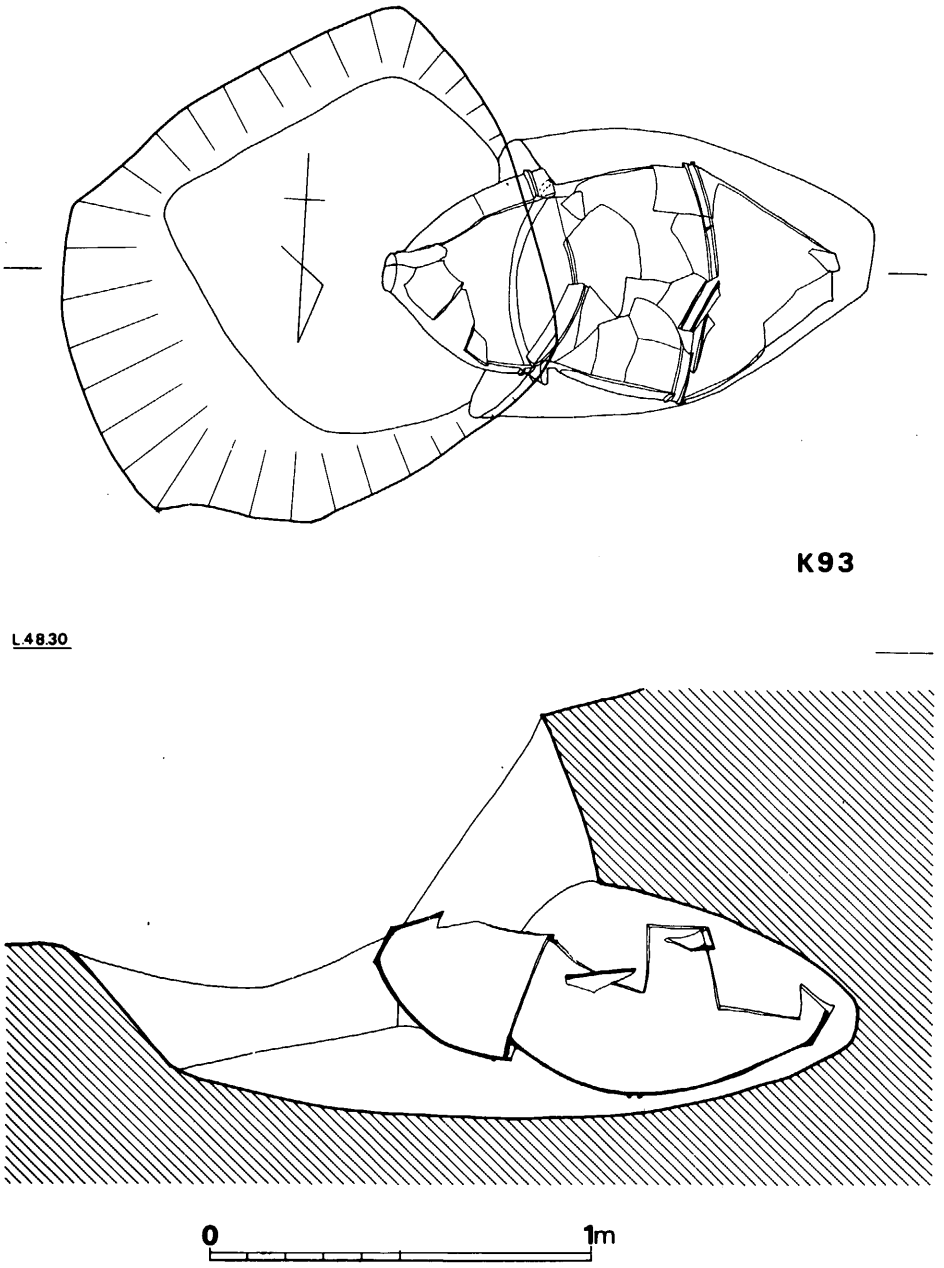


Fig. 59　93号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

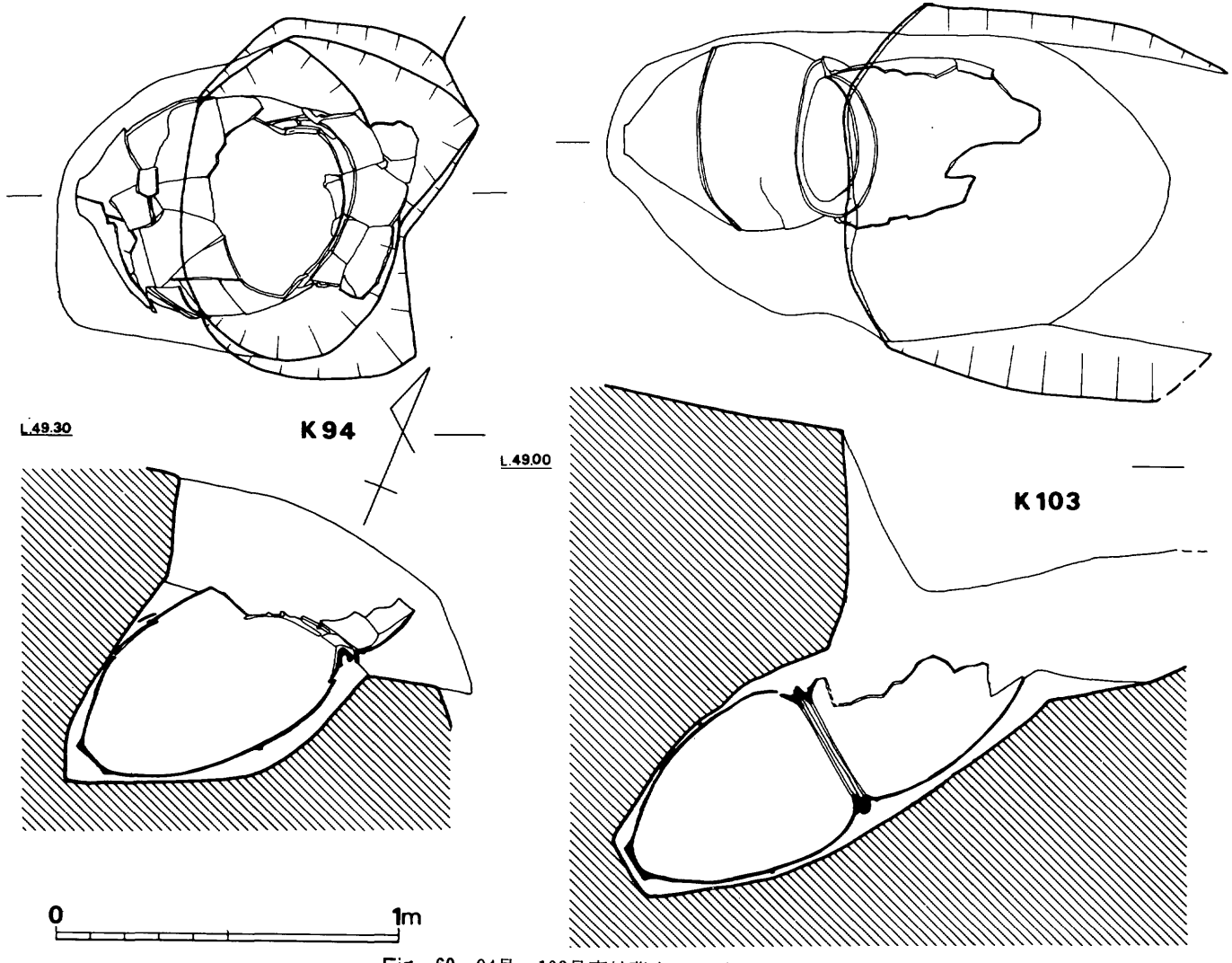


Fig. 60 94号・103号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

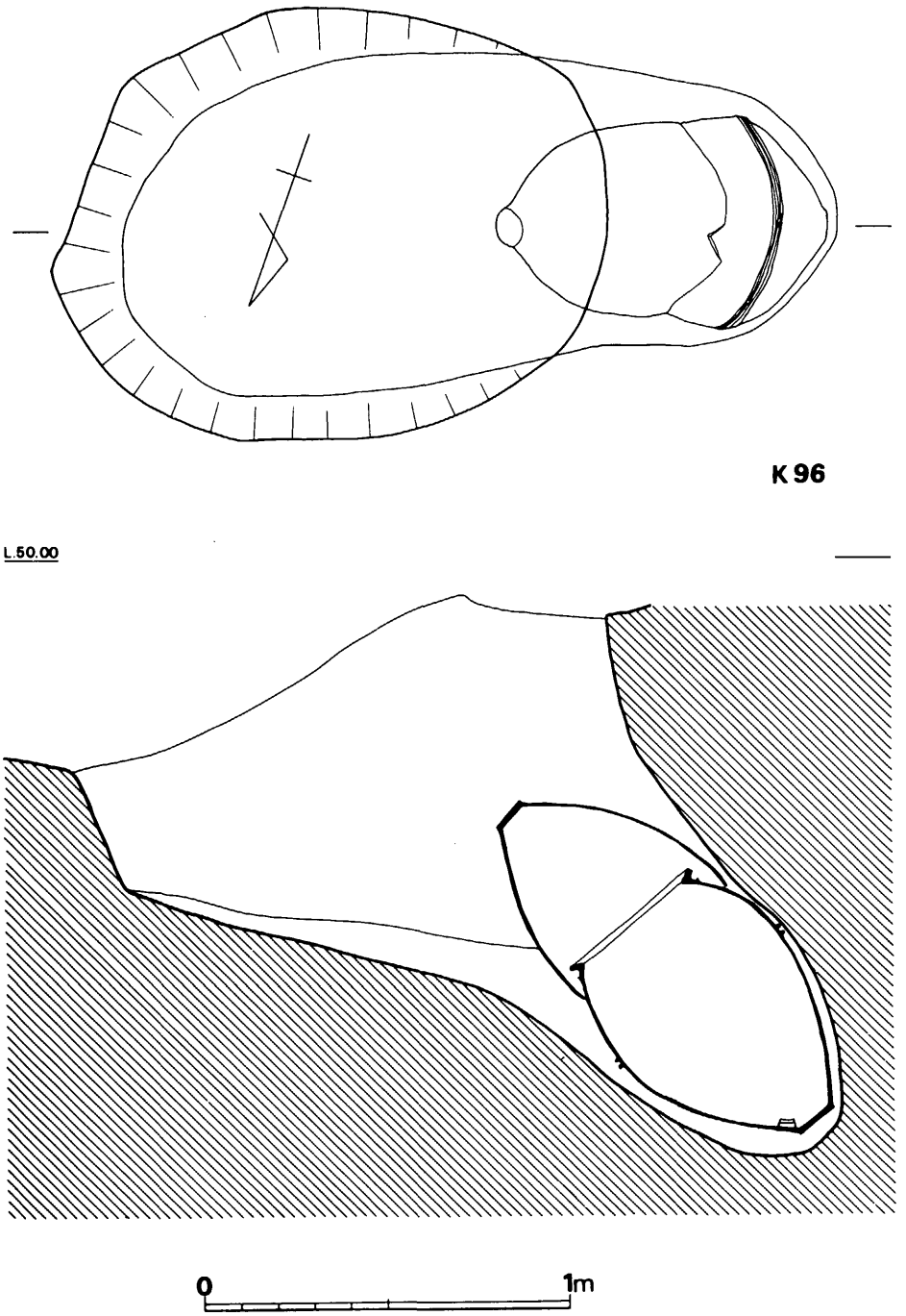


Fig. 61　96号甕棺墓実測図（縮尺１/20）

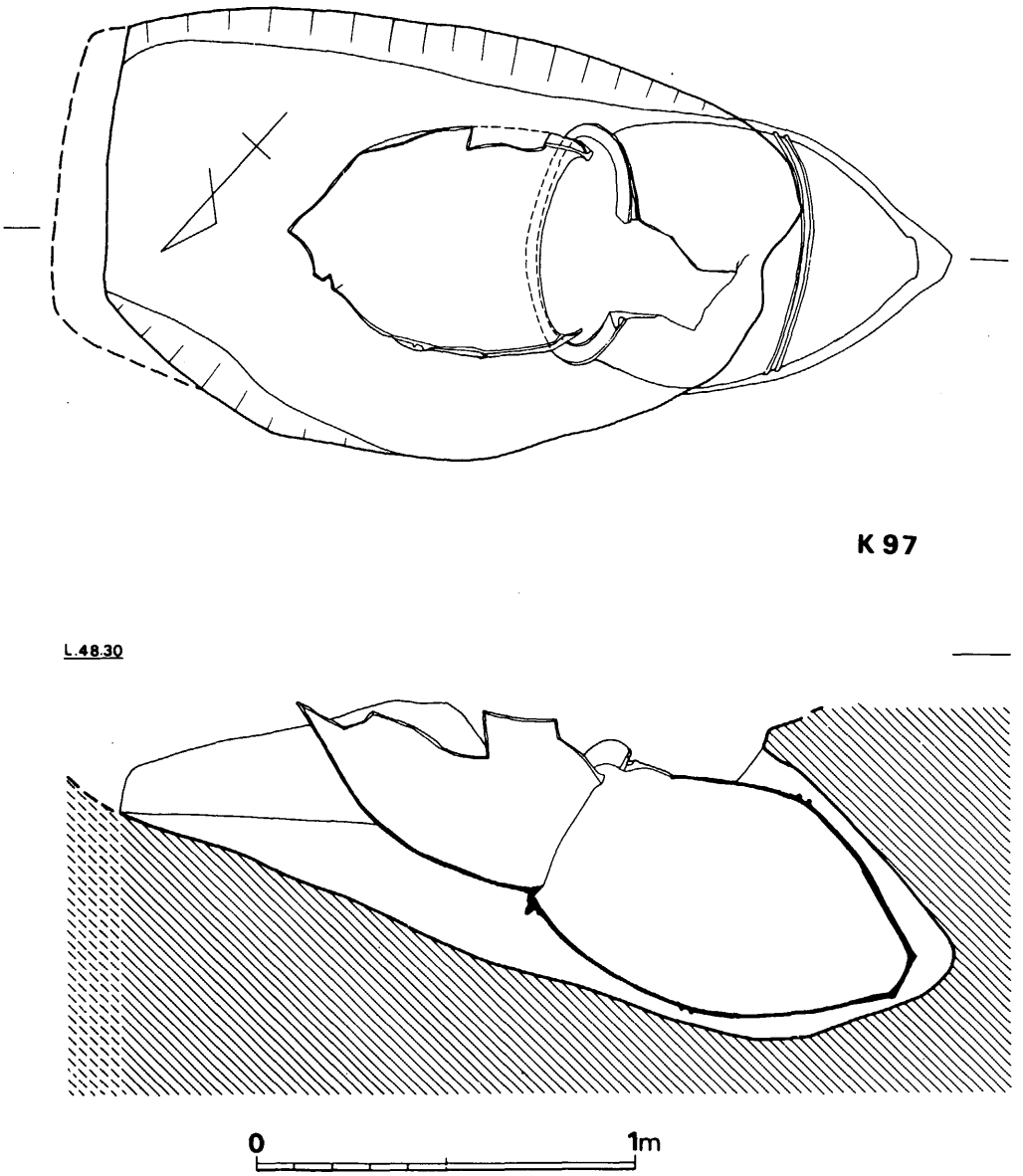


Fig. 62 97号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

92号甕棺墓（Fig. 56）

成人用の甕棺墓であるが、破壊が著しいため単式か組合せ式かの区別はつかない。墓坑は横穴部分も削平されていて現存しない。

93号甕棺墓（Fig. 59，PL. 36）

成人用の覆蓋式甕棺墓である。墓坑の平面は東壁のややだれた方形を呈している。この墓坑の北西のコーナーに偏して横穴を穿って下甕を挿入している。横穴は砲弾形を呈しており、奥行き70 *cm*、墓坑上面までの高さ105*cm*である。甕の上面部は土圧により崩壊している。

棺の上甕は口縁打ち欠きの甕形土器を用い、下甕も甕形土器を用いている。合わせ目には粘土の目貼りは施されていない。

94号甕棺墓（Fig. 60・107）

成人用の接口式甕棺墓である。墓坑東辺部は削られているためその全容は不明であるが、隅丸方形状を呈していたものと考えられる。墓坑の西壁に横穴を穿って下甕を挿入している。

棺は上・下甕とも甕形土器の組合せであり、合わせ目には目貼り粘土は施されていない。33°の角度で埋置されている。

96号甕棺墓（Fig. 61，PL. 37・54）

丘陵北側の崖面のそばに位置しており、かろうじて採土工事から難をのがれた小形の覆蓋式甕棺墓である。墓坑の平面は145 *cm*×120 *cm*の隅丸長方形を呈している。墓坑短辺の西壁に横穴を穿って下甕を挿入してものであり、上甕もこの横穴内に半分程納まっている。墓坑上面から底面までは145 *cm*の深さである。

棺は上甕には口縁部を打ち欠いた甕形土器を用い、下甕にはこれよりもひとまわり大形で内外面とも丹塗りを施した甕形土器を用いている。合わせ目には目貼り粘土は施されていない。下甕の底部のすぐ近くからイモガイ横型貝輪が２個検出された。人骨は遺存していない。棺は46°の角度で埋置されている。

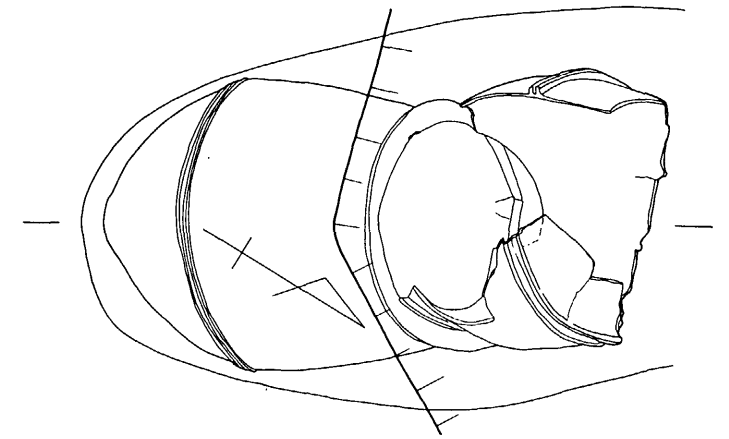
97号甕棺墓（Fig. 62，PL. 40）

甕棺墓群のうち最北東部に位置する成人用の接口式甕棺墓である。墓坑は削平されており、上甕も一部削り取られていたが墓坑の平面は長方形を呈するものである。墓坑短辺の南西壁に横穴を穿って下甕を挿入している。

棺は墓坑の主軸に沿って埋置してあり、上・下甕とも甕形土器を用いている。合わせ目には粘土の目貼りは施されていない。埋置角度は26°である。

98号甕棺墓（Fig. 10）

北側の崖面にあり、採土工事に伴って破壊を受けている。成人用の単式甕棺墓である。墓坑南壁に横穴を穿って甕を挿入しているが、その埋置角度は52°と急である。



L.50.20

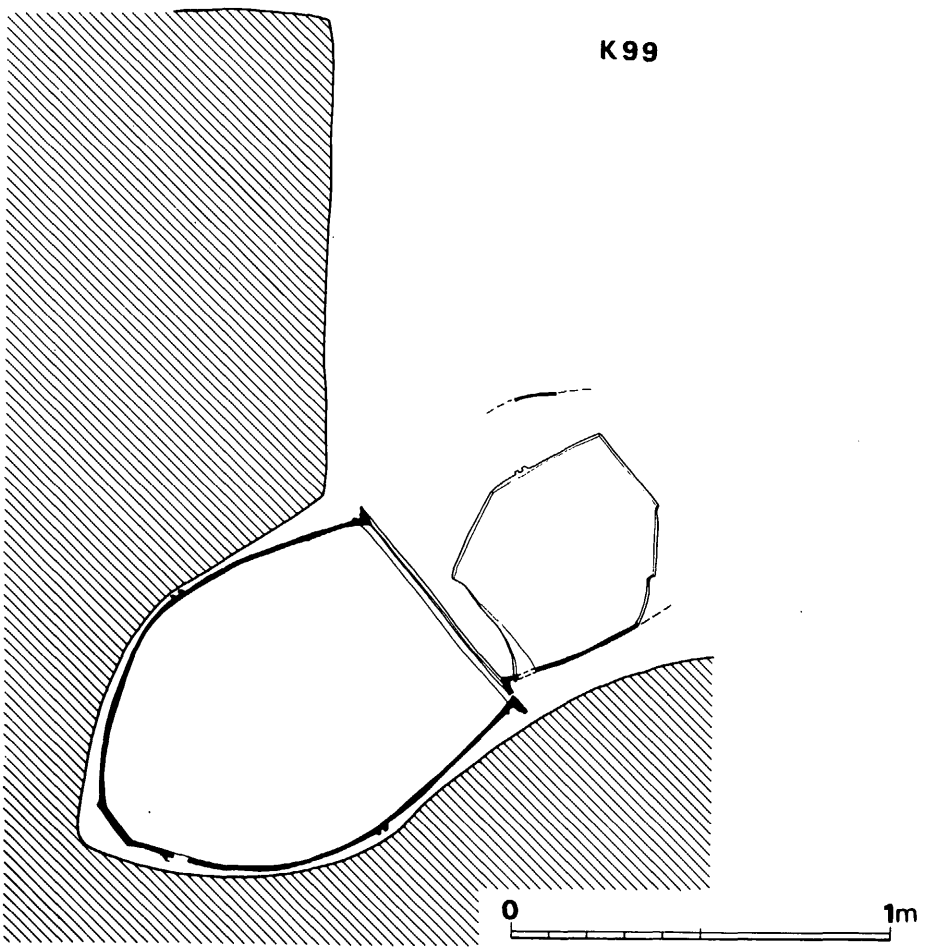
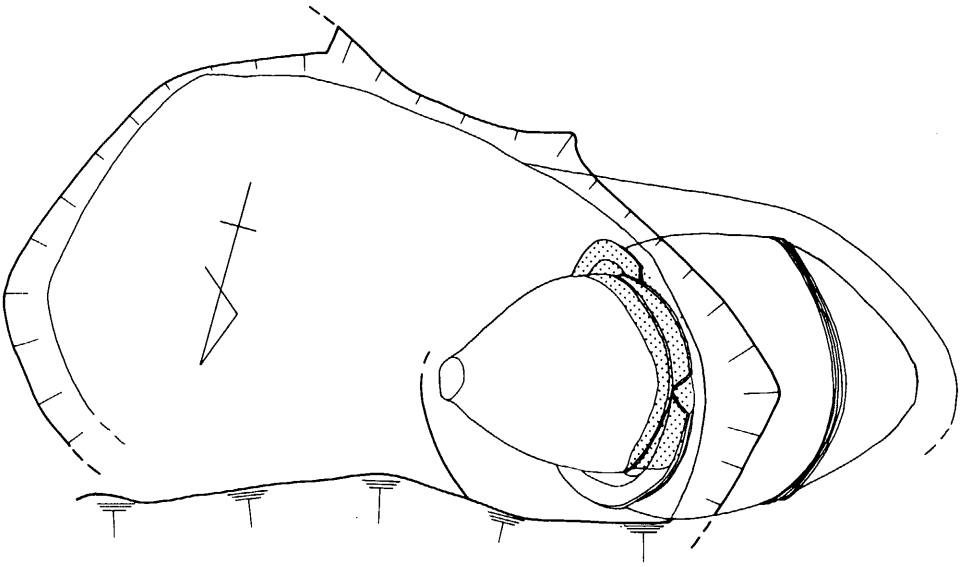


Fig. 63 99号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）



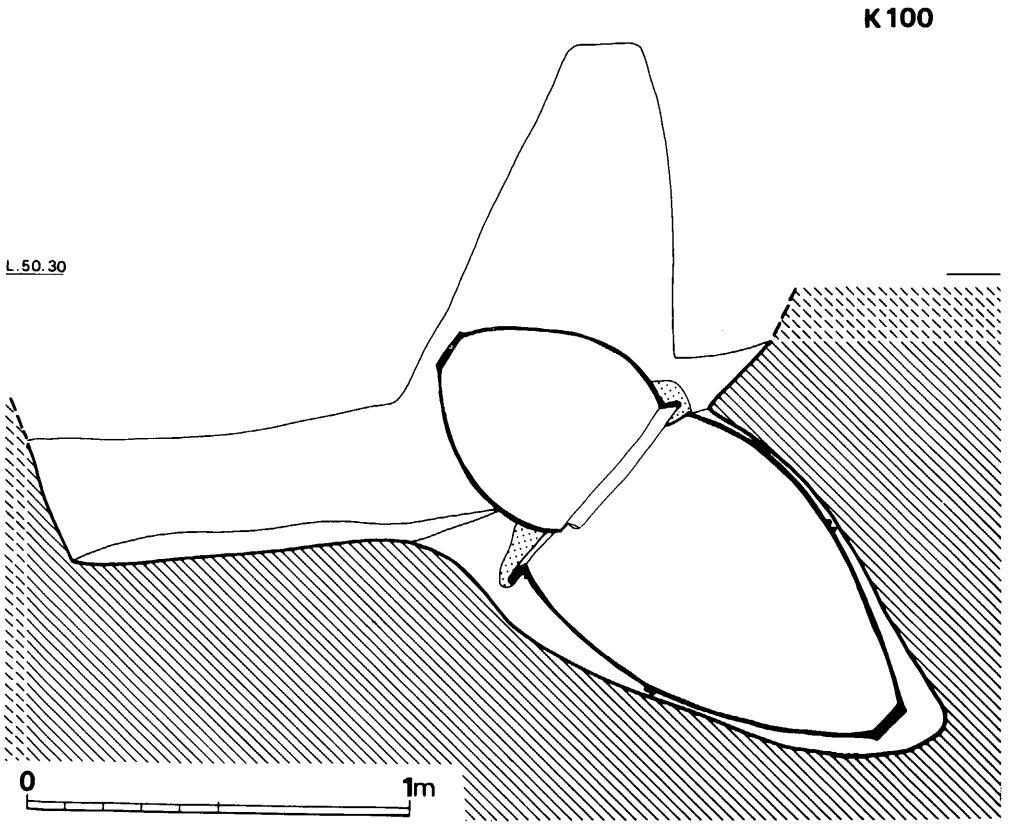


Fig. 64　100号甕棺墓実測図（縮尺１/20）

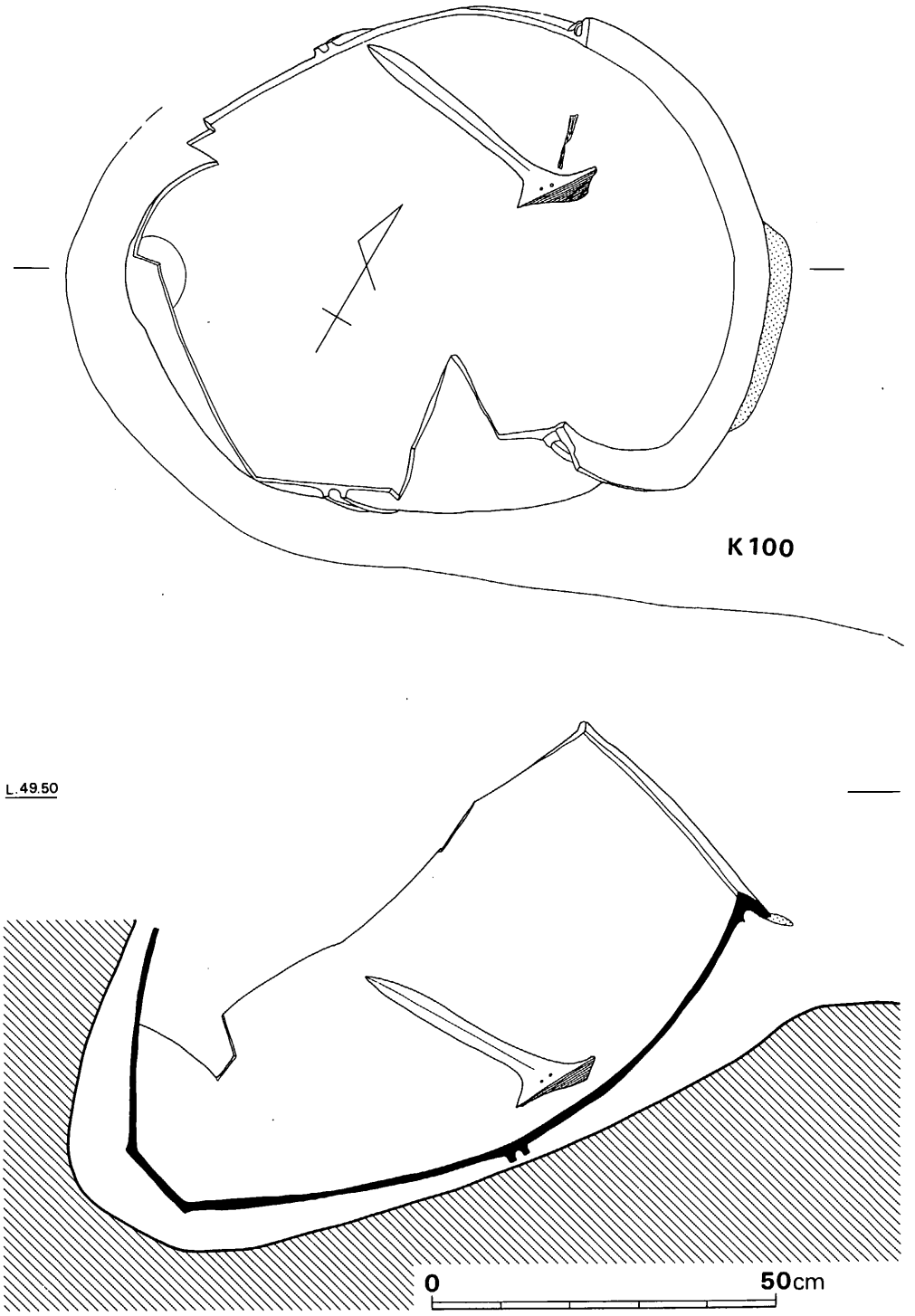


Fig. 65 100号甕棺墓内鉄戈出土状態実測図（縮尺 1/10）

99号甕棺墓（Fig. 63）

北側端部の崖面にあり、上甕の半分は削りとられている。墓坑の平面形は不明であるが、南壁を垂直に125 *cm*さがった位置から横穴を穿って下甕を挿入している。横穴は下甕が入るぎりぎりの大きさであり、奥行きは65*cm*、上面からの深さは 225*cm*と深いものである。

棺は上・下甕とも甕形土器を用いており、下甕の底部から12*cm*の位置には直径4*cm*程の水抜きの孔が焼成後穿たれている。合わせ目には目貼り粘土は施されていない。棺の埋置角度は34°である。

100号甕棺墓（Fig. 64・65, PL. 38・39・55）

北側の崖面に所在しており、これはまた甕棺墓群の西側端部近くでもある。成人用の呑口式甕棺墓である。墓坑の北側部分は採土工事に伴って破壊されているが平面形は隅丸長方形のものであった事が残存状況から考えられよう。墓坑西南部のコーナーの部分に横穴を穿って下甕を挿入している。この横穴は奥行き60*cm*、高さ90*cm*の砲弾形を呈したものであり、底面部はやや棺との空間が見られるがそれ以外はぎりぎりの大きさである。

棺は上甕には後期初頭の小形甕形土器を用い、下甕には中期の甕形土器を用いているという興味深い組合せである。この合わせ目には厚く目貼り粘土を施している。下甕は内外面とも丹塗りであった。下甕内からは鉄戈が1本検出された。これは甕の北半部にあたる位置で鋒を北西方向に向けており、木質の遺存が見られる事から木柄を装着したものと考えられた。なお人骨は遺存していなかった。棺の埋置角度は40°である。

101号甕棺墓（Fig. 66）

丘陵南側の端部近くに位置する成人用の接口式甕棺墓である。墓坑の平面は隅丸長方形を呈しており、短辺である西壁に横穴を穿って下甕を挿入している。

棺はこの墓拡の中軸線上に埋置されており、上・下甕とも甕形土器の組合せである。合わせ目には目貼り粘土は施されておらず、37°の角度で埋置している。

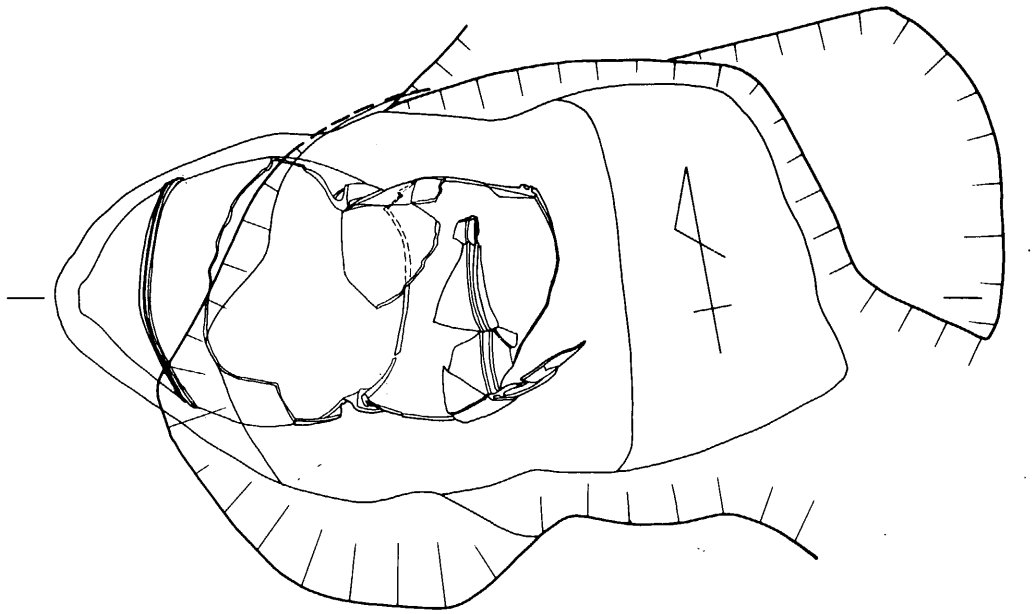
102号甕棺墓（Fig. 30・107, PL. 36・40）

88号甕棺墓によって墓坑を一部切られており、これよりは先行するものである。覆蓋式の小形甕棺墓である。墓坑の平面は隅丸長方形を呈しており、短辺である西壁に横穴を穿って下甕を挿入している。

棺は墓坑主軸から若干ずれて埋置されており、組合せは、上甕は口縁打ち欠きの甕形土器を用い、下甕はこれとほぼ同大の甕形土器を用いている。合わせ目には粘土の目貼りは施されておらず17°のゆるやかな傾斜で埋置している。

103号甕棺墓（Fig. 60）

接口式の小形甕棺墓である。墓坑は一辺を欠失しているが、その平面形は長方形状を呈するものと思われる。短辺の壁面から65 *cm*さがった位置に横穴を穿って下甕を挿入しているが、上



K101

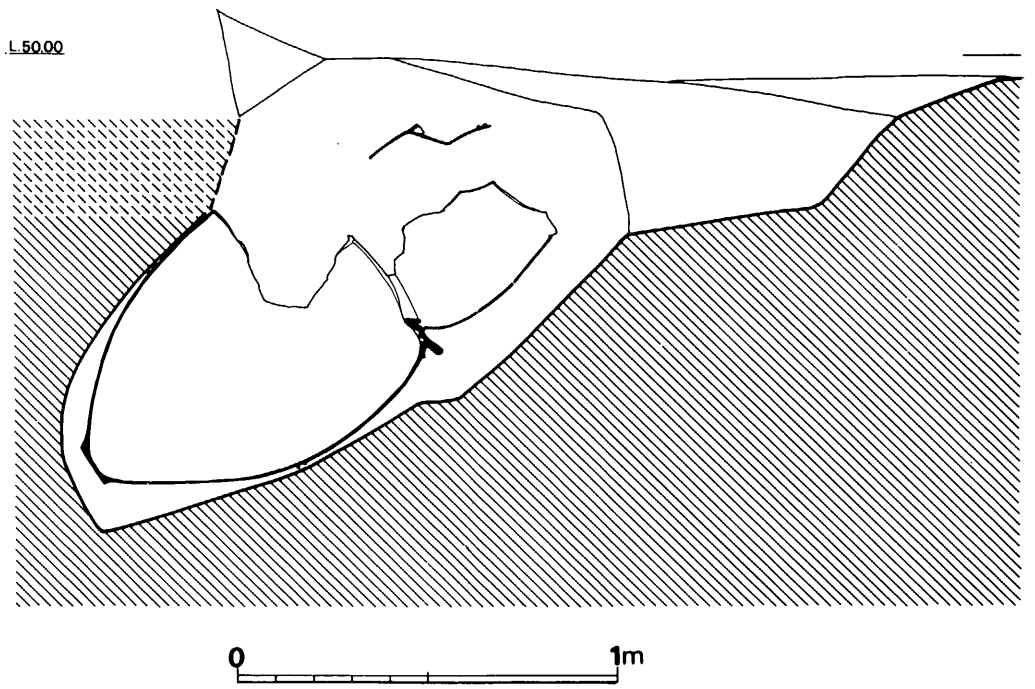


Fig. 66 101号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

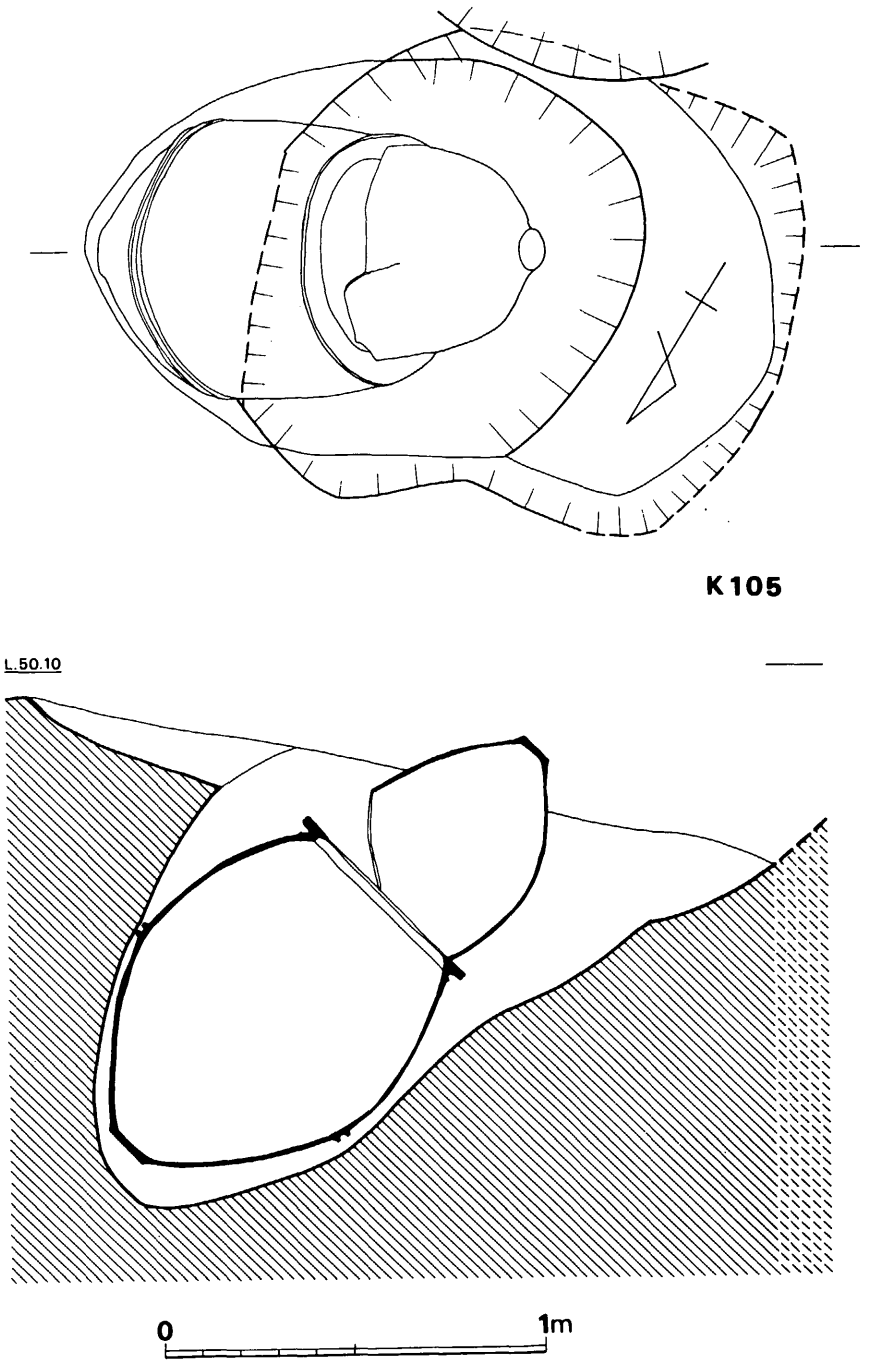


Fig. 67　105号甕棺墓実測図（縮尺１/20）

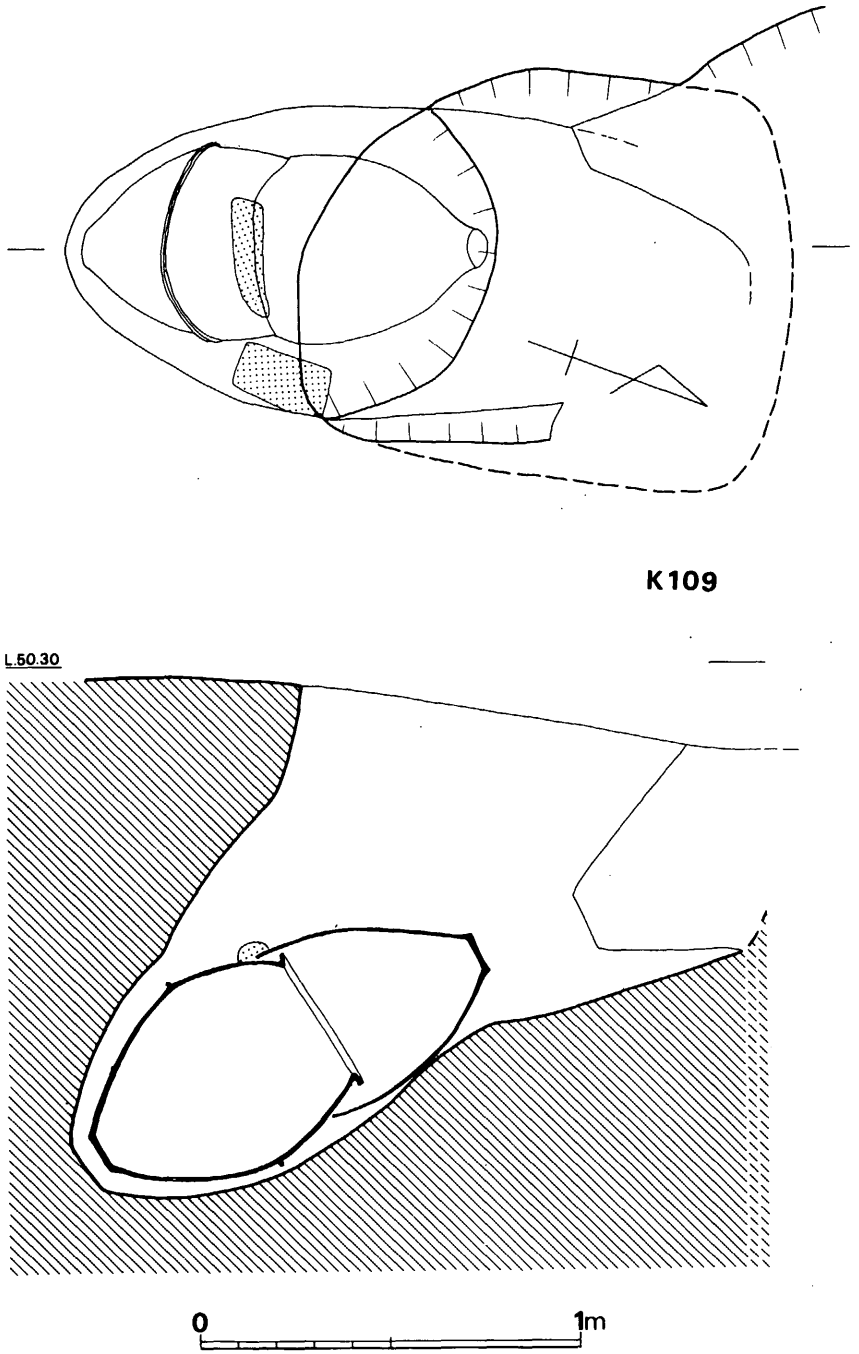
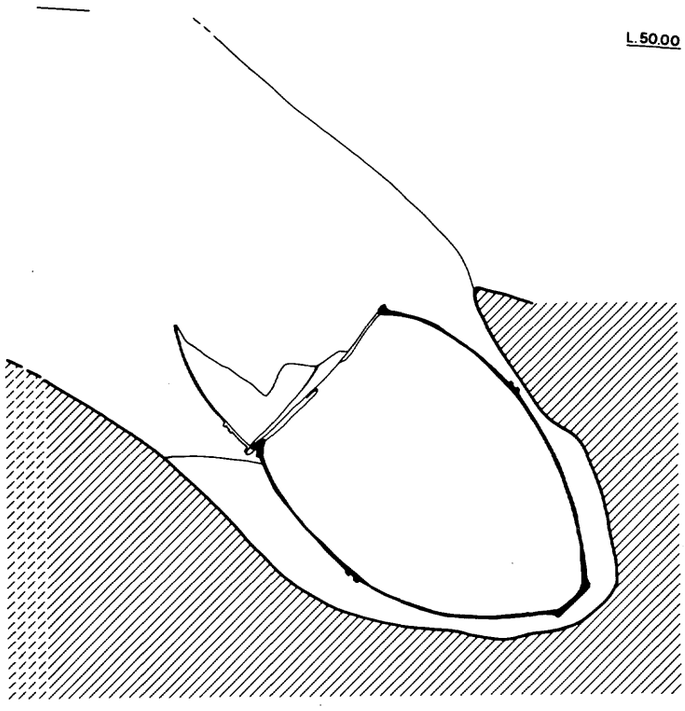
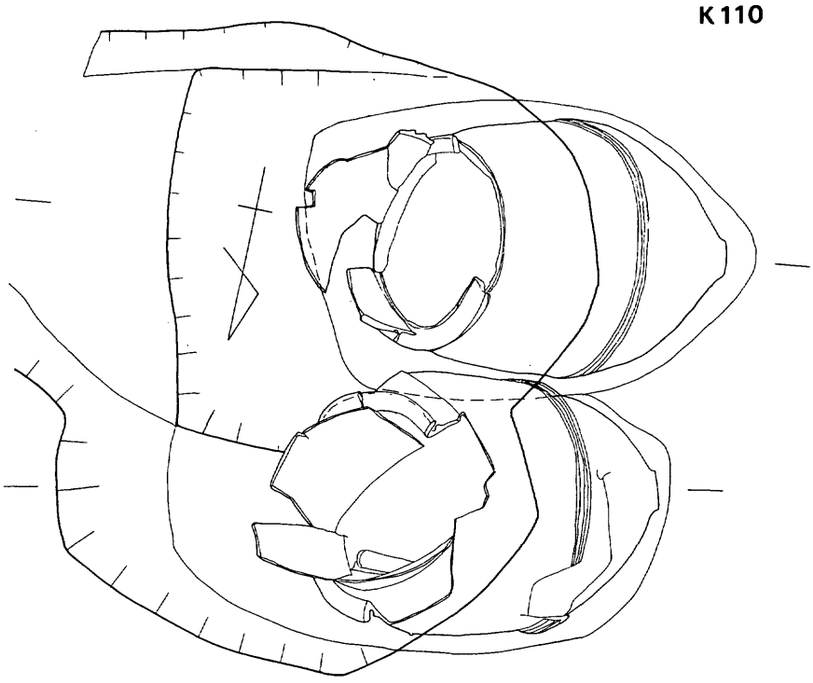


Fig. 68 109号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）



K110



K111

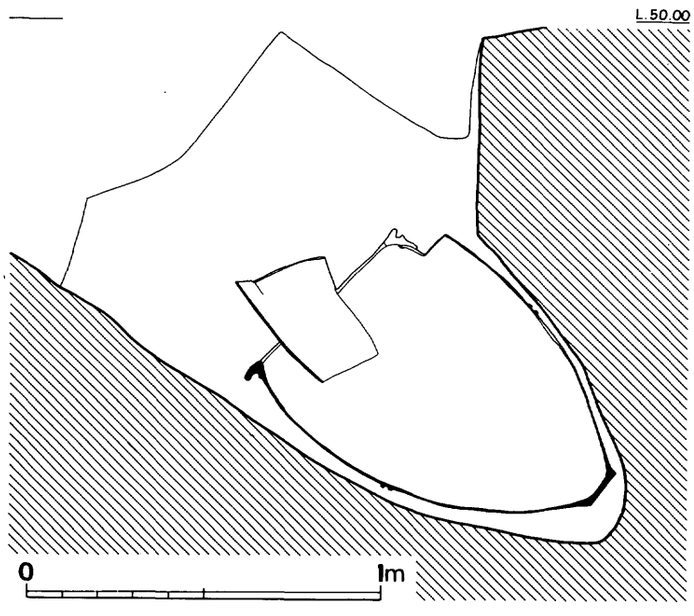


Fig. 69　110号・111号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

甕の若干部分もこの中に納まってしまう。横穴は奥行き60cm、高さ70cmの砲弾形を呈している。甕はこの横穴にぎりぎりで納まっている。

棺は上・下甕とも甕形土器の組合せであり、30°の角度で埋置されている。合わせ目には粘土の目貼りは見られなかった。

104号甕棺墓（Fig. 12, PL. 41）

成人用の単式甕棺墓である。墓坑は削られており、平面形は不明である。西壁に横穴を穿って甕を挿入している。横穴は甕の形に合わせて掘られており、底部に相当する部分はくぼませている。墓坑底面から上面までは14.5cmと高い。

棺の蓋は木蓋と思われるが木質は遺存しておらず、また、目貼りの粘土も見られなかった。32°の角度で埋置している。

105号甕棺墓（Fig. 67）

北側の崖面近くに位置している成人用の接口式甕棺墓である。墓坑の一部は新墓を造る際に破壊されているが、その平面形は1.4 m×1.2 mの隅丸長方形を呈するようである。墓坑短辺の東壁に横穴を穿って下甕を挿入している。横穴は奥行き35 cm、深さ110 cmの砲弾形を呈している。

棺の上甕は口縁打ち欠きの小形の甕形土器を用い、下甕は大形の甕形土器を用いている。合わせ目には目貼り粘土は見られない。棺は墓拡の中軸線からややずれた位置に43°の角度で埋置している。

106号甕棺墓

新墓を造る際にその大部分を破壊されている。小児用の接口式甕棺墓である。

109号甕棺墓（Fig. 68・108, PL. 41）

覆蓋式の小形甕棺墓である。墓坑の東半部分は切られており不明である。西壁に横穴を穿って下甕を挿入している。この横穴は棺に比して規模のやや大きなものであり、奥行き60 cm、墓坑上面からの深さ135cmのものである。

棺の上甕は口縁打ち欠きの甕形土器で下甕を覆い、下甕は上甕とほぼ同大の甕形土器を用いている。合わせ目の上部のみ粘土の目貼りが見られる。棺は30°の角度で埋置しており、底部下面の15cmの位置には直径1cm程の水抜き孔が穿たれている。なお、人骨は遺存していない。

110号甕棺墓（Fig. 69・108, PL. 42・55）

111号甕棺墓と並置してあり、これよりは先行するものである。墓坑の平面形は不明であるが、西壁に横穴を穿って下甕を挿入している。

棺の上甕は口縁打ち欠きの甕形土器を用い、下甕は甕形土器を用いている。合わせ目には目貼り粘土は用いられておらず、37°の角度で埋置している。

111号甕棺墓（Fig. 69, PL. 42）

110号甕棺墓の北隣りに並置してあり、これよりは後出するが、埋置の仕方を見ると棺どうしはぎりぎりに接して置かれてあり 110号甕棺墓を埋置したあと、意識的かどうかは定かでないがこれと並置している。成人用の呑口式甕棺墓であり、墓坑西壁に横穴を穿って下甕を挿入している。横穴は棺が入るほぼぎりぎりの大きさである。

棺の上甕は口縁打ち欠きの甕形土器を、下甕は甕形土器を用い、33°の角度で埋置している。

112号甕棺墓（Fig. 47・107, PL. 55）

小形の覆蓋式甕棺墓である。墓拡は不整形を呈しており、西南壁に横穴を穿って下甕を挿入している。

棺の上甕は口縁打ち欠きの壺形土器を用い、下甕は甕形土器を用いている。

甕棺墓の切り合い関係（古→新を表わす）

K14→K41	K40→K13→K109	K90→K91, K90→K96
K17→K18	K42→K43	K101→K83
K33・34→K35	K68→K67	K102→K88
K36→K37	K71→K74	K110→K111
K39→K38, K39→K41	K84→K61	

B 箱式石棺墓

1号箱式石棺墓（Fig. 70, PL. 43）

丘陵東側の端部近くに位置しており、甕棺墓群の上部に構築されている。主軸はN—52°—Eであり、頭位を南西にとる。

棺は内法で、長さ 210 cm、頭部幅45cm、足部近くは40cmを測る。左側壁は幅50cm、高さ25 cm～30cm、厚さ15cm～20cm程の石材を4個用い、右側壁はこれと同じ大きさの石が3個現存していた。蓋石は棺内法の幅よりも若干大き目の石材を用いているのが2個程確認された。棺の構築は墓坑を掘って行うのでなく、平坦面上に石材を組み背後に土を積むという方法である。床面からの高さは25cm程である。なお棺内から遺物は出土していない。

2号箱式石棺墓（Fig. 70, PL. 43）

丘陵南側裾部に位置している。南西側は削り取られていて現存しないため、墓坑の平面形の全容は不明であるが、石棺よりもやや大き目の墓坑を掘っていた事がうかがえる。墓坑は花崗岩バイラン土の地山を掘削して石材を据え、墓坑と石材との空間部に土を詰めている。

石棺の主軸はN—67°—W で頭位は西北西にとる。石棺は内法で幅40cmであり、長さは85cmまで確認された。蓋石は1個も残っていなかったが床面からの推定高は35cm程である。頭部の小口壁は小口上面の高さよりやや低い位置でこれの背後に近接して、1枚の石を横積みしている。石棺内から遺物は出土していない。（川述昭人）

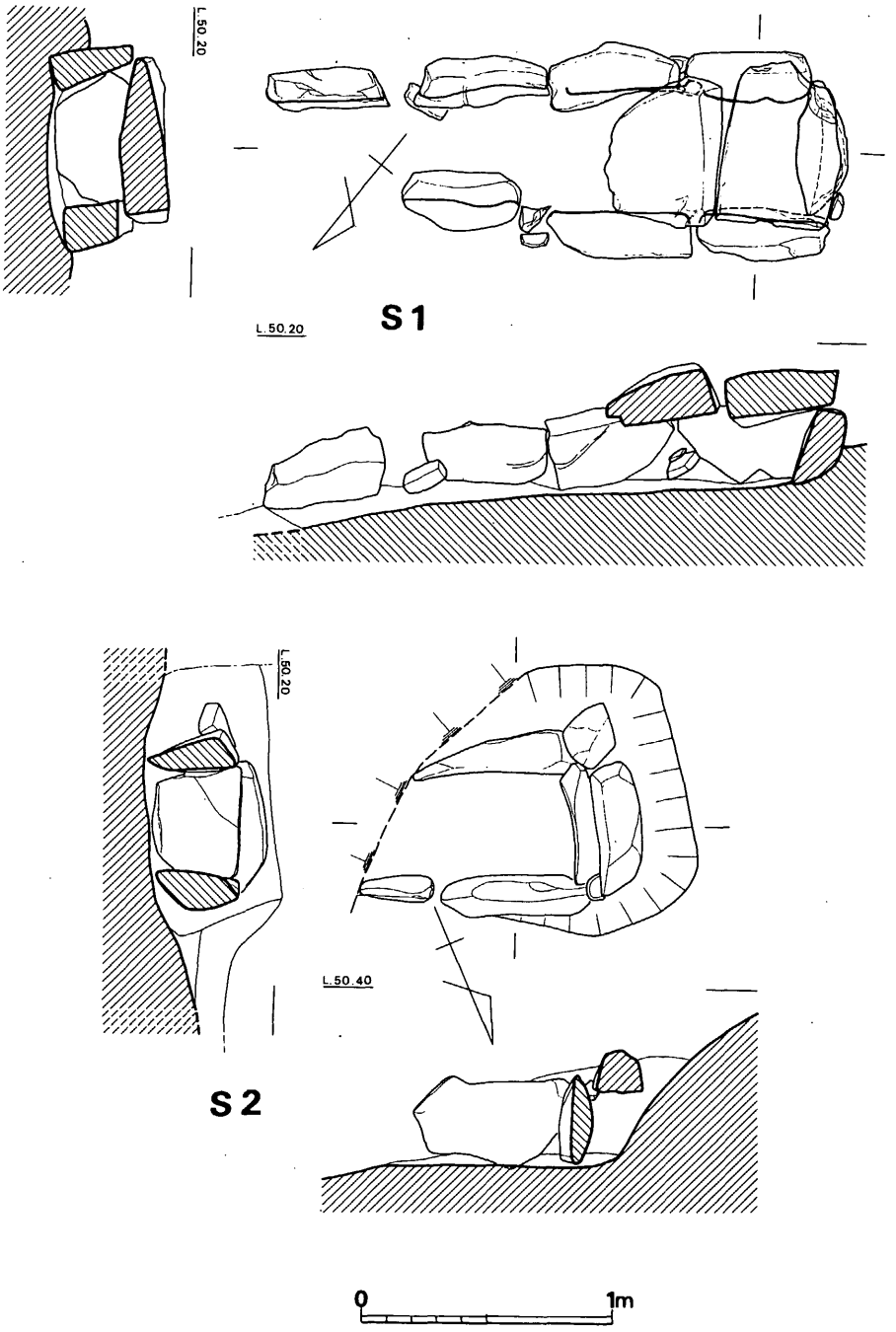


Fig. 70　１号・２号箱式石棺墓実測図（縮尺１/30）

(2) 弥生時代の遺物

A 甕 棺

はじめに

道場山1地点出土の甕棺は 112基、個体数にして 200個近くある。これらの全容を報告すべく努力はしたが、なにしろ日常容器に比べてきわめて大きく、時間的制約と、おもには空間的制約によって、全部を復原する余裕はなかった。したがって、復原をしなかったものに関してはなるだけ、最も特徴的な部分——口縁部——を図示することによって補なうこととした。

これらの個々についての説明は一覧表を付したので、それを参照していただきたい。

ここでは、この表で分類した、棺の規模、時期等について、その基準を述べ、次に甕棺製作技術についての若干の所見と、葬法についての若干の問題について述べたい。

1 分類の基準

(1) 棺の規模

従来、甕棺の大きさについては成人棺・小児棺に二分されることが一般的である。

いまここでは大形棺・小形棺・小児棺の三者に分類した。

大形棺としたものは80cmから120cm(特殊的には立岩の甕棺みたいに140cmを越えるものもあるが)ぐらいまでの100cm前後のもので、成人・若年の埋葬に使用されたことは、人骨の遺存によって明らかである。

小児棺としたものは甕棺専用に製作されたものはなく、そのほとんどが日常容器を転用した甕棺で、器高約50cm以下のものである。これも乳・幼児の埋葬に使用されたことはほぼまちがいない。用語としては不適格であるが、通例に従いたい。[註(1)]

いま問題になるのは小形棺としたものであって、器高は約50cm～80cmの間にあり、60cm、70cm代のものが多く、大形棺と小児棺の中間の大きさのものである。弥生前期の大形棺発生時の甕棺、中期前半に未だ大形棺が導入されていない遠賀川流域の日常容器の大形器を甕棺に転用したもの等に、この大きさの甕棺があるが、これは必ずしも幼・小児用のものではなく、むしろ成人用のものであろうと考える。甕棺の盛行した地域での、最も盛行した中期には、この大きさの甕棺はきわめて少なく、中期末～後期初頭になって比較的多くなり、又日常容器の転用も多くなってくる。[註(2)][註(3)]

量の少ない中期において、この小形棺は、小児を埋葬するためのものが主体であろう。しかしながら甕棺葬が終焉する傾向にある中期末～後期初頭になると小形棺がにわかに多くなり、埋葬専用の大形棺製作もすたれはじめ、石蓋土坑、石棺等が新たに出現する。甕棺葬という風習も次第に、糸島地方みたいにその後も甕棺葬が多い地域、または佐賀地方のようにその後もある時期まで後進的に甕棺葬が引きつづき行なわれる地域をのぞいては、遺習となりつつある。

この時期には一時期古い形態の大形棺に日常容器の大形器を蓋として使用したり、甕棺が小形化したり、日常容器の大形器を転用したりする傾向がより多くなってくる。従って、この中期末～後期初頭の小形棺は小さいからといって、棺の大きさにみあった小児の埋葬に使用したとは必ずしも言い難い。

道場山でもK—8のように、大きさとしては成人とそうたいして変らない年令の者を埋葬したもの、又はK—96のように、幼児を埋葬したもの等、両者ともあるようである。この小形棺は以上のように人骨の遺存がなければいずれにも決し難い。

(2)　時期区分

甕棺の時期については中期後葉・中期末・後期初頭の三期に区分した。結論的にいうと、ここで中期後葉、中期末としたものは森貞次郎氏編年の立岩式、高島忠平氏編年のⅦ式に相当し、後期初頭としたものは森編年の桜馬場式、高島編年のⅧ式[註(4)]に相当するものとしてよい[註(5)]。もともとこれらの甕棺は継起的・漸次的に形態変遷をとげているものであって、これらに一線を画するのはかなり至難のことであり、細分化しすぎとの批判をまぬがれないかもしれないが、中期後半とされる森編年の立岩式、高島編年のⅦ式のなかから新しい要素をもつものを抽出して、中期後葉と中期末とに分離したい。

合せ口甕棺においては、上下で[註(6)]編年的には一時期ちがうものがセットになる例がかなり多いが、概して蓋として用いられた上甕が下甕よりも新しい。一時期古いものが新しい時期に残るというこのような現象は、住居跡等で出土する日常容器にもいえることであって、別に甕棺にだけ例外的なものではない。このような組合せを重視して、後期の甕棺とセットになっている中期の甕棺を抽出し、比較検討するならば、いわゆる立岩式とされるものが細分可能か否かが自ずから明らかになるであろう。順序としては逆になるが、明確にく字口縁をなし、口縁内部に稜をつくる後期の甕棺から始まって、中期へと遡って説明を加えたい。

後期初頭の甕棺は、全体として丸味を帯び、器形は卵形を呈し、頸部はしまる。口縁は外反し、く字状を呈し、口縁内部は稜をつくる。口縁下凸帯は頸部もしくは頸部に近い位置にある。胴部凸帯はまだシャープなコ字形をなすものもあるが、全体としてはだれており、又三角形に近いもの、刻目を有するもの等があり、凸帯1条のものがかなり多くなる。

器面の調整は中期以来のものを引きついでおり、必ずしも粗雑になるということはない。

口縁の形態には(1)、逆L字口縁の傾斜がきつくなり、く字となったもの（K—59上下、K—100上等）。

(2)　丸味をもちながら口縁内部の稜を有するもの（K—15下、K—53下、K—88下、K—97上）

(3)　口縁が内彎するもの（K—25上、K—29下、K—73下、K—76上、K—111上等）。

(4)　口縁端が肥大化し、器形、口縁ともに全体に丸味のつよいもの（K—46下、K—51下）が

ある。

1と2との区別はそうたいして明確でないが、2は遠賀川流域のく字形の口縁をもつ中期の甕の大形化した系列のものではないかと思うが、大形棺には類例が少ない。これに先だつものとしては、後に述べる中期末に位置づけられる器形全体が丸味を帯び、口縁が外反し、口縁内部に稜をもたないものがある。

3は甕棺専用として製作された大形棺ではなく、日常容器を転用したものであり、小形棺、および大形棺の蓋として使用される。上記二者とは系列を異にするものである。

4は形態的には森編年の三津式、高島編年のⅨ式へとつながる形式のもので、ここでは後期初頭としたが、前三者に比べやや後出するもので、後期前葉に位置づけるべきものであろう。

以上述べた後期の甕とセットをなしている中期の甕としてK—25下、K—72上、K—76下、K—81下、K—94下、K—97、K—100下、K—111下等があげられる。これを口縁形態で分類すると

(1) K—76下、K—100下、K—111下のように約12～13㎜以上内傾する逆L字口縁。

(2) K—25下のように外に約10㎜程低く傾斜するもの。

(3) K—81下みたいに1のやや変形したもの。

(4) K—94下のように全体として丸味を帯び、口縁はく字口縁をなすが、内部に稜をつくらないもの、K—72上もこの部類に属す。

K—97はいずれとも異なるが、さらに古い形態が残ったものか、あるいは2の変形したものか。

1のタイプにはK—1上、K—14下、K—17下、K—18下、K—22、K—26下、K—30下、K—31下、K—32、K—37、K—39下、K—41下、K—42下、K—55、K—62下、K—63下、K—65下、K—67下、K—70下、K—75下、K—77下、K—82下、K—90、K—92、K—99上、K—103下、K—112下等がある。

これらのなかにはK—22のように胴部凸帯が中期中頃以前の甕棺にあるシャープな三角凸帯とは異なり、だれた三角凸帯を呈するもの、K—62下のように造り1条、見かけ2条のコ字凸帯をなすもの、K—103下、K—112下等のようにコ字形凸帯1条をなすものがあり、後期へとつながる要素が出現している。

2のタイプにはK—1下、K—45下、K—93下等がある。K—1の上甕の口縁部は1のタイプに属し、K—93の上甕の胴部凸帯は三角凸帯1条のもので、このようにいずれも中期末に位置づけられるものとセットになっており、中期末に比定してよい。

4にはK—49上下、K—61下、K—80下、K—83下、K—85、K—102下、K—103上等があげられる。このタイプの大形棺は数少ないが、ときたま見られるものである。日常容器を転用した小児棺には比較的多いが、これは板付遺跡J・K—25トレンチ旧河川砂層より一括して出土した土器群のく字口縁をなす、甕とほぼ同一の特徴を示し、中期末に比定してよかろう。
註(7)

このタイプはあるいは遠賀川流域に盛行したく字をなす中期の甕棺の系列に属するものであろうかと考える。
このタイプの甕棺の胴部凸帯にもK—102上下のようにコ字形凸帯1条のものが出現している。
1は中期後葉の甕棺と比較して外観等にはそうたいして差異は認められないが、口縁部に逆L字口縁からく字口縁へと変化していく過渡的様相が認められる。4も外観としては大きな差は認められないが、全体として丸味を帯び、頸部がしまりつつあり、後期へとつながる様相を呈する。又上述したように、胴部凸帯に後期に多いところの1条凸帯、あるいはだれた三角凸帯が出現して、全体としては中期から後期への過渡的様相を示している。

中期後葉の甕棺の口縁はほぼ平坦なT字口縁・逆L字口縁、やや内傾(10㎜前後まで)するT字・逆L字口縁を呈する。胴部凸帯は比較的シャープなものが多い。
森編年の須玖式、高島編年のⅥ式に比較すると、須玖式の口縁はT字をなし、ほぼ平坦か、やや外傾するのに比べ、逆L字状が圧到的に多くなり、須玖式の胴部凸帯はシャープな三角凸帯もしくはコ字形凸帯であるが、中期後葉のものは三角凸帯が姿を消し、コ字形凸帯はやや下方に垂れぎみの傾向が生じているといえよう。全体の器形は、須玖式が口縁から胴部凸帯にかけてほぼ直になっているのに比べ、胴部凸帯より上はやや丸味を帯びて、口縁下でややすぼまる。
以上中期後葉・中期末・後期初頭に分類したものをFig.71、Fig.72に図示する。

2　甕棺製作技術についての若干の所見

(1)　胴部凸帯は補強ではなく、運搬の用に供するもの

甕棺の胴部凸帯は中期後半（中期を前半・後半に大別した場合の後半。森編年の須玖式・立岩式、高島編年のⅥ、Ⅶ式にあたる）になり、甕棺が肥大化するにつれ、装飾的意味あいを失って、成形段階におけるひび割れを防ぐための補強として施されるものとされ、従って凸帯の位置は、成形上2段階目の上端部であり、それから上との継ぎ目にあるとされる。これが今日までの一般的見解であるが、このような（凸帯部に継ぎ目のある）位置に凸帯部[註(8)]のあるのは、道場山においては、K—48下に例外的にみられるのみであって、ほとんどは凸帯の上下に接合部が認められる。ということは、粘土帯の接合部ではなく中間に胴部凸帯が貼付されるということであって、補強としての積極面は果たしていないと思う。
胴部上半にススが付着し、又胴部に二次的火熱を受けた赤変部分等が認められる日常容器の大形器を転用した甕棺には胴部凸帯が貼付されていない。これら日常容器の大形器は器高60㎝、70㎝代のものであって、かなりの大きさであり、補強として胴部凸帯を貼付するなら、これら日常容器にも凸帯があるのが望ましい。

K—53下、K—62下、K—63下、K—96下、K—102下、K—109下、K—112下等の、これらと同じような大きさの小形棺で、胴部に凸帯のあるものには、ススの付着、二次的火熱による赤変部分等は認められず、これらは当初から埋葬専用の甕棺として製作されたものと考える。
それならば、埋葬専用として製作された甕棺には何故胴部凸帯を施す必要があるのであろうか。胴部凸帯の出現する前期末、中期初頭より中期中頃までのシャープな三角を呈する胴部凸帯は、甕棺が壺が大形化して成立した由縁をもって、前期の壺の肩の段、又は沈線を引きついだ装飾的意味をもっていた。中期後半になって、甕棺がさらに大形化するにつれ、胴部凸帯も大きくなり、長大なコ字形へと発展する。これは上述したように補強のためではない。私は居住地から墓地へ運ぶことを想定したためのものではないかと考える。従って埋葬専用のものは大形、小形を問わず胴部凸帯が貼付されるのだと思う。甕棺は意外と重く、その器形からしても、もち運びにくいものであるが、凸帯に手をかけて二人でもつと結構たやすく運べるものである。他にも口縁下と胴部凸帯部に縄をかけて、二人で担ぐ等の方法もあろうが、とにかく、このように運搬を合理的にするために、それにみあった凸帯へと発達したものであろう。

(2) 粘土帯の幅、タタキ技法の存在、ハケ目の方向等

高島忠平氏によると、大形甕棺における粘土帯の幅は8cm前後であって、これは原則として粘土帯の幅が手のひらの幅を越えることはないというように理由づけられている。しかし道場山の甕棺を観察するかぎり、粘土帯の幅は一定せず、まして8cm前後ということはない。[註(8)] たとえばK—48下を例にとると、上から12cm、20cm、17cm、29cm、19cm。K—39は上から12cm、24.5cm、12cm、11cm、20cm、18cm、18cm。K—96下は10cm、16cm、16cm、16cm、16cm、10cm。K—100下は6.5cm、19cm、13.5cm、15cm、15cm、13cm、12cmを測る。このように必ずしも一定の幅の粘土帯を積み上げていったものではなく、粘土帯の幅は各様であり、かなり幅広いものもある。又中期前半（中期を二大別した場合の前半）の甕棺には発掘時、乾燥によって長方形に縦割する例が多く、これは粘土板を縦に合せて成形する技法も存在したことを窺わせる（これには否定的、というよりも成形技法としてあり得ないと主張する人が多い）このように粘土帯の幅の広いもの、あるいは長方形の粘土板を縦に合せ成形するためには如何様な技法が存在したのか。

それはタタキ技法である。PL. 60に示すように、K—39上・下、K—48上・下、K—100下等に比較的よくタタキの痕跡が認められる。道場山の甕棺はタタキの後ハケ目で掻き消され、さらにナデ消され不明瞭であるが、このタタキの大きさは凹面の幅1.3cm、長さ8～13cmで、これの数条が一単位となると思われる。いま明瞭なタタキ痕を残す、福岡県三輪町栗田K—14上、太宰府町吉ヶ浦K—4上、同K—59の部分写真を参考のために提示する（PL. 60)。栗田K—14上は中期の鉢で通常みられる大きさのタタキ痕である。その上からハケ目で掻き消すが、タタキ

痕は明瞭に残る。吉ヶ浦K—4上は中期後葉の鉢で、これは道場山例と同じような大きさのタタキ痕で、その後調整が行なわれず、タタキの凹凸が明瞭である。吉ヶ浦K－59例はやはり同様のタタキ痕で、それをハケ目で掻き消しているが、痕跡は明瞭に残る。

甕棺のタタキ痕は中期の甕棺のみでなく、福岡県那珂川町瀬戸口の前期後半(板付II式)の甕棺にも、吉ヶ浦・道場山例と同様なものが明瞭に残るものがあり、甕棺の発生時から存在している。同じ前期に、筑紫野市剣塚の貯蔵穴より出土した板付II式の甕にもタタキ痕が認められるものがあり、大形の甕棺だけでなく日常容器の成形にもタタキ技法が用いられたことがわかる。タタキ技法[註(9)]が存在することによって、かなりの幅をもつ粘土帯の積み上げ、また長方形の粘土板を縦に接合していくことも可能であった。タタキの痕跡は普通はその後ハケ目で掻き消され、さらにナデ消されて、一見それとわからないところまで器面の調整が行なわれる。

次にハケ目の方向について述べたい。ハケ目は原則として下から上へ行なわれるとされる。甕棺が底部から口縁へと成形されていくとすれば、当然論理的には、下から上へ向けてハケ目[註(8)]は施されるものであろう。しかしハケ目を観察するかぎり、必ずしも下方向からのものだけではなく、上下方向いり乱れている観がある。調整の順序としては下方向から次第にハケ目が施されたとしても、ハケ目の主要な用途はさきに述べたタタキ痕を掻き消すためのものであって、上下方向いずれからであろうと、その目的を果たせばいいのである。

(3)　甕棺の補修痕について

K－22の底部近くに焼成前に補修した痕跡が認められる（PL. 60)。これは底部近くのつぎ目でハケ目を施した後割れており、割れ目の器表部に粘土を張り、補修を行なっている。口縁部のひび割れを粘土を張り補修したものは、龍王寺2号、吉ヶ浦等に例があるが、底部付近を補修したものは今まで例をみない。しかしいずれにしても[註(8)]、焼成前に割れ目を補修した事実があることは興味深い。

3　葬法上の若干の問題

(1)　上甕の口縁打ち欠きは甕棺埋葬時に行われる事が多い

上甕の口縁を打ち欠き、下甕と組合せる例はかなりの数にのぼる。この口縁打ち欠きは何処で行うのであろうか。K－40の場合は打ち欠いた上甕の口縁を、さらに上甕の外側に据えており、又他の場合は口縁を打ち欠かれた上甕の口縁の一部が下甕に落込んでいたり、口縁打ち欠きのものが復原すると口縁部まで存在している例がたまたまある。

これらは、遺体納棺後、蓋をする際、下甕との組合せの状況に応じて、現場で口縁を打ち欠く場合が多かった事を示している。

(2) 遺体は蓆ですまきにして納棺する

副葬品の項で述べるように、K－100に副葬された鉄戈にはタタミ表状の蓆が付着していた。甕棺・石棺・土坑墓等に副葬された鉄器にワラ状のものが付着する例は福岡県中間市上り立6号石棺出土の素環頭刀子、立岩2号土坑墓出土の鉄矛等にみられるが、タタミ表状はなしていない。K－100より出土の鉄戈[註(10)]に付着したものと同様[註(11)]なタタミ表状をなす蓆が人骨・甕棺内壁等に付着して出土した例は吉ヶ浦遺跡に数例ある。又蓆およびワラ状のものが人骨に付着した例は永岡K－30・33・41、スダレK－3、ハサコノ宮[註(12)]K－8等でも筆者は実見している。これらの蓆および蓆の一部とみられるワラ[註(13)]等の出土[註(3)]状態をみると、遺体は蓆ですまきにして納棺されたものと考える。K－ 100より出土[註(14)]の鉄戈に付着したタタミ表状の蓆も、人骨を巻いたものの一部が銹着して残ったものであろう。

(3) 日常容器を転用し、大形棺の蓋としたものが結構多い。このような組合せ自体はこの時期にはそうたいしてめずらしいものではないが、K－96、K－100等の着装品・副葬品をもつ甕棺でも蓋に日常容器を使用しており、注目される。これらの甕棺は後期初頭の甕棺であって、甕棺葬の終焉化傾向に伴ない、大形棺の絶対量の不足を補なうものであり、K－96、K－100もその反映であろうが、着装品・副葬品をもつ甕棺に日常容器を使用することはめずらしい。

道場山第1地点で着装品・副葬品を出土した甕棺はK－48、K－96、K－100で、これらは表面が丹塗り、又は器壁の厚さ、形の良さ等造りが良く、他の甕棺と比較して、外観からも若干の差異があり、発掘時にもその外観上から、留意したもののうちにはいっている。しかし須玖岡本の巨石、三雲南小路・立岩堀田等の副葬品を多量にもつ甕棺は、甕棺の造りの良さは当然のこととして、それを埋設する施設、すなわち墓坑、標識等に他と隔絶したものがある。道場山K－48・96・ 100の墓坑の大きさは他と比較して必ずしも大きいものではなく、他の甕棺との間に差異は認められない。

ここ近年における甕棺墓等の発掘成果によると、貝輪・鉄器はかなり普遍的に出土する遺物となりつつある。これは貝輪・鉄器等がかなり普及していることを示すものであって、これらが出土する遺跡に対して、須玖・三雲・立岩等みたいな、有力首長層の墳墓としての特別な意義を与える必要はない。道場山も一般的な甕棺墓地であって、従って墓地を形成した人々の聚落は当時としては当然一般的な聚落であったと考える。このような一般的な聚落内においても、K－48、K－96、K－100 等に示される首長層の一般成員からの分化は進行していたが、それはまだ、甕棺の造り等が他より若干優れている程度で、蓋に日常容器を使用する程度のものであった。

（橋口達也）

註1　道場山でもK－110に若年の被葬者を埋葬した例がある。若年後期はすでに身体的には

成人の域に達しており、又若年初期の者でも、男性は女性の成人にほぼ比すべき大きさにあり、女性は成人の大きさに達しつつある年頃である。又当時としては第二次性徴を示すこれらの年頃から成人としてあつかわれたと想定される。したがって若年は成人として扱うべきものであろう。

註２．大野城市教育委員会「中・寺尾遺跡」大野城市文化財調査報告書　第１集　1977

３．穂波町教育委員会「スダレ遺跡」穂波町埋蔵文化財調査報告書　第１集　1976

４．森貞次郎「弥生時代における細形銅剣の流入について」　金関丈夫古稀記念委員会編『日本民族と南方文化』　1968

５．立岩遺蹟調査委員会「立岩遺蹟　５章１－Ⅳ」　1977

６．来年度の報告書にて機会をあらためて詳述したいと考えているが、私案としては甕棺型式をＫⅠ、ＫⅡ、ＫⅢ、ＫⅣ（Ｋは甕棺の略記号）の四期に大別し、ＫⅠを前期、ＫⅡ、ＫⅢを中期として口縁下凸帯のない時期と、口縁下凸帯の出現以後の時期に分け、前者を前半、後者を後半とし、Ｋ－Ⅳを後期としたい。四期に大別した各々をさらに細分すべきであって、たとえば中期後半のＫⅢ式は、三小期に分類し、それぞれＫⅢａ、ＫⅢｂ、ＫⅢｃとすれば、ＫⅢａは須玖式（福岡市諸岡遺跡等の甕棺に代表される。）、ＫⅢｂはここでいう中期後葉、ＫⅢｃは中期末に相当するものとして理解していただきたい。

７．福岡市教育委員会「板付」福岡市埋蔵文化財調査報告書　第35集　1976

８．立岩遺蹟調査委員会編「立岩遺蹟　５章Ⅰ－Ⅲ」　1977

９．福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」ＸＸⅣ　1978

10．永井昌文・小田富士雄・橋口達也「福岡県中間市上り立弥生墳墓群調査報告」　九州古学33・34　1968　　原報告ではこのことにはふれていないが、石棺の床に面した側にワラ状のものが付着していた。

11．立岩遺蹟調査委員会編「立岩遺蹟　５章４－Ⅰ」　1977

12．橋口達也「初期鉄製品をめぐる二・三の問題」　考古学雑誌60－１　1974

13．福岡県教育委員会「南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」　第５集　1977

14．来年度報告予定

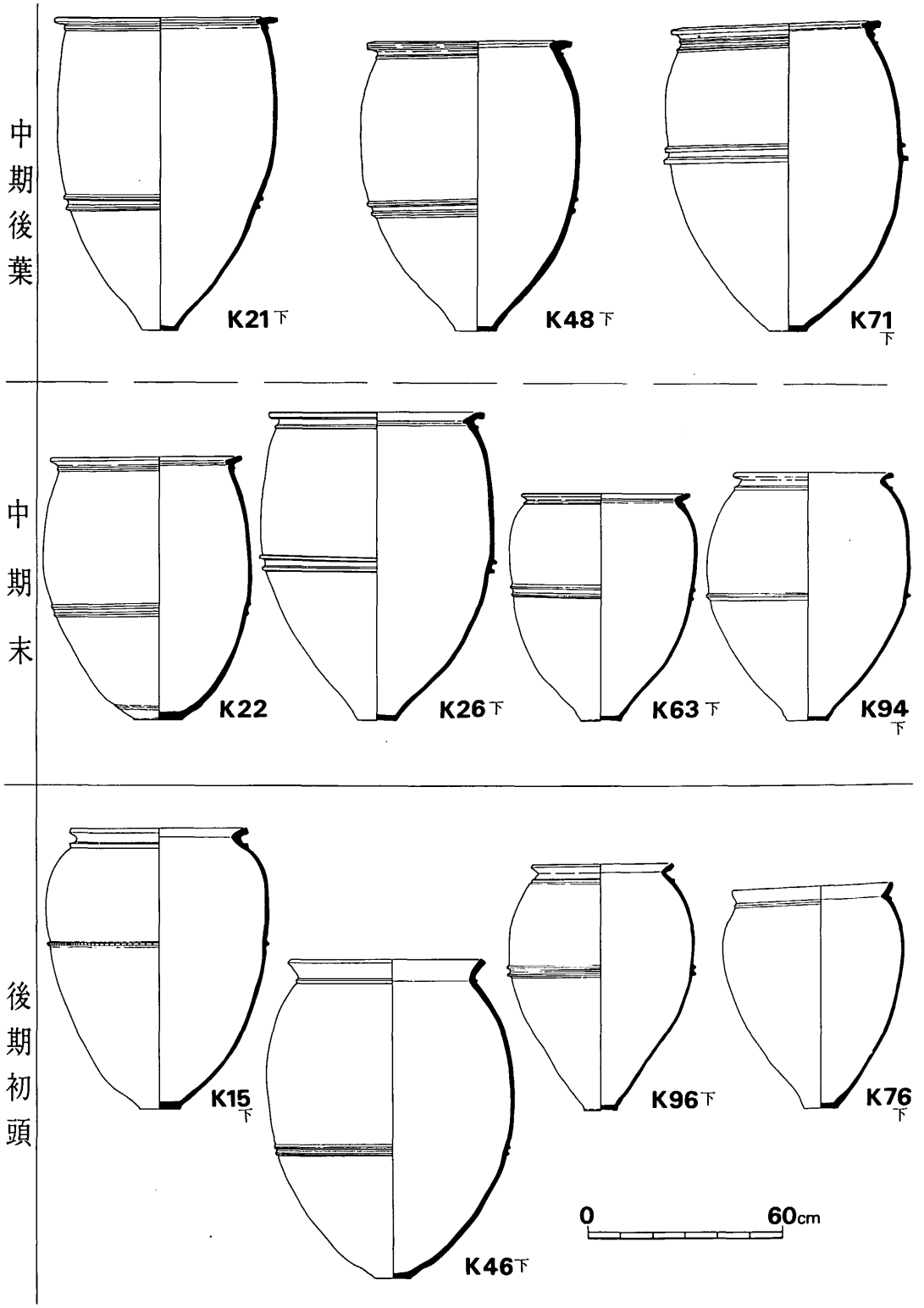


Fig. 71 道場山1地点出土甕棺編年図 ①（縮尺 1/20）

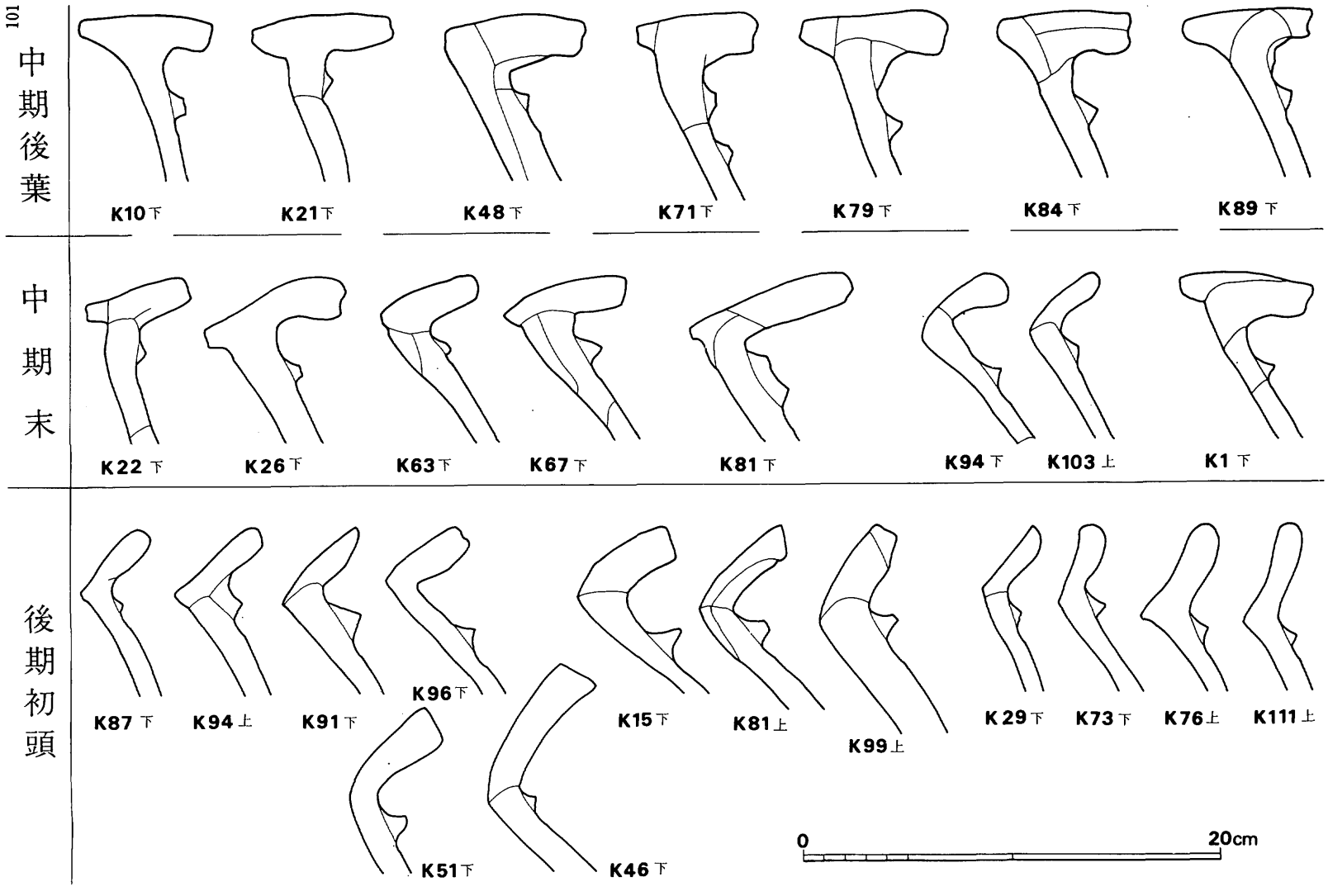
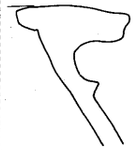
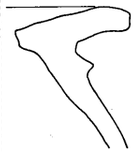
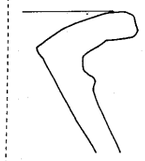
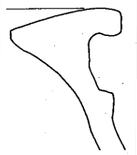
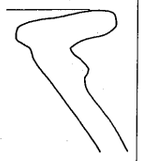
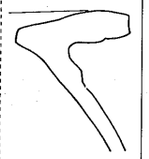
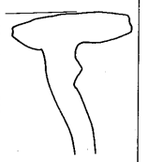
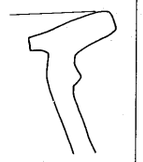
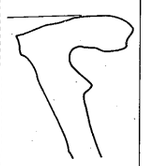
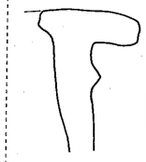
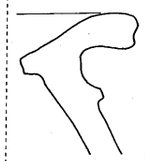
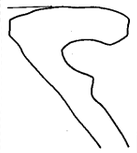
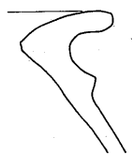


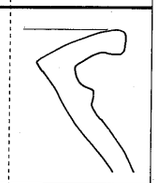
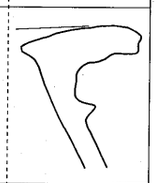
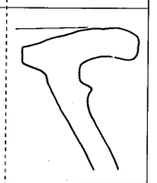
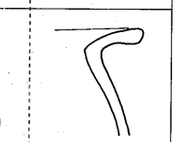
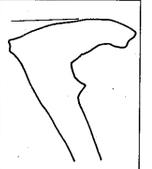
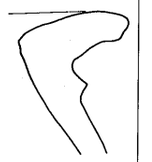
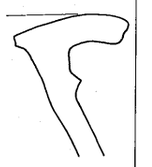
Fig. 72 道場山1地点出土甕棺編年図 ②（縮尺 1/3）

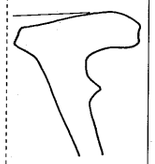
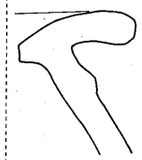
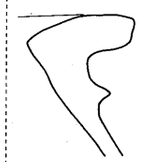
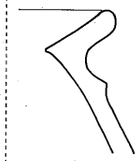
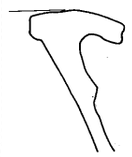
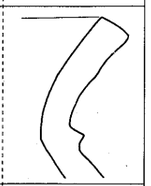
Tab.1 道場山1地点出土甕棺一覧表

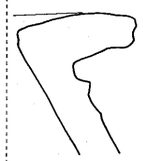
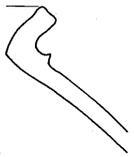
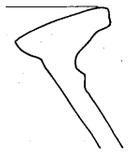
甕棺番号	時期	方位	傾斜	合せ口の方法				棺の規模			甕棺口縁の形態		特徴	備考・その他
				単棺	呑口	覆蓋	接口	大形棺	小形棺	小児棺	上甕	下甕		
1	中期末						○	○					**上** 13㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下凸帯なし、胴部には三角凸帯1条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他の部分は内外ともにナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。 **下** 外に若干低く傾斜するT字口縁。口縁下は三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条、口縁部内外・凸帯部は横ナデ、他の部分は内外ともにナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。	
8	後期初頭						○		○				**上** 内弯するく字口縁。胴部凸帯なし。 **下** 若干内傾する逆L字口縁。	上甕 後期初頭 下甕 中期
10	中期後葉						○	○					**上** やや外に低く傾斜するT字口縁。口縁下は山形凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。 **下** ほぼ平坦なT字口縁。口縁下はコ字形凸帯1条、胴部はコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。	
11	中期末	N-77°-E	40°	○						○			13㎜程内傾する逆L字口縁（く字口縁に近い）。口縁内外は横ナデ、器表は粗いハケ目。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。	
13	中期後葉	N-70°-E					○	○					**上** 胴部凸帯はコ字形2条。 **下** 若干内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表はハケ目の後ナデ、底部付近はハケ目がよく残る。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。胴上半部に黒斑あり。	上甕 口縁打欠
14	中期末		32°			○		○					**上** 胴部凸帯はコ字形2条。凸帯部は横ナデ、他はナデ。器表は淡黄色、内面は灰黄色を呈する。胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。 **下** 13㎜程内傾するT字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、その他の部分はハケ目の後ナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。胴部に黒斑あり。	上甕 口縁打欠
15	後期初頭	N-73°-E	42°			○		○					**上** 胴部凸帯はコ字形1条で、その部分は横ナデ。他はハケ目の後ナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。底部より胴上半部にかけて黒斑あり。 **下** 明瞭な稜をつくるく字口縁。口縁下には三角凸帯1条。胴部にはコ字形の刻目凸帯1条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表はハケ目を施す。	上甕 口縁打欠 下甕 口縁部付近に丹塗りの痕跡あり。
16	中期後葉	N-52°-E				○				○			上下ともに、口縁下に三角凸帯1条を貼付した逆L字口縁。	

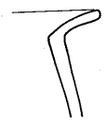
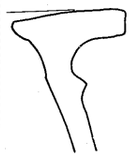
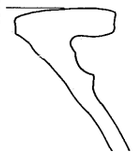
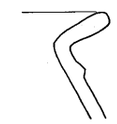
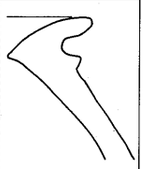
甕棺番号	時期	方位	傾斜	合せ口の方法				棺の規模			甕棺口縁の形態		特徴	備考・その他
				単棺	呑口	覆蓋	接口	大形棺	小形棺	小児棺	上甕	下甕		
17	中期末	N-62°-E	39°		○			○					**上** 胴部凸帯なし。器表はハケ目、内面はナデ。器表は淡黄色、内面は暗黄色を呈す。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は良好。 **下** 20㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。淡黄色を呈し、胎土には少量の砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。底部から胴部にかけて黒斑あり。	上甕口縁打欠、胴上半部にススが付着し、火熱を受けた二次的赤変部がみられるので、日常容器の転用と思われる。
18	中期末	N-69°-E	42°	○				○					12㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。器表は淡黄色、内面はやや赤味を帯びる。胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。	
19	中期後葉	N-67°-E	39°			○		○					**上** 胴部凸帯なし。 **下** 9㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ。他は内外ともにナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。底部から胴部にかけて黒斑あり。	上甕　口縁打欠
20	中期後葉	N-60°-E		○				○					9㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。	
21	中期後葉	N-65°-E	39°				○	○					**上** 胴部凸帯はコ字形2条。凸帯部は横ナデ、器表はハケ目の後ナデ、底部にはハケ目がよく残る。内面の下半部はナデ、上半部はハケ目。器表は淡黄色、内面はやや赤味を帯びる。胎土には少量の砂粒を含み、焼成良好。 **下** ほぼ平坦なT字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。底部から胴上半部にかけて黒斑あり。	上甕　口縁打欠
22	中期末	N-22°-W	37°	○				○					13㎜程内傾するT字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはシャープさを欠く三角凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表は胴下半を粗いハケ目、上半部は化粧土を施す。内面は口縁下に板状工具でひっかいた痕跡が残る。下半部はハケ目、上半部はハケ目の後ナデ。器表は淡黄色。内面は暗黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。	底部近くに焼成前の補修痕あり。（底部近くのつぎ目で、割れたので、上から粘土を張り、焼成前に補修を行なったもの。ハケ目を入れたのち割れている。）
23	中期後葉		57°	○				○					10㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表はハケ目の後ナデ、内面口縁下には板状工具で横方向にひっかいた痕跡が残る。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。	
24	中期後葉	N-89°-E	35°	○				○					胴部にはコ字形凸帯2条。器表はハケ目の後ナデ、底部にはハケ目がよく残る。内面はナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。	斜面に位置し、削平を受けているので、口縁部及び上甕のあった可能性もある。

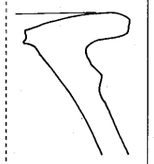
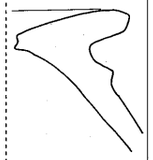
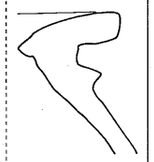
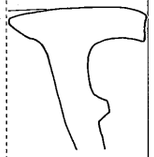
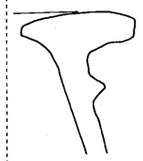
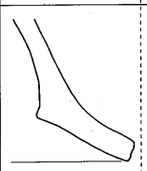
甕棺番号	時期	方位	傾斜	合せ口の方法				棺の規模			甕棺口縁の形態		特徴	備考・その他
				単棺	呑口	覆蓋	接口	大形棺	小形棺	小児棺	上甕	下甕		
25	後期初頭	N-72°-E					○		○				**上**　く字口縁。口縁下に三角凸帯１条。口縁・凸帯部は横ナデ。器表はハケ目の後ナデ、底部、凸帯下にハケ目が残る。内面はナデ。淡黄色を呈し、胎土には細粒の砂粒を少量含む。焼成は良好。 **下**　９㎜程外に低く傾斜する逆Ｌ字口縁。口縁下に三角凸帯１条。口縁・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。	上甕　口縁の大半を打欠。胴部上半にススが付着しているので日常容器の転用と思われる。 上甕　後期初頭
26	中期末	N-76°-E	35°			○ ?		○					**上**　胴部凸帯２条。凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。胴上半部に黒斑あり。 **下**　25㎜程内傾するＴ字口縁。口縁下にコ字形凸帯１条、胴部に２条をめぐらす。口縁内外･凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。器表は淡黄色、内面は暗黄色を呈し、胎土には少量の砂粒を含む。焼成は良好。黒斑が数ヶ所にある。	下甕の中に上甕の破片が落ちこんでいるために、合せ口の方法は不明であるが、大きさからみると覆蓋の可能性大。 上甕　口縁打欠
27	中期後葉	N-85°-W	39°			○		○					**上**　胴部にはコ字形凸帯２条。凸帯部は横ナデ、器表はハケ目の後ナデ、内面はナデ。淡灰黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。胴部に黒斑あり。 **下**　ほぼ平坦な逆Ｌ字口縁。口縁下に三角凸帯１条、胴部にはコ字形凸帯２条。口縁部・凸帯部は横ナデ、器表はハケ目の後ナデ。胴部凸帯の上、底部付近にハケ目が残る。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成良好。	上甕　口縁打欠
27′	中期後葉	S-63°-W	34°	○				○					９㎜程内傾する逆Ｌ字口縁。口縁下に三角凸帯１条、胴部にはコ字形凸帯２条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、胴部凸帯下に細いハケ目が残るが、他の部分は粗いハケ目状のものが認められる。淡黄色を呈し、胎土には細粒の砂粒を少量含む。焼成は硬くしまり、良好。胴下半部に大きな黒斑があるほか、数ヶ所に小さな黒斑がある。	器表に丹塗りの痕跡が部分的に認められる。
28	中期	S-57°-W	32°		不	明		○					胴部凸帯２条。	近世墓により上甕・下甕口縁部を削平される。上甕は丹塗り。
29	後期初頭	N-69°-E				○			○				**上**　胴部凸帯なし。器表はハケ目、内面はナデ。淡黄色を呈し、胎土には少量の砂粒を含む。焼成は良好。 **下**　わずかに内弯するく字口縁。口縁下に三角凸帯１条、胴部凸帯はなし。口縁・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。	上甕　口縁打欠 上下ともに胴上半部にススが付着しているので、日常容器の転用と思われる。
30	中期末	N-71°-E	49°			○		○					**上**　胴部凸帯なし。器表は風化いちじるしいが、部分的にハケ目が認められる。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。 **下**　13㎜程内傾する逆Ｌ字口縁。口縁下に三角凸帯１条、胴部にはコ字形凸帯２条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表はハケ目の後ナデ、内面はナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を少量含む。焼成は硬くしまり、良好。胴部に黒斑あり。	上甕　口縁打欠。 胴上半部にススが付着しているので、日常容器の転用と思われる。 小形。
31	中期末	N-83°-E	32°				○	○					**下**　17㎜程内傾する逆Ｌ字口縁。口縁下に三角凸帯１条、胴部にはコ字形凸帯２条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。淡黄色を呈し、胎土には少量の砂粒を含む。焼成は良好。胴部に大きな黒斑あり。	上甕　口縁打欠

甕棺番号	時期	方位	傾斜	合せ口の方法				棺の規模			甕棺口縁の形態		特徴	備考・その他
				単棺	呑口	覆蓋	接口	大形棺	小形棺	小児棺	上甕	下甕		
32	中期末	N-2°-E	41°	○				○					18㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表は風化いちじるしいので調整の観察不能、内面はナデ。黄白色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。胴部から底部にかけて大きな黒斑あり。	
33	中期後葉	S-84°-W	42°			○		○					**上** 胴部にはコ字形凸帯2条。凸帯部は横ナデ、器表はナデ、内面はハケ目。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。 **下** 10㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。胴部に大きな黒斑あり。	上甕 口縁打欠
34	中期後葉	S-71°-W	40°		○			○					**上** 胴部凸帯なし。器表はハケ目、内面はナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。 **下** 10㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表の胴上半部はナデ、下半部はハケ目の後ナデ、内面はハケ目の後ナデ。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。胴上半部に黒斑あり。	上甕 口縁打欠、胴上半部にススが付着しており、日常容器を転用したものと思われる。比較的小形。 下甕 大形
35	中期末	N-83°-E	46°				○			○			**上** 11㎜程内傾する逆L字口縁。口縁部および内面の上半は横ナデ。他の部分は内外ともにナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。 **下** 12㎜程内傾する逆L字口縁。口縁内外は横ナデ、器表は粗いハケ目、内面はナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。	
36	中期後葉	N-60°-E	35°				○	○					**上** 13㎜程内傾する逆L字口縁。凸帯なし。口縁部は横ナデ、器表はハケ目の後ナデ、内面は口縁直下を横方向のハケ目、他はハケ目の後ナデ。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。 **下** 10㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。口縁から底部にかけて黒斑あり。	上甕 深鉢
37	中期末	S-5°-W	54°		不	明		○					**下** 15㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表はハケ目の後ナデ、内面は底部近くをハケ目の後ナデ、他の部分は横方向の細いハケ目。器表は淡黄色、内面は暗黄色を呈する。胎土には砂粒を含み、焼成は硬くしまり、良好。	上甕の破片の一部が下甕に落ちこんでいるので、単甕ではない。
38	後期初頭	N-56°-E	40°		○					○			**上** 地肌は淡黄色を呈する。胎土には砂粒を含み、焼成は良好。 **下** く字口縁。口縁下には三角凸帯1条。口縁および凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。淡黄色を呈し、砂粒を含む。焼成は軟質で不良。	上甕 口縁打欠、壺、内外ともに丹塗り。 下甕 内面の一部に丹塗りの痕跡あり。
39	中期末	N-59°-E	50°				○	○					**上** 口縁は22㎜程内傾し、かつ若干内弯する。口縁下に三角凸帯1条。口縁・凸帯部は横ナデ。器表は巾13㎜、長13.5㎝の大きなタタキ痕が認められる。それをハケ目でかき消し、さらにナデてハケ目を消す。内面はナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。 **下** 12㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。胴部凸帯はハケ目を施した後貼付。口縁内外・凸帯部は横ナデ。器表には巾13㎜、長9㎝の大きなタタキ痕が認められる。それをハケ目でかき消し、さらに口縁下約10㎝はハケ目をナデ消す。内面はナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。底部から胴上半に黒斑あり。	上甕 鉢、後期初頭、内面の一部に丹塗りの痕跡あり。

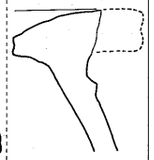
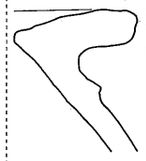
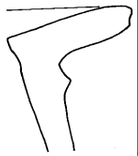
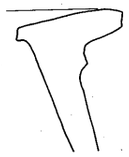
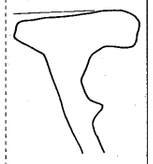
甕棺番号	時期	方位	傾斜	合せ口の方法				棺の規模			甕棺口縁の形態		特徴	備考・その他
				単棺	呑口	覆蓋	接口	大形棺	小形棺	小児棺	上甕	下甕		
40	中期後葉	S-41°-W	43°			○		○					**上**　胴部にはコ字形凸帯2条。 **下**　7㎜程内傾するT字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表はナデ、内面はハケ目の後ナデ、口縁直下のみ横方向のハケ目あり。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。	上甕　口縁打欠、打欠いた口縁はさらに上甕の外側にすえている。棺内に石が落ちこみ、上甕の一部も落ちこむ。棺内の上甕の破片の上に小壺がある。これは棺外副葬の可能性もあると思われる。 下甕　かなりの大形品
41	中期末	N-84°-E	27°				○	○					**上**　胴部凸帯なし。器表は細いハケ目、内面はナデ。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。 **下**　17㎜程内傾するT字口縁。口縁下は扁平な三角凸帯1条、胴部にはコ字凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。底部から口縁下約20㎝のところにかけて大きな黒斑あり。	上甕　口縁打欠、胴上半部にススが付着しており、日常容器を転用したものと思われる。小形品。
42	中期末	N-40°-E	32°		○			○					**上**　胴部凸帯なし。 **下**　15㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。口縁下より胴下半部にかけて大きな黒斑あり。	上甕　口縁打欠、日常容器を転用したものか。
43	後期初頭	N-62°-E	44°	○					○				若干内弯するく字口縁。口縁下に三角凸帯1条。胴部凸帯なし。口縁内外および凸帯部は横ナデ、器表はハケ目を施し、内面はナデ調整。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。	胴部にススが付着しており、日常容器を転用したものと思われる。
44	中期末	S-40°-W	35°	○						○			く字口縁で、口縁内面は丸味を帯び稜がつかない。口縁内外は横ナデ、他は内外ともにナデ。内面の口縁直下に指紋の残るところあり。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。	
45	中期末	N-60°-E	33°			○		○					**上**　胴部にはコ字形凸帯2条。 **下**　10㎜程外に低く傾斜する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。淡黄色を呈し、胎土には大粒の砂粒を多量に含む。焼成は良好。底部より胴上半部にかけて大きな黒斑があり、口縁下にも小黒斑がある。	上甕　口縁打欠
46	後期初頭	N-59°-W	26°		○			○					**上**　胴部にはコ字形凸帯2条。凸帯部は横ナデ、器表はハケ目の後ナデ、内面はナデ。淡黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。胴下半部に黒斑あり。 **下**　く字口縁で口縁内面は稜をなす。頸部に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表はハケ目の後ナデ、内面はナデ。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。胴上半部に黒斑。	目貼粘土あり。 上甕　口縁打欠
47		N-50°-E	45°	○						○				

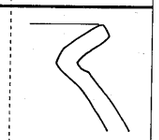
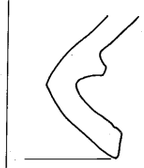
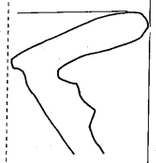
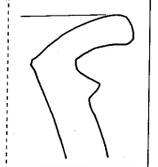
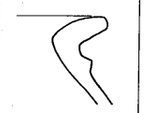
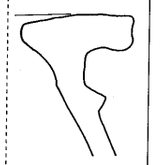
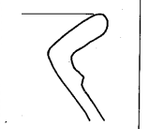
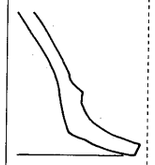
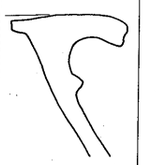
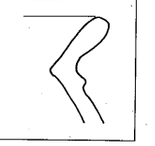
甕棺番号	時期	方位	傾斜	合せ口の方法				棺の規模			甕棺口縁の形態		特徴	備考・その他
				単棺	呑口	覆蓋	接口	大形棺	小形棺	小児棺	上甕	下甕		
48	中期後葉	N-17°-W	39°			○		○					**上**　胴部にはコ字形凸帯2条。器表の一部には巾13㎜長8.8㎝の大きなタタキ痕が認められる。それを胴上半部はナデて消し、下半はハケ目を施した後、さらにナデ調整。内面はナデ。器表は淡黄色、内面は暗黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。 **下**　8㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯１条、胴部にはコ字形凸帯２条。上甕同様のタタキ痕が認められる。器表の調整は口縁から胴上半にかけて横ナデ、下半はハケ目の後ナデ。内面は口縁下を削った後横ナデ、他の部分はナデ。器表は淡黄色、内面は暗黄色を呈す。器壁は全体に厚く、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。口縁下から底部にかけて黒斑あり。胴部凸帯のところにつぎ目がある。	上甕　口縁打欠 ♀成年（20代後半） イモガイ縦型貝輪17(r.15.ℓ.2)を着装。
49	中期末	N-41°-E	36°				○			○			**上**　10㎜程内傾する逆L字口縁で、口縁内面は丸味を帯び稜がつかない。器表はハケ目。淡黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。 **下**　上と同様な口縁で15㎜程内傾。内外ともにハケ目を施すが、内面のハケ目が粗い。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。	
50	後期初頭	N-67°-E	24°			○			○				**下**　く字口縁。口縁下に三角凸帯１条。口縁・凸帯部は横ナデ。器表はハケ目、内面はナデ。黄白色を呈し、胎土には砂粒を含む。	上甕　口縁打欠
51	後期初頭	S-67°-W	35°	○				○					く字口縁。口縁下、胴部にはそれぞれ三角凸帯１条。口縁・凸帯部は横ナデ。器表はハケ目を施すが、上部凸帯下約３㎝程はナデてハケ目を消す。内面は、口縁部に横方向のハケ目を施し、他の部分はナデ。淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質で不良。胴上半部に黒斑あり。	
53	後期初頭	N-73°-E				○			○				**上**　く字口縁。口縁下に三角凸帯１条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表はハケ目、部分的にハケ目をナデ消す。内面はナデ。淡黄色を呈し、胎土には細粒の砂を少量に含む。焼成は良好。 **下**　く字口縁。口縁下に三角凸帯１条、胴部には三角に近いコ字形凸帯２条、口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表はハケ目の後ナデ、内面はナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。底部付近に黒斑あり。	上甕　胴部にススが付着しており、日常容器を転用したものと思われる。
54	中期末	N-67°-E	33°				○	○					**上**　18㎜程内傾する逆L字口縁。口縁内外は横ナデ、器表はハケ目、内面はナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。 **下**　10㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯１条、胴部にはコ字形凸帯２条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。	上甕　鉢、内面に丹塗りの痕跡あり。 下甕　口縁部に丹塗りの痕跡あり。
55	中期末	N-66°-E	28°	○				○					19㎜程内傾するT字口縁。口縁下に三角凸帯１条、胴部には若干垂れぎみのコ字形凸帯２条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は軟質でやや不良。胴部に黒斑あり。	

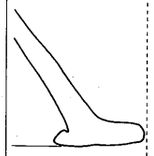
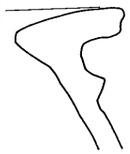
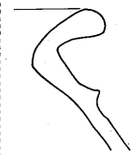
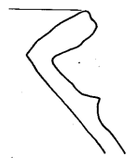
甕棺番号	時期	方位	傾斜	合せ口の方法				棺の規模			棺口縁の形態		特徴	備考・その他
				単棺	呑口	覆蓋	接口	小形棺	小形棺	小児棺	上甕	下甕		
56										○				
57	中期末	N-55°-E	38°			○				○			**上** 8㎜程内傾する逆L字口縁。口縁部は横ナデ、他は内外ともにナデ。茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。 **下** 15㎜程内傾する逆L字口縁。口縁部は横ナデ、器表は細いハケ目、内面はナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。	下甕 口縁下に丹塗りの痕跡が認められる。
58	中期後葉	S-82°-W	29°				○	○					**上** 平坦な逆L字口縁。口縁部は横ナデ、他は内外ともにナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。 **下** ほぼ平坦なT字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。	上甕 鉢
59	後期初頭	N-49°-E					○		○				**上** わずかに内弯するく字口縁。口縁下に三角凸帯1条。口縁部・凸帯部は横ナデ、器表はハケ目の後ナデ、内面はナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。 **下** わずかに内弯するく字口縁。口縁下に三角凸帯1条。口縁部・凸帯部は横ナデ、器表はハケ目を施し、口縁下の部分のみナデ消す。内面はナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を少量含む。焼成は良好。胴部に黒斑。	上甕 胴上半部にススが付着しており、日常容器を転用したものと思われる。
60	中期後葉	N-82°-E	26°			○		○					**上** 胴部凸帯なし。内外ともにナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質で、不良。 **下** ほぼ平坦な逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条をめぐらすが横ナデの際生じた凸部が凸帯状をなし、見かけとして2条を呈する観あり。胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表はハケ目の後ナデ、内面はナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり良好。	上甕 口縁打欠、胴部にススが付着しており、又、胴下半部には火熱を受けて赤変した部分があり、日常容器を転用したものと思われる。
61	中期末	N-69°-E	43°		不	明				○			**上** 10㎜程内傾する逆L字口縁、口縁内面は丸味を帯び稜はつかない。口縁部は横ナデ、器表はハケ目、内面はナデ。淡黄色を呈し、焼成は良好。 **下** 18㎜程内傾するく字口縁で、内面は丸味を帯び稜はつかない。口縁下に三角凸帯1条。黄白色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は軟質で不良。	
62	中期末	S-47°-W	39°			○			○				**下** 22㎜程内傾する逆L字口縁（く字口縁に近い）。口縁下には三角凸帯1条、胴部には造り1条見かけ2条のコ字形凸帯をめぐらす。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表及び内面の口縁下約5㎝までは赤色顔料を混じた化粧土を施す。内面の他の部分も赤味がかかったところもあるのでやはり化粧土を施している可能性あり。内外ともにナデ。地肌は黄白色、胎土には砂粒を含むが精選された粘土を用いる。焼成は良好。大きな黒斑あり。	上甕 口縁打欠
63	中期末	S-75°-W	38°				○		○				**上** 胴部には三角凸帯1条。器表は風化いちじるしく調整の観察不能、内面はナデ、淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は軟質で不良。 **下** 18㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下には垂れぎみの三角凸帯1条、胴部には垂れぎみのコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表は粗いハケ目、内面はハケ目の後ナデ。灰黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。胴下半部に黒斑。又胴下半部の器壁は極端に薄い（約6㎜）。	上甕 口縁打欠

甕棺番号	時期	方位	傾斜	合せ口の方法				棺の規模			甕棺口縁の形態	
				単棺	呑口	覆蓋	接口	大形棺	小形棺	小児棺	上甕	下甕
64	中期後葉	N-26°-W		○				○				
65	中期末		43°	○				○				
66		N-56°-E			不	明				○		
67	中期末	S-80°-W			不	明		○				
68	中期後葉	N-63°-E			不	明		○				
69	中期後葉	S-13°-E		○				○				
70	中期末	N-58°-E	38°				○	○				
71	中期後葉	N-65°-E	35°		○			○				

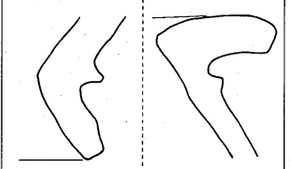
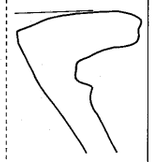
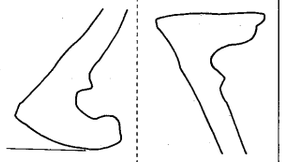
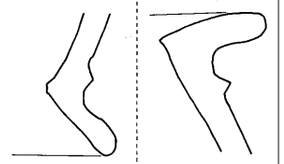
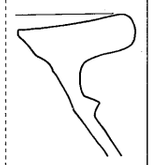
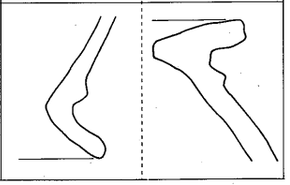
特徴	備考・その他
8㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下には三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。器表は淡黄色、内面は灰黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。	
13㎜程内傾するT字口縁。口縁下には三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯3条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表は風化いちじるしく観察不能、内面はナデ。淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。	
下　20㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下には三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表は粗いハケ目、内面は粗いハケ目の後ナデ。淡黄色を呈するが、器表はやや赤みを帯びる。胎土には砂粒を含み、焼成は硬くしまり、良好。	
ほぼ平坦なT字口縁。口縁下にはコ字形凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。器表は淡黄色、内面はやや暗い色調を呈す。胎土には砂粒を含み、焼成は硬くしまり、良好。胴中央部に黒斑あり。	
ほぼ平坦なT字口縁。口縁下にはコ字形に近い三角凸帯1条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。黄白色を呈し、細粒の砂粒を含む。焼成は良好。	
上　口縁は4㎜程内傾する。口縁部は横ナデ、内面下部はハケ目、他は内外ともにナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。 下　14㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。淡黄色を呈し、胎土には大粒の砂粒を含む。焼成は良好。	上甕　鉢
上　口縁は12㎜程内傾する。口縁に三角凸帯1条。口縁内外・凸帯は横ナデ、器表は粗いハケ目の後ナデ、内面はナデ、淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。底部より口縁下約12㎝のところにかけて黒斑あり。 下　6㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角に近いコ字形凸帯2条、胴部には鋭いコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表は大小のハケ目の後丁寧なナデ、内面はナデ。淡黄色。砂粒を含む。焼成は良好。	上甕　鉢、中期末

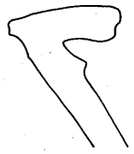
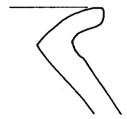
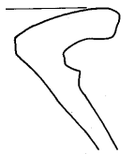
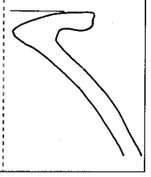
甕棺番号	時期	方位	傾斜	合せ口の方法				棺の規模			甕棺口縁の形態		特徴	備考・その他
				単棺	呑口	覆蓋	接口	大形棺	小形棺	小児棺	上甕	下甕		
72	後期初頭	N-58°-E	42°				○		○				**上**　19㎜程内傾するく字口縁。口縁内面は明確な稜はつくらない。口縁下には三角凸帯1条。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を少量含む。焼成は良好。 **下**　わずかに内弯するく字口縁。頸部に三角凸帯1条。器表はハケ目を施した後ナデ、内面はナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質	上甕　深鉢、内面丹塗り、中期末 下甕　後期初頭
73	後期初頭	N-48°-E	41°			○			○				**下**　内弯するく字口縁。頸部に三角凸帯1条。口縁部・凸帯部は横ナデ、他はハケ目を施した後ナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。	上甕　深鉢、内面丹塗り 下甕　胴上半部にススが付着しており、日常容器を転用したものと思われる。
74	後期初頭	N-40°-E	49°		○				○				**下**　く字口縁。口縁下に三角凸帯1条。口縁部・凸帯部は横ナデ、器表は風化いちじるしいが、底部にハケ目が認められるので、ハケ目が施されていたものと思われる。淡黄色を呈し、胎土には少量の砂粒を含む。焼成は良好。	目貼粘土あり 上甕　口縁打欠
75	中期末	N-65°-E	30°			○		○					**上**　6㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表はナデ、内面は粗いハケ目の後ナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。 **下**　15㎜程内傾するT字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはかなり垂れ下ったコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表はナデ、内面はハケ目の後ナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。	上甕　鉢 下甕　中期末
76	後期初頭	N-40°-E	37°				○	○					**上**　内弯するく字口縁。頸部に三角凸帯1条。口縁部・凸帯部は横ナデ、器表はハケ目の後ナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。 **下**　13㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。胴上半部に黒斑あり。	上甕　後期初頭
77	中期末	N-36°-E	35°	○				○					16㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表はハケ目の後ナデ、内面はナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。口縁下まで大きな黒斑あり。	
78	中期後葉	N-70°-E	52°	○				○					10㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。灰黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は軟弱で不良。	
79	中期後葉	N-32°-W	40°				○	○					**下**　7㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、内面はナデ、器表には化粧土を施す。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は軟弱で不良。	上甕　鉢

甕棺番号	時期	方位	傾斜	合せ口の方法				棺の規模			甕棺口縁の形態		特徴	備考・その他
				単棺	呑口	覆蓋	接口	大形棺	小形棺	小児棺	上甕	下甕		
80	中期末	N-60°-E	41°				○			○			**下**　く字口縁で、口縁内面の稜は部分的には認められるが、全体としては不明瞭。胎土には細粒の砂粒を若干含む精選粘土を用い、焼成は良好。胴中央部に黒斑あり。	下甕　口縁内面、器表を丹塗り
81	後期初期						○	○					**上**　く字口縁。口縁下にコ字形凸帯1条、胴部にもコ字形凸帯1条。口縁外面・凸帯部は横ナデ、器表はやや粗めのハケ目、口縁内面はハケ目の後ナデ、内面はナデ。黄褐色を呈し、胎土には大粒の砂粒を含む。焼成良好。 **下**　25㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下には見かけ2条、造り1条の凸帯、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外はハケ目の後横ナデ、凸帯は横ナデ、器表はやや粗めのハケ目、内面はハケ目の後ナデ。淡赤褐色を呈し、胎土には大粒の砂粒を含む。焼成は良好。	上甕　後期初頭 下甕　中期末
82	中期末		40°	○				○					25㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表は粗いハケ目、内面はハケ目の後ナデ。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり良好。口縁下約12㎝以下に黒斑あり。器壁は全体に分厚く、口縁下で約24㎜を測る。	
83	中期末	N-60°-E				○			○				**下**　12㎜程内傾する逆L字口縁で、口縁内部は丸味を帯び稜をつくらない。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはシャープさを欠く三角凸帯1条。淡黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質で不良。	上甕　口縁打欠
84	中期後葉	S-36°-W	27°			○		○					**下**　わずかに内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ、若干赤みを帯びた黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。口縁下約10㎝以下に黒斑あり。	上甕　口縁打欠
85	中期末	N-55°-E	50°	○					○				20㎜程内傾する逆L字（く字といってもよい）口縁。口縁内部は丸味を帯び稜はつくらない。口縁下に三角凸帯1条、口縁・外・凸帯部は横ナデ、口縁内面、器表は化粧土を施す。内面は粗いハケ目。黄白色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。	
86	中期末	N-73°-E	35°				○	○					**上**　口縁は24㎜程内傾する。口縁内外は横ナデ、器表は粗いハケ目、内面はナデ、ハケ目の方向は上下ともにあり。器表は淡黄色を呈するが、内面はやや暗い。胎土には砂粒を含み、焼成は良好。 **下**　ほぼ平坦なT字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはやや垂れぎみのシャープなコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成・仕上りともに良好。	上甕　鉢、口縁内面に丹塗りの痕跡あり 上甕　中期末
87	後期初頭	N-48°-E	34°	○					○				く字口縁。口縁直下に三角凸帯1条をもつ。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表はハケ目の後ナデ、内面はナデ。淡黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。	

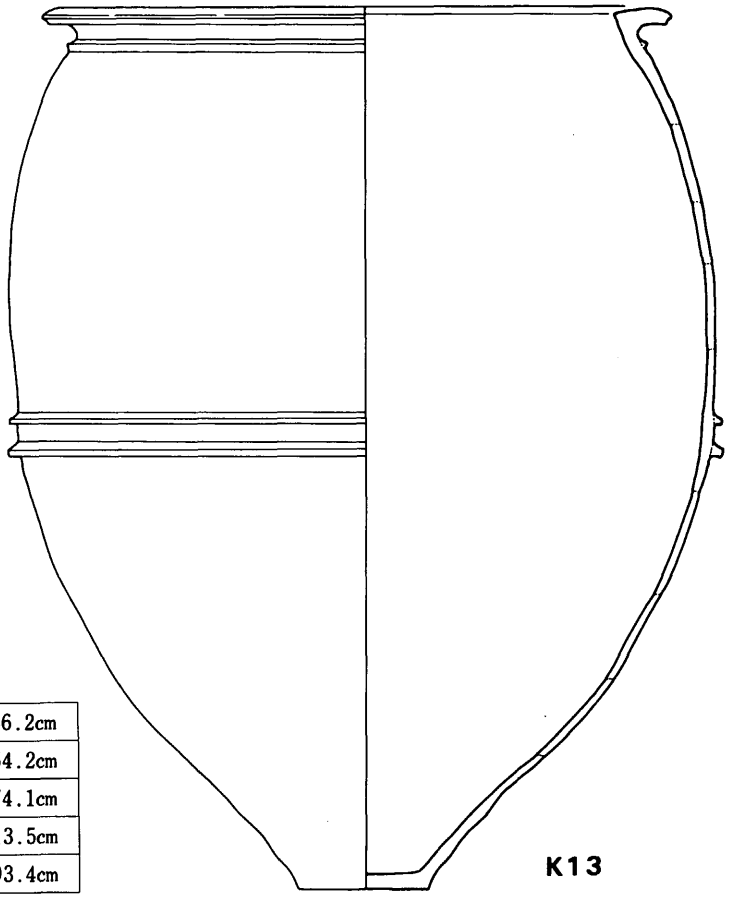
甕棺番号	時期	方位	傾斜	合せ口の方法				棺の規模			甕棺口縁の形態	
				単棺	呑口	覆蓋	接口	大形棺	小形棺	小児棺	上甕	下甕
88	後期初頭	N-46°-E	37°			○			○			
89	中期後葉	N-58°-E	20°				○	○				
90	中期末	N-62°-E	34°	○				○				
91	後期初頭	N-40°-E	41°			○			○			
92	中期末	N-75°-E	28°		不	明		○				
93	中期末	N-87°-E				○		○				
94	後期初頭	N-67°-E	33°				○	○				
96	後期初頭	N-70°-E	46°			○			○			

特徴	備考・その他
上　く字口縁。口縁直下に三角凸帯1条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表はハケ目、内面はナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成良好。 **下**　く字口縁。口縁下に三角凸帯1条。口縁内外は横ナデ、器表は粗いハケ目、凸帯下約5㎝はその後横ナデ、内面は粗いハケ目の後横ナデ。淡黄色を呈し、胎土には細粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。	下甕　丹塗りの痕跡あり。
上　口縁はわずかに外に低く傾斜する。口縁部は横ナデ、内面はナデ、器表は風化いちじるしく観察不能。器表は淡黄色、内面は赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好 **下**　わずかに内傾するT字口縁。口縁下には三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他はナデ。器表は淡黄色、内面は暗黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。	上甕　鉢
12㎜程内傾するT字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。赤褐色を呈し、胎土には大粒の砂粒を多量に含む。焼成は軟質で不良。	目貼粘土あり。
上　胴部にはコ字形凸帯1条 **下**　く字口縁。口縁下には大きな三角凸帯1条を貼付。口縁および凸帯部は横ナデ、器表はナデ、内面は粗いハケ目。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。	上甕　口縁打欠
13㎜程内傾するT字口縁。口縁下には三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条をめぐらす。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ、器表は淡黄色、内面は灰黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。	
上　胴部には三角凸帯1条。 **下**　外に9㎜程低く傾斜する逆L字口縁。口縁下には垂れぎみの三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。赤褐色を呈し、胎土には細粒の砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。	上　甕　口縁打欠 上甕は後期の可能性もあり。
上　わずかに内弯ぎみのく字口縁。頸部に三角凸帯1条。口縁内外は横ナデ、他はナデ。器表は淡黄色、内面はやや暗い。胎土には砂粒を含み。焼成は良好。 **下**　く字口縁。口縁内部の稜はあまり明瞭でない。口縁下に三角凸帯1条、胴部にコ字形凸帯1条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表はハケ目の後ナデ、内面はナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は軟質で不良。	上甕　後期初頭 下甕　中期末
上　器表の調整はハケ目、内面はナデ。淡黄色を呈し胎土には砂粒を含む。焼成は良好。 **下**　く字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、内面はハケ目の後ナデ。器表の上半部は横ナデ、底部付近はハケ目、凸帯下約13㎝までハケ目の後ナデ。地肌は黄橙色を呈し、し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好	上甕　口縁打欠　胴上半にススが付着しており、日常容器の転用と思われる。 下甕　内外ともに丹塗 イモガイ横型貝輪2、出土。

甕棺番号	時期	方位	傾斜	合せ口の方法				棺の規模			甕棺口縁の形態		特徴	備考その他
				単棺	呑口	覆蓋	接口	大形棺	小形棺	小児棺	上甕	下甕		
97	後期初頭	N-50°-E	26°				○	○					**上** く字口縁。頸部にコ字にちかい三角凸帯1条。口縁・凸帯部は横ナデ、凸帯下はハケ目の後ナデ、他はハケ目。口縁内面は粗い横方向のハケ目、内面はナデ。口縁内面と器表のハケ目は別の器具による。淡黄褐色を呈し、胎土には細粒の砂を含む。焼成は硬くしまり良好。器壁は分厚い。 **下** ほぼ平坦な逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ、淡黄色を呈するが器表はやや赤みを帯びる。胎土には大粒の砂粒を含む。焼成は良好。	上甕 後期初頭
98	中期後葉	N-1°-E	52°	○				○					10㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。器表は淡茶褐色、内面は灰黄色を呈す。胎土には砂粒を含み、焼成は硬くしまり、良好。	口縁部、内面の口縁下約11.5㎝まで丹塗りの痕跡あり。
99	中期末	N-32°-W	34°		○			○					**上** 18㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表はハケ目、口縁下約7㎝はハケ目の後ナデ、内面はナデ。淡黄色を呈し、胎土には大粒の砂粒を小量、細粒の砂粒を多く含む。焼成は良好。 **下** 平坦な逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはやや垂れぎみのコ字形凸帯2条。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。	水ぬき孔あり
100	後期初頭	N-75°-E	40°		○			○					**上** く字口縁。頸部に三角凸帯1条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表はハケ目、内面はナデ、淡黄色を呈し、胎土には細粒の砂を少量含む。焼成は良好。胴下半部に黒斑あり。 **下** 14㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下に三角凸帯1条。胴部には垂れぎみのシャープなコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表の一部には巾13㎜長8㎝の大きなタタキ痕が認められる。内外ともにナデ。地肌は黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くやきしまる。	上甕 後期初頭 下甕 内外ともに丹塗 鉄戈を副葬 鉄戈には布・蓆(タタミ表状)等が付着
101	中期後葉	S-80°-W	37°				○	○					**下** 8㎜程内傾しかつわずかに内弯ぎみのT字口縁。口縁下には三角凸帯1条・胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外および凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ、器表には赤色顔料を混じた化粧土を施す。胎土には砂粒を含み、焼成は良好。器壁はきわめてうすい。	下甕 口縁の一部に丹の痕跡あり。
102	中期末	N-65°-E	17°			○			○				**上** 胴部にはコ字形凸帯1条。 **下** 10㎜程内傾する逆L字口縁。口縁内部は丸味を帯び稜をつくらない。胴部にはシャープさを欠く垂れぎみのコ字形凸帯1条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他はハケ目の後ナデ、底部近くにはハケ目がよく残る。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。	上甕 口縁打欠
103	中期末		30°				○		○				**上** く字口縁。口縁内部は丸味を帯び稜をつくらない。頸部に三角凸帯1条。口縁・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。明黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。 **下** 12㎜程内傾するT字口縁。口縁下には三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯1条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表はハケ目、凸帯下約3㎝はその後ナデ、内面はナデ。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は不良。	

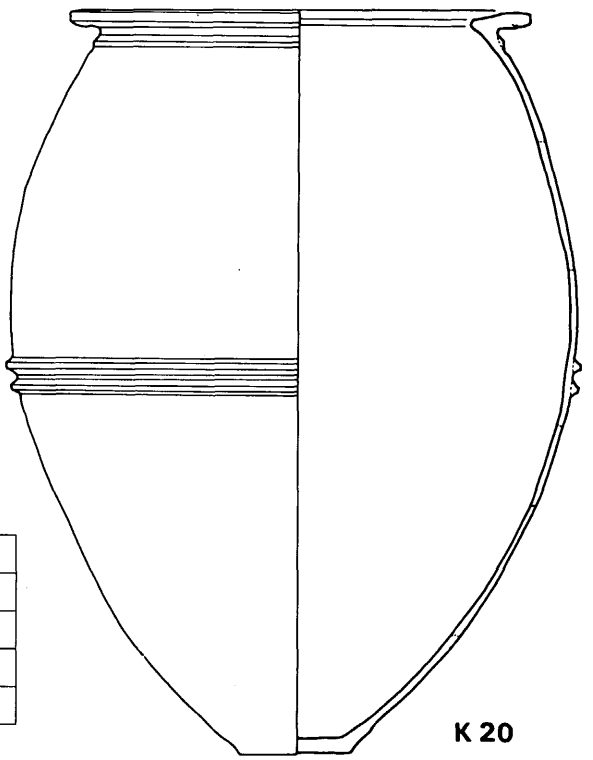
甕棺番号	時期	方位	傾斜	合せ口の方法				棺の規模			甕棺口縁の形態		特徴	備考・その他
				単棺	呑口	覆蓋	接口	大形棺	小形棺	小児棺	上甕	下甕		
104	中期後葉	N-98°-E	32°	○				○					T字口縁。口縁下は三角凸帯1条、胴部はコ字形凸帯2条。	
105	後期初頭	N-58°-E	43°				○	○					下　9㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下には三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。器表は淡茶色、内面は淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり良好。	上甕　口縁打欠、上甕の口縁の一部が下甕内に落ちこんでいた。後期初頭。
106										○				
109	後期初頭		30°			○			○				下　く字口縁。口縁内部は明瞭な稜を有す。口縁下凸帯なし、胴部はコ字形凸帯1条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表はハケ目の後ナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。	上甕　口縁打欠、目貼粘土あり、水ぬき孔あり。小児用。
110	中期後葉	N-83°-E	38°				○	○					上　胴部はコ字形凸帯2条。 下　6㎜程内傾し若干内弯するT字口縁。口縁下に三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表はハケ目の後ナデ、底部にはハケ目がよく残る。内面はナデ。胴上半は赤褐色、下半は黄褐色内面は赤褐色を呈す。胎土には砂粒を含み、焼成は良好。	上甕　口縁打欠
111	後期初頭	N-79°-E	33°		○			○					上　内弯するく字口縁。頸部に三角凸帯1条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、器表はハケ目の後ナデ、内面はナデ。淡黄色を呈し、胎土には小粒の砂を含む。焼成は良好。 下　16㎜程内傾する逆L字口縁。口縁下には三角凸帯1条、胴部にはコ字形凸帯2条。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。	上甕　口縁打欠、胴上半より口縁部にかけてススが付着しており、日常容器の転用と思われる。後期初頭
112	中期末	N-55°-E				○			○				上　胴部に山形凸帯2条。上部凸帯より上には暗文あり、胴下半はナデ、内面上半はナデ、下半は指おさえの後ハケ目を施こし、ナデ消す。地肌は黄白色、胎土には小粒の砂を含む。焼成は良好、胴下半に黒斑あり。 下　12㎜程内傾する逆L字口縁。胴部にコ字形凸帯1条。口縁より凸帯までは横ナデ、胴下半はナデ、内面はナデ。器表は赤色顔料を混じた化粧土を施す。胎土には砂粒を含み、焼成は良好。	上甕　壺、口縁打欠、凸帯より上部は丹塗り。

（口縁縮尺1/4）



K13 下

口　　径	66.2cm
口縁内径	54.2cm
胴部最大径	74.1cm
底　　径	13.5cm
器　　高	93.4cm



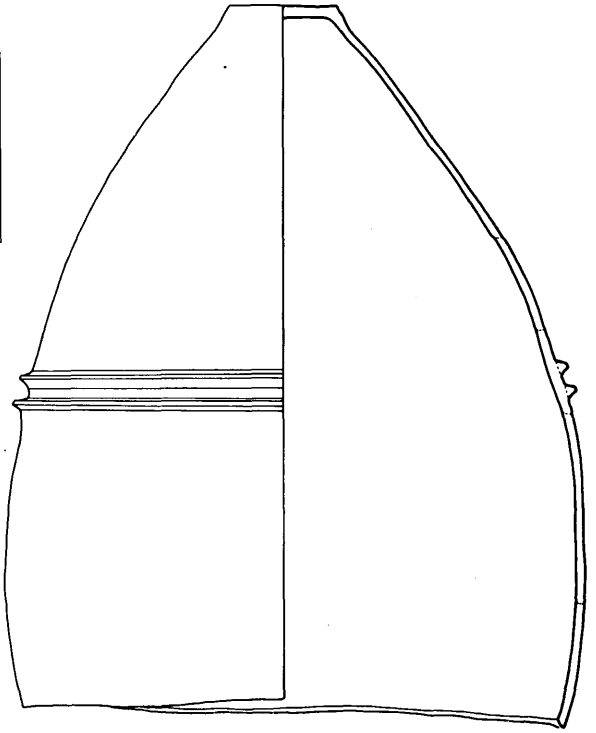
K20 下

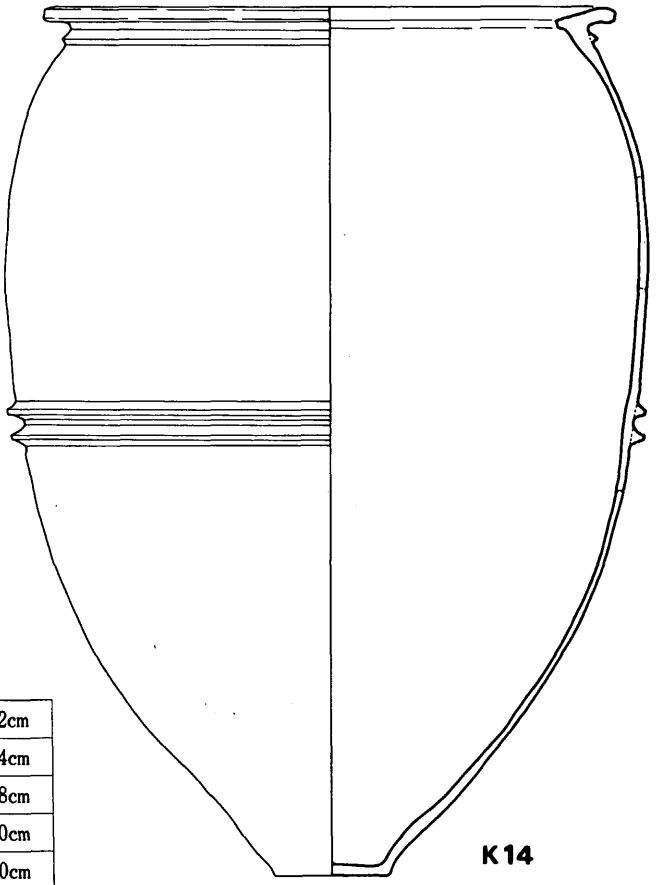
口　　径	48.3cm
口縁内径	36.4cm
胴部最大径	59.4cm
底　　径	11.4cm
器　　高	78.8cm

Fig. 73　13号・20号甕棺実測図（縮尺 1 / 8）

K14　上

口　　径	
口縁内径	
胴部最大径	61.7cm
底　　径	11.4cm
器　　高	(75.8cm)





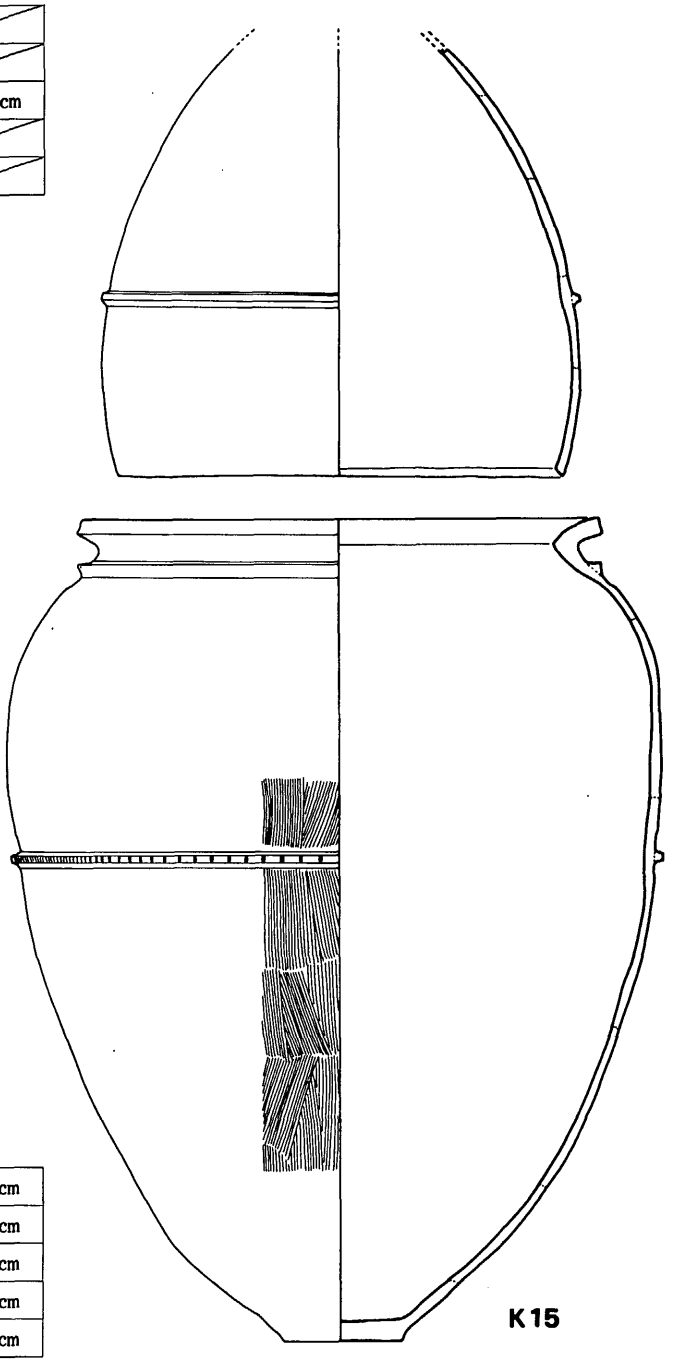
K14　下

口　　径	60.2cm
口縁内径	47.4cm
胴部最大径	67.8cm
底　　径	12.0cm
器　　高	92.0cm

Fig. 74　14号甕棺実測図（縮尺１/８）

K15 上

口径	
口縁内径	
胴部最大径	50.6cm
底径	
器高	



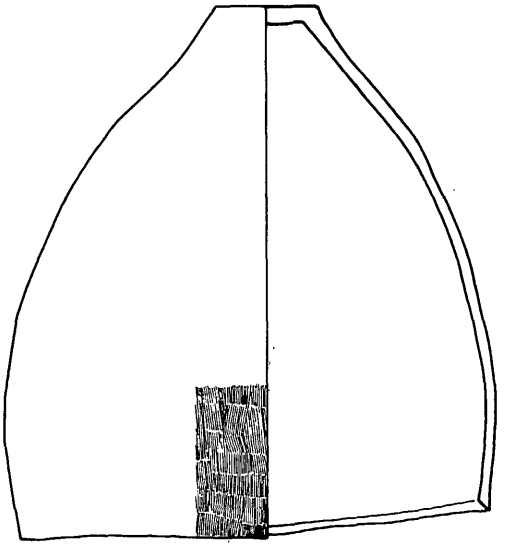
K15 下

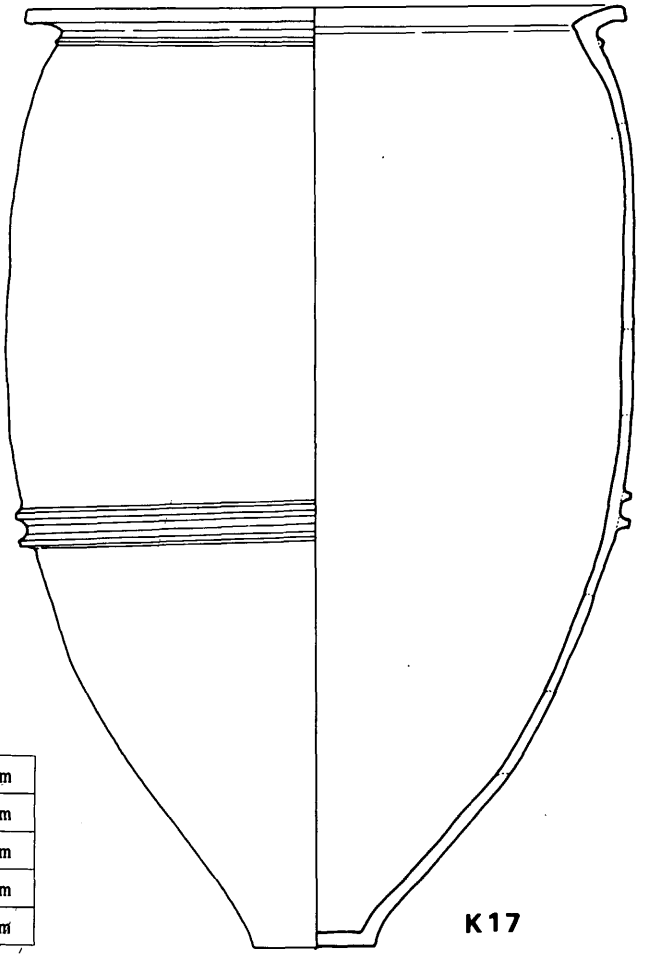
口径	54.0cm
口縁内径	45.0cm
胴部最大径	68.6cm
底径	12.2cm
器高	87.4cm

Fig. 75 15号甕棺実測図（縮尺1/8）

K17　上

口　　径	
口縁内径	
胴部最大径	52.1cm
底　　径	10.6cm
器　　高	(55.0cm)

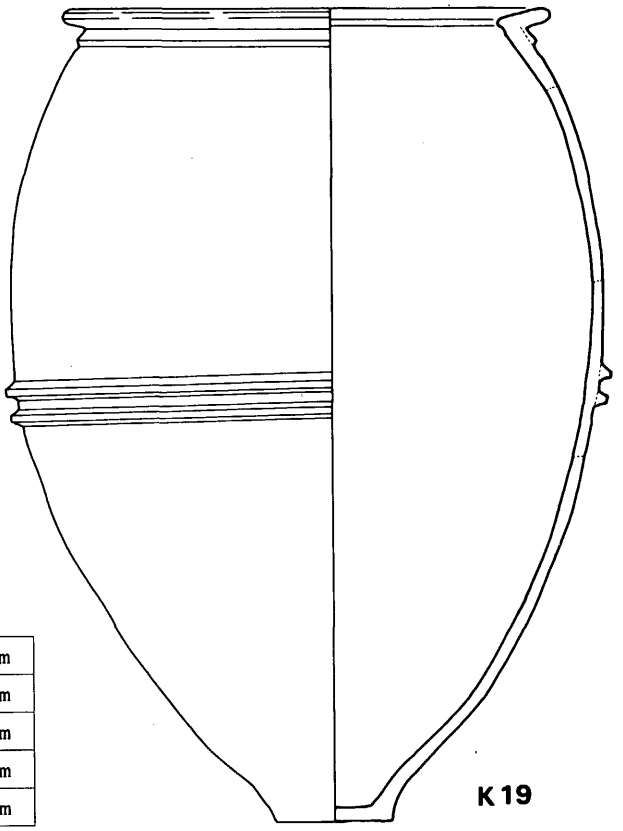




K17　下

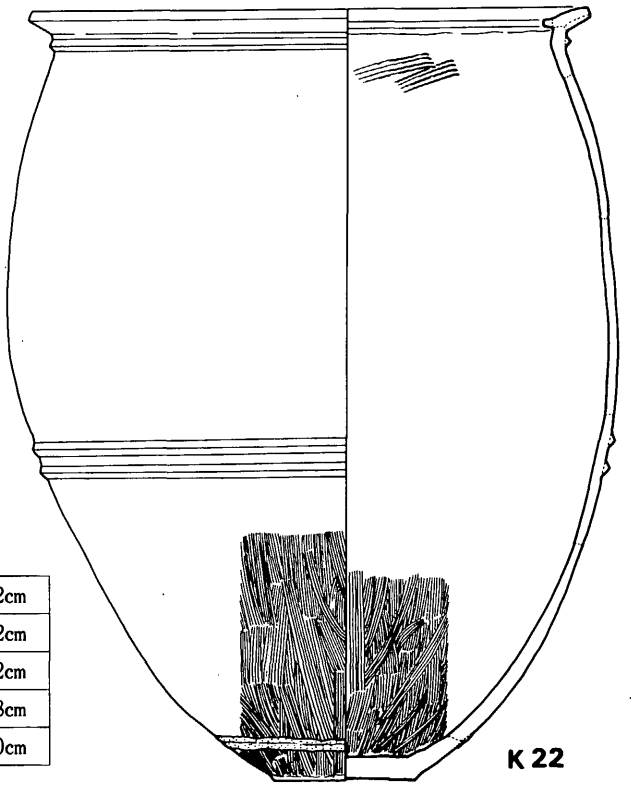
口　　径	63.0cm
口縁内径	51.1cm
胴部最大径	65.8cm
底　　径	12.7cm
器　　高	99.3cm

Fig. 76　17号甕棺実測図（縮尺１/８）



K19 下

口　　径	50.2cm
口縁内径	40.7cm
胴部最大径	63.0cm
底　　径	12.3cm
器　　高	85.3cm



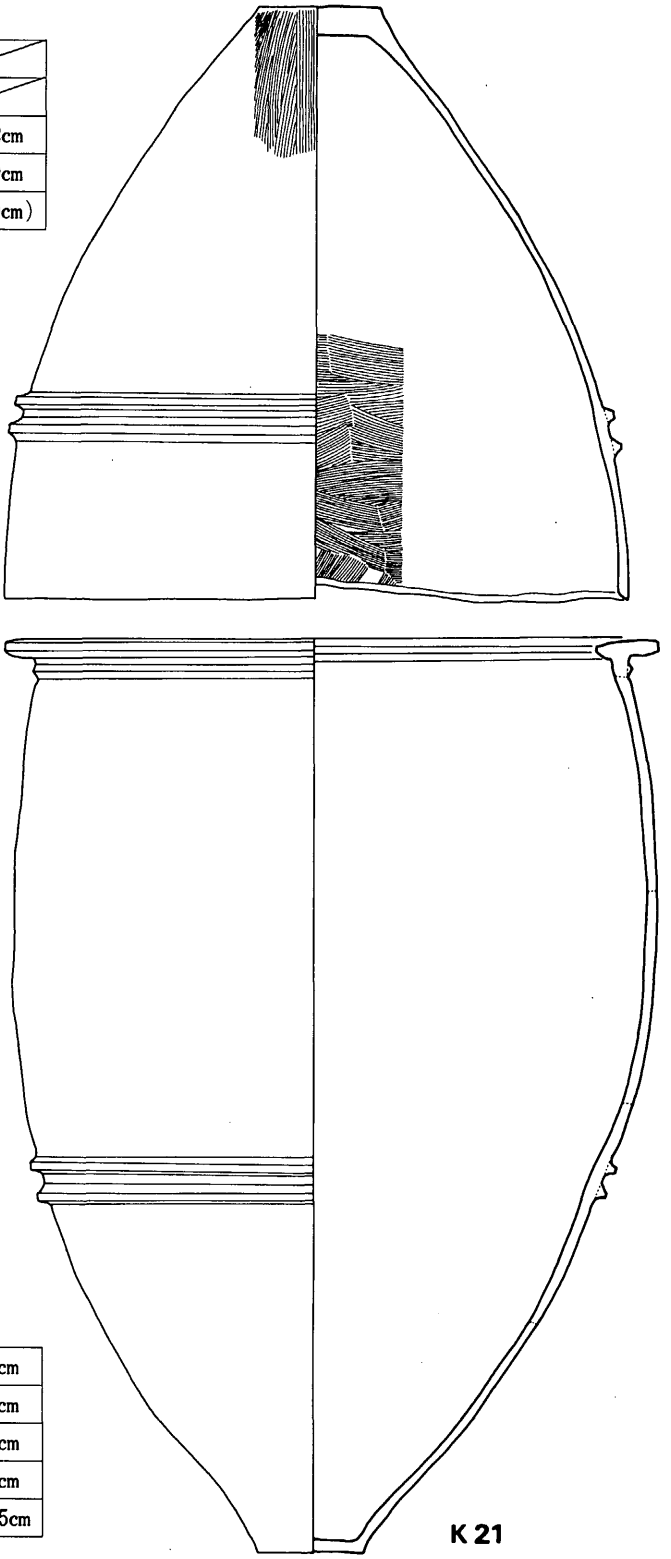
K22 下

口　　径	59.2cm
口縁内径	49.2cm
胴部最大径	64.2cm
底　　径	14.8cm
器　　高	82.0cm

Fig. 77　19号・22号甕棺実測図（縮尺 1/8）

K21　上

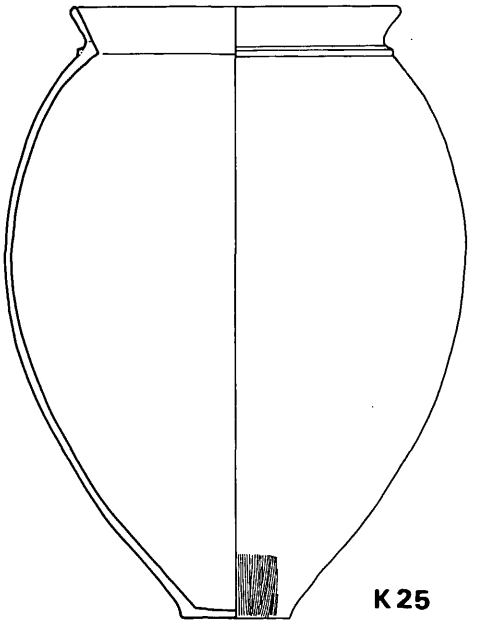
口　　径	
口縁内径	
胴部最大径	66.2cm
底　　径	12.9cm
器　　高	(61.0cm)



K21　下

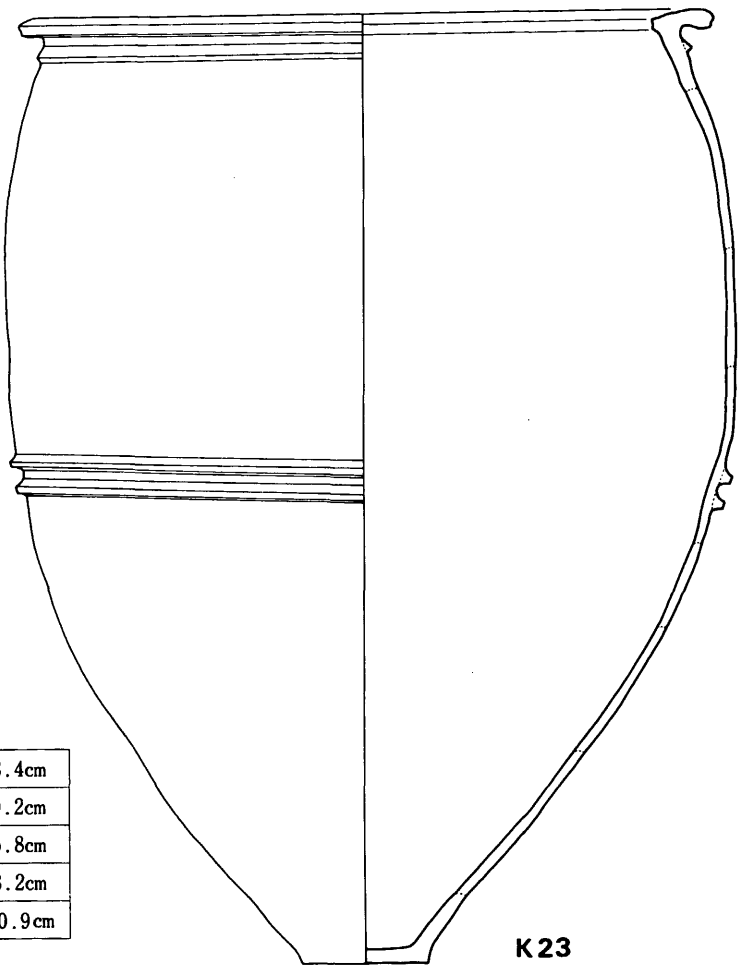
口　　径	68.2cm
口縁内径	55.5cm
胴部最大径	67.2cm
底　　径	11.0cm
器　　高	96.85cm

Fig. 78　21号甕棺実測図（縮尺１/８）



K25 上

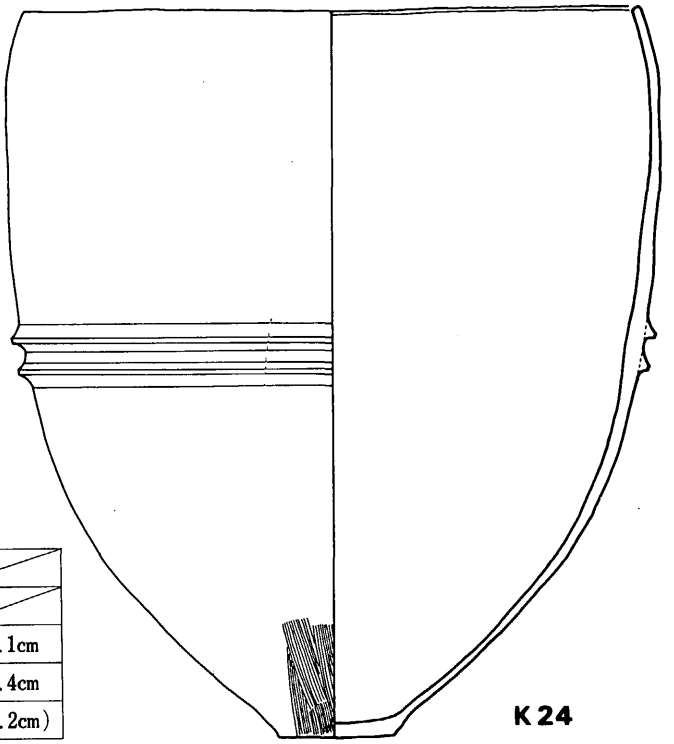
口　　径	33.8cm
口縁内径	28.8cm
胴部最大径	48.4cm
底　　径	11.2cm
器　　高	64.7cm



K23 下

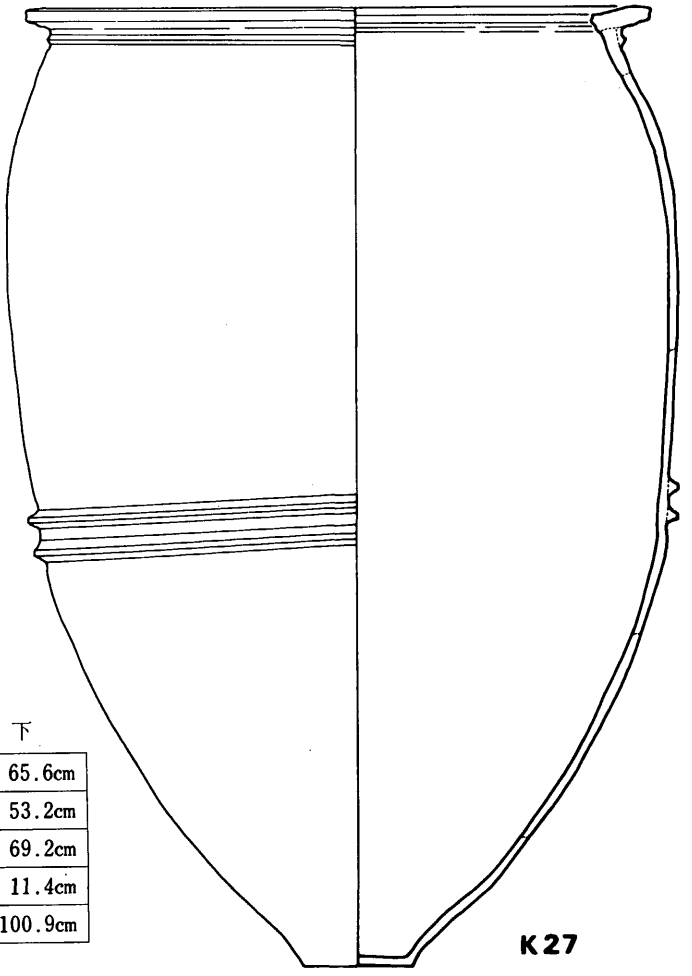
口　　径	73.4cm
口縁内径	60.2cm
胴部最大径	76.8cm
底　　径	13.2cm
器　　高	100.9cm

Fig. 79　23号・25号甕棺実測図（縮尺 1 / 8 ）



K24　下

口　　径	
口縁内径	
胴部最大径	69.1cm
底　　径	12.4cm
器　　高	(76.2cm)



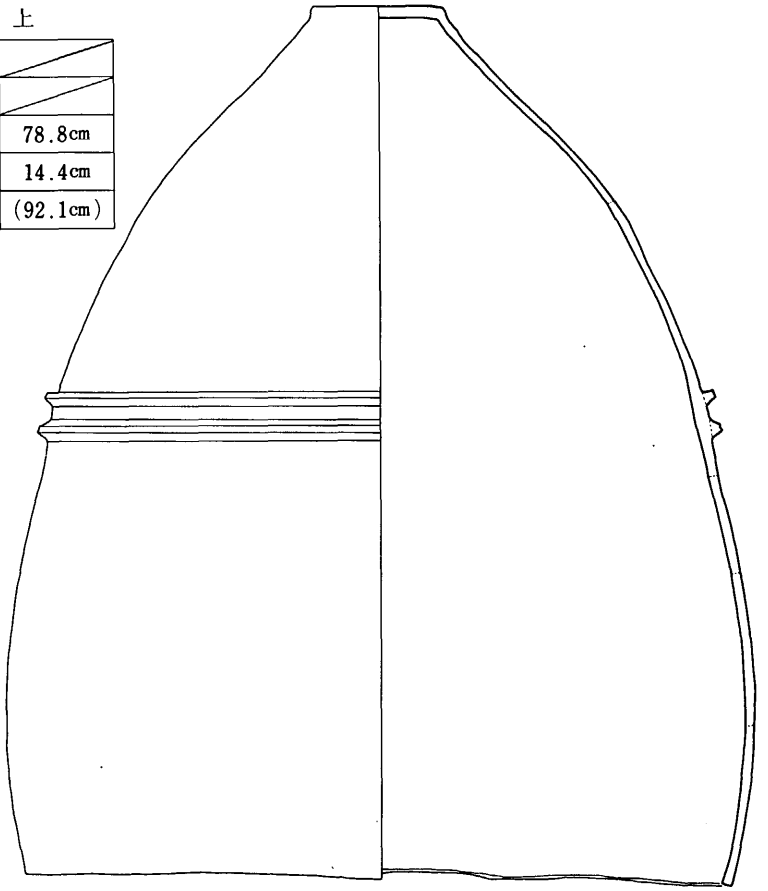
K27′　下

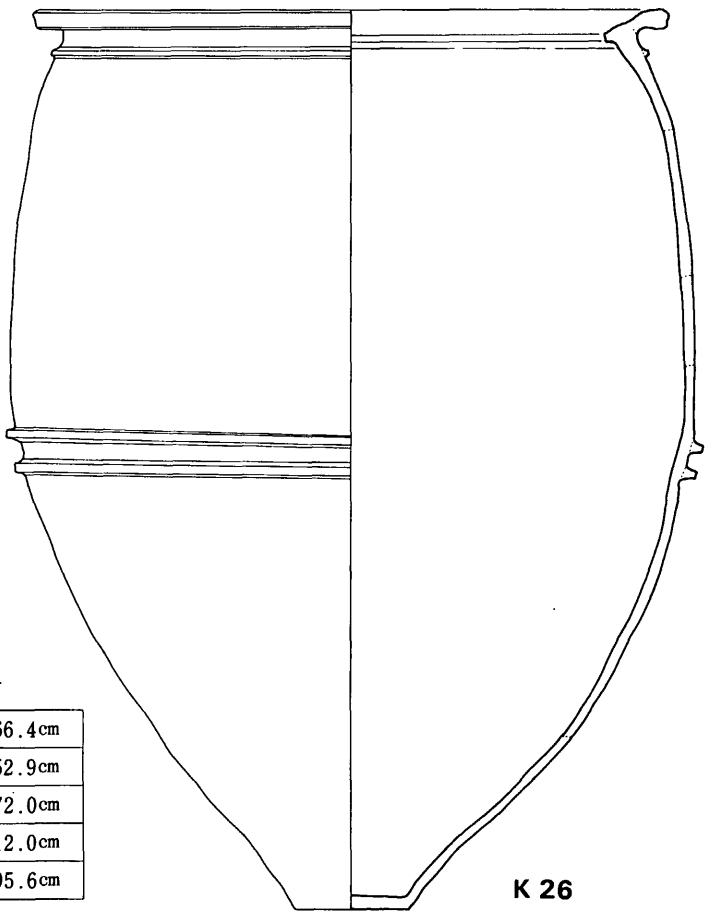
口　　径	65.6cm
口縁内径	53.2cm
胴部最大径	69.2cm
底　　径	11.4cm
器　　高	100.9cm

Fig. 80　24号・27′号甕棺実測図（縮尺１/８）

K26 上

口径	
口縁内径	
胴部最大径	78.8cm
底径	14.4cm
器高	(92.1cm)





K26 下

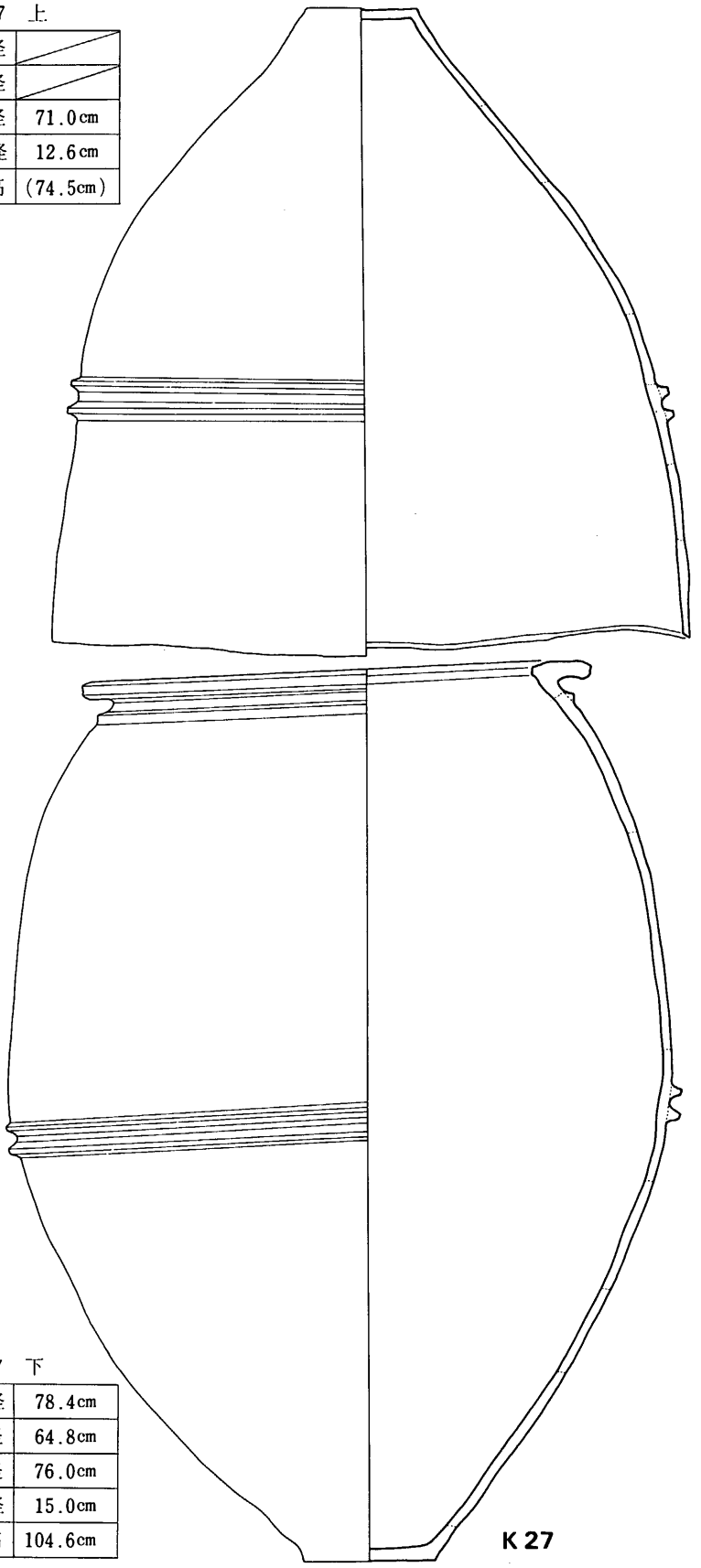
口径	66.4cm
口縁内径	52.9cm
胴部最大径	72.0cm
底径	12.0cm
器高	95.6cm

K 26

Fig. 81 26号甕棺実測図(縮尺1/8)

K27　上

口　　径	
口縁内径	
胴部最大径	71.0cm
底　　径	12.6cm
器　　高	(74.5cm)



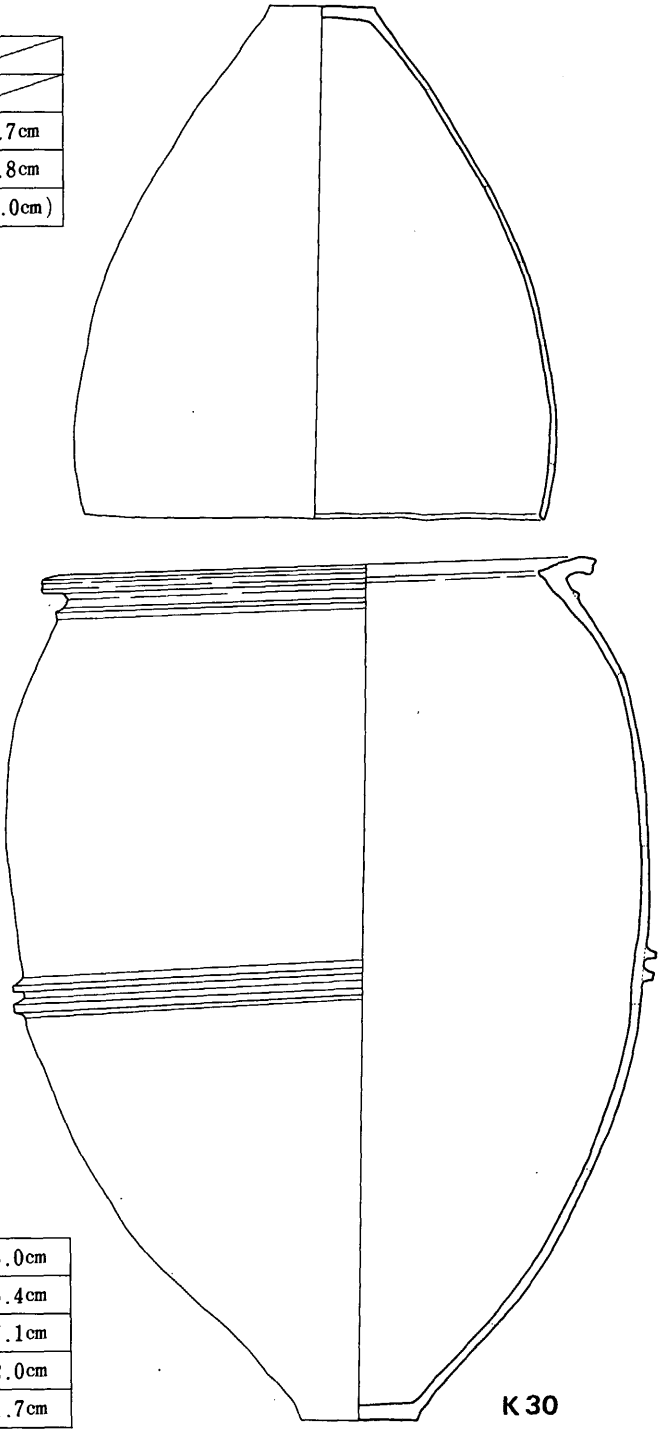
K27　下

口　　径	78.4cm
口縁内径	64.8cm
胴部最大径	76.0cm
底　　径	15.0cm
器　　高	104.6cm

Fig. 82　27号甕棺実測図(縮尺１/８)

K30 上

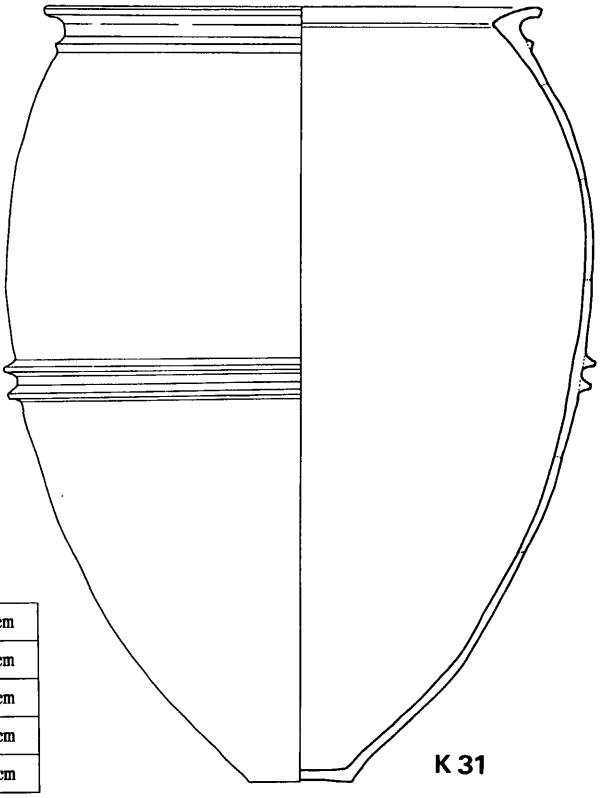
口径	
口縁内径	
胴部最大径	50.7cm
底径	10.8cm
器高	(54.0cm)



K30 下

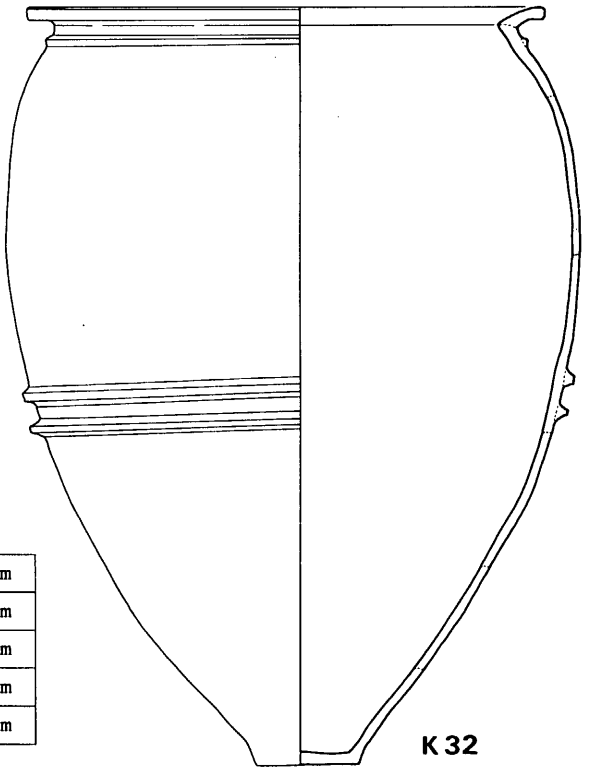
口径	58.0cm
口縁内径	46.4cm
胴部最大径	67.1cm
底径	12.0cm
器高	91.7cm

Fig. 83 30号甕棺実測図(縮尺1/8)



K31　下

口　　径	52.4cm
口縁内径	42.0cm
胴部最大径	61.6cm
底　　径	10.8cm
器　　高	82.1cm



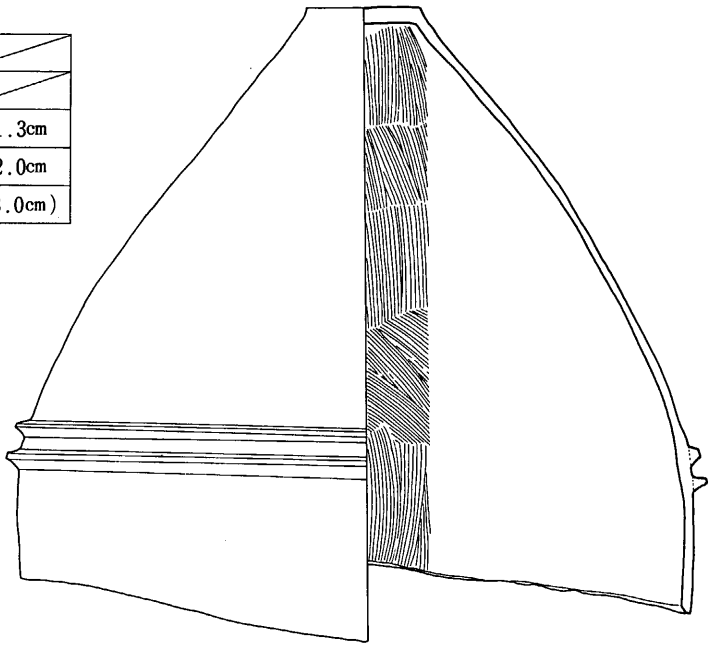
K32　下

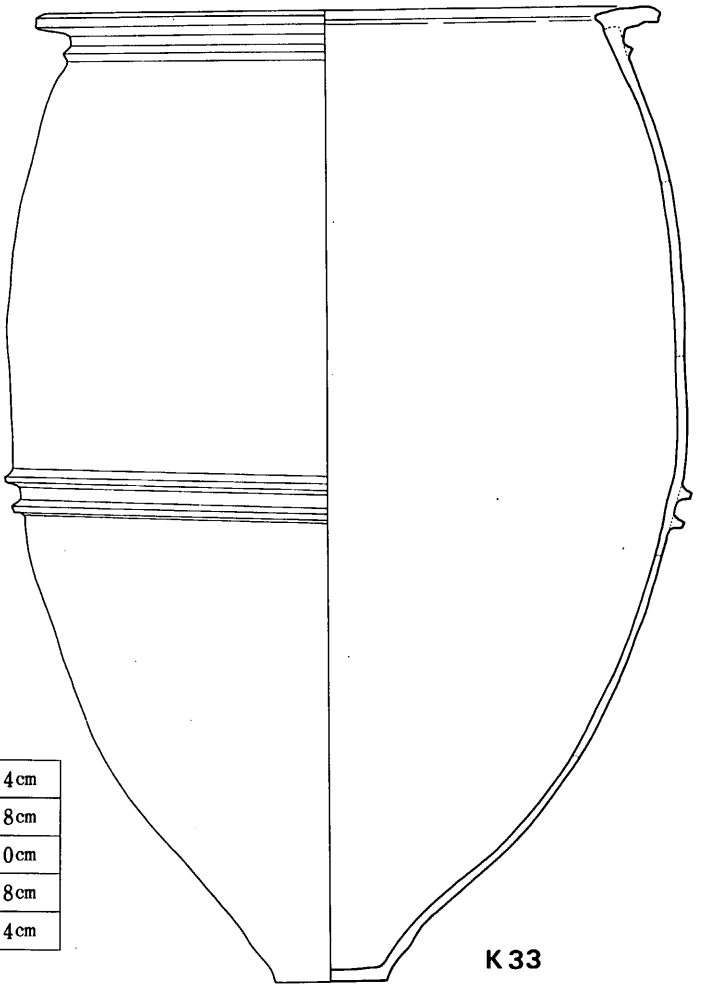
口　　径	53.6cm
口縁内径	44.6cm
胴部最大径	60.3cm
底　　径	10.8cm
器　　高	80.2cm

Fig. 84　31号・32号甕棺実測図(縮尺１/８)

K33 上

口径	
口縁内径	
胴部最大径	71.3cm
底径	12.0cm
器高	(63.0cm)





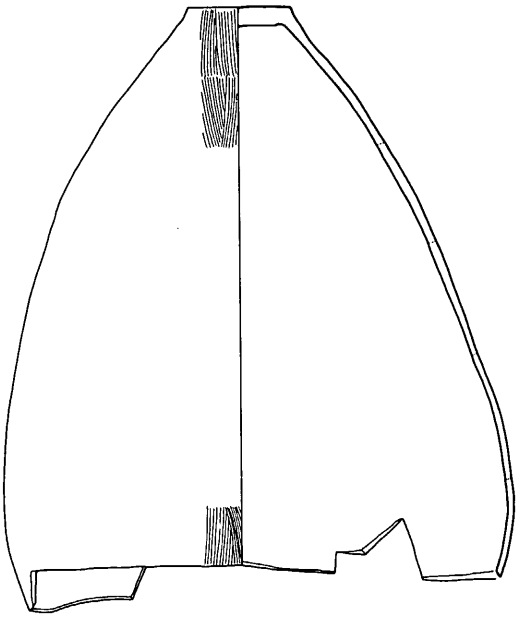
K33 下

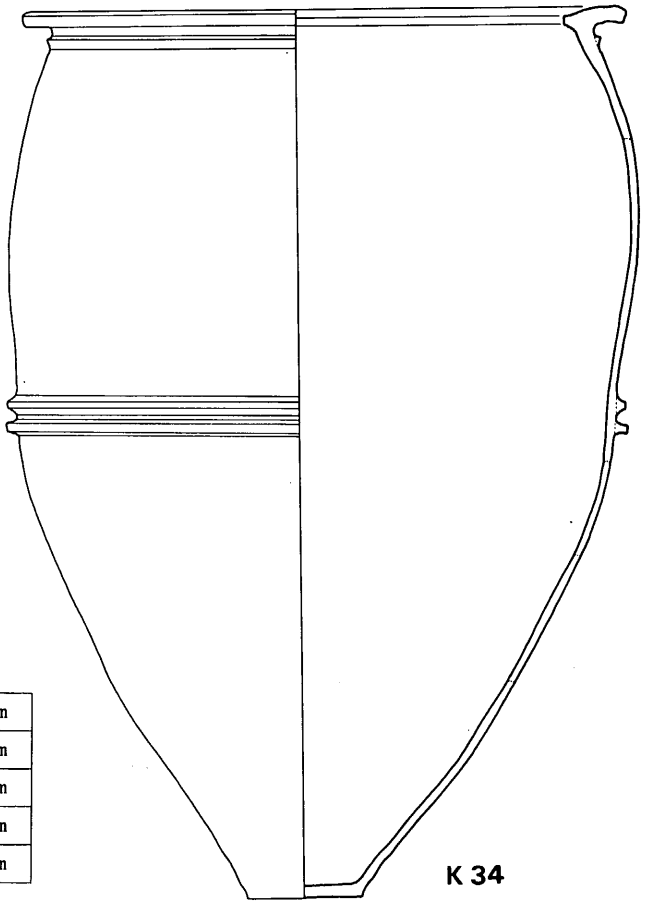
口径	65.4cm
口縁内径	51.8cm
胴部最大径	71.0cm
底径	11.8cm
器高	103.4cm

Fig. 85 33号甕棺実測図(縮尺1/8)

K34　上

口　　径	
口縁内径	
胴部最大径	53.4cm
底　　径	10.7cm
器　　高	(61.5cm)





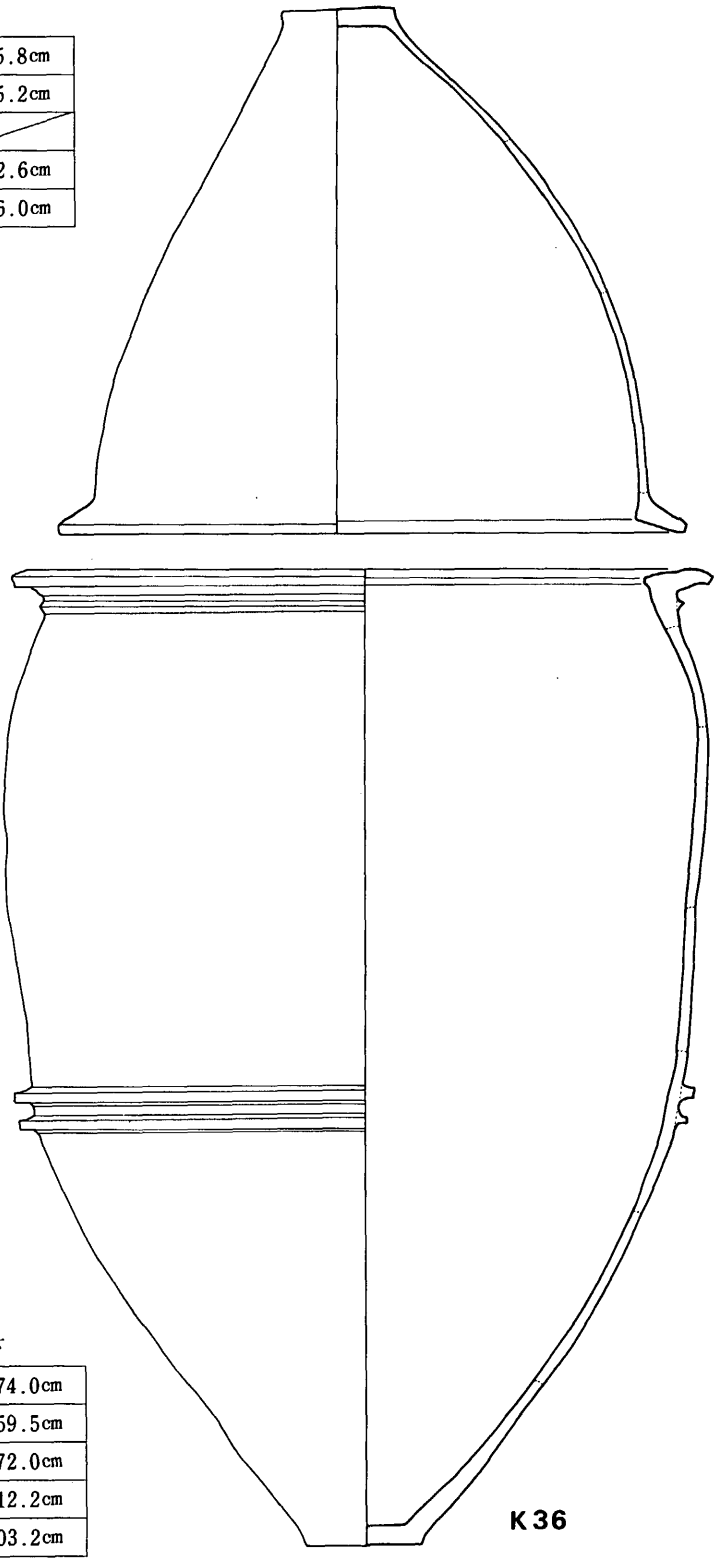
K34　下

口　　径	63.4cm
口縁内径	50.2cm
胴部最大径	65.8cm
底　　径	13.9cm
器　　高	94.3cm

Fig. 86　34号甕棺実測図(縮尺１/８)

K36 上

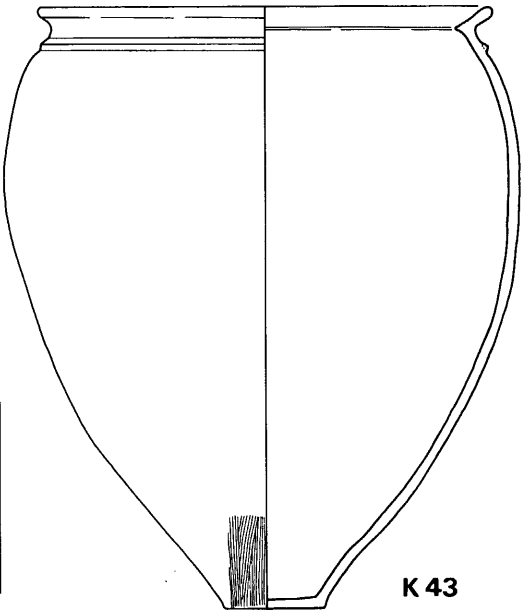
口径	65.8cm
口縁内径	55.2cm
胴部最大径	
底径	12.6cm
器高	56.0cm



K36 下

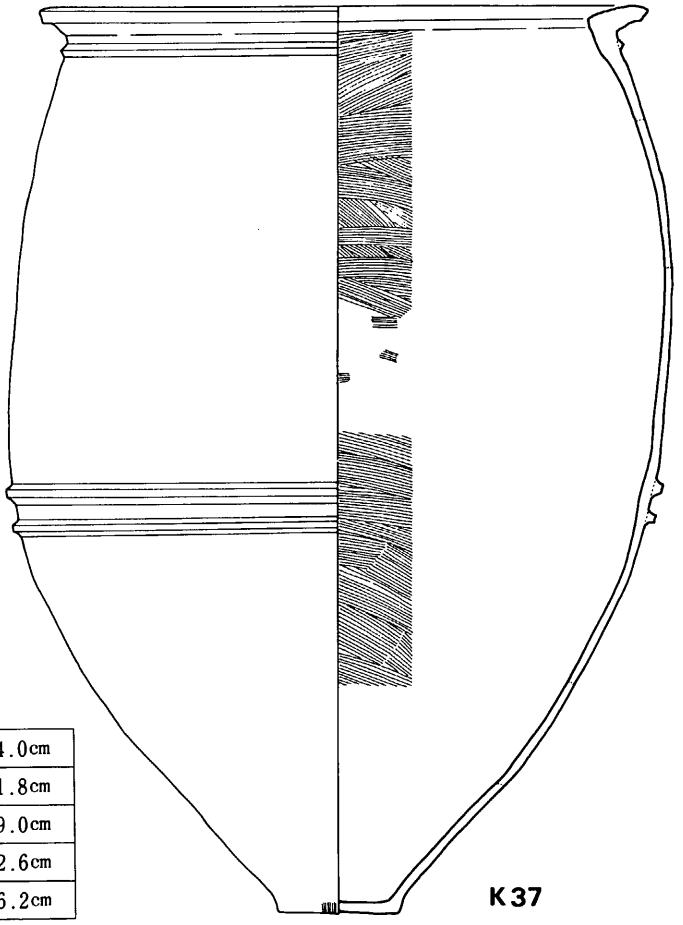
口径	74.0cm
口縁内径	59.5cm
胴部最大径	72.0cm
底径	12.2cm
器高	103.2cm

Fig. 87 36号甕棺実測図(縮尺1/8)



K43

口　　径	47.8cm
口縁内径	40.2cm
胴部最大径	54.4cm
底　　径	10.6cm
器　　高	63.6cm



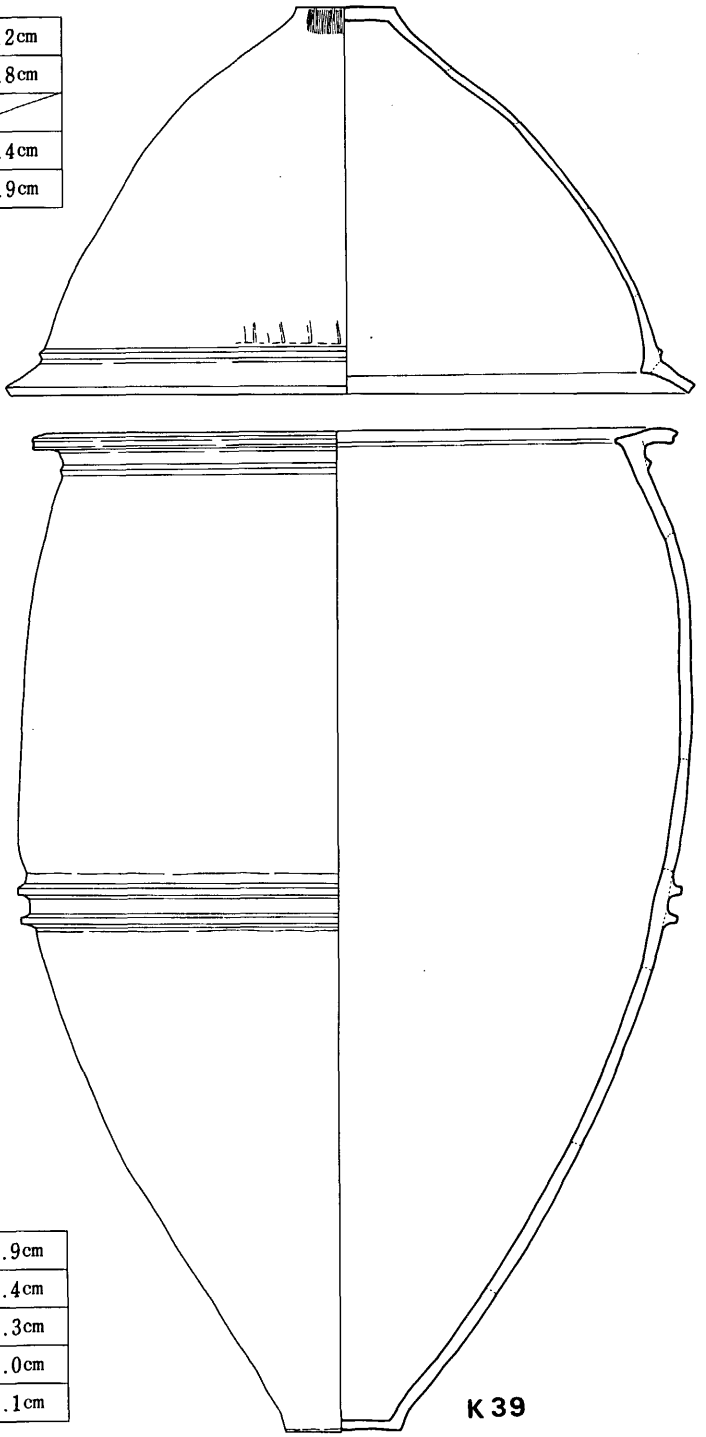
K37　下

口　　径	64.0cm
口縁内径	51.8cm
胴部最大径	69.0cm
底　　径	12.6cm
器　　高	96.2cm

Fig. 88　37号・43号甕棺実測図(縮尺１/８)

K39 上

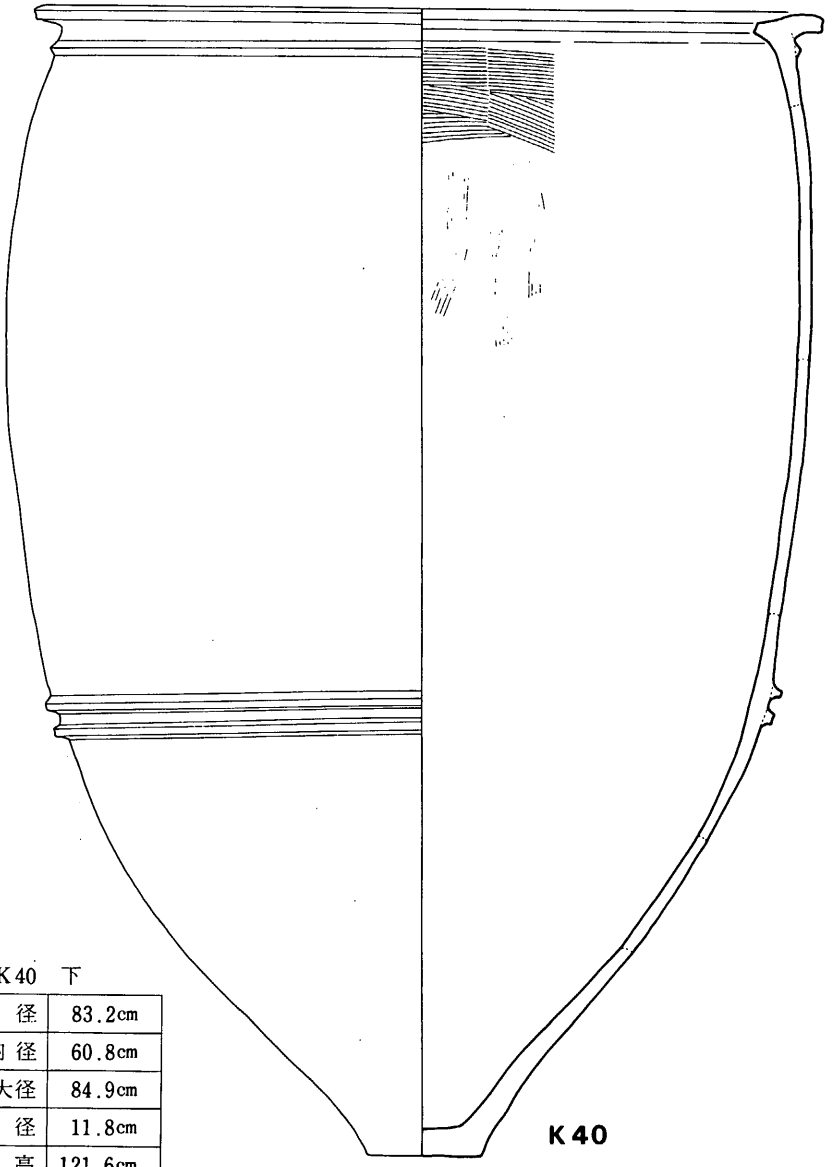
口径	72.2cm
口縁内径	61.8cm
胴部最大径	
底径	10.4cm
器高	40.9cm



K39 下

口径	67.9cm
口縁内径	55.4cm
胴部最大径	70.3cm
底径	12.0cm
器高	106.1cm

Fig. 89 39号甕棺実測図(縮尺1/8)



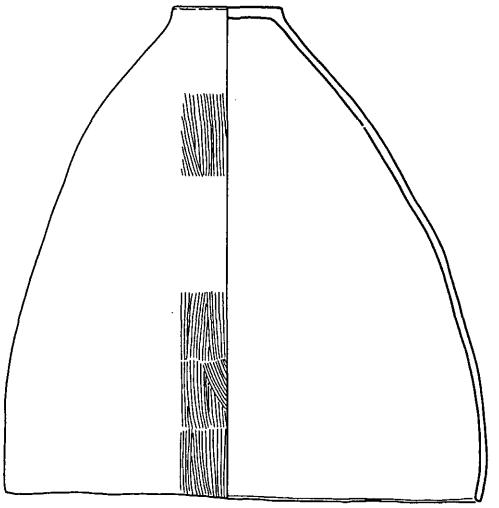
K40　下

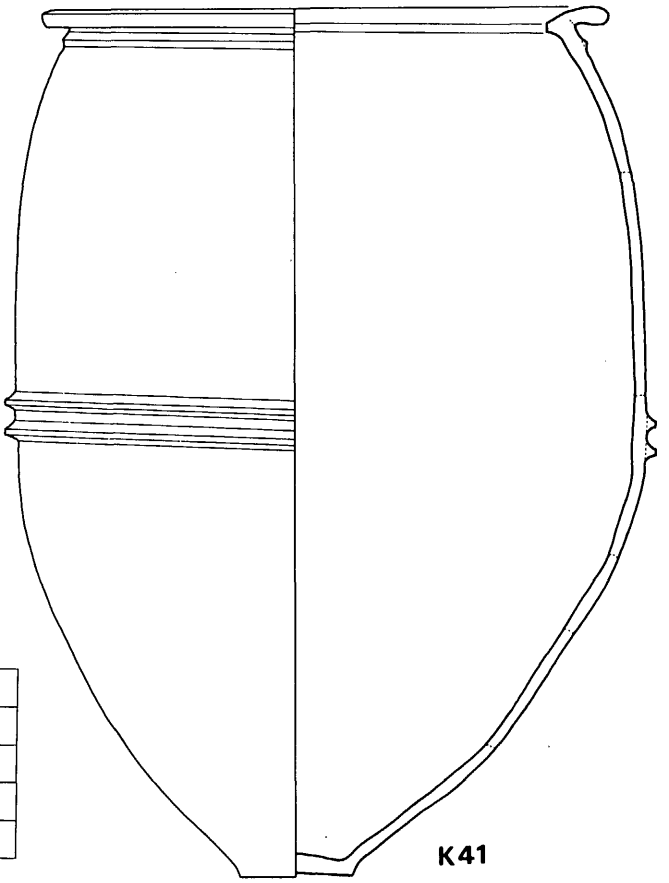
口　　径	83.2cm
口縁内径	60.8cm
胴部最大径	84.9cm
底　　径	11.8cm
器　　高	121.6cm

Fig. 90　40号甕棺実測図（縮尺１／８）

K41 上

口径	
口縁内径	
胴部最大径	50.6cm
底径	11.4cm
器高	(51.9cm)

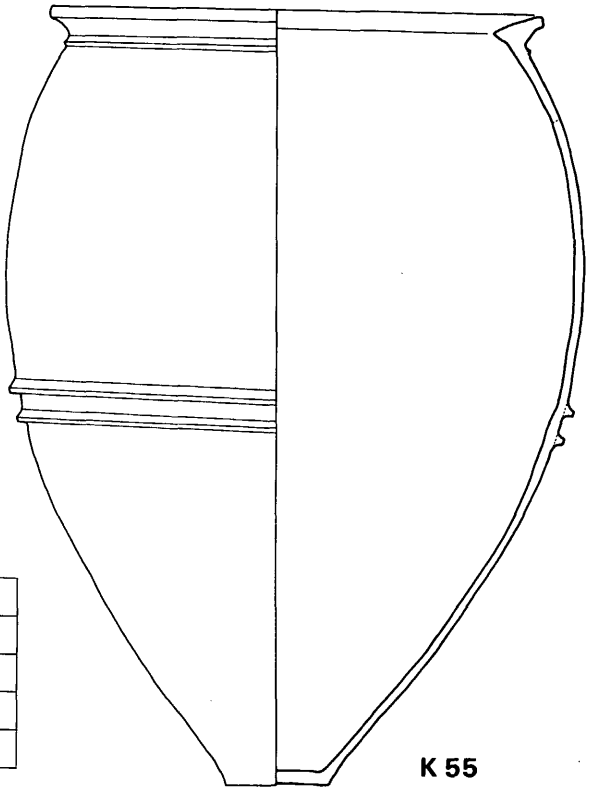




K41 下

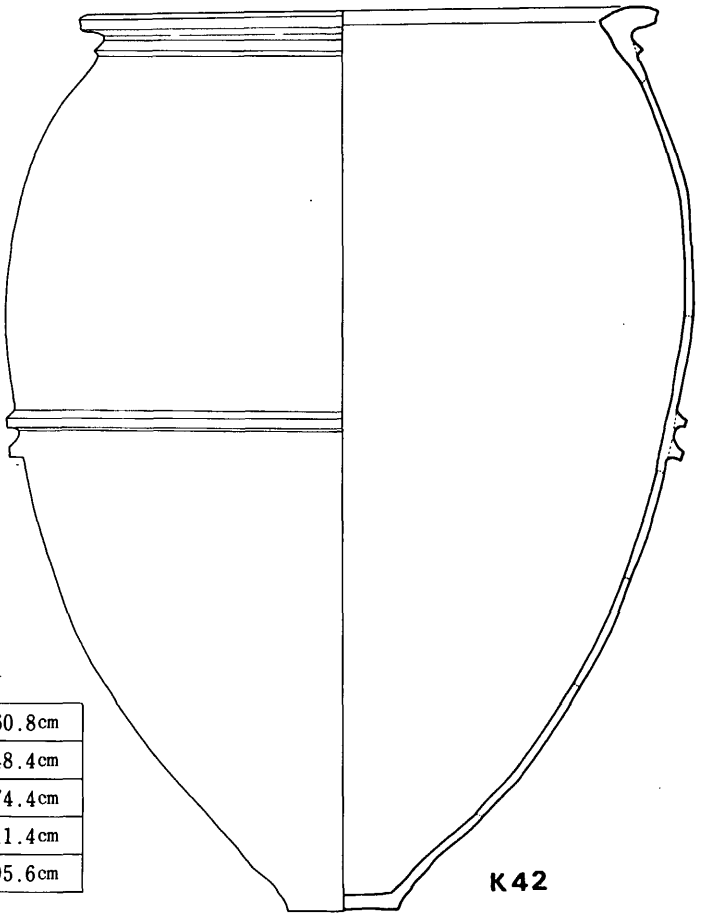
口径	59.5cm
口縁内径	47.0cm
胴部最大径	66.3cm
底径	12.0cm
器高	91.7cm

Fig. 91 41号甕棺実測図(縮尺1/8)



K55　下

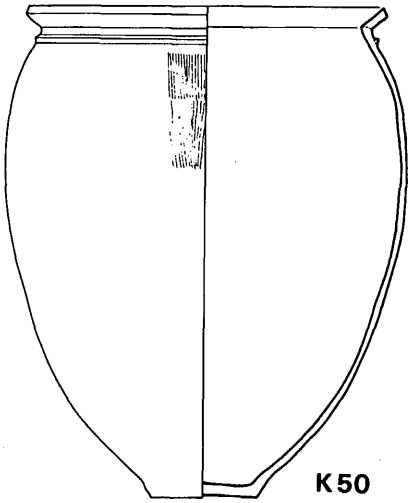
口　　径	51.6cm
口縁内径	41.0cm
胴部最大径	60.9cm
底　　径	10.8cm
器　　高	82.3cm



K42　下

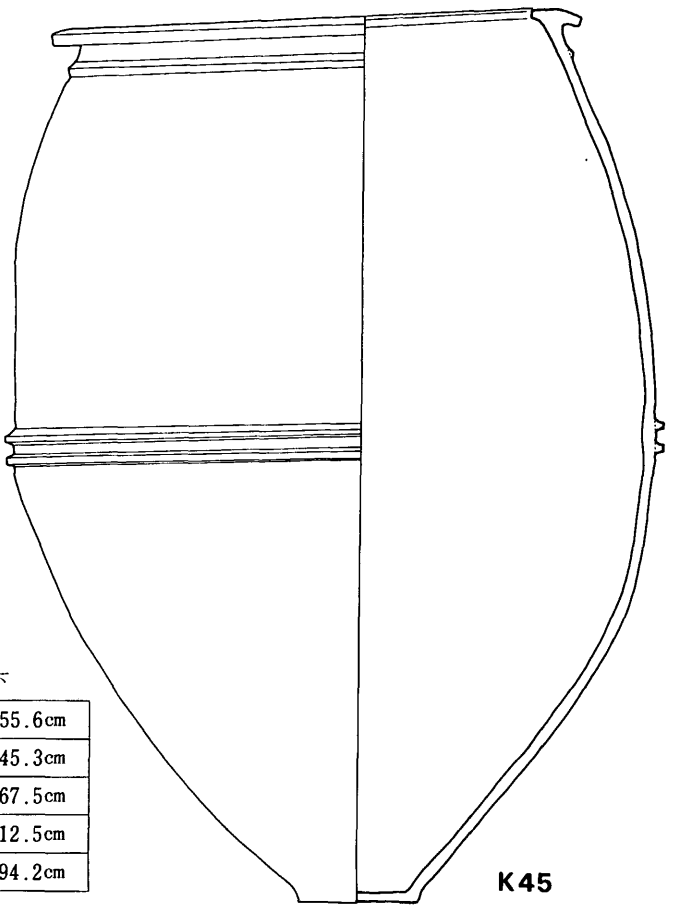
口　　径	60.8cm
口縁内径	48.4cm
胴部最大径	74.4cm
底　　径	11.4cm
器　　高	95.6cm

Fig. 92　42号・55号甕棺実測図(縮尺１/８)



K50 下

口径	37.0cm
口縁内径	32.0cm
胴部最大径	42.0cm
底径	11.0cm
器高	52.2cm



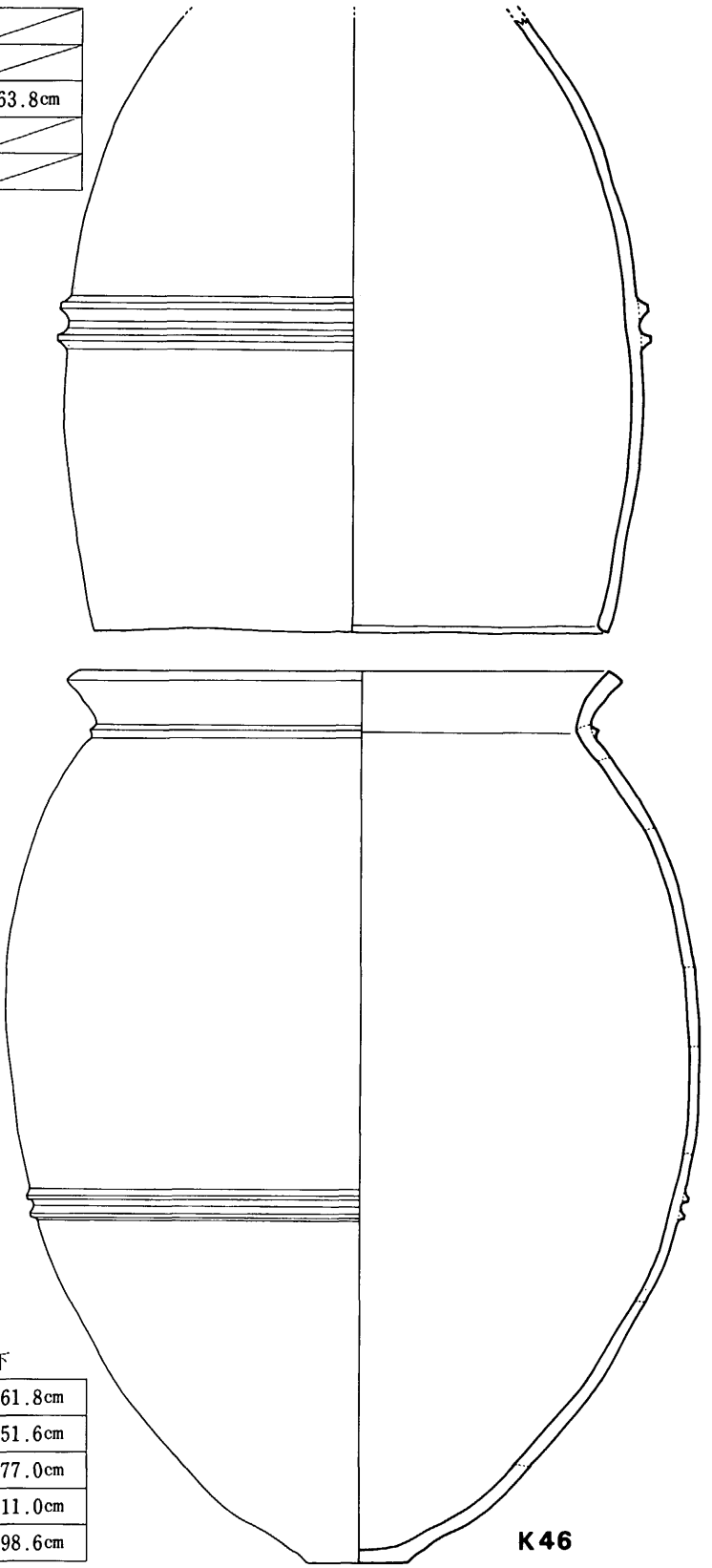
K45 下

口径	55.6cm
口縁内径	45.3cm
胴部最大径	67.5cm
底径	12.5cm
器高	94.2cm

Fig. 93 45号・50号甕棺実測図(縮尺1/8)

K46　上

口　　径	
口縁内径	
胴部最大径	63.8cm
底　　径	
器　　高	



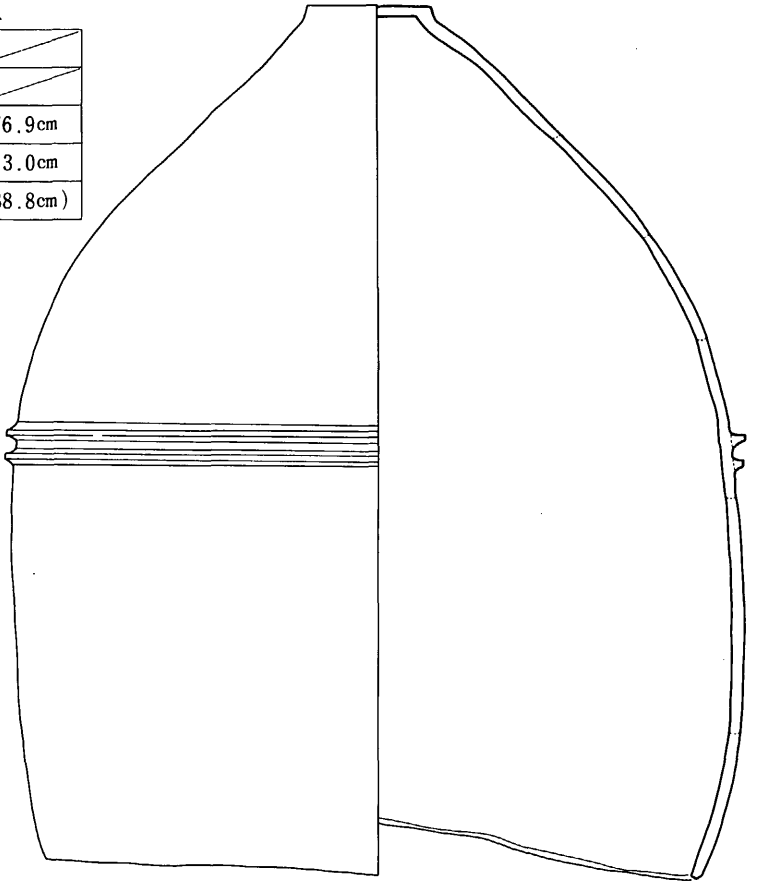
K46　下

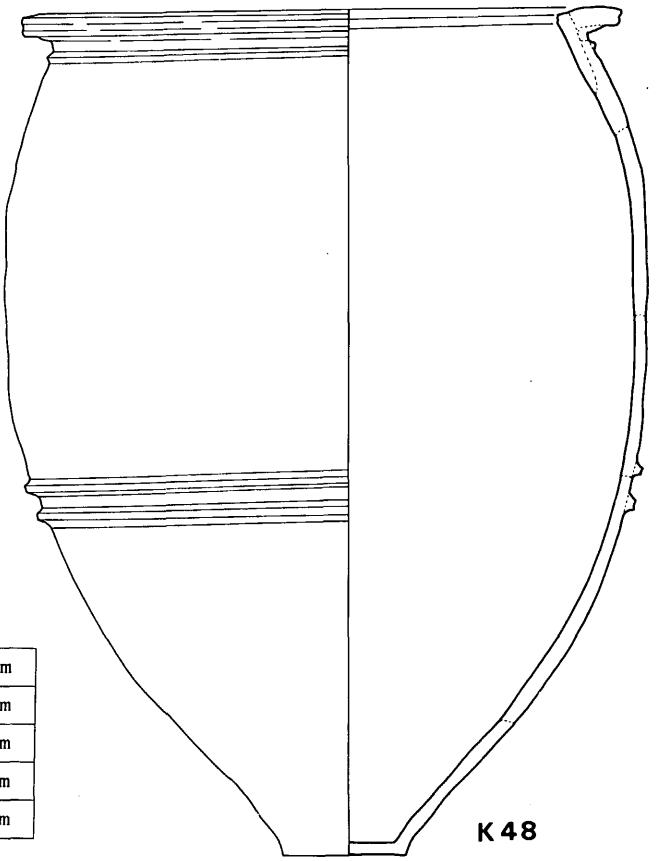
口　　径	61.8cm
口縁内径	51.6cm
胴部最大径	77.0cm
底　　径	11.0cm
器　　高	98.6cm

Fig. 94　46号甕棺実測図(縮尺１/８)

K48 上

口径	
口縁内径	
胴部最大径	76.9cm
底径	13.0cm
器高	(88.8cm)





K48 下

口径	63.0cm
口縁内径	49.6cm
胴部最大径	67.7cm
底径	13.0cm
器高	89.7cm

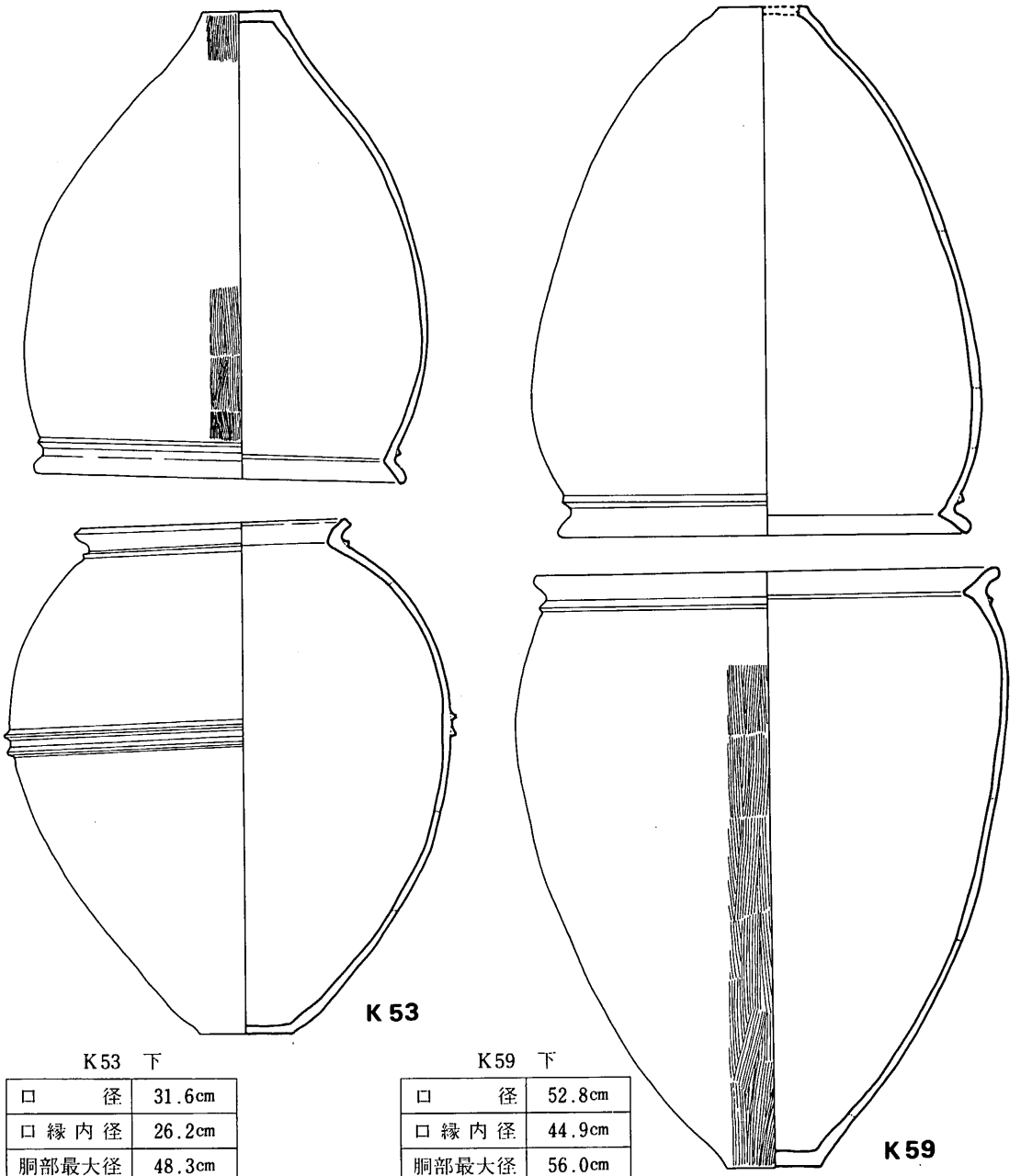
Fig. 95 48号甕棺実測図(縮尺1/8)

K53　上

口　　径	42.4cm
口縁内径	38.0cm
胴部最大径	46.0cm
底　　径	9.2cm
器　　高	53.9cm

K59　上

口　　径	47.2cm
口縁内径	39.8cm
胴部最大径	51.3cm
底　　径	10.0cm
器　　高	61.0cm



K53　下

口　　径	31.6cm
口縁内径	26.2cm
胴部最大径	48.3cm
底　　径	10.6cm
器　　高	59.6cm

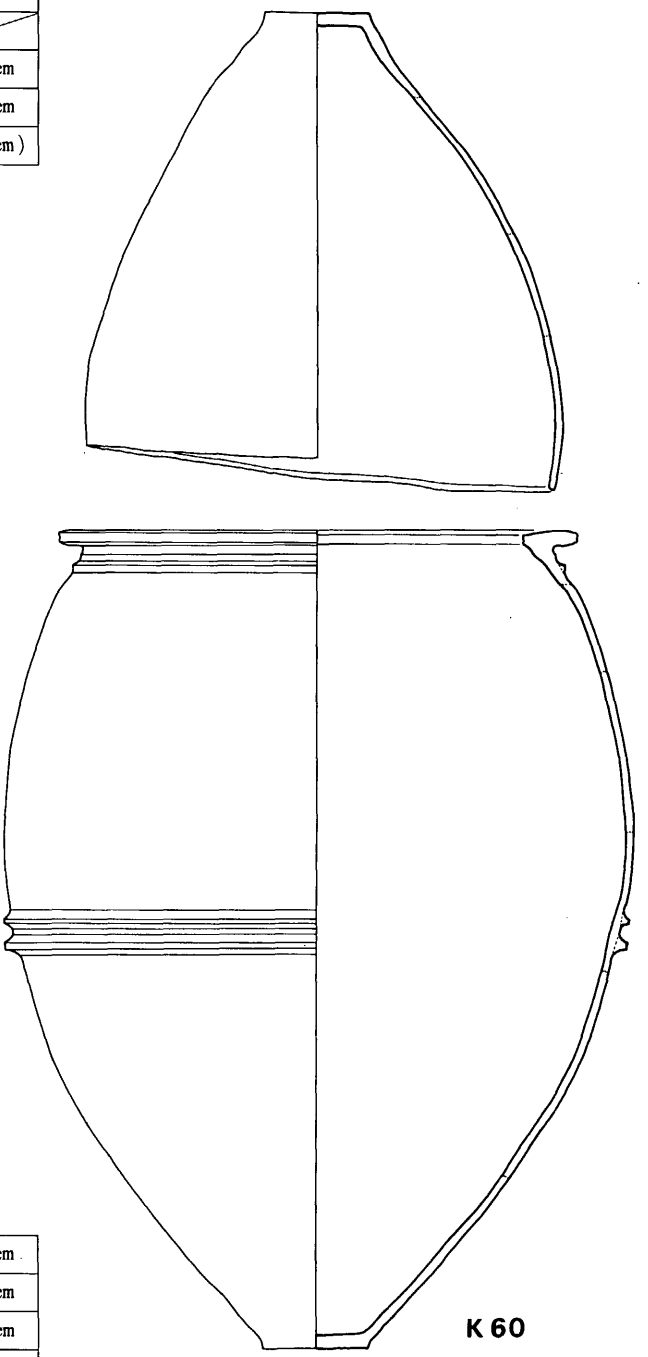
K59　下

口　　径	52.8cm
口縁内径	44.9cm
胴部最大径	56.0cm
底　　径	10.7cm
器　　高	69.0cm

Fig.　96　53号・59号甕棺実測図(縮尺１/８)

K60 上

口径	
口縁内径	
胴部最大径	50.5cm
底径	11.2cm
器高	(50.2cm)



K60 下

口径	54.4cm
口縁内径	43.0cm
胴部最大径	63.0cm
底径	11.2cm
器高	86.9cm

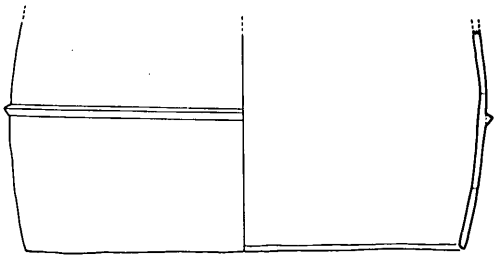
Fig. 97 60号甕棺実測図(縮尺1/8)

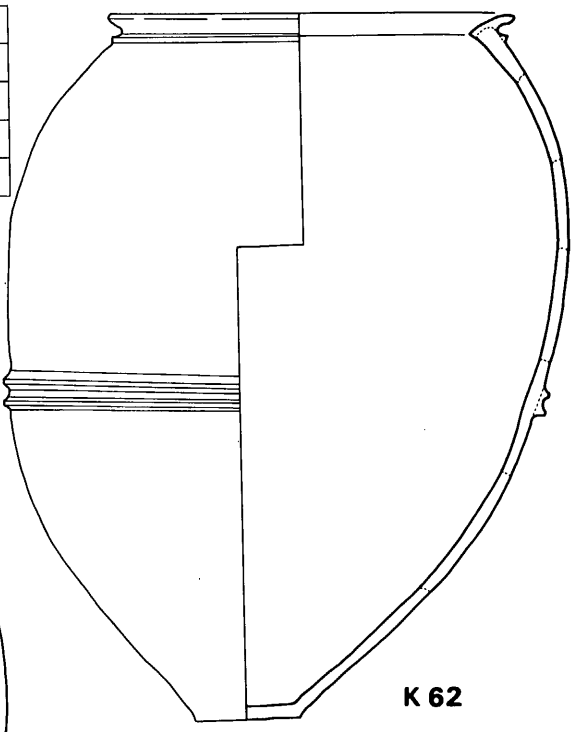
K63　上

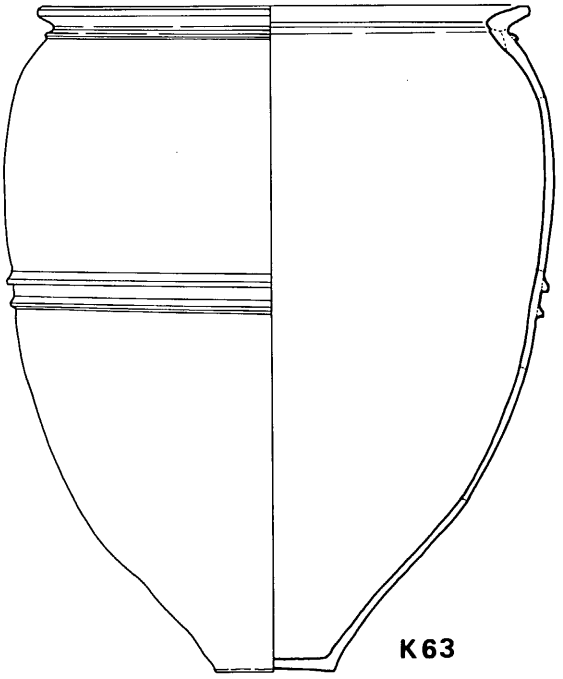
口径	
口縁内径	
胴部最大径	45.5cm
底径	
器高	

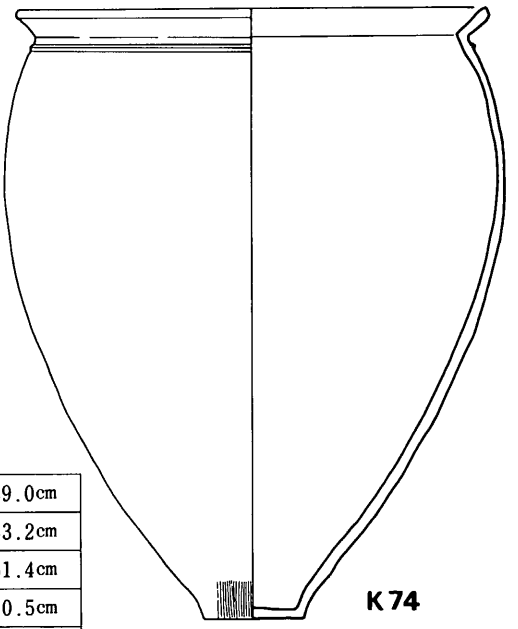
K62　下

口径	42.2cm
口縁内径	33.0cm
胴部最大径	58.8cm
底径	10.9cm
器高	74.6cm









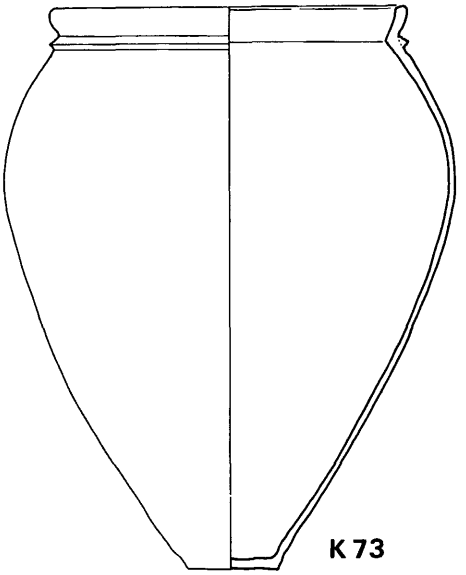
K63　下

口径	51.9cm
口縁内径	43.0cm
胴部最大径	58.1cm
底径	12.3cm
器高	70.2cm

K74　下

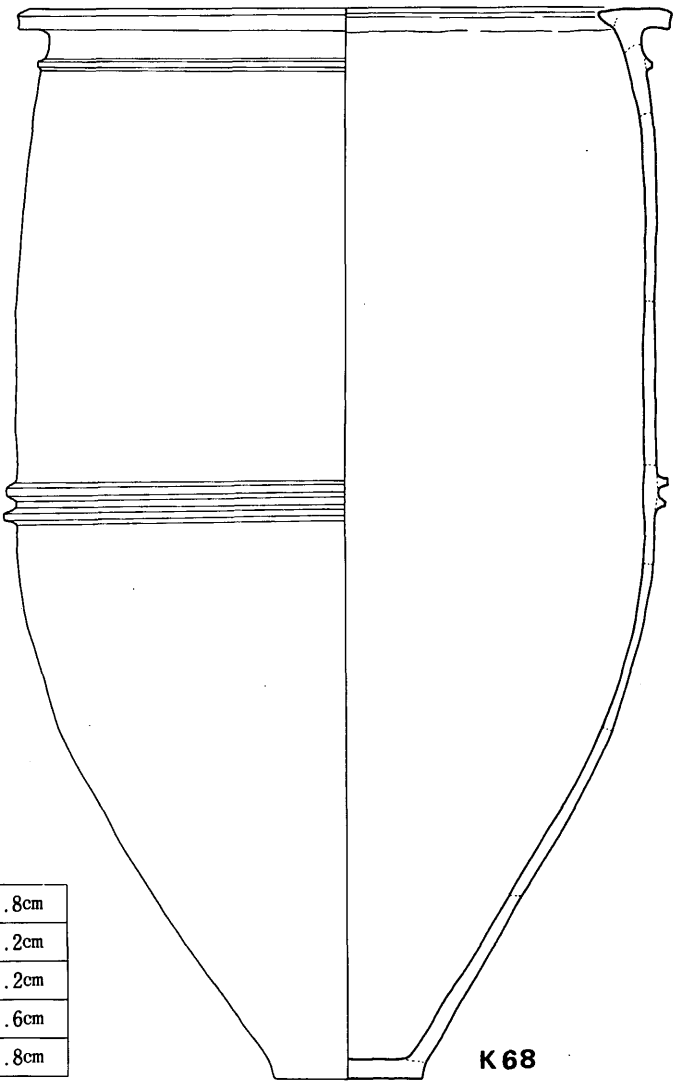
口径	49.0cm
口縁内径	43.2cm
胴部最大径	51.4cm
底径	10.5cm
器高	64.4cm

Fig. 98　62号・63号・74号甕棺実測図(縮尺1/8)



K73 下

口径	37.7cm
口縁内径	33.0cm
胴部最大径	47.4cm
底径	10.4cm
器高	60.0cm



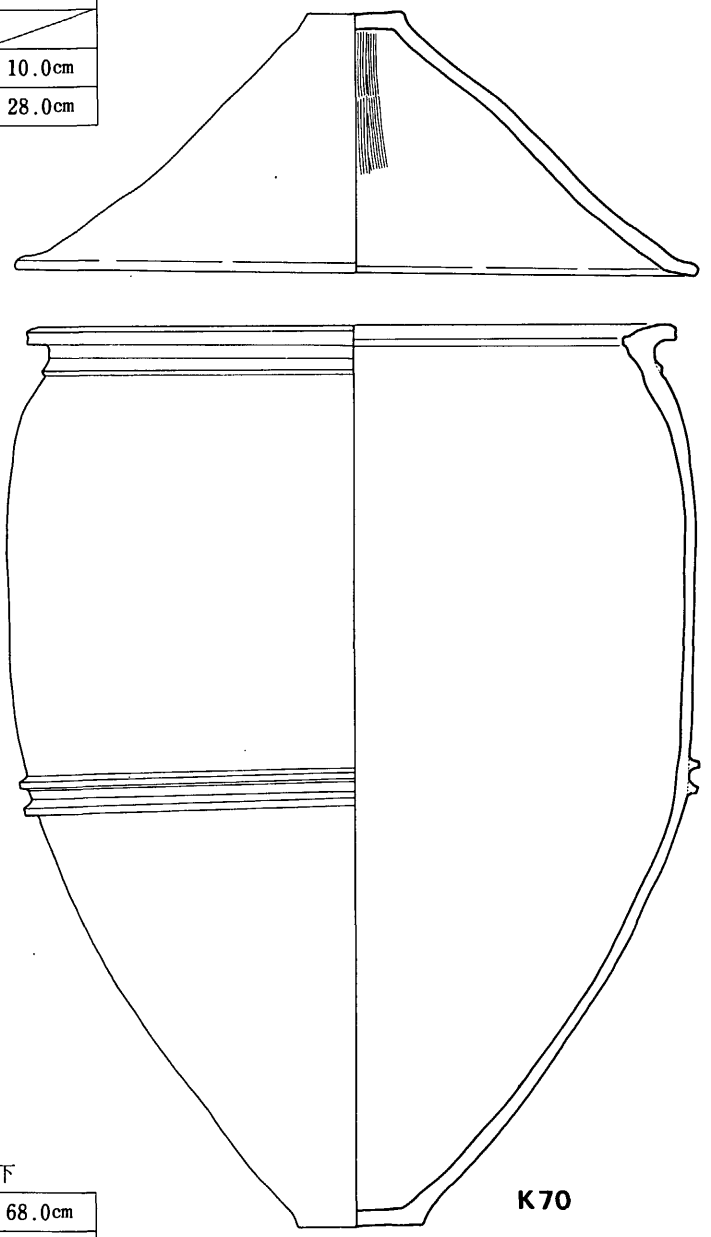
K68 下

口径	68.8cm
口縁内径	53.2cm
胴部最大径	67.2cm
底径	15.6cm
器高	111.8cm

Fig. 99 68号・73号甕棺実測図(縮尺1/8)

K70　上

口　　径	71.8cm
口縁内径	64.0cm
胴部最大径	
底　　径	10.0cm
器　　高	28.0cm



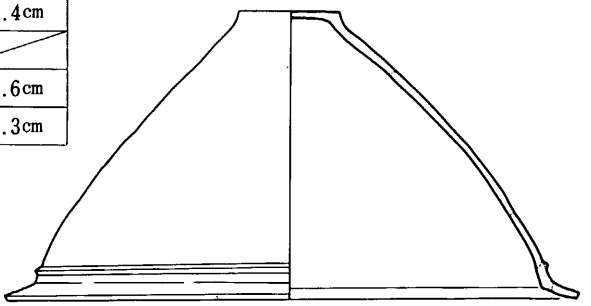
K70　下

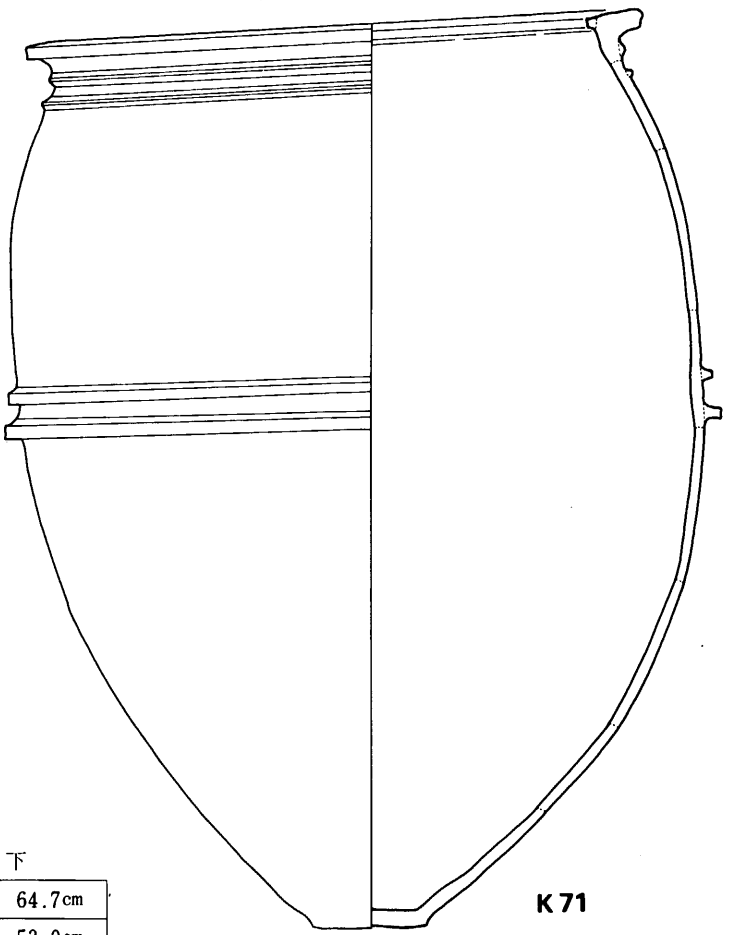
口　　径	68.0cm
口縁内径	57.0cm
胴部最大径	72.4cm
底　　径	13.0cm
器　　高	96.0cm

Fig.　100　70号甕棺実測図(縮尺１/８)

K71 上

口径	59.9cm
口縁内径	52.4cm
胴部最大径	
底径	10.6cm
器高	30.3cm

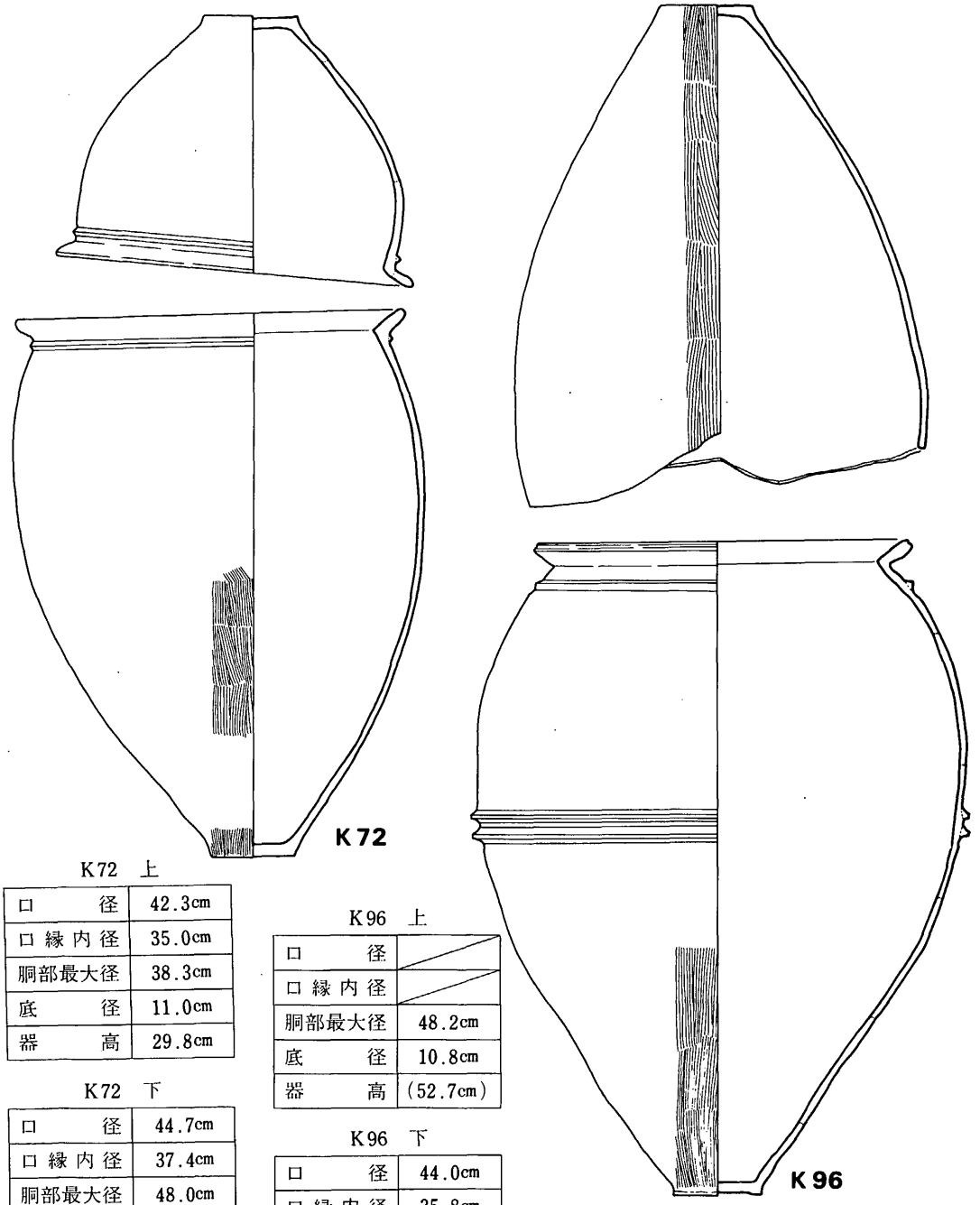




K71 下

口径	64.7cm
口縁内径	53.0cm
胴部最大径	72.0cm
底径	12.2cm
器高	95.7cm

Fig. 101 71号甕棺実測図(縮尺1/8)



K72　上

口　　径	42.3cm
口縁内径	35.0cm
胴部最大径	38.3cm
底　　径	11.0cm
器　　高	29.8cm

K72　下

口　　径	44.7cm
口縁内径	37.4cm
胴部最大径	48.0cm
底　　径	9.8cm
器　　高	63.9cm

K96　上

口　　径	
口縁内径	
胴部最大径	48.2cm
底　　径	10.8cm
器　　高	(52.7cm)

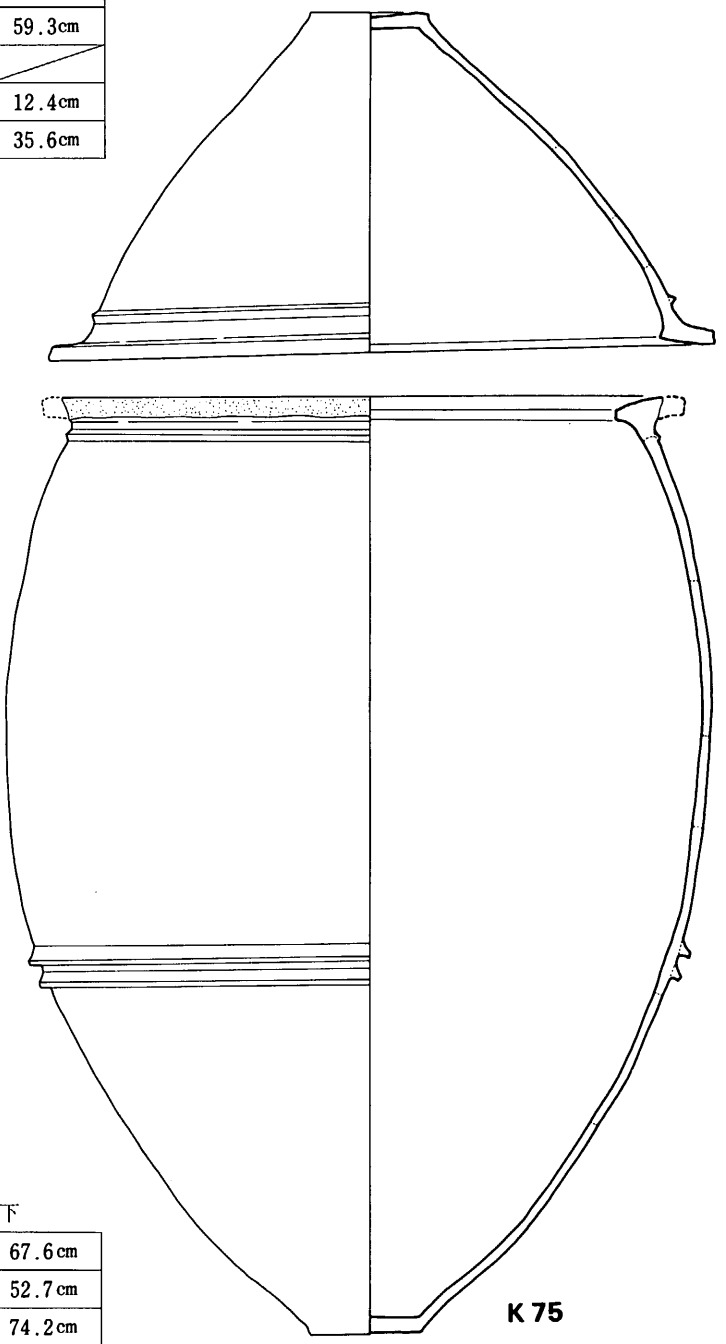
K96　下

口　　径	44.0cm
口縁内径	35.8cm
胴部最大径	56.6cm
底　　径	10.2cm
器　　高	76.2cm

Fig. 102　72号・96号甕棺実測図(縮尺1/8)

K75 上

口径	71.1cm
口縁内径	59.3cm
胴部最大径	
底径	12.4cm
器高	35.6cm



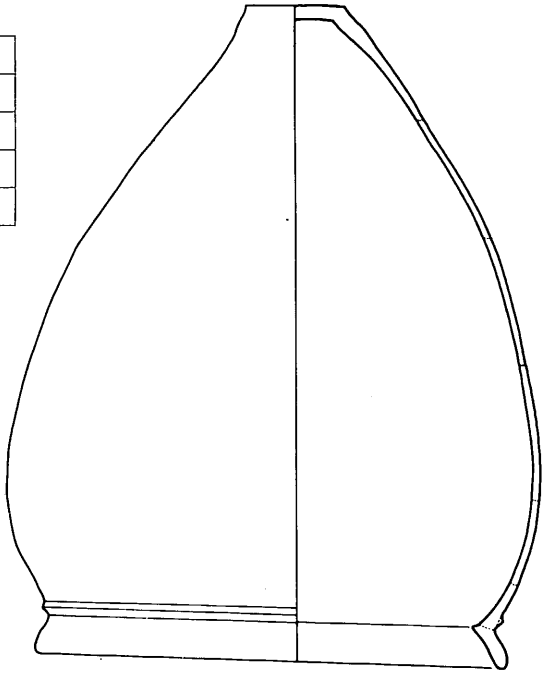
K75 下

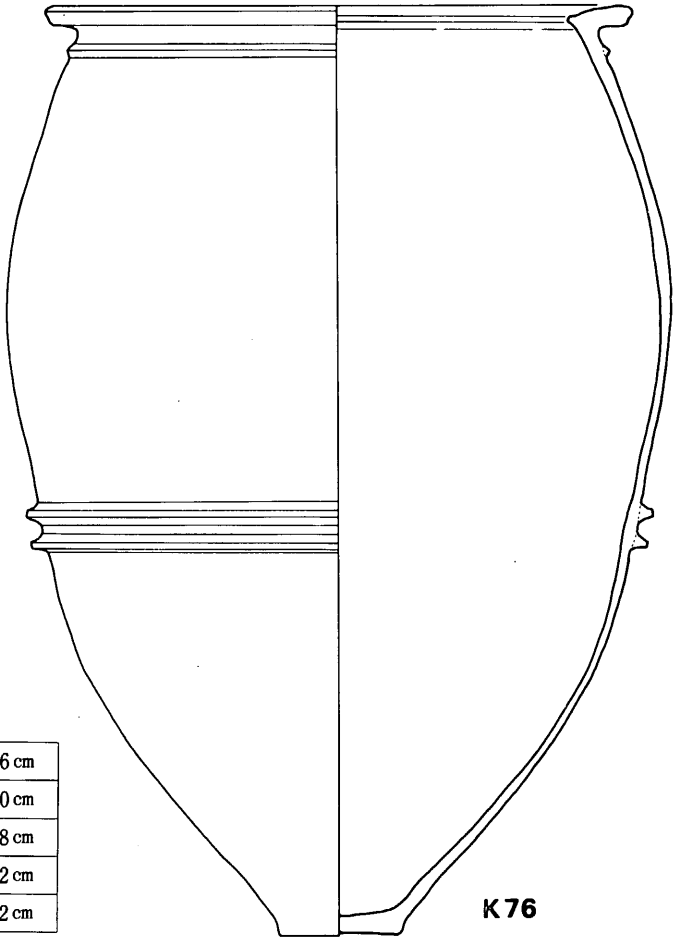
口径	67.6cm
口縁内径	52.7cm
胴部最大径	74.2cm
底径	13.0cm
器高	99.5cm

Fig. 103 75号甕棺実測図(縮尺1/8)

K76　上

口　　径	49.6cm
口縁内径	42.4cm
胴部最大径	55.8cm
底　　径	10.4cm
器　　高	70.1cm





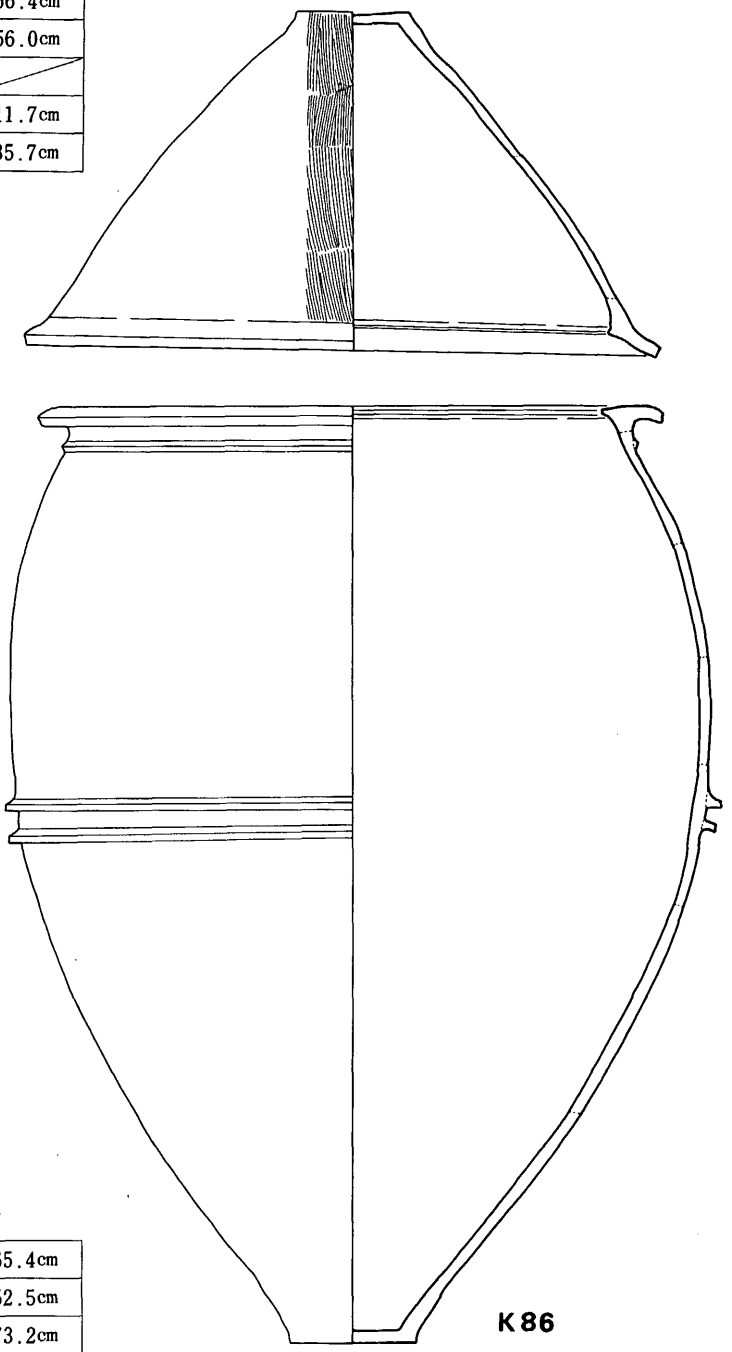
K76　下

口　　径	61.6cm
口縁内径	48.0cm
胴部最大径	69.8cm
底　　径	12.2cm
器　　高	98.2cm

Fig.　104　76号甕棺実測図(縮尺１/８)

K86 上

口径	66.4cm
口縁内径	56.0cm
胴部最大径	
底径	11.7cm
器高	35.7cm



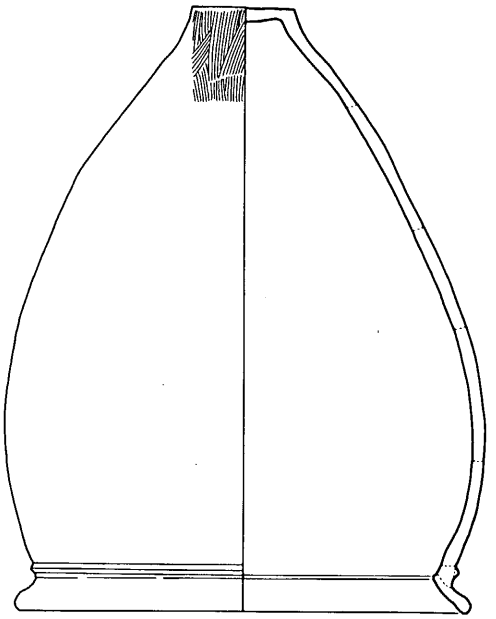
K86 下

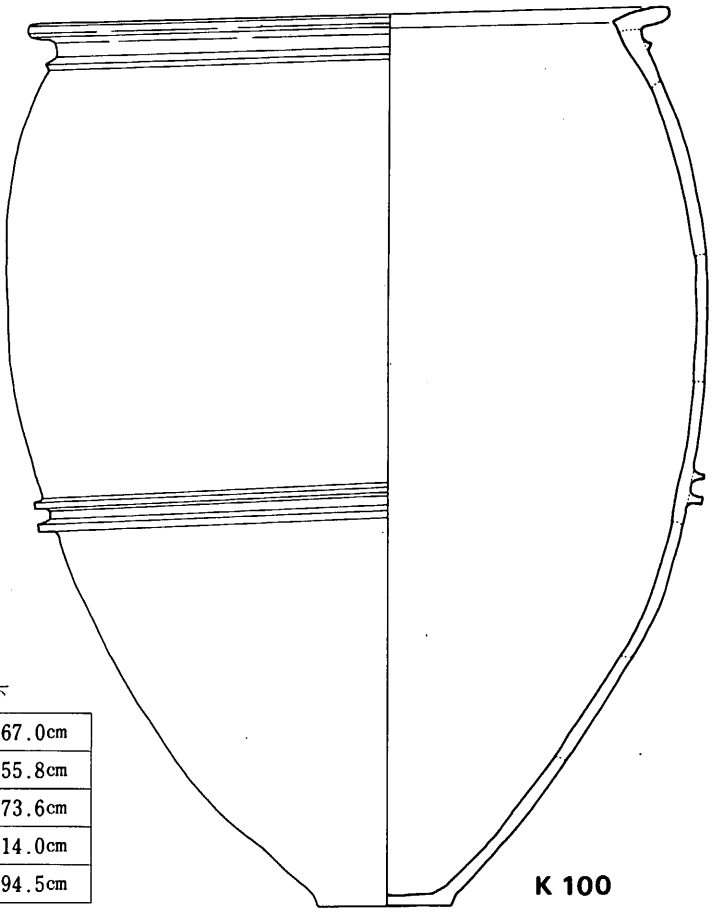
口径	65.4cm
口縁内径	52.5cm
胴部最大径	73.2cm
底径	13.0cm
器高	99.2cm

Fig. 105 86号甕棺実測図(縮尺1/8)

K100 上

口　　径	47.2cm
口縁内径	40.0cm
胴部最大径	50.8cm
底　　径	10.8cm
器　　高	63.5cm

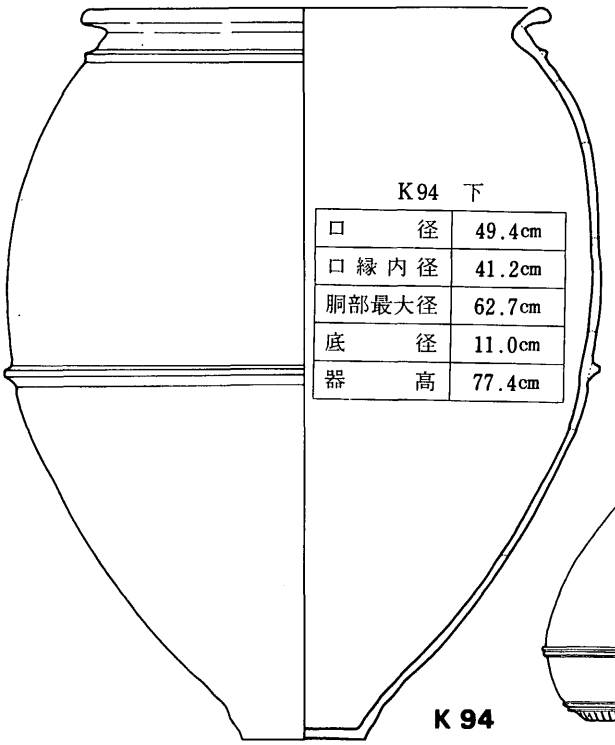




K100 下

口　　径	67.0cm
口縁内径	55.8cm
胴部最大径	73.6cm
底　　径	14.0cm
器　　高	94.5cm

Fig. 106　100号甕棺実測図(縮尺１/８)



K94 下

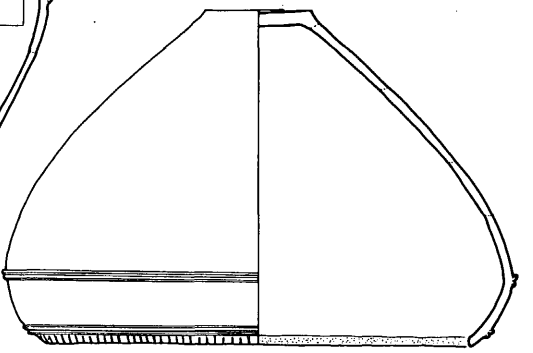
口径	49.4cm
口縁内径	41.2cm
胴部最大径	62.7cm
底径	11.0cm
器高	77.4cm

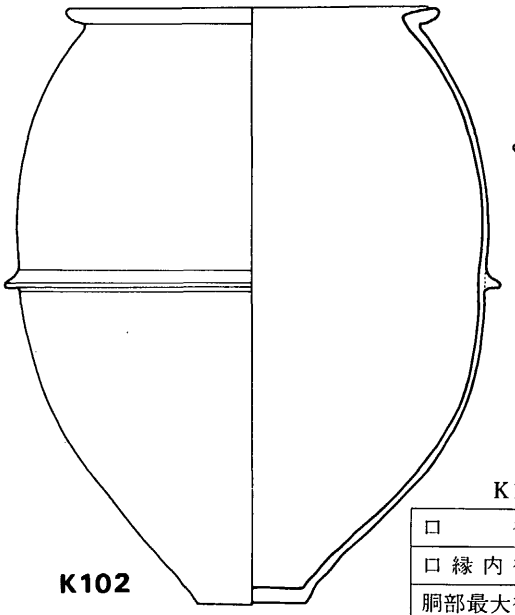
K112 上

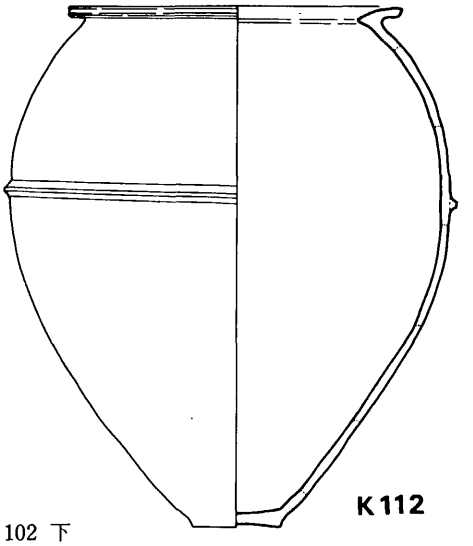
口径	
口縁内径	
胴部最大径	43.2cm
底径	11.4cm
器高	(35.2cm)

K112 下

口径	35.0cm
口縁内径	26.2cm
胴部最大径	45.6cm
底径	9.4cm
器高	54.8cm



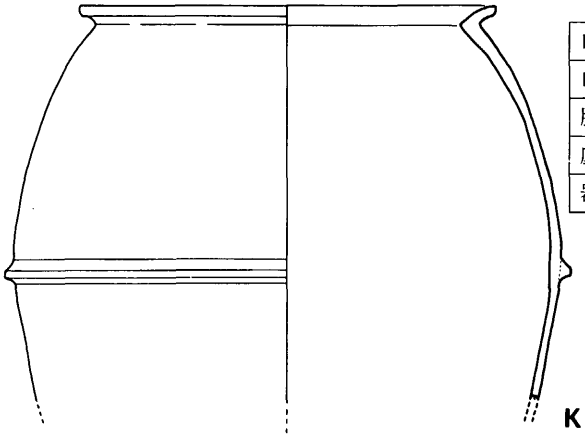




K102 下

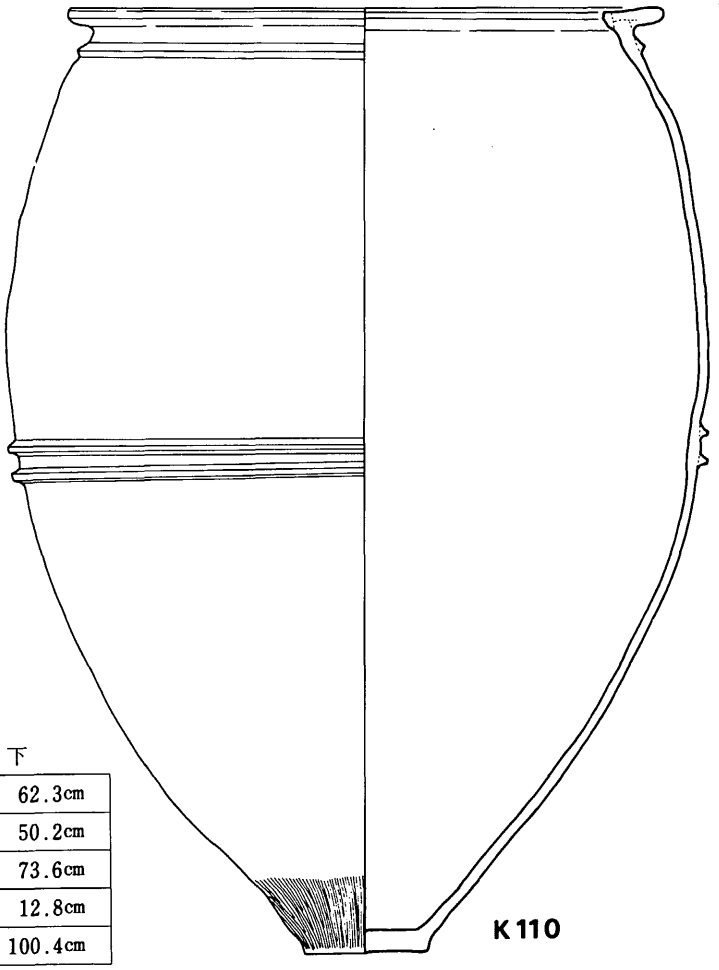
口径	40.2cm
口縁内径	32.6cm
胴部最大径	49.6cm
底径	11.6cm
器高	63.0cm

Fig. 107 94号・102号・112号甕棺実測図(縮尺1/8)



K109 下

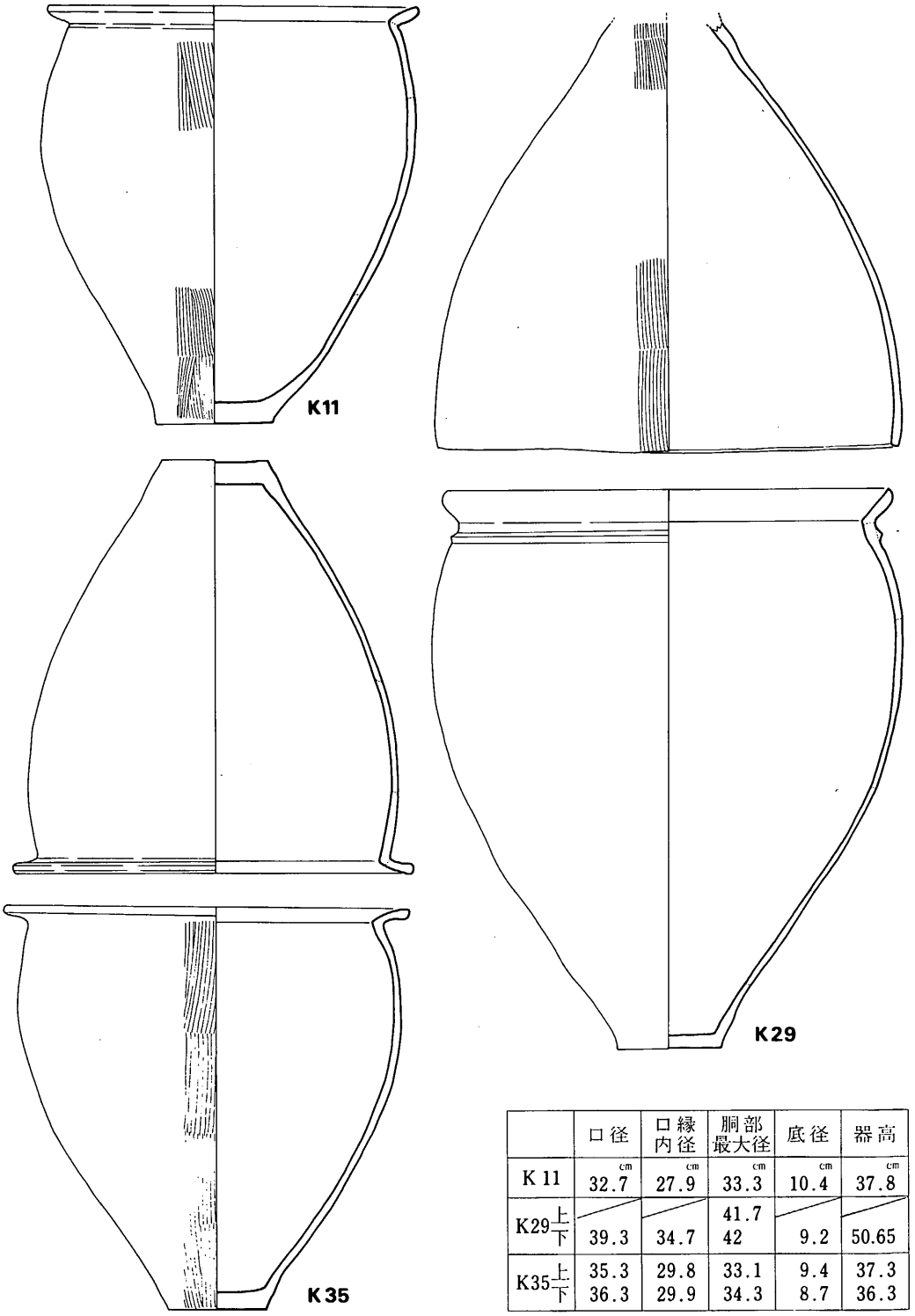
口　　径	44.0cm
口縁内径	36.4cm
胴部最大径	57.6cm
底　　径	
器　　高	



K110 下

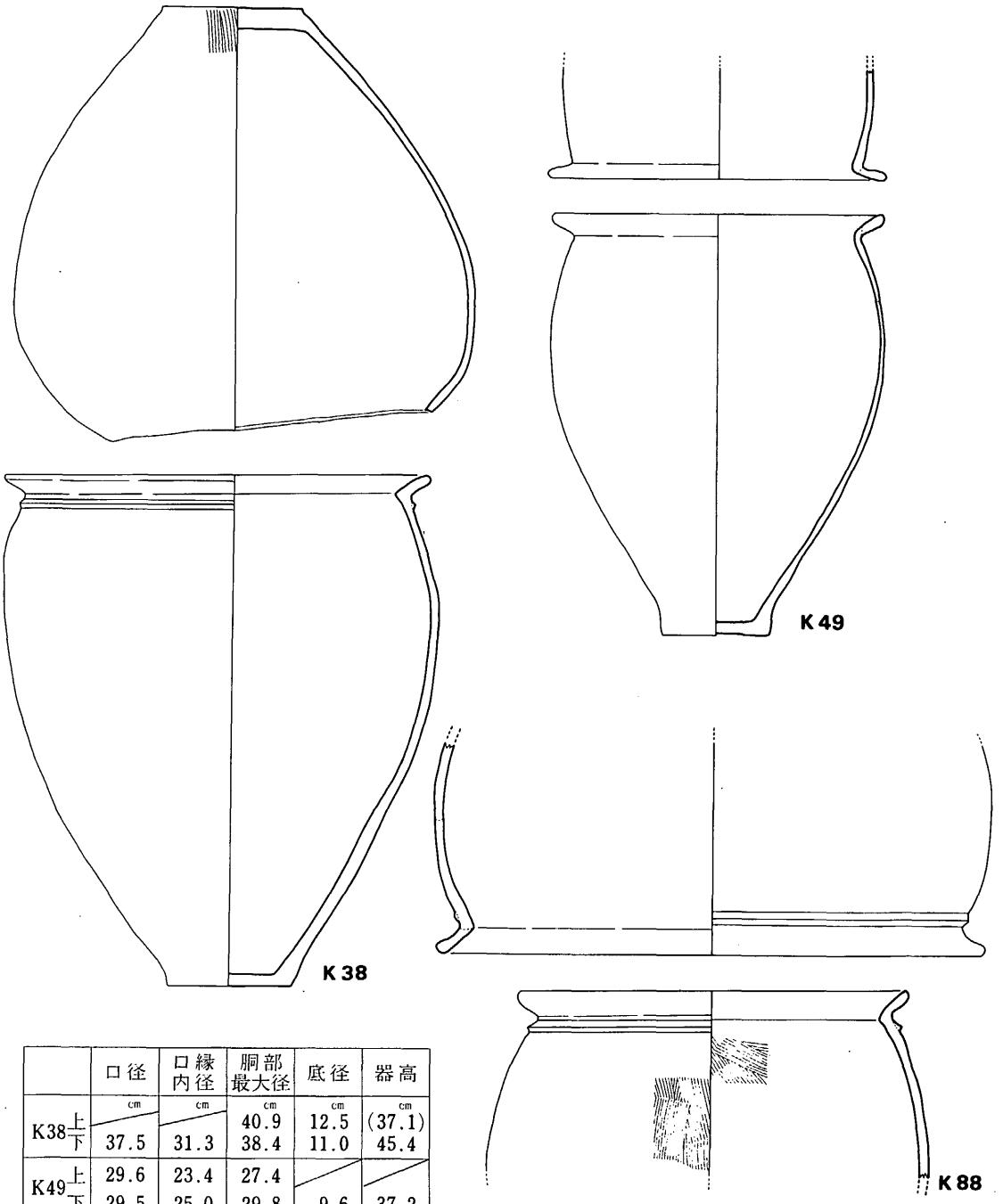
口　　径	62.3cm
口縁内径	50.2cm
胴部最大径	73.6cm
底　　径	12.8cm
器　　高	100.4cm

Fig. 108　109号・110号甕棺実測図(縮尺１/８)



	口径	口縁内径	胴部最大径	底径	器高
K 11	32.7 cm	27.9 cm	33.3 cm	10.4 cm	37.8 cm
K29 上			41.7		
K29 下	39.3	34.7	42	9.2	50.65
K35 上	35.3	29.8	33.1	9.4	37.3
K35 下	36.3	29.9	34.3	8.7	36.3

Fig. 109 11号・29号・35号甕棺実測図（縮尺 1 / 6 ）



	口径	口縁内径	胴部最大径	底径	器高
	cm	cm	cm	cm	cm
K38 上			40.9	12.5	(37.1)
K38 下	37.5	31.3	38.4	11.0	45.4
K49 上	29.6	23.4	27.4		
K49 下	29.5	25.0	29.8	9.6	37.2
K88 上	47.4	43.3	49.3		
K88 下	33.8	29.0	39.0		

Fig. 110　38号・49号・88号甕棺実測図（縮尺１/６）

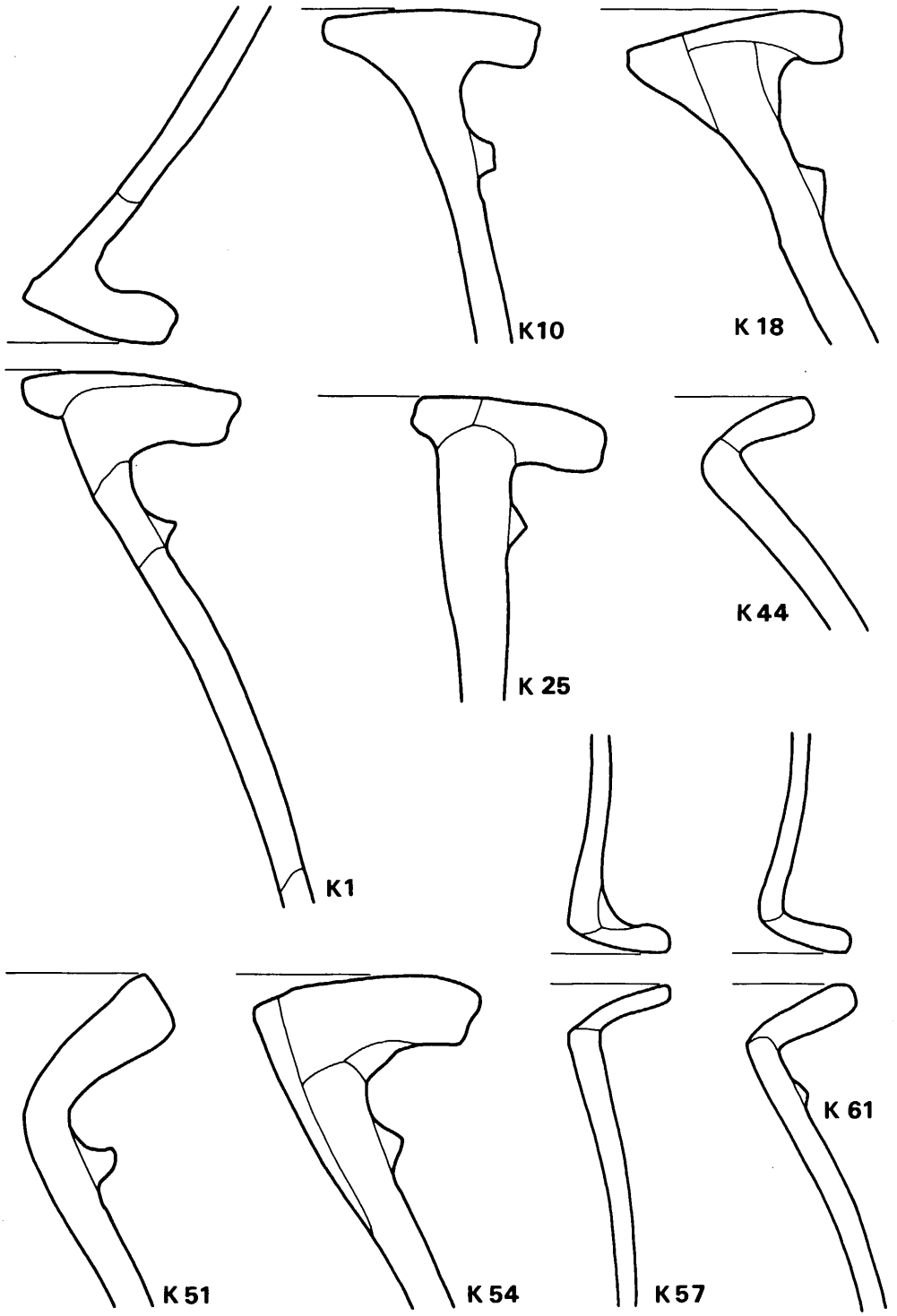


Fig. 111 甕棺口縁部実測図①(縮尺1/2)

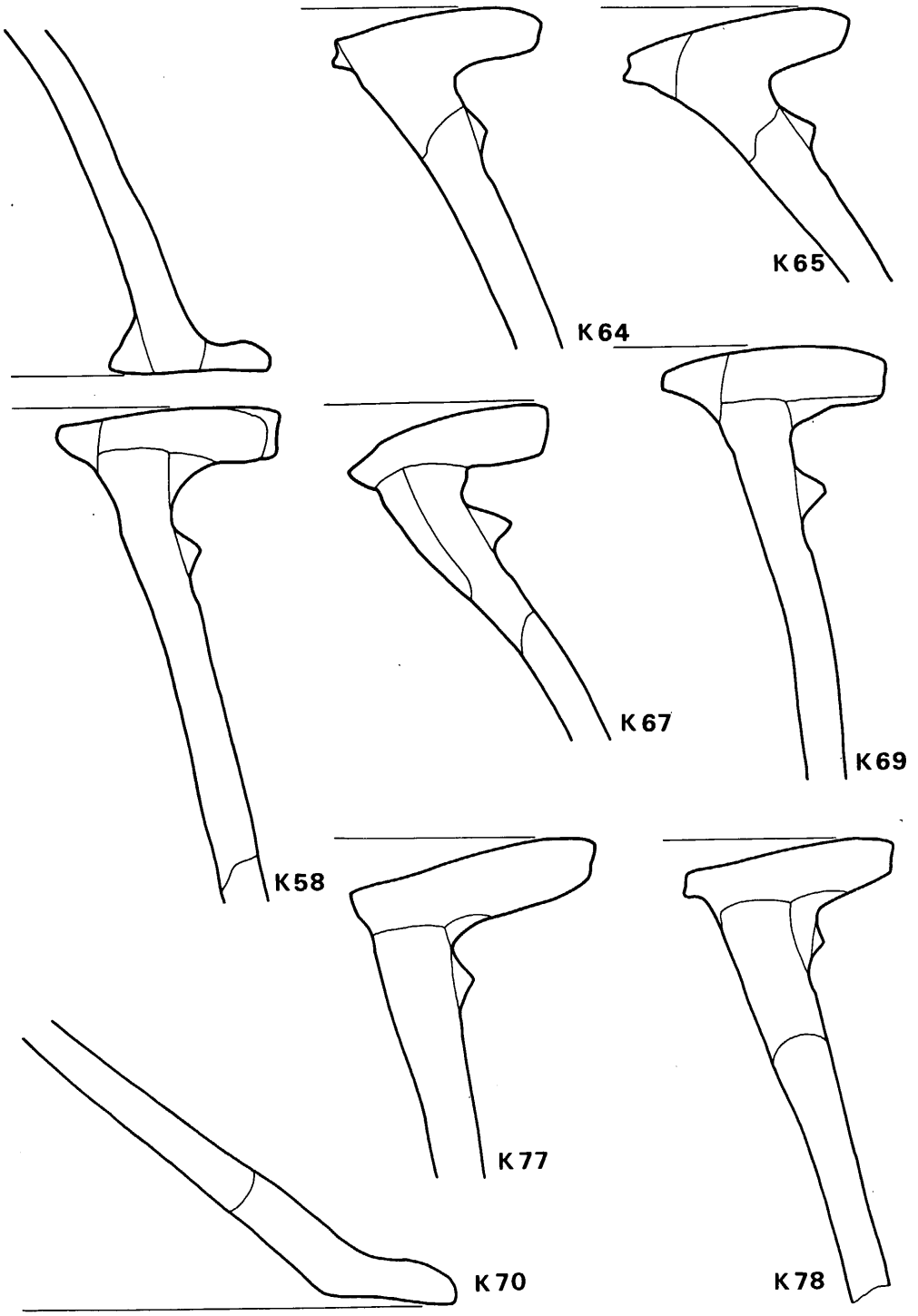


Fig.　112　甕棺口縁部実測図②(縮尺１/２)

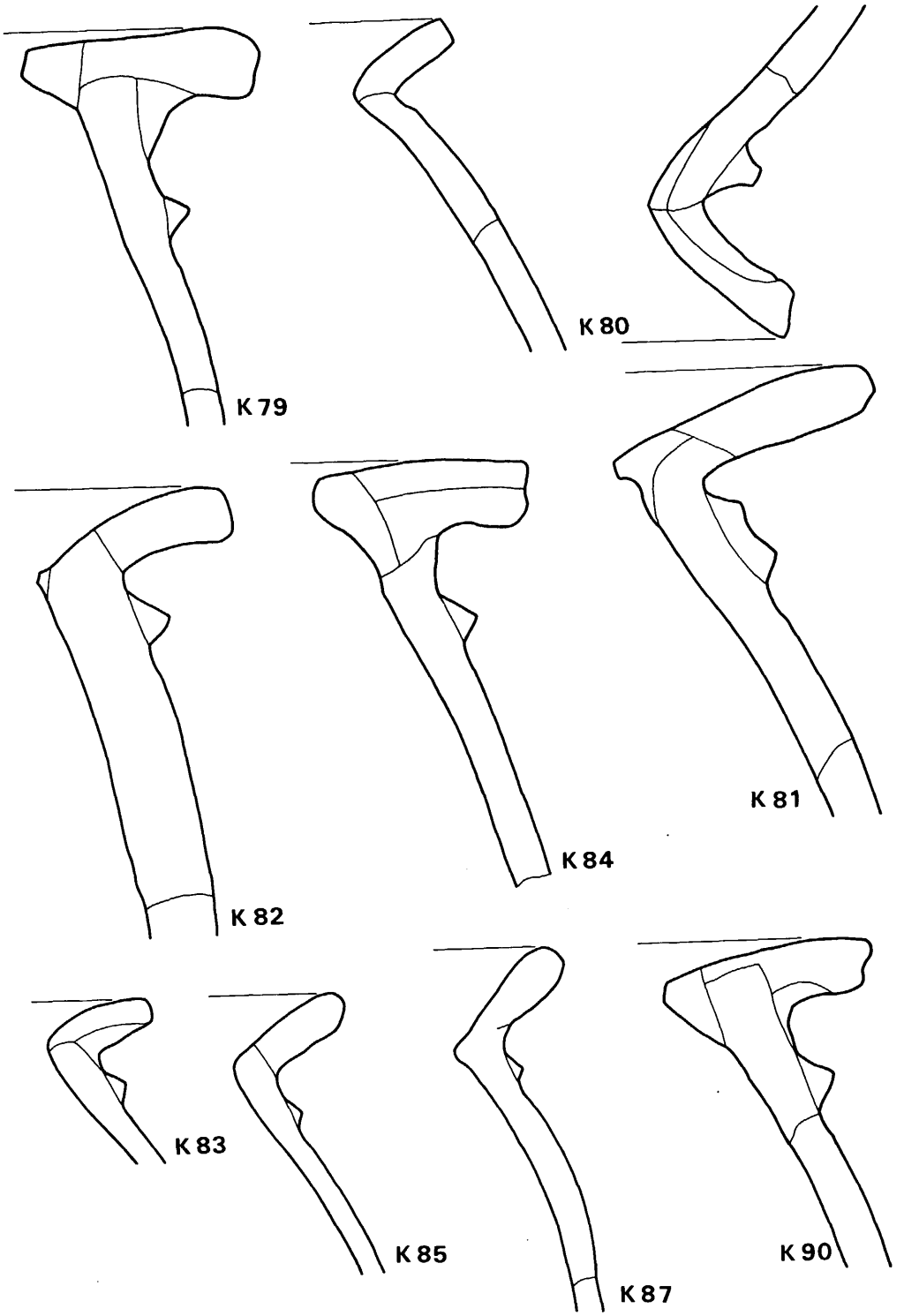


Fig. 113 甕棺口縁部実測図③(縮尺 1 / 2)

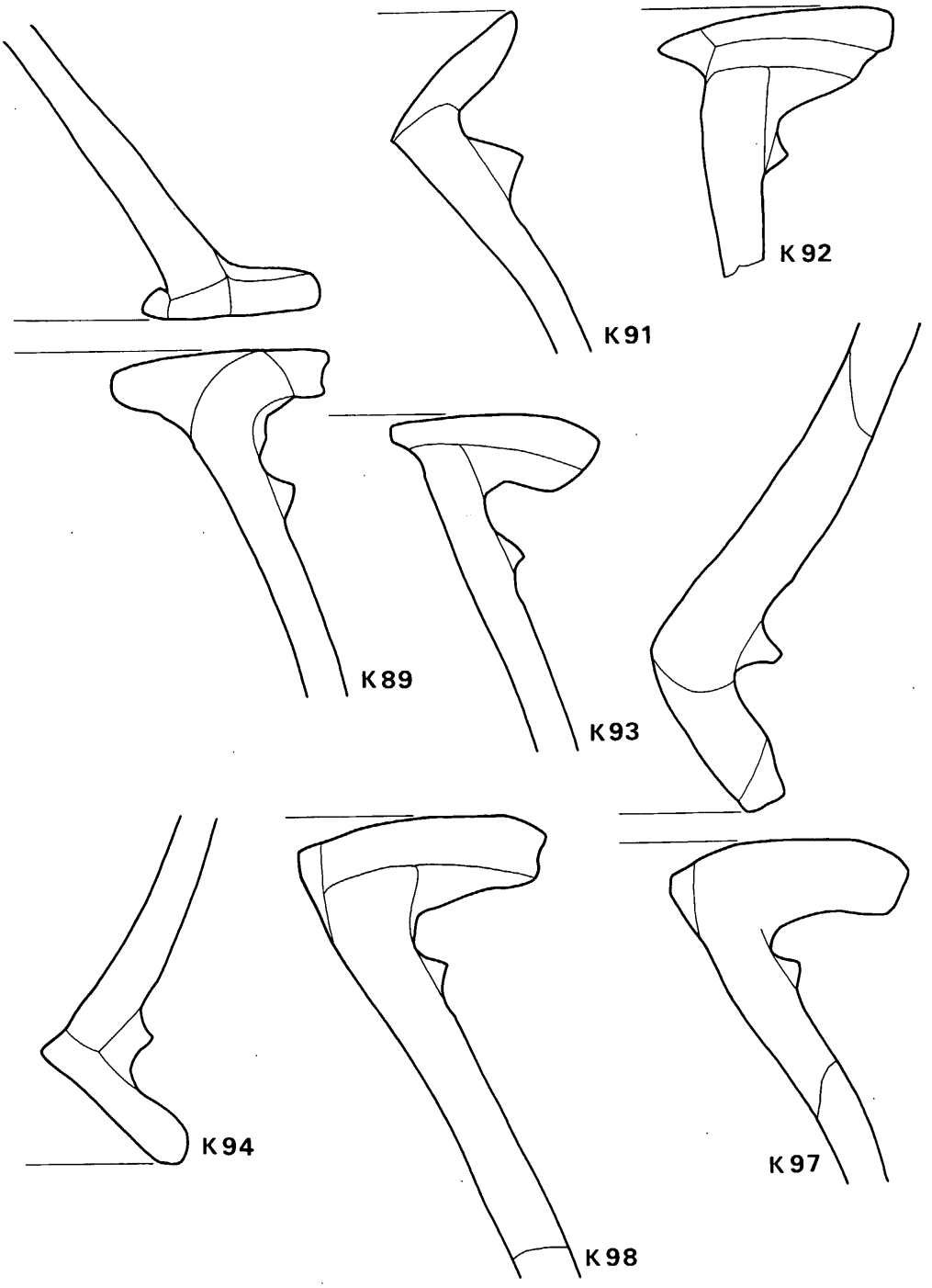


Fig.　114　甕棺口縁部実測図④(縮尺１/２)

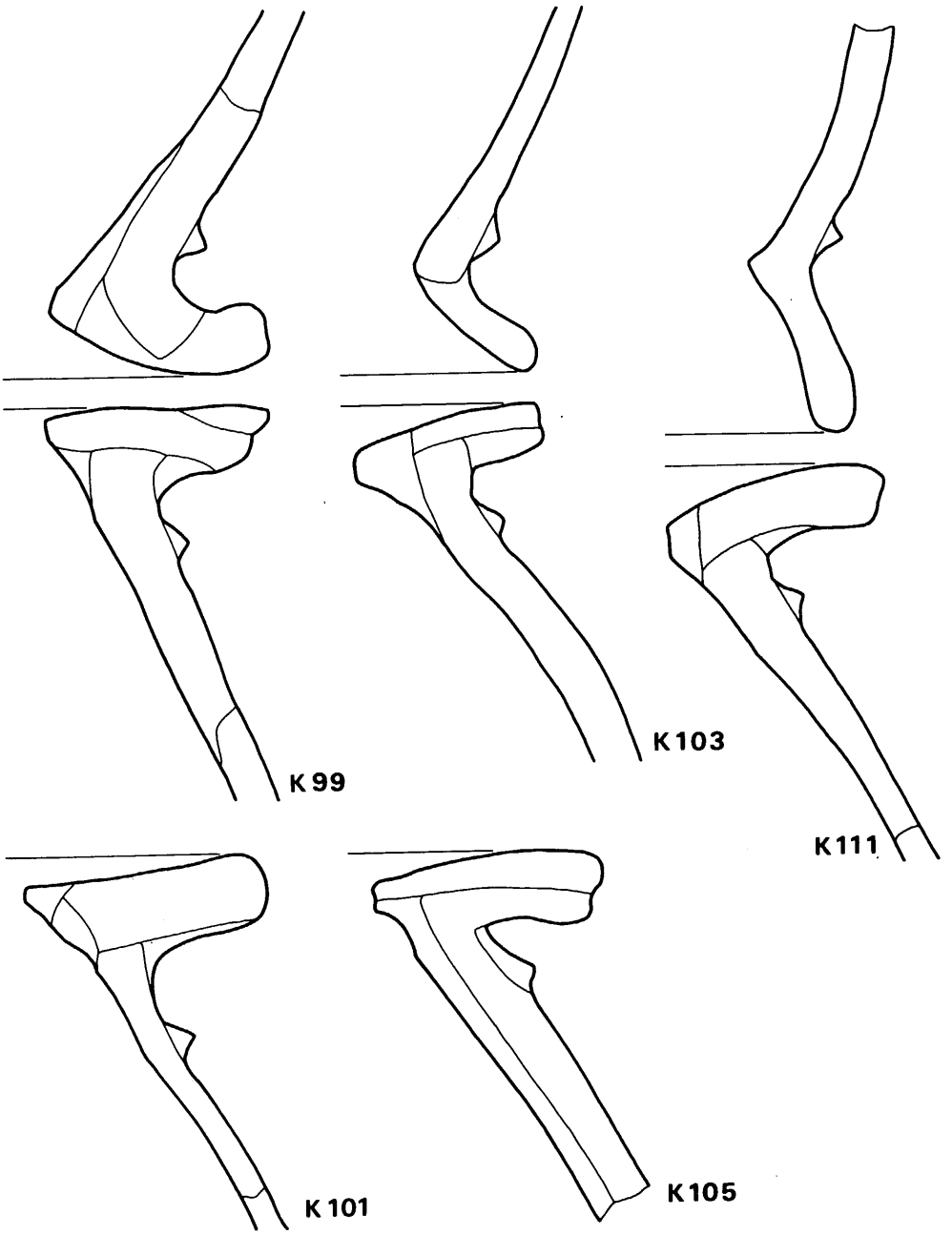


Fig. 115 甕棺口縁部実測図⑤(縮尺1/2)

B　人　骨

Tab. 2　道場山1地点人骨一覧表

番　号	性	年　令	保存状態	推定身長 (cm)	頭形示数	風習的技歯	備　　考
K　3	♂	成　年	○	156.1	77.1	無	20才くらい 赤色顔料附着
K　8	⚥	若　年	△	――	――	無	12才くらい
K　14	♂	成　年	◐	162.5	73.8	無	赤色顔料附着
K　15	♀	熟　年	◐	――	――	無	同　上
K　17	♀	熟　年	◐	――	――	―	同　上
K　21	⚥	不　明	◐	――	――	―	
K　22	♀	成　年	◐	――	――	―	
K　26	⚥	成　人	◐	――	――	―	
K　27	♂	成　人	◐	――	――	―	赤色顔料附着
K　41	♂	成　年	◐	――	――	無	同　上
K　48	♀	成　年	○	150.4	77.4	無	同　上 貝輪着装
K　51	♀	成　年	◐	――	――	―	
K　54	♀	成　人	◐	――	――	―	
K　70	♂	成　人	◐	――	――	―	
K　71	⚥	成　人	◐	――	――	―	赤色顔料附着
K　76	⚥	成　年	◐	――	――	―	同　上
K　81	♂	成　年	◐	――	――	―	
K　86	⚥	成　人	◐	――	――	―	
K　88	⚥	幼　児	◐	――	――	―	4才くらい
K　96	⚥	幼　児	◐	――	――	―	5～6才 貝輪2個伴出
K 100	⚥	成　年	◐	――	――	―	歯の破片少量 赤色顔料附着
K 105	⚥	成　人	◐	――	――	―	下肢骨小片のみ残
K 109	⚥	幼　児	◐	――	――	―	5～6才
K 110	⚥	若　年	◐	――	――	―	

道場山人骨　24体

〔凡例〕　性　⚥　性別不明

年令
- 乳児　0～1才　　成年　20～40才
- 幼児　1～6才　　熟年　40～60才
- 小児　6～12才　　老年　60～
- 若年　12～20才　　成人　20才以上なるも成・熟・老年のいずれか判定困難なもの

保存状態　○……良好　△……不良　◐……部分的残存

（永井昌文）

C 着装品

1 K－48人骨着装の貝輪（PL.63・64）

人骨は甕棺の傾斜がきついため、埋葬時の原状を保たず、下甕にずり落ちた状態で出土した。従って貝輪も前腕に着装された状態は窺い知ることができるが、かなり乱れている。

右前腕に15個、左前腕に2個、計17個着装されていた。貝輪番号は着装順とは逆に手首側から付した。貝輪の保存状態は概して悪く、計測等にたえ得るもの[註(1)]はr.№6のみであるが、全体としてはr.№1～№15の順で次第に大きくなっていく。すべてイモガイ縦型貝輪であるが、螺頭部がやや丸味をもつもの、角ばり逆二等辺三角形を呈するものの両者がある。

r№6の外側での長径80mm、最小幅26mm、最大幅58mm、内径64mm×46mm（最大幅）、高さは10mm

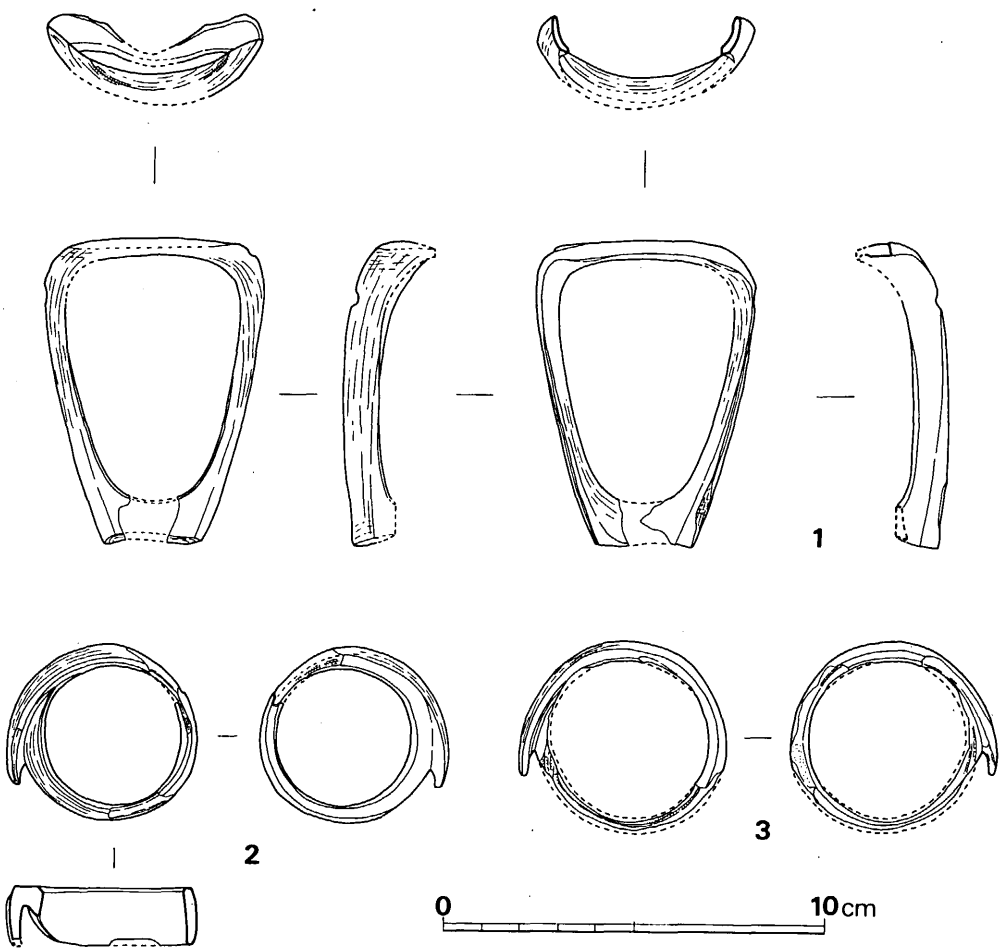


Fig. 116 貝輪実測図（縮尺1/2）1.K－48 r.No.6 2.K－96 No.1 3.K－96 No.2

を測る。イモガイ縦型貝輪では最も薄手のもので、時期的にも最も後出する。

被葬者は成年の女性であり、この種の貝輪は女性が着装する例が多く、又左前腕にも時に着装する。道場山K－48もこの例にもれない。

2　K－96出土の貝輪（PL. 63）

K－96の下甕の底部近くの甕棺埋置状態の最下位の部分に、№1（小さい方）を上にして重なった状態で出土した。K－96からは幼児の頭骨片・歯等が若干出土したのみで着装又は副葬されたものかは不明である。しかし貝輪は一般には着装された状態で出土するので着装品としてあつかう。

2個ともイモガイ横型貝輪で、小形品である。№1は外径47㎜、内径36㎜　高さ15㎜を測る。№2は外径51㎜（復原長）、内径42㎜（復原長）、高さ15㎜を測る。№2は甕内壁に密着していたためもあって保存状態が不良である。

3　イモガイ縦型貝輪の銅器化

イモガイ縦型貝輪には五島列島福江島大浜遺跡出土例のように逆二等辺三角形に近い形状を呈し、やや角ばった感じのものと、佐賀県呼子町大友遺跡例のように、全体に丸味を帯びたものの二種がある（Fig. 117）。この型の貝輪はおもに前期末～中期前半代におもに盛行し、この時期のものは分厚く、高さも20㎜を越えるものが多く重厚な感じを与える。道場山K－48人骨

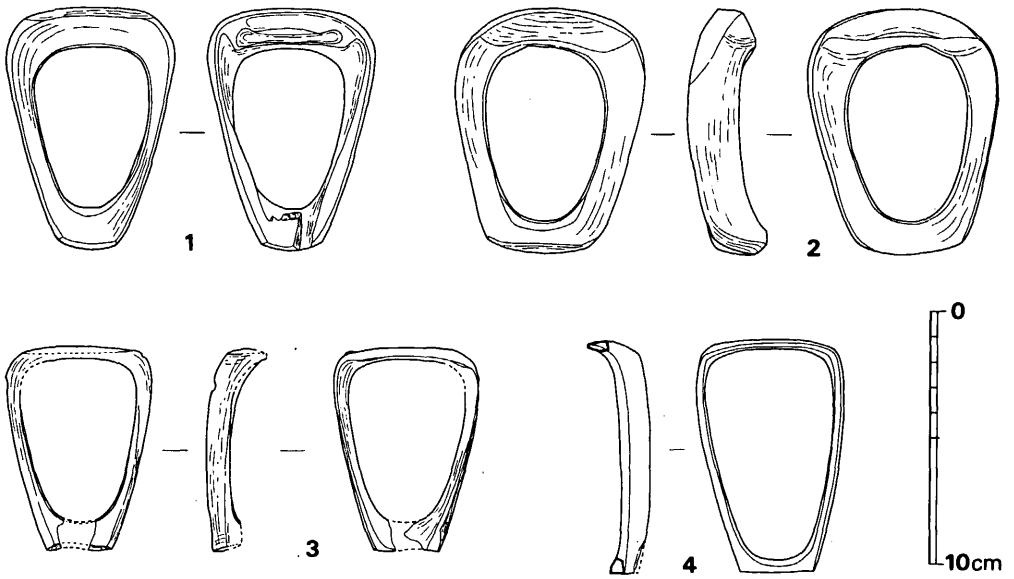


Fig. 117　貝輪実測図（縮尺1／3）1.長崎県福江市大浜出土イモガイ縦型貝輪
2.佐賀県呼子町大友K－1出土イモガイ縦型貝輪　No. 2
3.道場山K48イモガイ縦型貝輪 r.No. 6
4.唐津市千々賀出土銅釧

着装例は、さきにみたように、器壁も薄く、高さも10mm程度で全体に薄手で繊細なものである。

明治末年に出土したといわれる唐津市千々賀の銅釧はイモガイ縦型貝輪を忠実に模したものであるが（Fig. 117)、器厚、高さ(10mm～12mm)等は道場山K－48人骨着装例に酷似する。千々賀出土の銅釧は甕棺・壺等の時期が不明であるが、以上のことから道場山K－48と同時期以後に位置づけられよう。ゴホウラ縦型貝輪で立岩型のものにも、中間市上り立2号石棺人骨着装の貝輪等のように、かなり薄手になっているものもあり、ゴホウラ製貝輪も、イモガイ貝輪と同様繊細になる傾向がある。これらの繊細な貝輪が直接的には銅釧の原形となったものと考える。後期初頭の桜馬場出土の銅釧がゴホウラ製貝輪を模したものであるならば、その原形となった立岩型の貝輪からはかなりはなれ、抽象化された形態を示す。これらのことからも中期後葉頃に貝輪の銅器化がすでに開始されると考える。

註1．当初、手首側から番号を付し、右前腕着装の貝輪は№15まで取りあげたが、螺頭部の破片が1個余ったため、右前腕着装個数は16個と認定していた。

福岡県教育委員会「祖先のあしあと」九州縦貫自動車道関係筑紫野市所在遺跡の調査報告会資料1974　しかし復原の過程でこれは№4と同一個体であることが判明したので、あらためて15個に訂正したい。

D　副葬品

1　鉄　戈

K－100の下甕の北側よりに、鋒を北西方向に向けて出土した。関には木質が残存し、柄が装着された状態で副葬されたことがわかる。鉄戈の位置は甕棺の傾斜がつよいので若干はずれているであろうが、ほぼ当初の状態を保っていると思われる。木質部は関に残存しているのとは別に、上甕よりにも若干残っており、柄は上甕方向にのびていたと想定される。従って着柄は身の正中線に対して鈍角をなしていると考えられる。

鉄戈の全長390mm、身の最大幅43mm、最小幅38mm、関の残存長135mm、復原長144mm、身の正中線に対する関の角は102°、茎の長さ17mm、幅11mm、厚さは身の最大幅部分で8mmで、関・茎にいくにしたがってうすくなっている。身の最小幅部で6mm、緊縛孔のところで4mm、茎で3mmを測る。緊縛孔は約4mmの方形をなし、両緊縛孔ともに革紐と思われるものが残存している。身の断面は菱形を呈し、鎬を有するが、稜線はやや不明瞭である。鍛造品である。

この鉄戈には出土状態からいって上面、実測図の裏面の、身から関へ弯曲するところにタタ

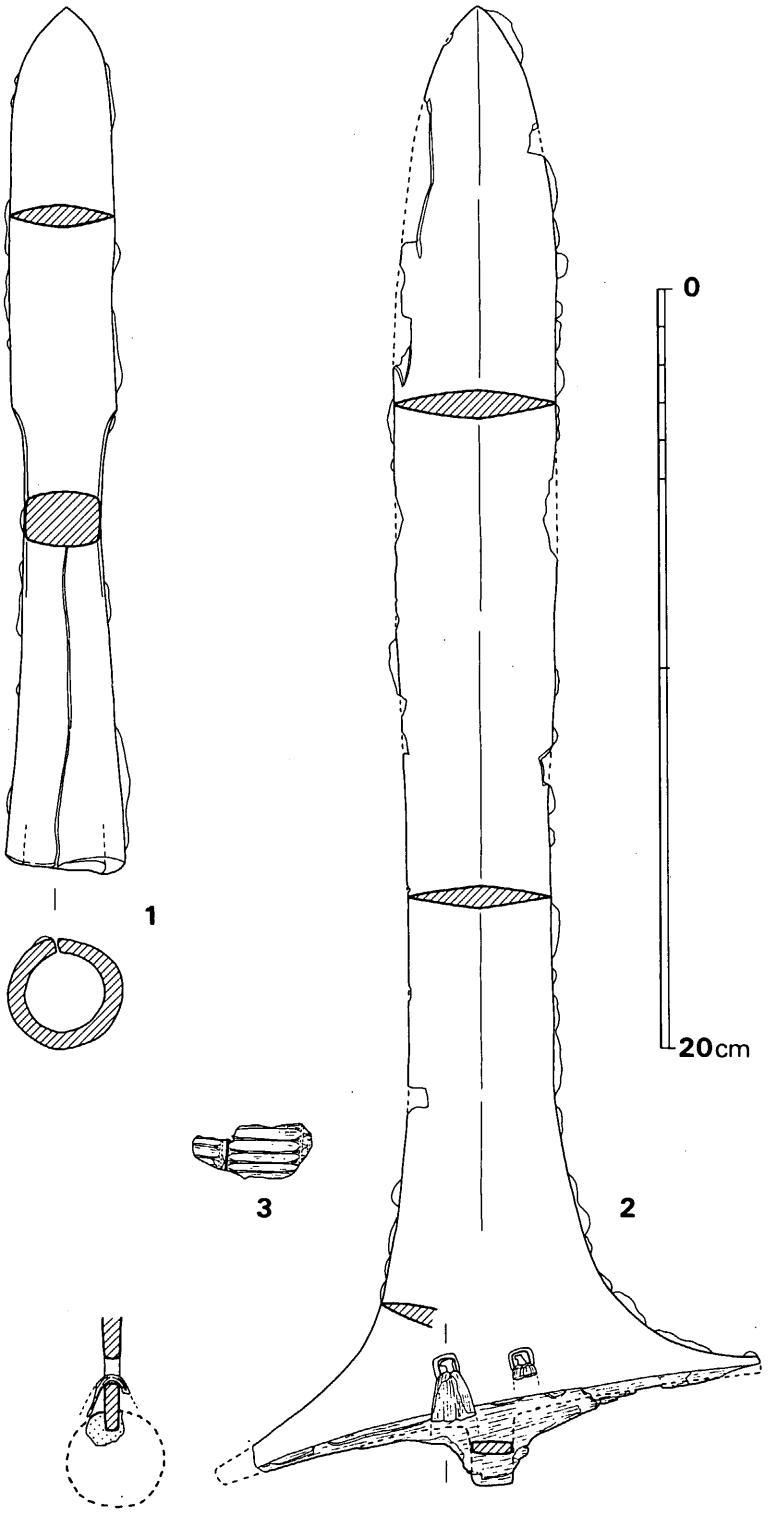


Fig. 118　副葬鉄器実測図(縮尺1/2)
1. 鉄矛　2. 鉄戈　3. 鉄戈付着蓆

ミ表状の蓆が付着していた（Fig. 118、PL. 61 ）。これは縦糸を2本ずつ使用し、その間隔は19 mm～21 mmで現在のタタミ表と形状・編み方ともにほぼ同様なものである。これは甕棺の項で述べたように、遺体を巻いた蓆の一部が鉄戈に銹着したものと考える。

2 鉄矛

遺跡の北半部の遺構確認面で出土したもので、出土と同時に取りあげられたため、棺外副葬品だと思われるが残念ながらどの甕棺に伴うものかわからない。この鉄矛に関して小田富士雄氏が立岩の報告書のなかで、橋口の教示として、K－100の棺外副葬としているが、これは小田氏のまちがいである。[註(1)]

全長228 mm、身長107 mm、身幅27.5 mm、袋部長117 mm、身の断面は杏仁形をなし厚さは6mm、袋口には土砂等が充塡し、奥行きは不明。袋口の外径29 mm、内径21 mmを測る。鍛造品である。全体の形は下伊川例に似る。

3．まとめ

弥生時代の鉄戈・鉄矛の一覧表と、掲載可能な実測図を提示する（Fig. 119、120）。計測値は立岩の報告書における小田氏論文と若干異なる点もあるが、これは実測図の個性のあらわれであろう。

小田氏は鉄戈を短鋒形式（須玖型）・中鋒形式（門田型）・長鋒形式（立岩型）に分類し、短鋒から中鋒の段階で銅戈から写されたもので、短鋒→中鋒→長鋒の変遷をたどったであろうと推察し、短鋒は須玖Ⅰ式（中期中葉）～須玖Ⅱ古式期（中期後半の古式期）、中鋒は須玖Ⅰ式（中期中葉）～須玖Ⅱ式（中期後半）、長鋒の流行期を須玖Ⅱ式（中期後半）、下限を後期初頭から前半としている。この見解はほぼ妥当なものと考える。

細形銅戈を模した鉄戈[註(1)]が中期中葉にすでに出現し、以後副葬品の地位を銅戈にとって変っていく。須玖岡本出土の鉄戈はその大きさ・形状からして細形銅戈を模したものであることはまちがいない。小田氏が中鋒形式にいれた御床松原例は、身幅がほぼ一定し、復原長は約260 mmぐらいで、関の復原長も91 mmと形態的には須玖例にひきつづくものであり、銅戈と対比するなら中細銅戈と大きさ・形状ともほぼ一致する。唐津市中原例は長さは332 mmで中広銅戈とほぼ同様な長さをもつが、身幅32 mm～44 mmと細く、鋒部に近いところでやや広がる傾向をもつ。これからいえることは、鉄戈の出現自体は銅戈を模すところから始まるとしても、かなりはやい時期に鉄戈自体が長大化し、独自の発展をとげたようである。唐津市中原K－7は中期中葉の甕棺であり、この時期には細形銅戈がまだ甕棺の副葬品として存在する。銅戈が副葬品としての地位を失ない[註(2)]、祭祀的な様相をつよめ埋納品として出現するのは、春日市千歳町、福岡市拾六町石丸[註(4)]等の例からして中細銅戈の段階からであるが、小田氏の分類にしたがうならば[註(3)]、中細

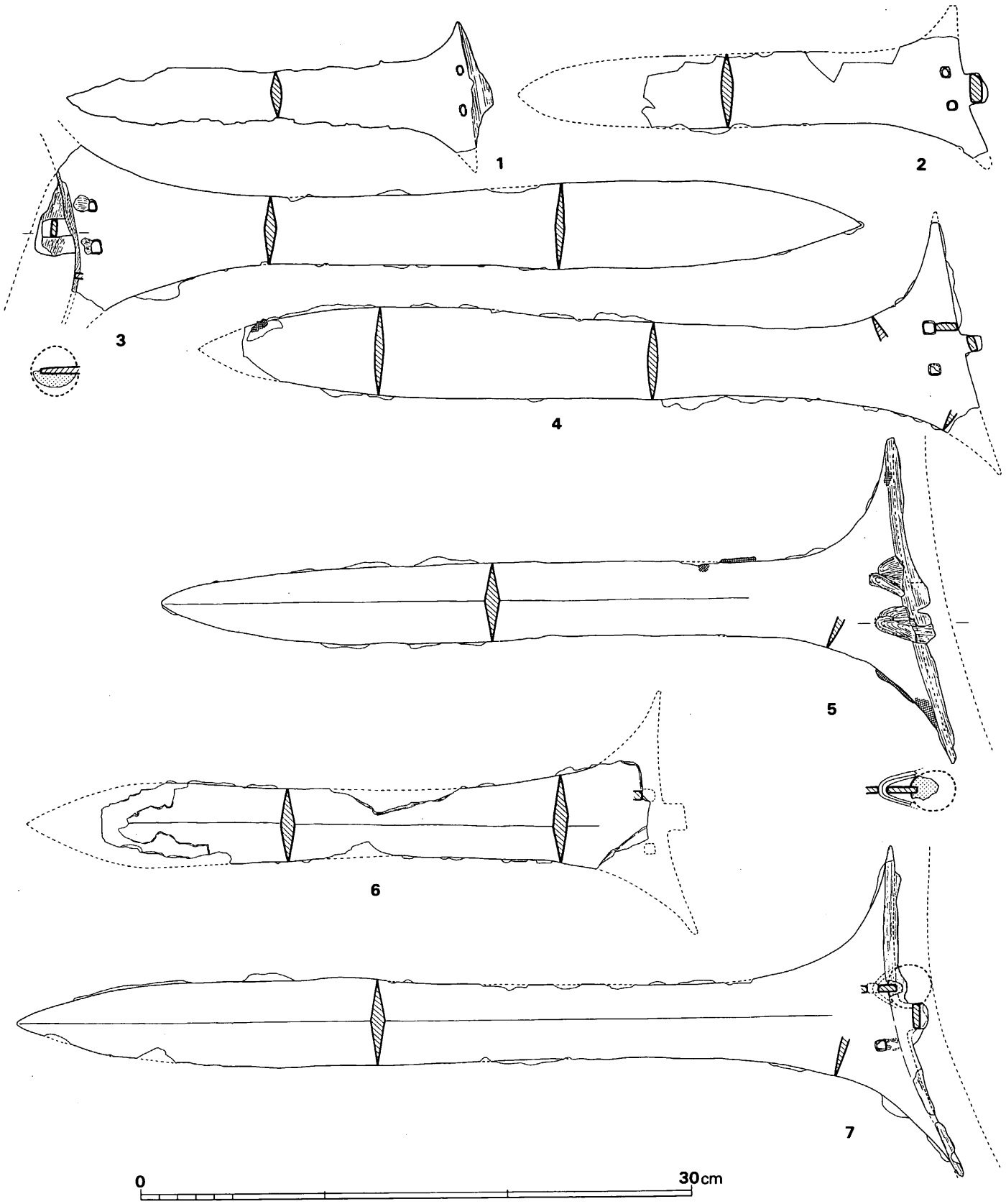


Fig. 119　鉄戈実測図（縮尺 1 / 3）

1 須玖　2 御床松原　3 吹田　4 上り立
5 立岩堀田 K 34　6 山崎　7 立岩堀田 K 35

銅戈は中鋒形式の鉄戈に模されていくということであるから、その時期を中期中葉まで遡ぼらせねばならない。春日市大南のV字溝より出土した広形銅戈の溶范は後期前葉の土器を伴っており、広形銅戈は後期前葉に位置づけられると考える。これから中広銅戈・中細銅戈と遡ぼって考えるならば、中細銅戈が中期中葉にまで遡ぼり得ることはあながち否定できないが、さきにも述べたように、この時期には細形銅戈がまだ甕棺の副葬品として存在しているので、今後の検討を要しよう。[註(5)]

鉄戈の着柄法は本来は身の正中線に対して鈍角をなすものである。立岩の2例に関して小田氏の報文では身の正中線に対して鋭角をなすと推察している。門田例は柄の痕跡を約60 cmたどれ、それは身の正中線に対して鋭角をなしていたという。従って身の正中線に対して鋭角をなす例も存在することはまちがいない。道場山例では身の正中線に対して鈍角をなすと思われる。[註(6)]吹田例では、木柄が残存したものでは特異なもので、身の正中線に対する関の角は98°であるが、木柄は関に並行せず、関の角度とは逆向きに身の正中線と110°の鈍角をなす。従って、着柄法は身の正中線に対して鈍角をなすのが基本であるが、若干例鋭角をなすものも出現しつつあったといえる。

鉄戈は確実なもので6例が甕棺内副葬・1例が石棺内副葬・4例が甕棺外副葬である。甕棺内にはいるとするならば柄の長さはおのずから限定され、50～100 cmのものを想定できる。棺外副葬のものでも、門田例からして長いものではなかったことがわかる。

石剣・石戈・細形銅剣・銅戈が実用に供された可能性の大なることをかつて考察したが、鉄戈をはじめとする鉄製武器も当然実用の武器であったといえる。鉄戈は弥生時代で姿を消し、[註(7)]後代にひきつがれないが、柄の長さに対して、身自体が長大化したために、句兵としての本来の用途からは不合理になり消滅せざるを得なくなったものであろう。

ともあれ、弥生時代に出現したこの鉄戈は中国・朝鮮に類例を求められず、日本独自の武器であることはまちがいなく、鉄製武器としても最もはやく出現するものの一つである。鉄鏃は中期中葉に、鉇は前期末に確実に出現しており、前期末頃に存在する鉄素材と考えられる鉄塊等を原料として、この時期には北九州で鉄製品の生産が開始された可能性にかつて言及した。このように北九州でも当然朝鮮等の影響を受けつつではあろうが、独自に鉄製品生産への条件[註(8)]は醸成されつつあった。それと前漢後半代に急速に鉄器が普及し、それが東アジア全体に波及していくという国際的契機ともからみあって鉄戈等が出現し、鉄戈・鉄矛・鉄剣・鉄刀等が急速に普及し、青銅製武器にとって変る。副葬されたこれらの武器はまさにその反映であろう。

鉄矛については小田氏は短鋒形式（下伊川型）、中鋒形式〔良洞里形――A類〕、〔道場山型――B類〕、長鋒形式（元松原型）に分類するが、道場山例は下伊川例に酷似するのでむしろ短鋒型式に入れるべきもので、属する時期も中期の可能性が強い。

（橋口達也）

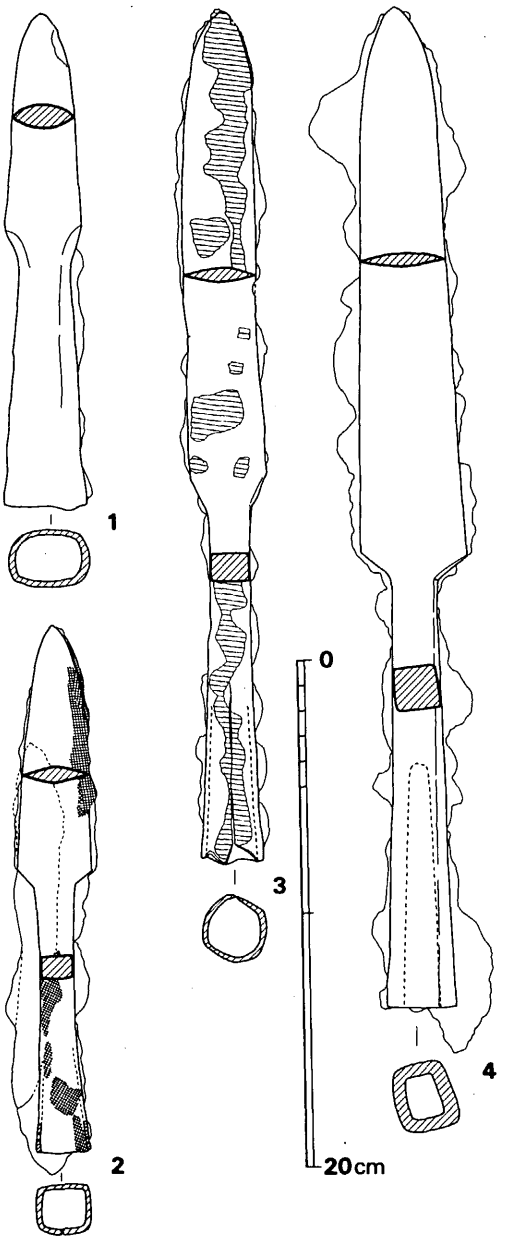


Fig. 120 鉄矛実測図(縮尺1/3)
1. 下伊川　2. 立岩K36
3. 立岩D－2　4. 元松原

註1. 立岩遺跡調査委員会編「立岩遺跡 5章4.」 1977

2. 九州大学文学部考古学研究室「北部九州（唐津市）先史集落遺跡の合同調査」 1966

3. 1969年出土。48本。

4. 1975年出土。3本。福岡市教育委員会調査

5. 春日市教育委員会が実施した1976年度の調査による。

6. 井上裕弘氏の御教示による。

7. 穂波町教育委員会「スダレ遺跡」穂波町埋蔵文化財調査報告書 第1集、1976

8. 橋口達也「初期鉄製をめぐる二・三の問題」考古学雑誌 60—1 1974

Tab. 3 鉄 戈 一 覧 表

	出土地名	時期	出土状態	伴出遺物	長 mm	身幅 mm	身厚 mm	関長 mm	茎長 mm	茎幅 mm	身の正中線と関のなす角	備考	参考文献
1	福岡県春日市須玖岡本	(中期)	甕棺内		233	26	7	復原長 88 残存長 71	10	10	96°	関は外弯 木柄部残痕	九州考古学会編「北九州古文化図鑑」第一輯 1950
2	〃 糸島郡志摩町御床松原	(中期)	工事中出土		復原長 250～300 残存長 190	40	6	復原長 91 残存長 65	11	17	102°	関はやや内弯	
3	〃 甘木市栗山	(中期)	甕棺内		340	45		復原長 110 残存長 55				鎬あり 木柄部残痕	中山平次郎「筑前国朝倉郡福田村平塚字栗山新発掘の甕棺内遺物」考古学雑誌15－4 1925
4	〃 朝倉郡夜須町東小田峰	中期後半	甕棺外	内行花文日光鏡	残存長 220	45		復原長 170 ～ 180 残存長 80	15	9		鎬あり 木柄部残痕 関は内弯	中山平次郎「クリス形鉄剣及び前漢式鏡の新資料」考古学雑誌17－2 1927 小田富士雄「4鉄器」 立岩遺蹟調査委員会編『立岩遺跡』1977 所収
5	〃 朝倉郡夜須町吹田	中期後半	甕棺外		450	38～48	6	復原長 150 残存長 66	15	11	98°	木柄部残痕 紐の痕跡 身の主軸と木柄の角 110° 関は内弯	柳田康雄「福岡県朝倉郡夜須村吹田発見の鉄戈」考古学雑誌48－2 1960
6	〃 飯塚市立岩堀田K34	中期後半	甕棺内	日光鏡1 ゴホウラ製貝輪14	418	42～45	8	183	9	14	100°	関は内弯。木柄・革紐の痕跡	立岩遺蹟調査委員会編「立岩遺跡」 1977
7	〃 飯塚市立岩堀田K35	中期後半	甕棺内	内行花文清白鏡 鉄剣、棺外口縁部よりガラス管玉	500	40～47	8	188	12	13	102°	関は内弯 木柄・革紐の痕跡	〃
8	〃 中間市上り立2号石棺	中期後半 ↓ 後期初頭	石棺内	ゴホウラ製貝輪8	復原長 442 残存長 405	38～50	6	復原長 150 残存長 105	10	10	106°	関は内弯	永井昌文・小田富士雄・橋口達也「福岡県中間市上り立弥生墳墓群調査報告」九州考古学33－34 1968
9	〃 春日市門田K24	中期後半	甕棺外	鉄剣1	340	37～44	45	164	推定長 12	推定長 10	102°	着柄は鋭角 関は内弯・有樋	福岡県教委「昭和50年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」1976 計測値は井上裕弘氏の御教示による
10	〃 春日市門田K27	中期後半	甕棺外	鉄剣2	332	40～52	55	157	15	10	102°	関は内弯	〃
11	〃 筑紫野市道場山K100	後期初頭	甕棺内		390	38～43	8	復原長 144 残存長 135	17	11	102°	関は内弯 木柄部・革紐等残痕	
12	佐賀県唐津市中原K7	中期中葉	甕棺内	鉄矛1（棺外） 碧玉管玉9 ガラス小玉1	332	32～44	4	復原長 112 残存長 110	15	13	100°	関はほぼ直	九州大学文学部考古学研究室「北部九州（唐津市）先史集落遺跡の合同調査」 1966
13	〃 神埼郡神埼町二子山崎	中期後半	工事中出土		復原長 350～400 残存長 300	39～57	8						橋口達也「佐賀県脊振南麓における弥生社会の発展」九州考古学41～44 1971

Tab. 4 弥生時代鉄矛一覧表

	出土地名	時期	出土状態	伴出遺物	全長 mm	身長 mm	身幅 mm	身厚 mm	袋部長 mm	備考	参考文献
1	福岡県飯塚市下伊川	中期中葉	甕棺内		194	85	(関部) 31	10	94		
2	〃 立岩堀田K36	中期後半	甕棺内	鉄刀子・鉇	209	97	(関部) 31	7	106	目釘穴2、布片付着	小田富士雄「4鉄器」立岩遺蹟調査委員会『立岩遺蹟』1977
3	〃 立岩堀田2号土坑墓	中期	土坑墓内		338	185	28	6	141	蓆状のもの錆着	〃
4	福岡県遠賀郡岡垣元松原	中期	(石棺)	鉇	395	217	32～42	5.5	170		〃
5	〃 筑紫野市道場山	(中期)	(棺外)		228	107	27.5	6	117		
6	佐賀県唐津市中原K－7	中期中葉	甕棺墓坑上面	鉄戈1（棺内） 碧玉製管玉9 ガラス小玉1	残存長 289	200	31～38	5	残存長 74	布片付着	九州大学考古学研究室「北部九州（唐津市）先史集落遺跡の合同調査」 1966
7	〃 三養基郡上峰村二塚山IIK－46	後期初頭	甕棺外目貼粘土中	朝鮮系仿製鏡（漁隠洞遺跡出土と同范）	332					先端は剣菱形の陵角をなす。	石隈喜佐雄・七田忠昭「佐賀二塚山遺跡の調査」考古学ジャーナル No.138 1977. 7 佐賀県教育委員会「二塚山遺跡群――佐賀県東部中核工業団地発掘調査展示会資料―」 1977

Ⅳ 道場山２地点の調査

Ⅳ　道場山２地点の調査

１　調　査　の　経　過

道場山２地点の調査は、1974年（昭和49年）５月８日から８月19日まで実施した。

調査の担当者は下記のとおりである。

調査担当者	福岡県教育庁管理部文化課	技師	川述昭人
調査補助員			川述公紀
庶務担当者	福岡県教育庁管理部文化課	主事	山本文和
	同	嘱託	因　将太
整理担当者	同	嘱託	岩瀬正信

以下に、調査日誌によって経過をたどってみよう。

５月８日(水)　本日より発掘調査を開始する。

５月９日（木）～11日(土)　遺構面まで、かなりの土量があるためブルドーザーによる表土剝ぎ作業を行う。当該地は最近まで墓地であったので、栄法寺に頼んで、供養をしてもらう。

５月13日(月)～14日(火)　ブルドーザーによる表土剝ぎ作業を行う一方、東南部から遺構検出作業を開始する。両日で甕棺を６基検出するが、いずれも半分以上を欠損している。

５月15日(水)～17日(金)　東南部の遺構検出作業を行う。甕棺は前期のものであり総数10基になる。土坑墓を検出する。

５月18日(土)～23日(木)　東南部の斜面中段付近の遺構検出作業を行う。

５月24日(金)～31日(金)　遺構検出作業と遺構掘りを行う。

６月１日(土)　１号木棺墓は副葬壺をもっており、２号木棺墓からも副葬小壺を検出する。西南部の表土剝ぎ作業を開始する。

６月３日(月)～５日(水)　西南部の表土剝ぎ作業を行う。１号住居跡覆土中から石鏃、弥生式土器片を検出する。

６月６日(木)～６月12日(水)　西南部の作業を一時中断して、東南部の遺構掘りを行う。

６月13日(木)～15日(土)　東部平坦面の表土剝ぎ作業を開始するが、遺構面までは盛り土が厚く覆っているためユンボを入れる事にする。

６月18日(火)～22日(土)　東部平坦面はユンボによる表土剝ぎ作業を行い、あわせて遺構掘りを行う。

６月23日(日)～26日(水)　北側斜面の表土剝ぎ作業をユンボで行い、遺構の検出作業をする。

6月27日(木)　雨のため中止

6月28日(金)～7月3日(水)　西部地区の遺構検出作業と遺構掘りを行う。住居跡・貯蔵穴を掘り、石鏃・弥生式土器片を検出する。

7月4日(木)～6日(土)　1号住居跡は遺構掘りを続行し、土層観察の畦を残してほぼ完掘する。円形プランであり、西北部には貯蔵穴がある。東部地区南斜面の遺構検出作業を行う。

7月8日(月)～13日(土)　遺構掘りを行う。

7月15日(月)～16日(火)　西北部の崖面にトレンチを設け、土層断面図を作製する。西北部と東北部の表土剝ぎ作業を行う。

7月17日(水)　雨のため中止

7月18日(土)　貯蔵穴と住居跡の土層断面図を作製する。

7月22日(月)～26日(金)　貯蔵穴・木棺墓・土坑の実測と、遺構掘りを行う。

7月27日(土)～29日(月)　雨と休日のため、現場作業は休む。

7月30日(火)～8月3日(土)　実測と写真撮影を行う。新墓の清掃をする。

8月5日(月)～8月14日(火)　実測と若干部分の補足調査、遺構の清掃と写真撮影を行う。

8月15日(水)～19日(土)　実測を行い、終了する。

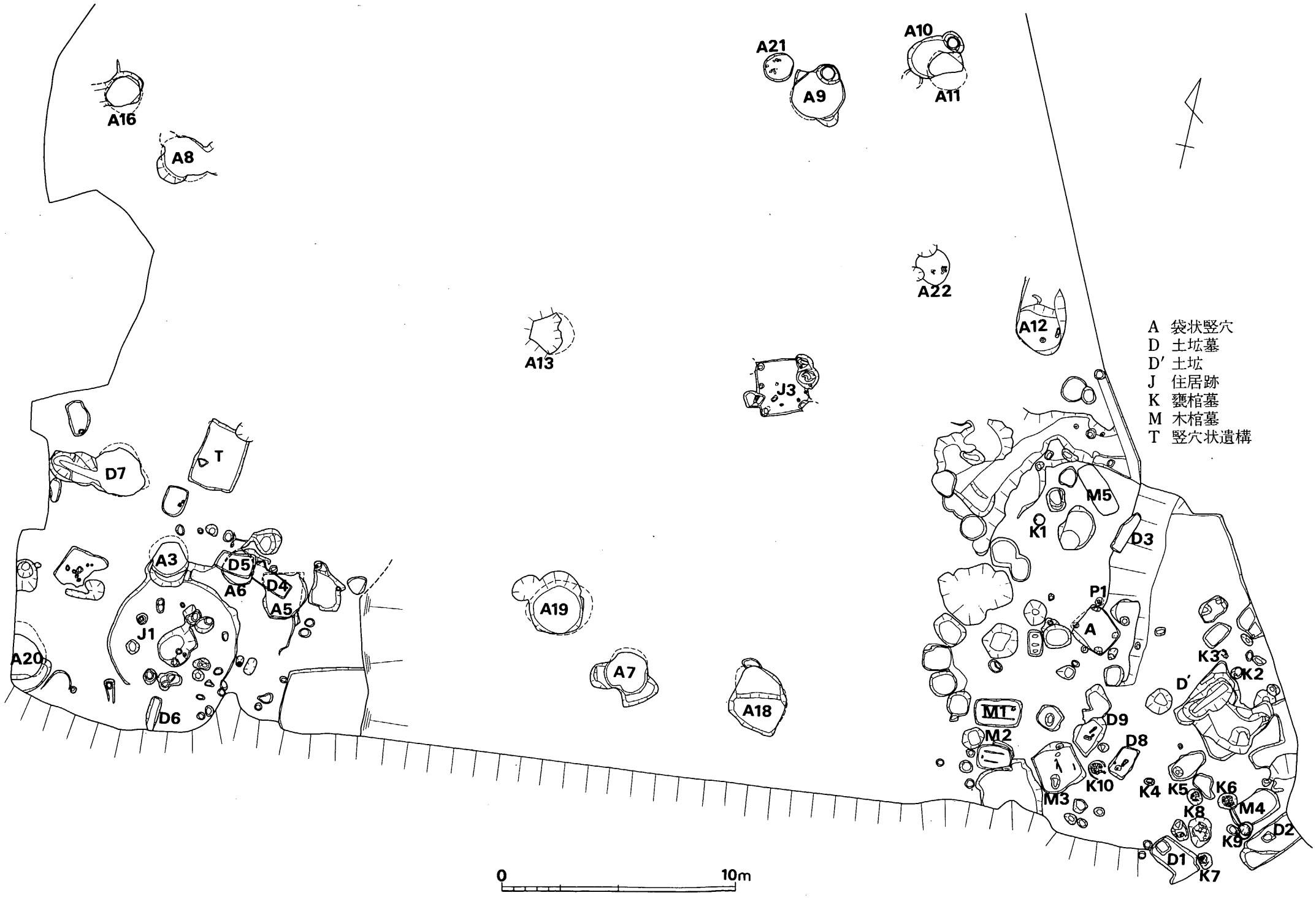


Fig. 121　道場山２地点遺構配置図（縮尺1/200）

2　調査の内容

標高58ｍの丘陵の頂部から南緩傾斜面に遺跡は所在する。道場山１地点とは、もともと同一の丘陵であったが、当刻地の東側に県道が付設される際に１・２地点の中央部は削り取られた。当地は、調査開始直前まで墓地であったため、丘陵頂部は著しく削平されて旧状を変じていた。また、最近までは土葬が主であったため、墓を造る際に遺構が破壊を受けており、我々の調査に際しては、まずこの新しい墓を清掃して、遺構を検出しなければならなかった。改葬もれの新しい人骨が多数発見され、調査には余分な神経を使わなければならなかった。当該地の検出遺構は弥生時代前期の土坑墓２基・木棺墓５基・甕棺墓10基、前期末の円形住居跡１軒と他に住居跡１軒、それに貯蔵穴18基である。古墳時代のものとしては、遺構が一部しか残っていないので確証はないが、方形周溝墓と思われるもの１基が、歴史時代のものとしては土坑墓が３基検出された。

(1)　弥生時代の遺構と遺物

A　木棺墓

弥生時代の木棺墓は５基検出されており、これはいずれも墓坑底面に板材を使用したと思われる細長い帯状の掘り込みをもったものである。木棺墓は当遺跡の南側緩傾斜の東部地区にすべて集中している。なお、木棺墓のうち２基には副葬小壺を有していた。

１号木棺墓（Fig. 122, PL. 70）

隅丸長方形を呈する長さ2.0ｍ、幅1.2ｍの墓坑のほぼ中央に棺は埋置されている。棺の主軸はＮ－81°－Ｅであり、頭位を東にとるものと思われる。墓坑は上面を削平されており、底面までは50cm程の深さである。底面には、幅３cm～４cm、長さ140cm～150cm　深さ５cm～６cmの溝状の掘り込みがあり、粘土が詰っていた。これは両側板の掘り込みと思われる。なお両小口壁には溝状の掘り込みと粘土は見られない。小口板が側板をはさむものと思われる。棺は内法で長さ140cm、幅50cmのものである。墓坑底面は平坦でなく、地山上に若干の土を敷いて床面としている。北東の隅、即ち頭部の右側の床面に接して副葬小壺（Fig. 142－１）が１個検出された。この土器は弥生時代前期の板付Ｉ式に属するものである。

２号木棺墓（Fig. 122, PL. 70）

南斜面の裾部に位置し、他の遺構に一部切られている。墓坑は長さ145cm、幅110cmで隅丸長方形を呈している。坑底までの深さは50cmであり、幅４cmで深さ３cm程の溝状の掘り込みがみられる。この掘り込み内には粘土が詰っており、木棺に使用した板材の掘り込みと思われる。北側壁は長さ80cm、南側壁は60cm程確認された。なお西側小口壁には若干の掘り込みがみられ

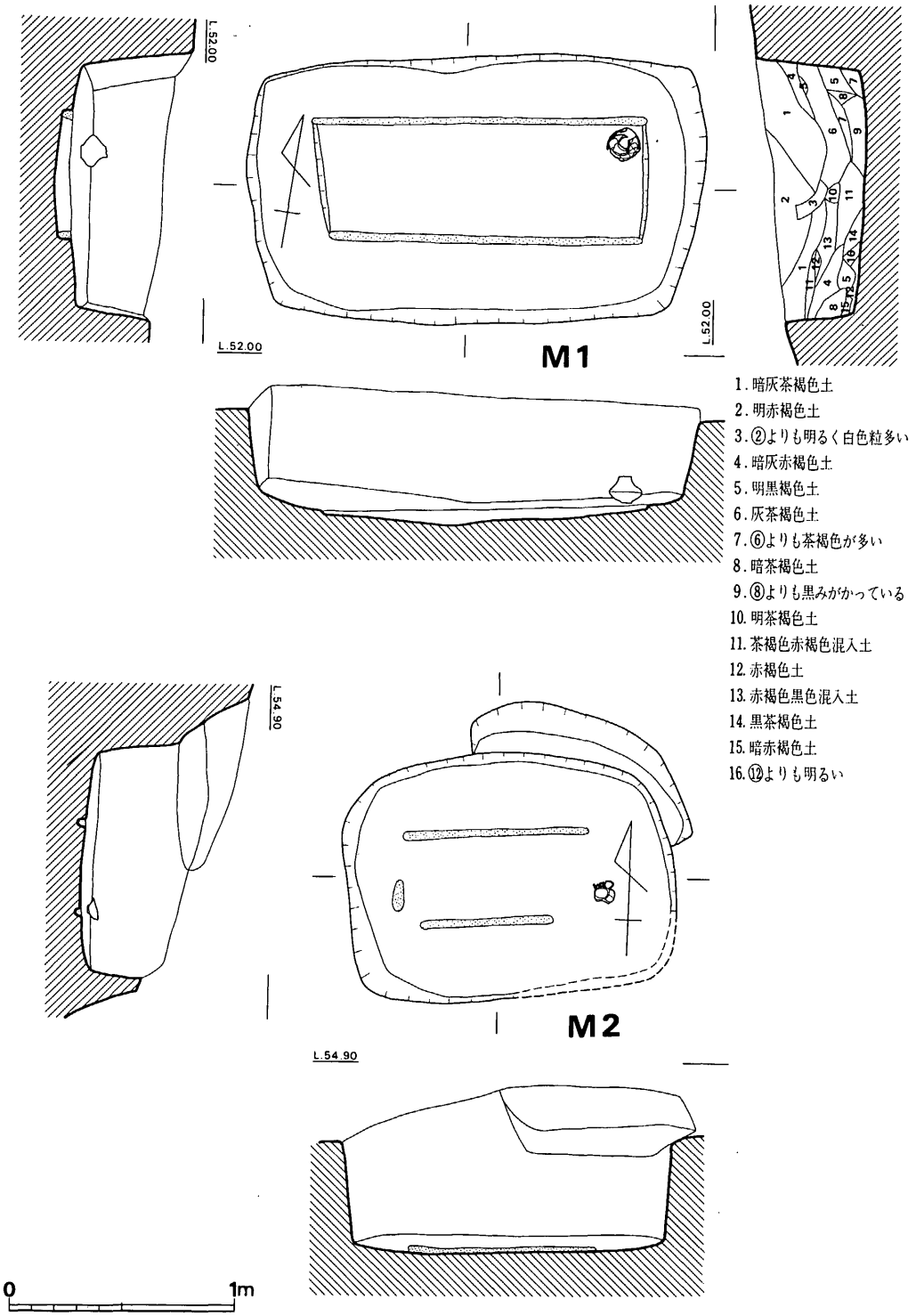


Fig. 122　1号・2号木棺墓実測図（縮尺1/30）

た。棺の主軸はN－77°－Eである。棺の内法は長さ83cm、幅35cmであり、両小口板が両側板を挟む形態のものである。棺の東側から副葬小壺（Fig. 142－２）が１個検出されたが、これは位置からみて棺外副葬品と思われる。この土器は弥生時代前期の板付Ⅰ式に属するものである。

３号木棺墓（Fig. 123, PL. 71）

２号木棺墓の東側１mの位置にこれとは主軸を異にして営まれている。墓坑は２m×1.9mの隅丸方形を呈している。棺はこの墓坑の東側に偏して、東辺と平行に埋置されている。主軸はN－40°－Wであり、床面のレベル差から、高所に位置する北側を頭位と考える。

墓坑上面は削平されており、坑底までは最も深い所で50cmである。底面には幅３cmで深さ２cm程の溝状の掘り込みがあり、粘土が詰っているのが検出されており、側板の掘り込みと思われる。これによると木棺は幅55cmで長さは80cm＋αである。墓坑の西側半分には木棺を埋置したと考えられる掘り込みは検出されていない。なお遺物は出土していない。

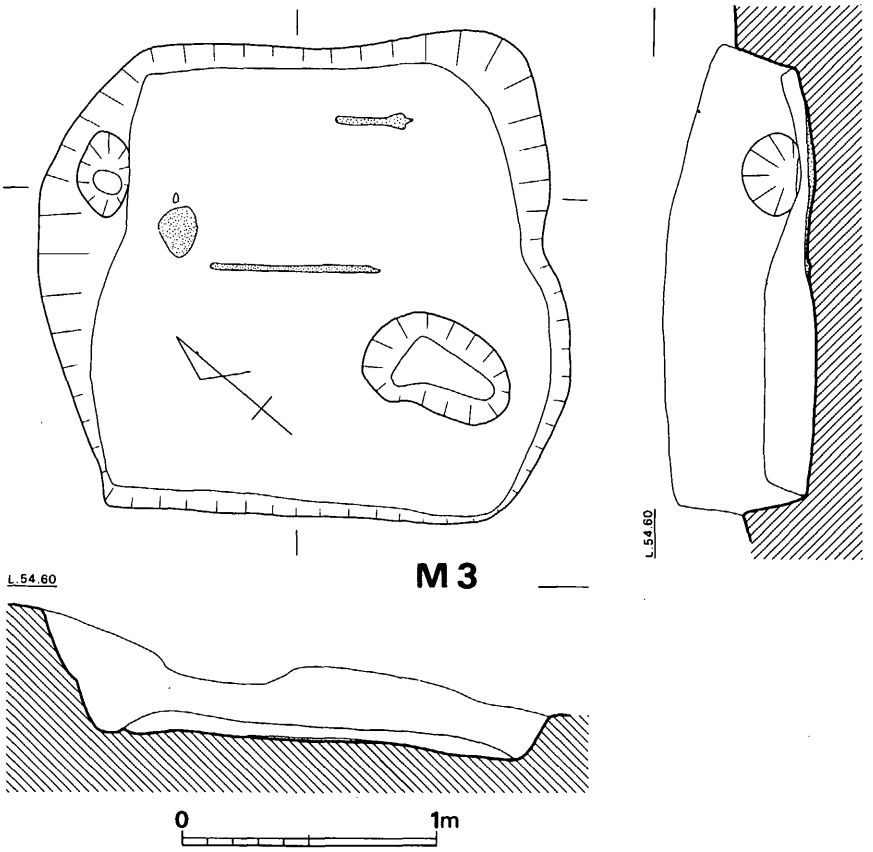


Fig. 123　３号木棺墓実測図（縮尺１/30）

4号木棺墓（Fig. 124－1，PL. 72）

丘陵南斜面の裾部で、東側崖面近くに位置している。墓坑は長さ210cm、幅110cm、深さ65cmであり、平面は隅丸長方形を呈する。墓坑のほぼ中央部に棺は埋置されたものと思われ、主軸はN－48°－Eである。墓坑の南隅は9号甕棺墓によって切られている。西南壁は墓坑底面の小口から10cm程離れた位置に、木材の炭化したものが見られ、これは厚さ1cm、高さ15cmで長さは、小口壁と同一である。側板の炭化材も南側で若干検出されたが、棺の規模は定かでない。木質は墓坑底面に接して遺存するが他の木棺墓と異って掘り込みはみられない。

なお、遺物は何ら検出されていない。

5号木棺墓（Fig. 124－2）

南傾する丘陵の頂部平坦面に位置しており、他の4基の木棺墓からは離れた位置にある。墓拡は長さ235cm、幅95cmの隅丸長方形の平面形を呈しており、上部は削平されているため、深さは30cm程の浅いものである。この墓坑の中央に棺は埋置されており、南西部は破壊されて不明だが側板が小口板を狭む形態のものと思われる。墓坑底面には幅52cm、深さ5cm～10cmの長方形の掘り込みがありここに棺を埋置していたことがわかる。両側板に相当する部分には溝状に粘土がみられた。従って木棺は幅50cm、長さ120cm＋α であり、推定長は190cm程である。

B　土坑墓

1号土坑墓（Fig. 125, PL. 74）

丘陵南側の裾部に位置している。墓坑は長さ185cm、幅105cm、深さ80cmであり、下端での平面形では、長方形を呈している。主軸はN－58°－Wで、頭位は西北西にとる。頭部の位置には幅60cm×40cmで、深さ15cm程の楕円形の掘り込みがみられる。この上面で、頭部の左からは副葬小壺が1個検出された。この土器はやや傾いており、棺外副葬品であろう。墓坑底面の縦断面はほぼ水平であるが、横断面は中央部がややくぼむ。壁面の残存状況は良好である。頭部の小口壁を見るとほぼ垂直に近い勾配である。土器は弥生時代前期の板付II式に属するものである。

2号土坑墓

丘陵の南側裾部に位置しており、両小口壁は欠損している。墓坑は幅130cm、長さ200cm＋α、深さ30cm程のものである。平面形は長方形を呈していたと思われる。墓坑底面には45cm×35cmで、深さ20cmの長方形状の小穴が存在する。

なお、遺物は何ら検出されていない。

3号土坑墓（Fig. 126）

丘陵頂部に位置しており、東壁は消滅されていて現存しない。墓坑は長さ190cm、幅55cm＋α、深さ57cmのものである。平面は北側小口は弧状を呈するが、南側小口は直線であり、全体的には長方形を呈している。主軸はN－20°－Eであり、墓坑の形状から頭位は南側にとるものと

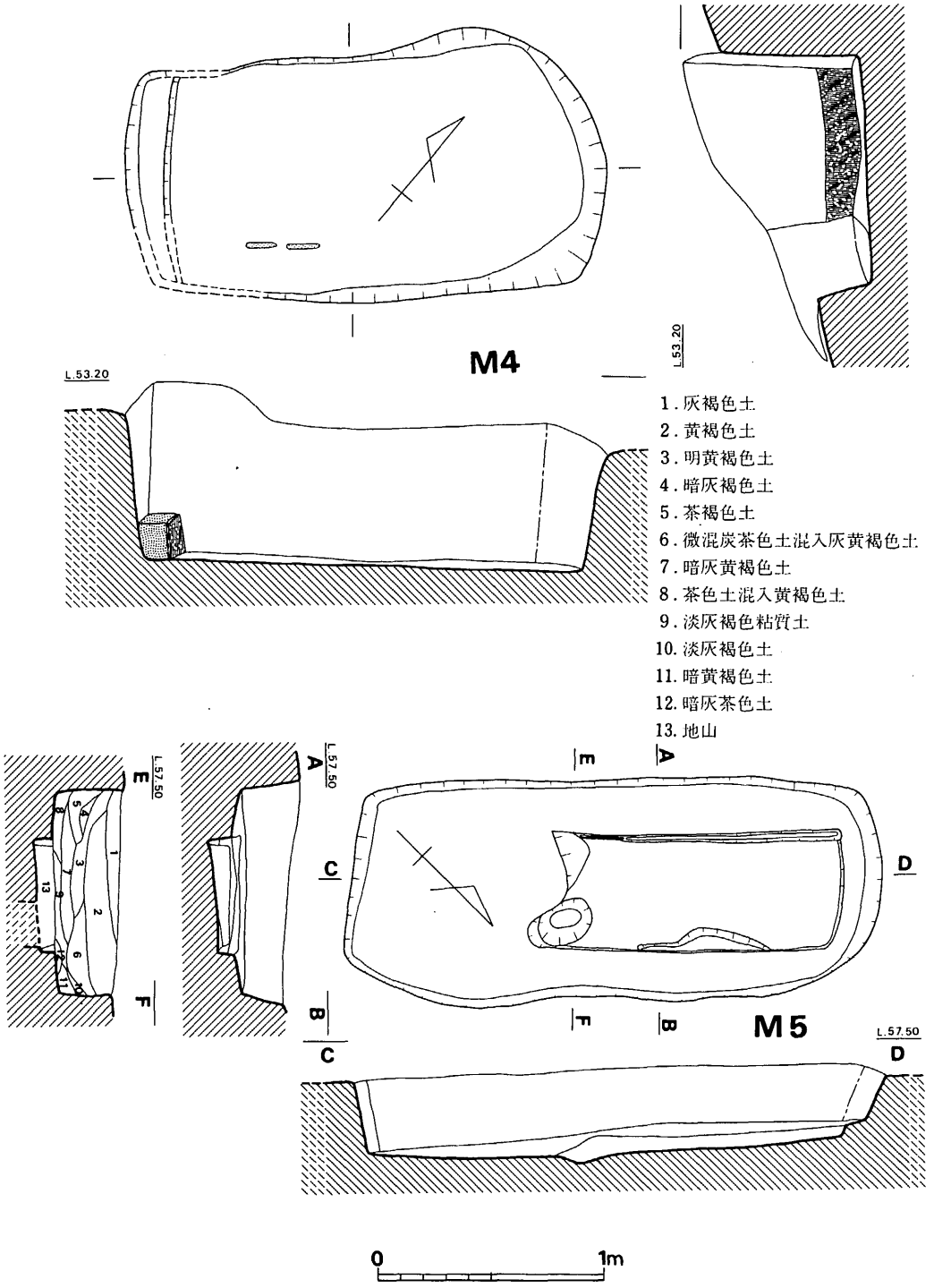


Fig. 124　4号・5号木棺墓実測図（縮尺 1/30）

思われる。東半部は削除されているため、全形は知りえないが、小口の一方が弧状を呈しており、他の木棺墓・土坑墓とは平面形がやや異なっている。後述する方形周構墓の主体部となる可能性もある。

なお、遺物は何ら検出されていない。

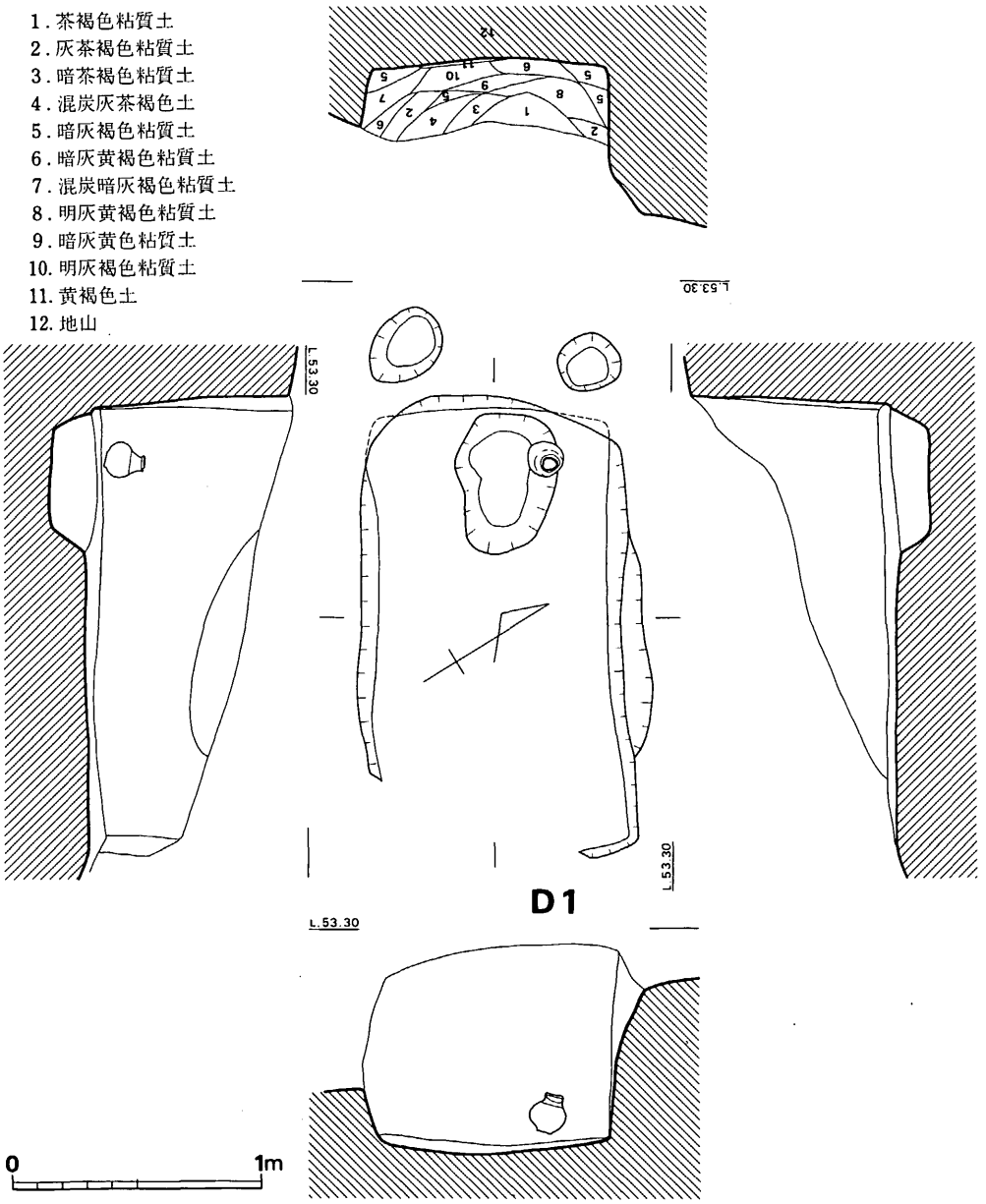


Fig. 125　1号土坑墓実測図（縮尺 1/30）

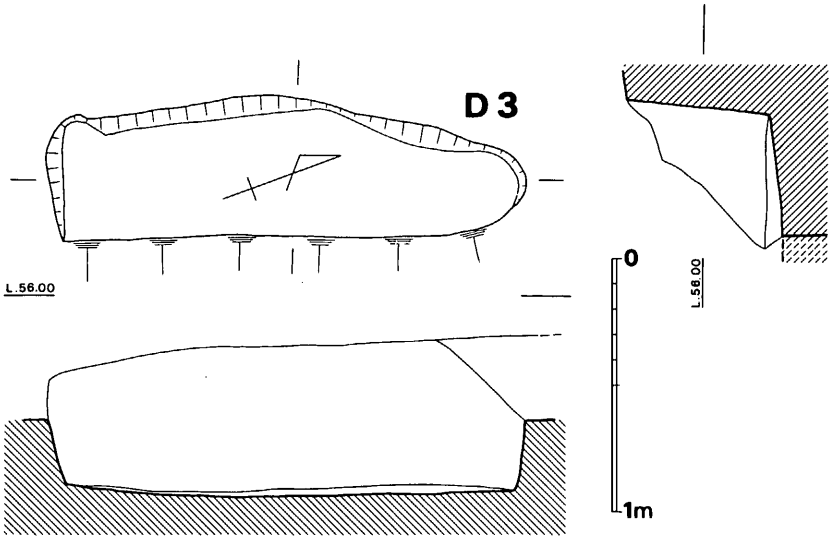


Fig. 126　3号土坑墓実測図（縮尺 1/30）

Tab. 5　弥生時代木棺墓・土坑墓一覧表

単位 cm

No.	方　位	掘り方			墓坑		副葬品
		平面形	長×幅	深さ	平面形	長×幅	
1号木棺墓	N－81°－E	隅丸長方形	200×120	50	長方形	140×50	壺
2号　〃	N－77°－E	隅丸長方形	145×110	50	長方形	83×35	壺
3号　〃	N－40°－W	隅丸方形	200×190	50	長方形	80＋α×55	
4号　〃	N－48°－E	隅丸長方形	210×110	65	不明	不明	
5号　〃	N－45°－W	隅丸長方形	235×95	30	長方形	120＋α×50	
1号土坑墓	N－58°－W	長方形	185×105	80			壺
2号　〃	N－41°－E	長方形	200＋α×130	30			
3号　〃	N－20°－E	長方形	190×55＋α	57			

C 甕棺墓

1号甕棺墓（Fig. 127）

南斜面の頂部付近で、他の甕棺墓群から離れて位置している。丘陵の削平の度合いが著しいため墓坑・棺ともに著しく削平されている。墓坑底面の平面は円形に近い。棺は壺形土器を用いており、水抜孔が穿たれている。斜位埋葬であるが、埋置角度は定かでない。

2号甕棺墓（Fig. 127, PL. 75）

南斜面の東側端部近くに位置しており、墓坑と甕上半部を削平されて消失している。墓壙底面の平面は円形であり、棺は斜位埋葬される。棺は壺形土器を用いている。

3号甕棺墓（Fig. 127, PL. 75）

2号甕棺墓の北に位置している。墓坑の大半と、甕の上半部を削平されて欠損する。棺は壺形土器を用いており、ゆるやかな角度で埋置している。

4号甕棺墓（Fig. 127）

南斜面の下方に位置している。墓坑の底面のわずかと、甕棺が若干検出されたが、実測不能の状態であったので断面図はない。

5号甕棺墓（Fig. 127, PL. 76）

南斜面の下方にあり、8号甕棺墓の北隣りに位置している。墓坑・甕ともに上部を削平されて、その大半を欠損している。墓坑底面の平面は隅丸長方形に近い形をしている。棺は組合せ式の甕棺であるが、甕形土器と何の組合せかは不明である。

6号甕棺墓（Fig. 129, PL. 76）

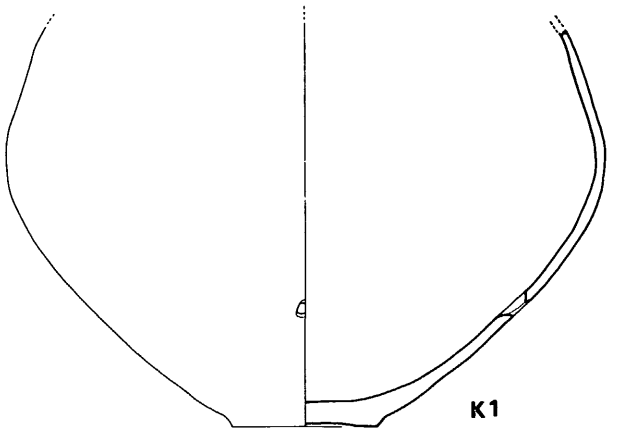
4号木棺墓を切って造られており、これよりは新しいものである。墓坑上面は削平されており、甕も上半部を欠損している。残存する墓坑の平面は楕円形状を呈している。墓坑底面は平坦であり、底部を埋置する部分のみ掘りくぼめられている。棺は壺形土器と思われ、斜位埋葬している。

7号甕棺墓（Fig. 127, PL. 77）

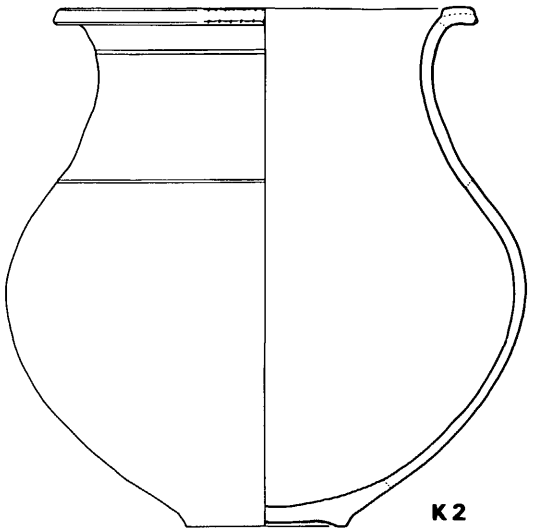
南斜面の裾部に位置し1号土坑墓を切って造られている。墓拡上面と甕上半部を削平されている。墓坑の平面は倒卵形を呈しており、上甕は深鉢形土器を、下甕は壺形土器を用いる組合せである。

8号甕棺墓（Fig. 129, PL. 77）

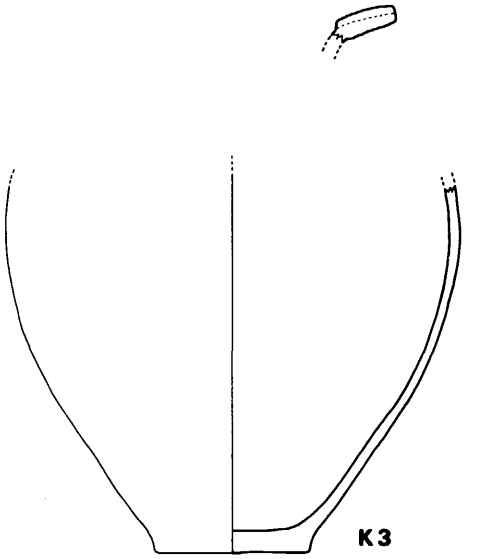
南斜面の裾部近くで、7号甕棺墓の北隣りに位置している。墓坑の若干を削平され、また甕も上部を削平されているものの、2地点の甕棺墓のうちでは最も残りの良好なものであった。墓坑は下整円形であり、北西壁に横穴を穿って口縁打ち欠きの壺形土器を挿入し、壺形土器で口を覆う覆蓋式甕棺墓である。墓坑底面はくぼませている。上・下甕の含わせ目には目貼り粘土は施されていない。



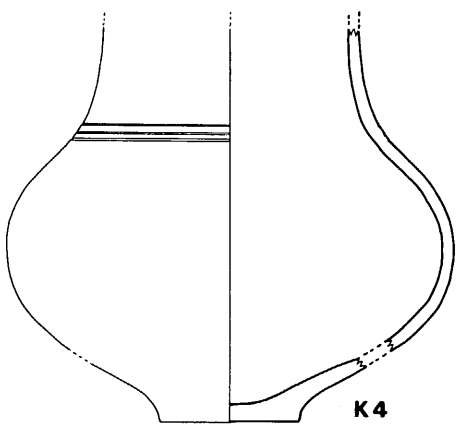
計側値	口　径	口縁内径	胴部最大径	底　径	器　高
			47.6cm	11.6cm	
特徴	壺形土器。胴下半に外より穿孔した水ぬき孔あり。器表は風化いちじるしい。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。				



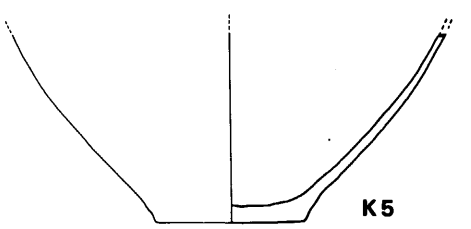
計測値	口　径	口縁内径	胴部最大径	底　径	器　高
	32.5cm	27.9cm	40.8cm		41.2cm
特徴	壺形土器。口縁は平坦で内側に段をつくる。外側は上下両端に刻目を施している。　口縁下及び肩部には沈線1条を有す。器表の風化いちじるしい。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。頸部内面に丹塗りの痕跡あり。胴部に黒斑あり。				



計測値	口　径	口縁内径	胴部最大径	底　径	器　高
			36 cm	12 cm	
特徴	壺形土器。器表の風化いちじるしい。淡黄色を呈し胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好。				



計測値	口　径	口縁内径	胴部最大径	底　径	器　高
			35.4cm	11 cm	
特徴	壺形土器。肩部に沈線3条を有す。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。胴部に黒斑あり。				



計測値	口　径	口縁内径	胴部最大径	底　径	器　高
				11.2cm	
特徴	甕形土器と思われる。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は軟質で不良。胴下半に二次的に火熱を受け赤変した部分があるので、日常容器を転用したものと思われる。				

Fig. 128　1号・2号・3号・4号・5号甕棺実測図（縮尺1/6）

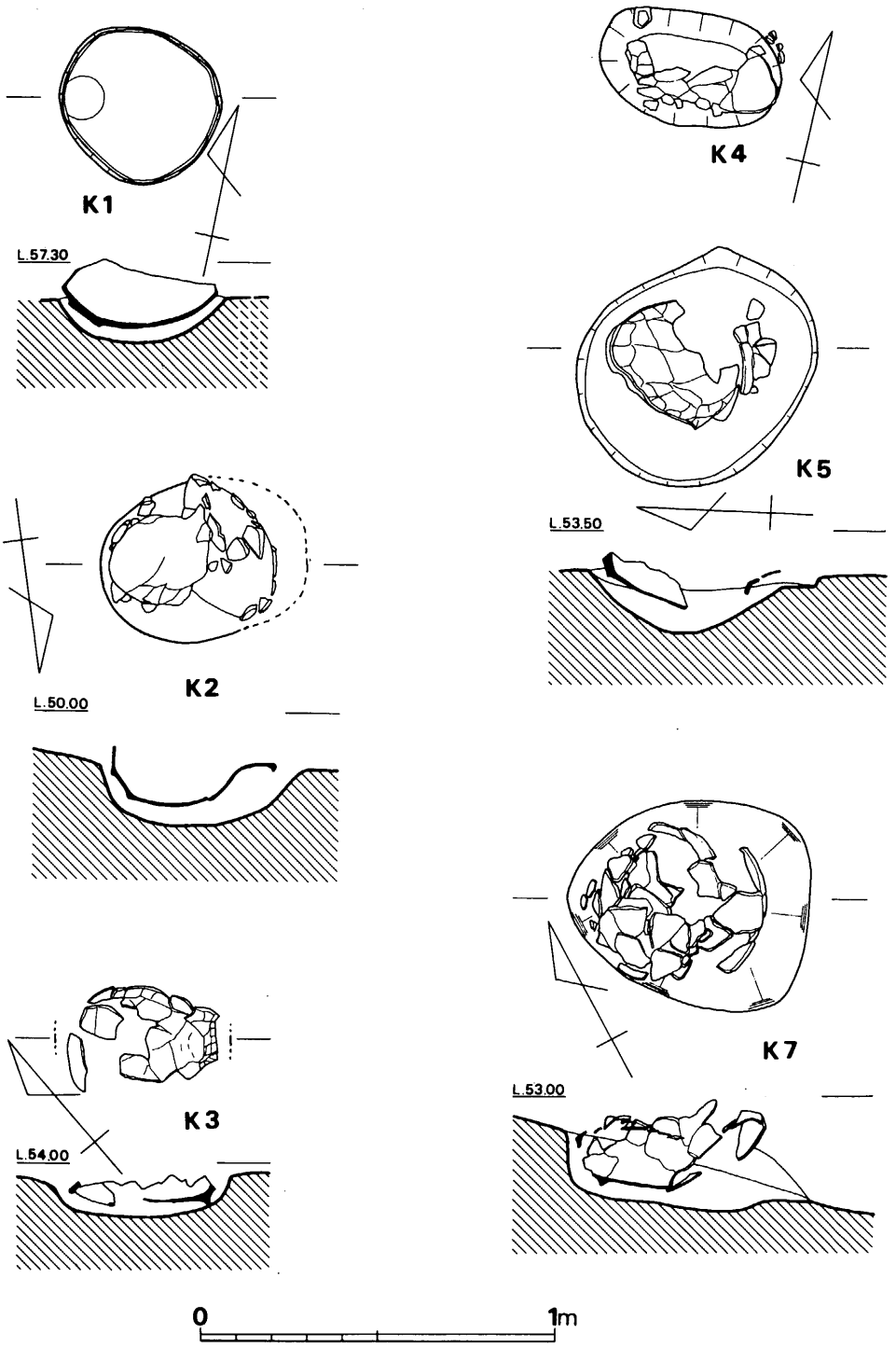


Fig. 127　1号・2号・3号・4号・5号・7号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

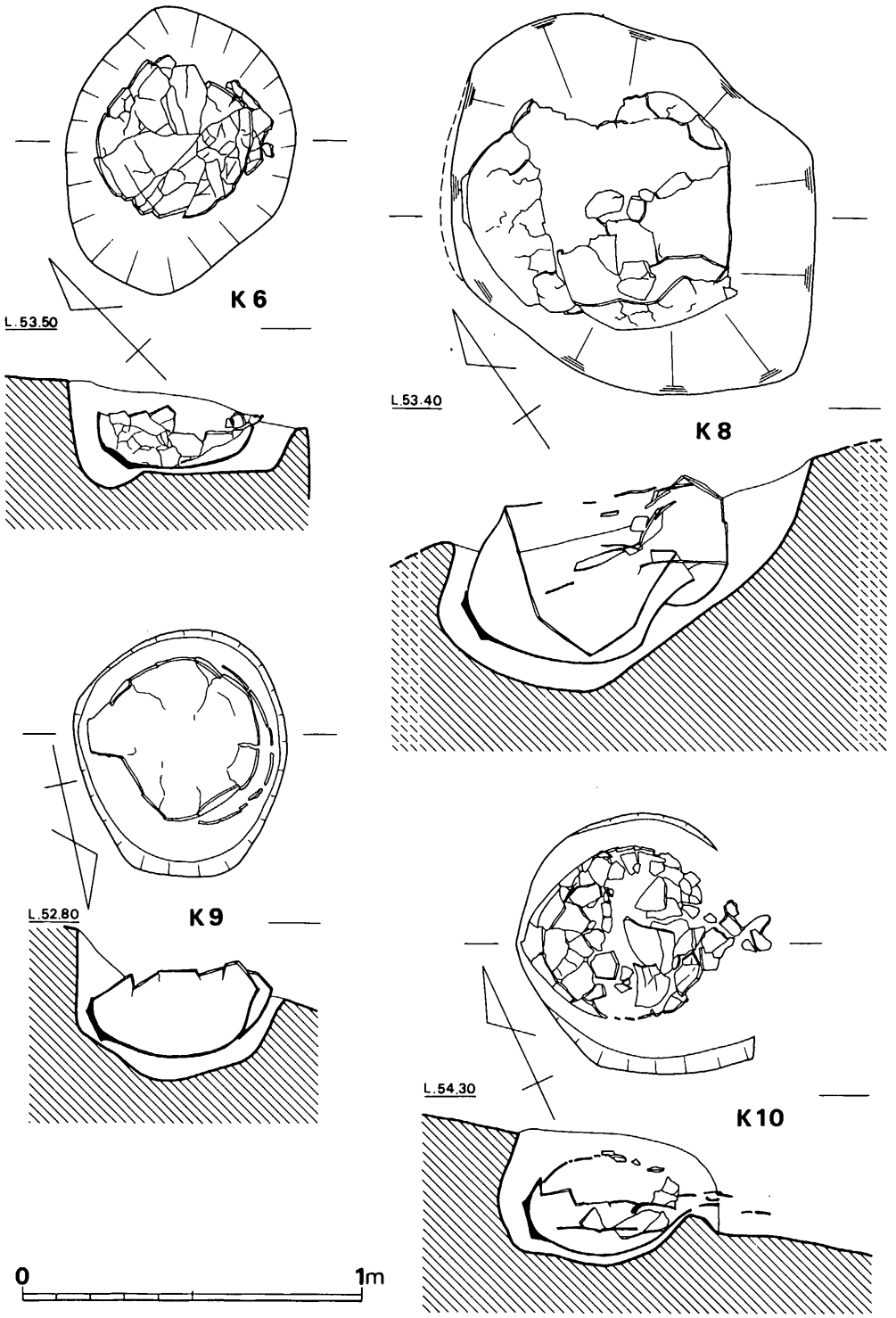
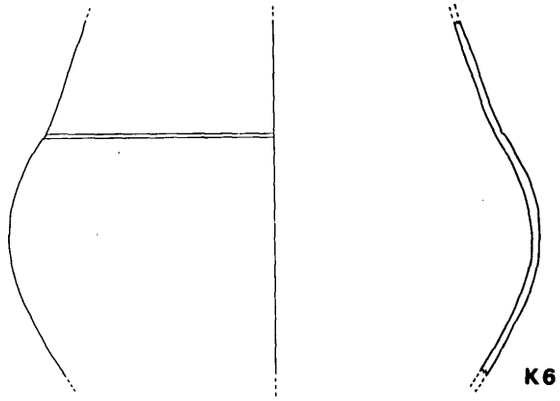


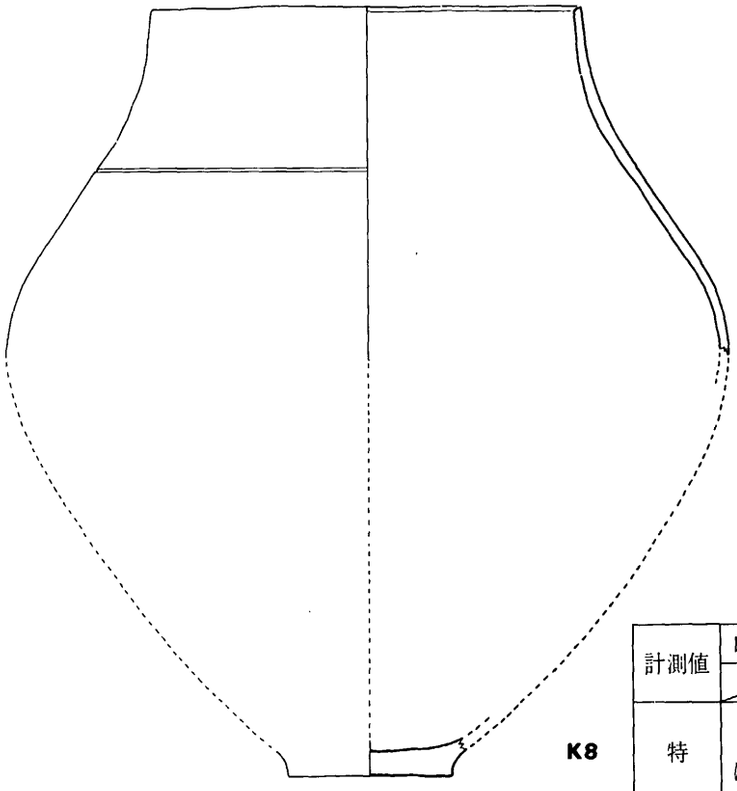
Fig. 129 6号・8号・9号・10号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）



K6

計測値	口　径	口縁内径	胴部最大径	底　径	器　高
			44.8cm		

特徴	壺形土器。肩部　沈線1条を有する。器表の風化いちじるしい。淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は軟質で不良。



K8

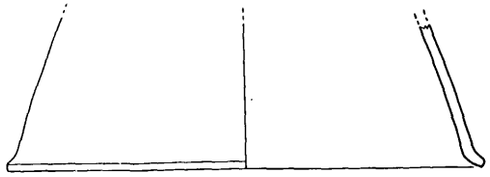
計測値	口　径	頸部内径	胴部最大径	底　径	器　高
		33.8cm	59.0cm	13.4cm	

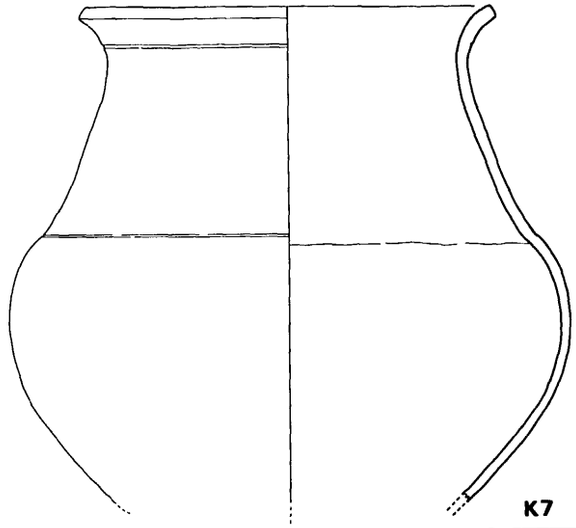
特徴	大形の壺形土器の口縁を打ち欠く。頸部までの高さは60～65cmの間。肩部に沈線1条を有す。淡黄色を呈し、胎土には大粒の砂粒を含む。焼成は良好。器表の風化いちじるしい。

Fig. 130　6号・7号・8号甕棺実測図（縮尺1/6）

計測値	口　径	口縁内径	胴部最大径	底　径	器　高
	39.0cm				

特徴	深鉢形土器。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成良好。

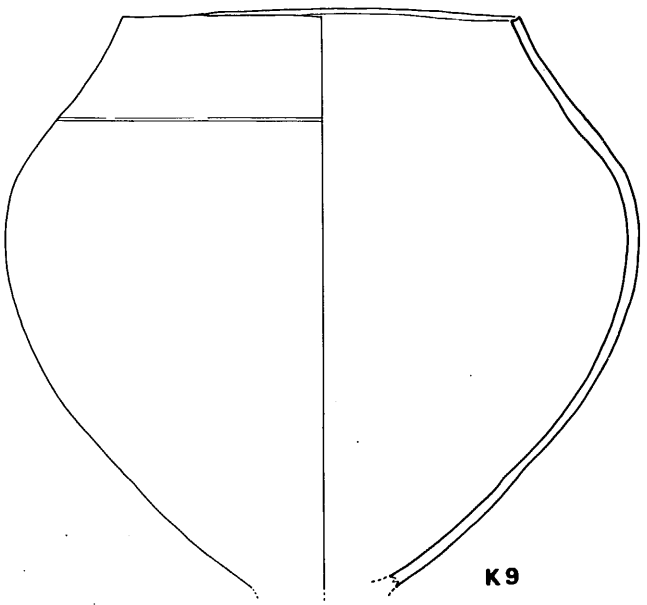




K7

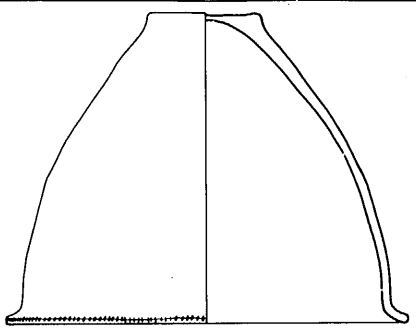
計測値	口　径	頸部内径	胴部最大径	底　径	器　高
	33.0cm	27.5cm	45.9cm		

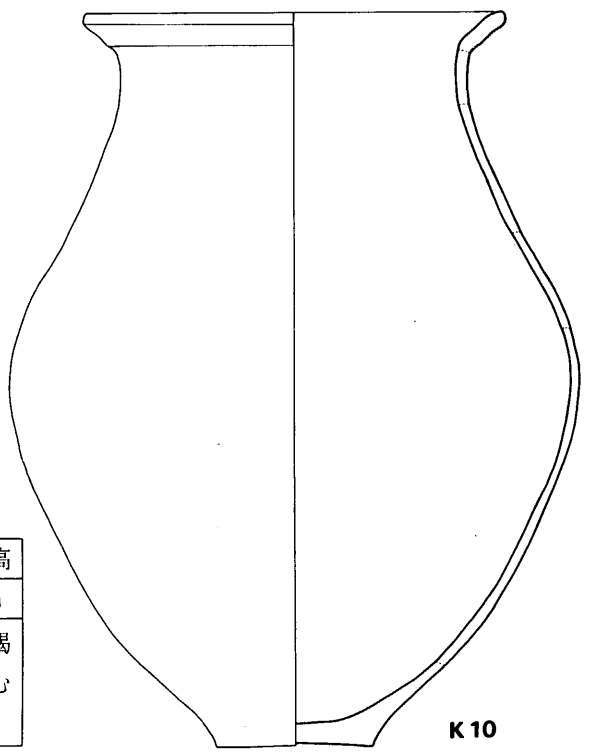
特徴	壺形土器。口縁は外反する。口縁直下に沈線1条、肩部には段をつくる。口唇部は横ナデ。頸部内面の上半はヘラ研磨、他はナデ。灰黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。



計測値	口　径	頸部内径	胴部最大径	底　径	器　高
		30 cm	55 cm		
特徴	壺形土器の口縁を打ち欠く。器表の風化いちじるしいが、わずかに丹の痕跡が認められる。黄褐色を呈し胎土には砂粒を含む。焼成は良好。				

計測値	口　径	口縁内径	胴部最大径	底　径	器　高
	31.5cm	27.8cm		8.8cm	24.8cm
特徴	甕形土器。外反する口唇の上下両端に刻目を施すが、上下で工具がちがい、かつ下端では大きさ方向の異なる部分があり、工具2つを用いたことがわかる。口縁部は横ナデ、他は内外ともにナデ。暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は軟質で不良。				





計測値	口　径	口縁内径	胴部最大径	底　径	器　高
	32.9cm	26 cm	44.8cm	12.2cm	57.9cm
特徴	壺形土器。器表の風化いちじるしい。器表は淡黄褐色、内面は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む焼成は良好。				

Fig. 131　9号・10号甕棺実測図（縮尺1/6）

9号甕棺墓（Fig. 129, PL. 77）

南斜面の裾部近くに位置し、4号木棺墓を切って造られており、これよりは新しいものである。墓坑と甕の上半部を削平されているが、大体の形はつかめる。覆蓋式の甕棺墓である。墓坑は楕円形を呈しており、東壁に垂直に掘り込みをつくり、棺の底面を置く。墓坑底面は中央部が掘りくぼめられており、胴部のふくらんだ部分が、ここに位置する。下甕は口縁打ち欠きの壺形土器を用いている。

10号甕棺墓（Fig. 129, PL. 78）

南斜面の下部で3号木棺墓の東に位置する。墓坑上面は削平され、甕の上面も削平を受けて一部を欠損している。墓坑北西壁に横穴を穿って甕を埋置している。棺は上甕に壺形土器を、下甕は壺形土器を用いている。

甕棺は土坑墓を切って造られているものがあり、これよりは後出するものである。時期は前期の金海式や、中・寺尾等の甕棺よりも若干古いものと思われる。
註(1)

註1　中・寺尾遺跡　大野城市文化財調査報告書　第1集　1977　大野城市教育委員会

D　住居跡

1号住居跡（Fig. 132, PL. 79）

西部地区の南側緩斜面に位置しており壁の一部は削平により消失している。住居跡は直径5.6mで円形を呈する。深さ40cm～50cmの竪穴住居跡であり、柱穴が壁に沿って円形に検出された。柱穴は9個～10個であり、直径30cm～60cm大の円形のものである。深さは50cm～90cmと非常に深い。住居跡の中央部には180cm×150cmの隅丸長方形状を呈する深さ30cm程の土坑が検出された。住居跡の北壁部には貯蔵穴と思われる袋状竪穴が存在する。この貯蔵穴は住居跡に伴うものである。底面は円形を呈しており、径は1.7mで深さ3mのものである。なお住居跡内からは多数の弥生土器片とともに黒曜石の石鏃68点と未製品6点、それに多数の剥片や、石核などが出土している事から石器の製作跡と考えられよう。住居跡の東側には壁と接する位置に70cm×50cmの範囲に焼土がみられており、別の住居跡が存在した事が考えられるが、壁面は剝平されたり、1号住居跡によって切られたりして消失していて、定かでなかった。

3号住居跡（Fig. 133, PL. 80）

丘陵頂部から検出されており、上部は削平され、しかも新墓によって4カ所を切られていた。平面は2.15m×2.3mの方形を呈している。各壁のコーナー部には長さ30cmで深さ50cmの円形もしくは方形状のピットが存在しており、これは柱穴と思われる。床面はほぼ水平であり、踏みかためた形跡はない。壁の残りは悪くて20cm程である。遺物は床面から10cm程上方で、弥生土器の底部が検出された。主軸はN－20°－Wである。

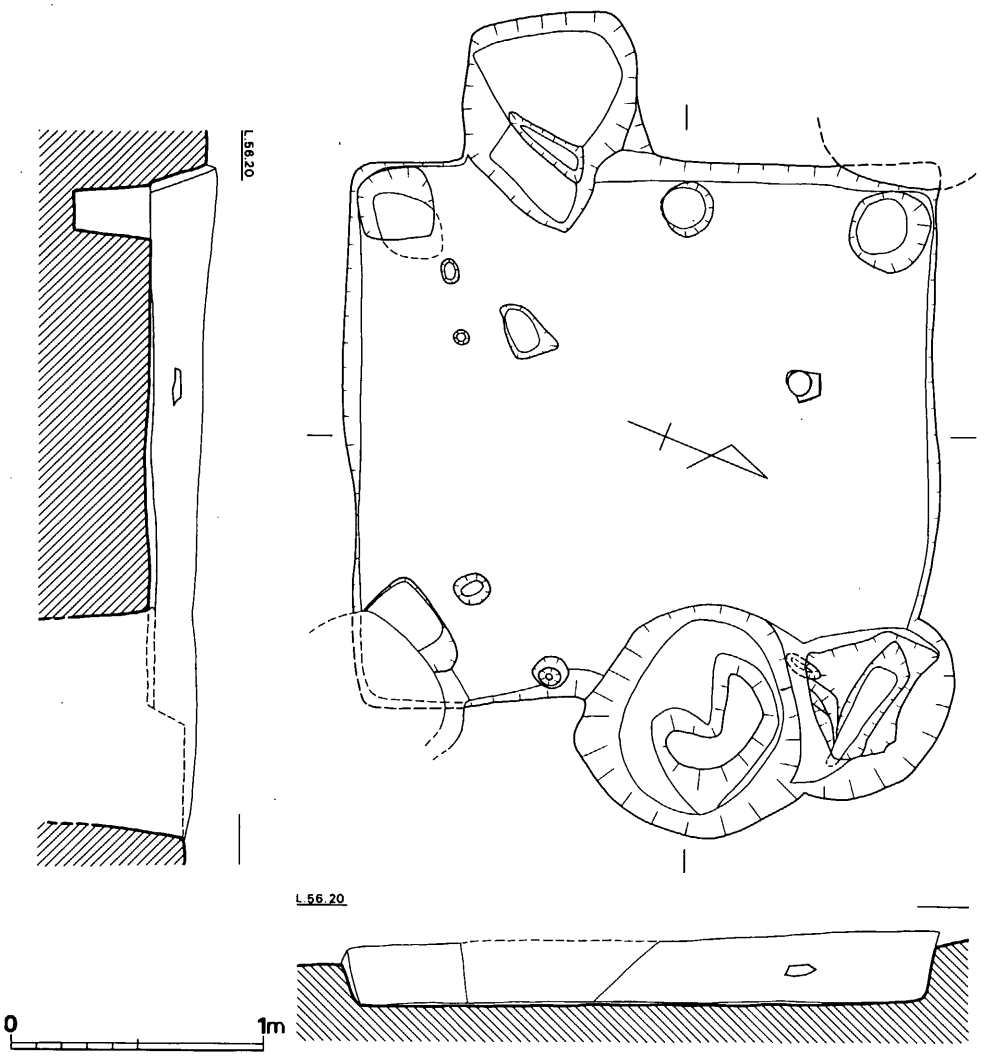


Fig. 133 3号住居跡実測図（縮尺 1/30）

E 袋状竪穴

貯蔵穴と考えられる袋状竪穴は22基検出されたが、そのうち4基はその平面形は円形であるが断面は袋状を呈さず逆にその径をせばめており、墓地遺構と考えられるので除いた。従って総数18基の袋状竪穴が検出された事になり、その分布のしかたは南斜面には8基で頂部平坦面から北側で10基である。その平面形は方形のものが2基で後はすべて円形のものである。方形のものは南側斜面からのみ検出した。断面形をみると方形のものは上面と底面の長さが同じか、やや底面の方が短いものであるが円形のものは、上面よりも底面の径が長いものが多いが、なかには壁が崩壊したためか、垂直に近いものもある。袋状竪穴からは若干の弥生式土器を検出

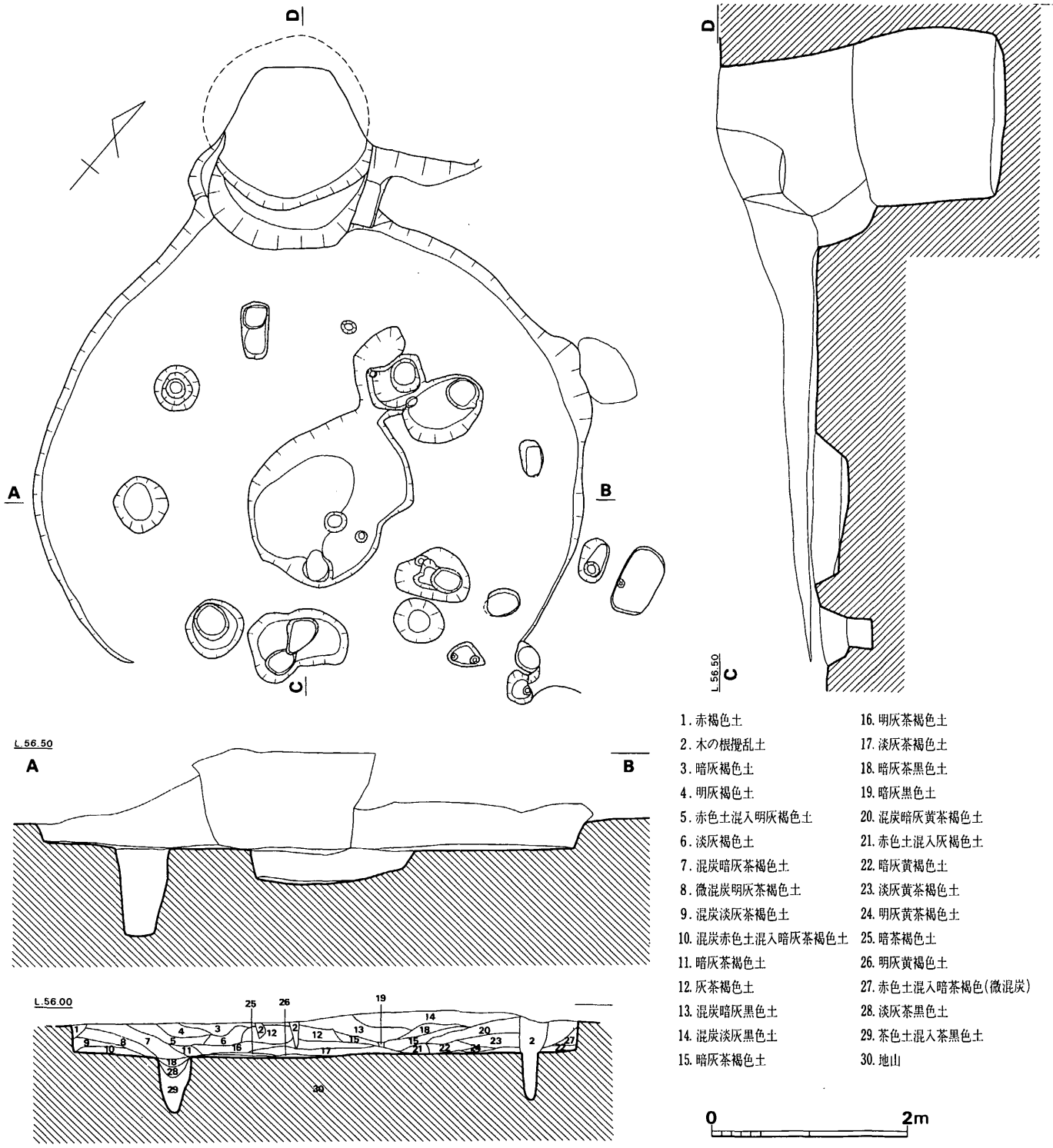


Fig. 132　1号住居跡実測図（縮尺 1 /60）

したが、いずれも袋状竪穴内に土器を置いていたという状態でなく、流れ込んだ様な状態で発見されたものがほとんどである。

1号袋状竪穴（Fig. 134, PL. 81）

上面は175cm×166cmで、方形よりは台形に近い平面形を呈するが、底面は182cm×140cmで台形に近い長方形を呈するものである。壁面は垂直に近い勾配で、底面からの高さは140cmである。底面の4隅には20cm×30cm大のピットが検出された。深さはいずれも20cm程であり、斜めの掘り込みである。このピットの性格としては柱穴が考えられ、屋根をふいていたものと思われる。柱穴の断面から柱は直に立つものでなく、傾斜するものであった事が想定できる。

3号袋状竪穴（PL. 81）

1号住居跡に伴う貯蔵穴である。上面は崩壊により不整形であるが、底面は径170cmの円形を呈している。壁の断面は袋状を呈しているが南側は底面から130cmの位置に段がついている。高さは300　である。

5号袋状竪穴（Fig. 135, PL. 82）

歴史時代の土坑墓の下面に位置する。上面の平面形は崩壊などにより旧状をやや変えているようであるが、底面では190cm×150cmの台形を呈する。平面形は1号袋状竪穴と同じである。壁面の断面形はほぼ垂直に近い勾配であり、深さは160cm程のものである。底面は平坦であり、これは4隅に柱穴をもたない。底面にほぼ近い位置から高杯の破片が出土した。

6号袋状竪穴（Fig. 134, PL. 83）

上面は削平され、一部は新墓を造る際に切られている。上・下両面とも不整円形を呈しており、底径は長径150cm、短径130cmである。壁の断面はほぼ垂直であり、底面に近い位置は袋状を呈している。深さは150cmである。

7号袋状竪穴（Fig. 135, PL. 83）

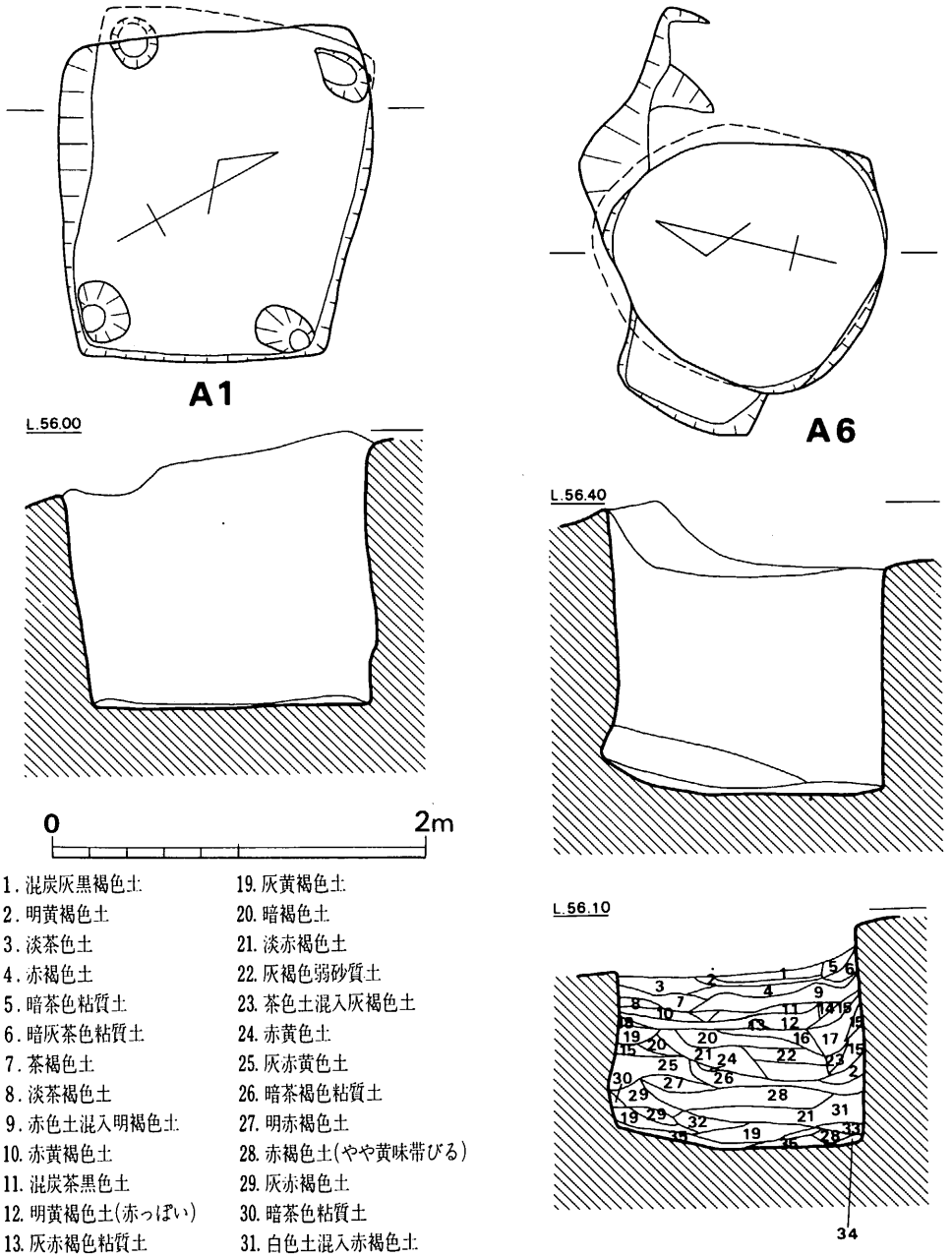
新墓を作る際に2ヵ所を切られているが、底面までには及んでいない。上・下両面とも円形を呈しており、底径は180cmである。壁の断面は底面近くは袋状を呈するものであり、高さは160cm程である。底面は若干のくぼみを有している。

8号袋状竪穴（Fig. 136, PL. 84）

新墓によって切られており、一部は底面にまで及ぶ。底面の平面形は楕円形に近い形を呈している。長径220cm、短径180cmである。壁面の断面形は底面に近い位置は袋状を呈しており、深さは160cmである。

9号袋状竪穴（Fig. 136）

新墓3基によって切られている。上・下両面とも円形状を呈するが正円とはならない。長径は230cm、短径は200cmである。壁面の断面形は片方のみ袋状を呈する。高さは100cmと浅く、残りの悪いものである。



1. 混炭灰黒褐色土
2. 明黄褐色土
3. 淡茶色土
4. 赤褐色土
5. 暗茶色粘質土
6. 暗灰茶色粘質土
7. 茶褐色土
8. 淡茶褐色土
9. 赤色土混入明褐色土
10. 赤黄褐色土
11. 混炭茶黒色土
12. 明黄褐色土(赤っぽい)
13. 灰赤褐色粘質土
14. 灰褐色土
15. 暗茶褐色土
16. 暗灰赤褐色土
17. 混炭暗茶褐色土
18. 赤色土
19. 灰黄褐色土
20. 暗褐色土
21. 淡赤褐色土
22. 灰褐色弱砂質土
23. 茶色土混入灰褐色土
24. 赤黄色土
25. 灰赤黄色土
26. 暗茶褐色粘質土
27. 明赤褐色土
28. 赤褐色土(やや黄味帯びる)
29. 灰赤褐色土
30. 暗茶色粘質土
31. 白色土混入赤褐色土
32. 淡赤色土
33. 赤色土混入黄褐色弱砂質土
34. 淡黄褐色土
35. 黄褐色土（白味を帯びる）
36. バイラン土地山

Fig. 134　1号・6号袋状竪穴実測図（縮尺1/40）

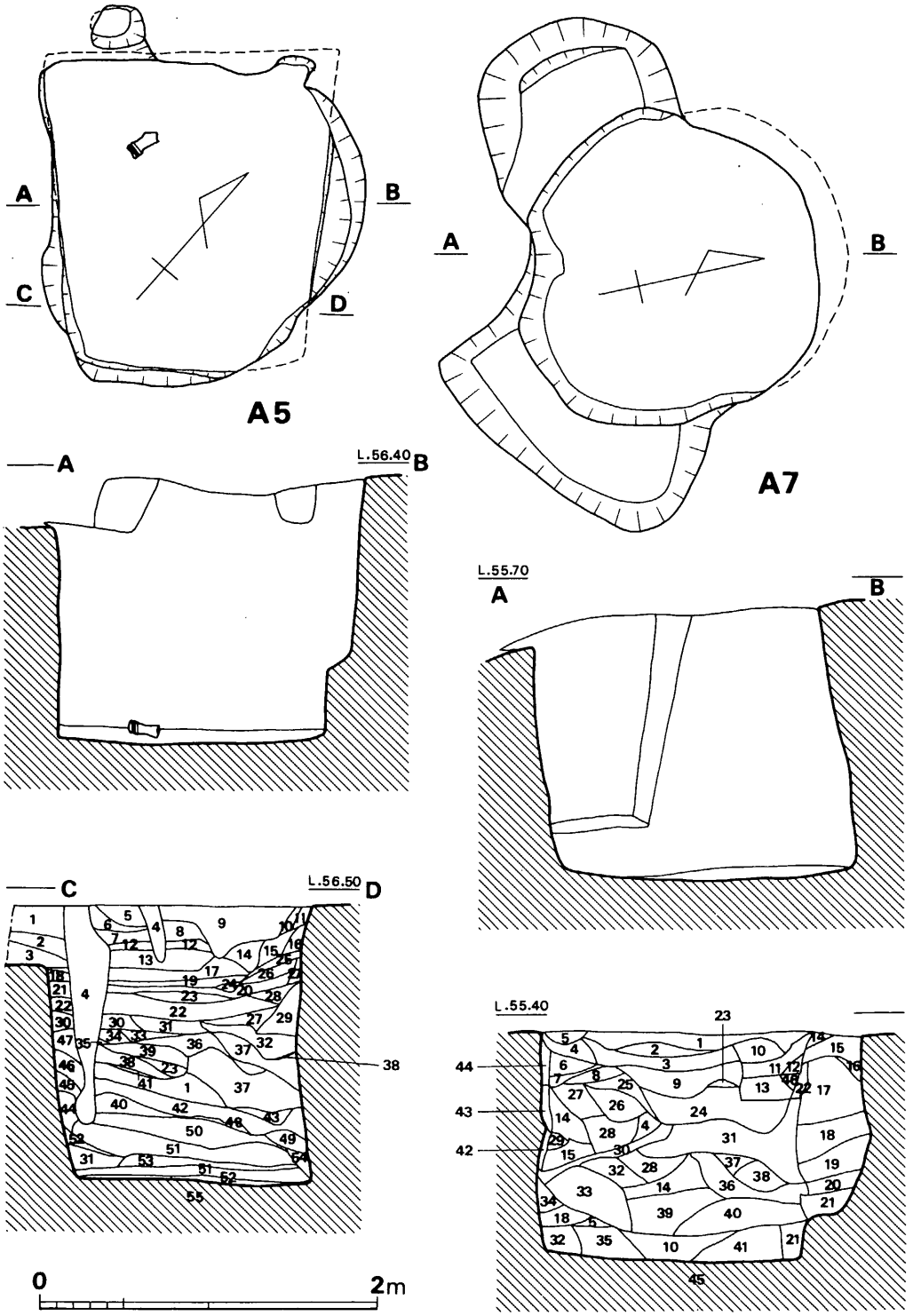


Fig. 135　5号・7号袋状竪穴実測図（縮尺１/40）

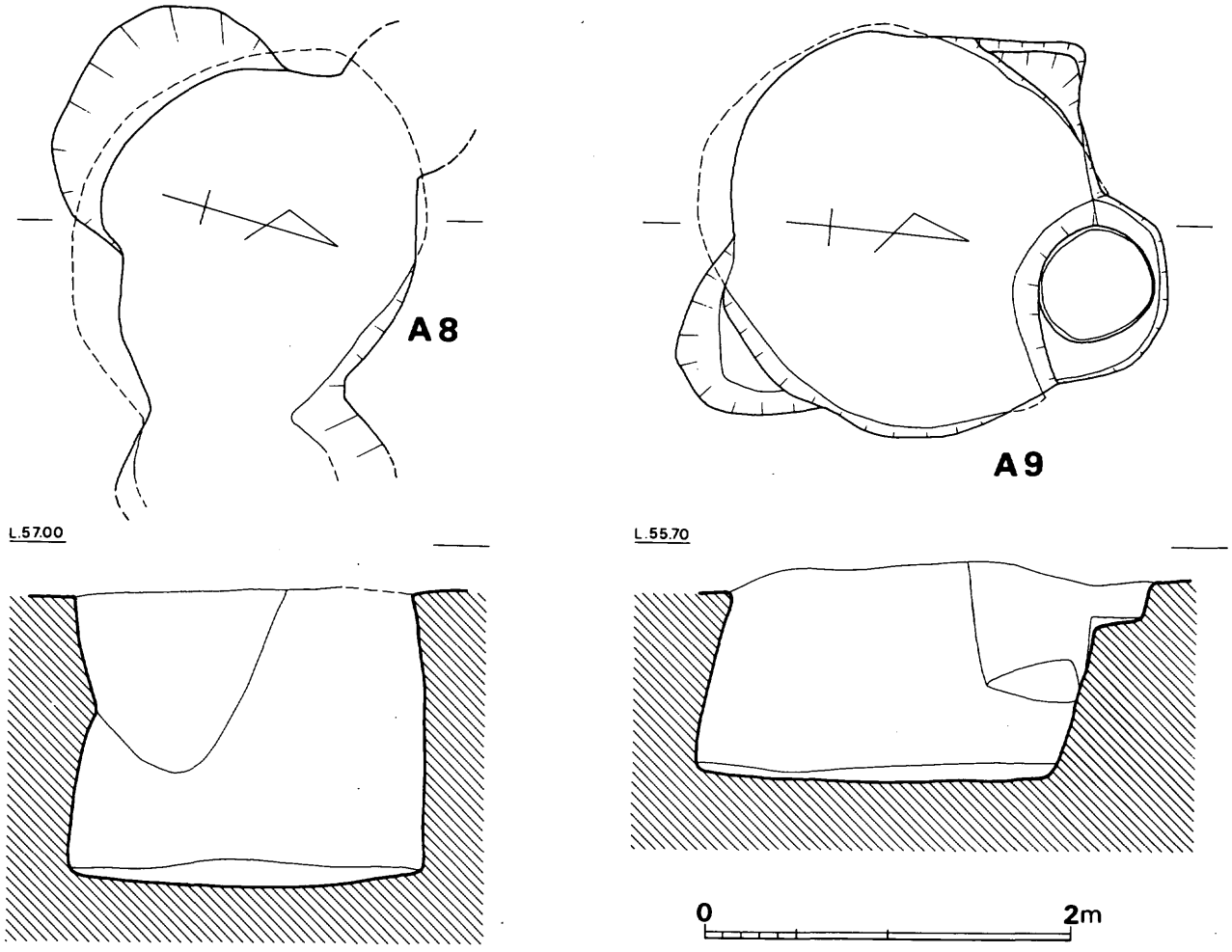


Fig. 136　8号・9号袋状竪穴実測図（縮尺1/40）

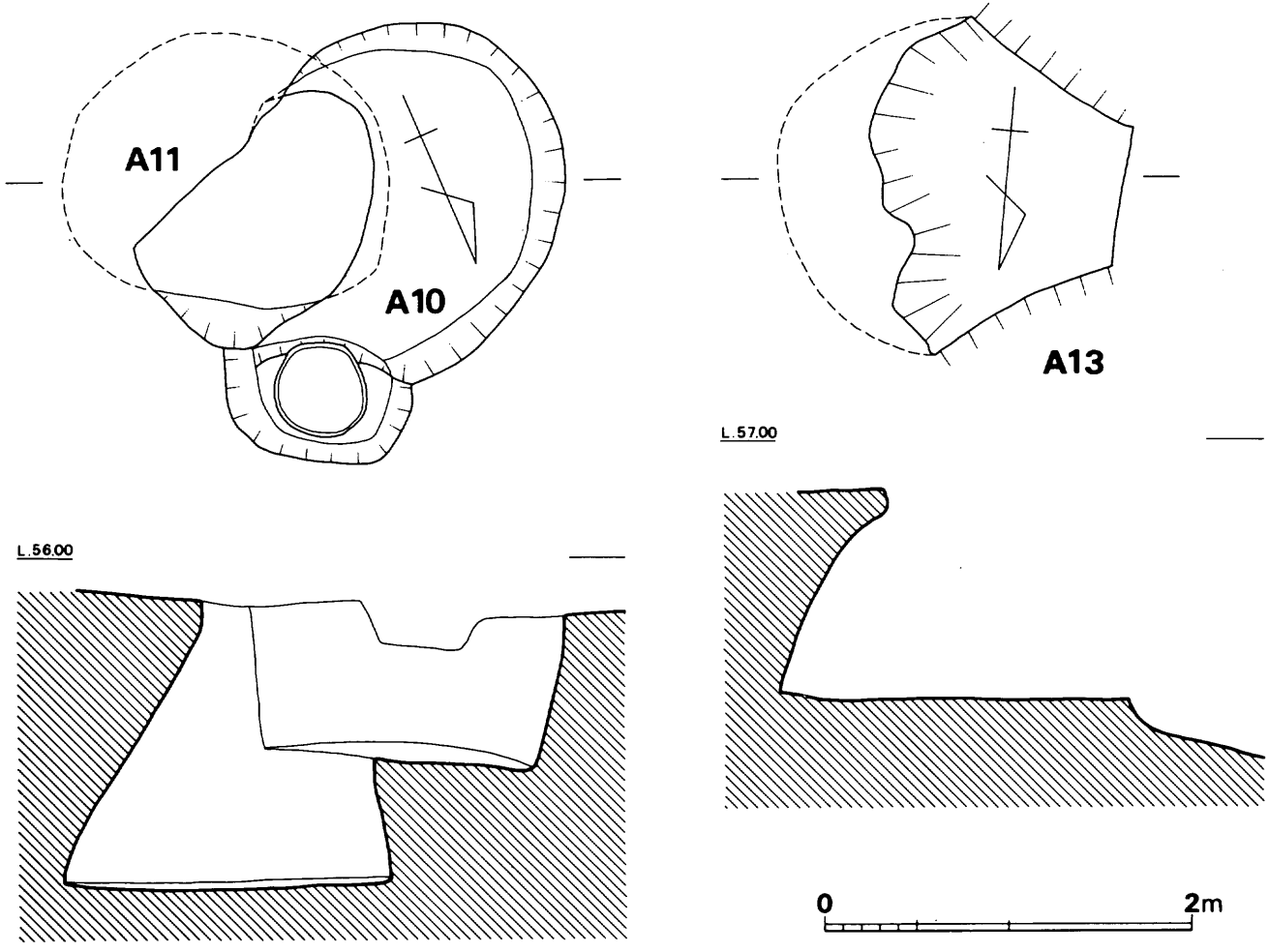


Fig. 137 10号・11号・13号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

10号袋状竪穴（Fig. 137, PL. 85）

11号袋状竪穴と切り合っている。上部は削平されているため高さは低い。新墓にも切られているため平面形は定かでないが円形状を呈するものである。径は190cmのものである。壁の断面は袋状を呈していないが一応袋状竪穴としてとりあつかった。

11号袋状竪穴（Fig. 137, PL. 85）

10号袋状竪穴と切り合っている。底面形は楕円形状を呈しており、長径は180cm、短径は140cmである。壁面の断面形はいわゆる袋状を呈しており、残りは良好である。高さは160cmのものである。中からは弥生式土器が若干出土したが、いずれも袋状竪穴が埋没する際に流れ込んだものである。

13号袋状竪穴（Fig. 137）

新墓を造る際にその大半を破壊されている。平面形は円形で径は180cm～200cmのものである事が推定される。壁はいわゆる袋状を呈するものであり、高さは110cmと削平により低くなっている。

14号袋状竪穴（Fig. 138）

新墓によって一部を切られており、底面にまで及んでいる。上・下両面とも平面は円形を呈しており、底面での径は180cmである。壁は若干袋状を呈するものであり、底面からの高さは150　である。

15号袋状竪穴（Fig. 138）

新墓3基によって切られているため上面の平面形は不明である。底面は不整円形を呈しており、径は南北が180cm、東西は170cmである。壁は削平により高さ50cm程しか遺存していないが、断面形は袋状を呈するものである。中からは遺物は何も検出されていない。

16号袋状竪穴（Fig. 139）

底面は150cm×160cmの不整円形を呈するものである。壁面はわずかに袋状を呈しており、高さは110cmと削平のため低い。

18号袋状竪穴（Fig. 139, PL. 85）

上面は隅丸方形状を呈するが底面は不整形である。底面北半部には20cm程の段落ちが見られる。深さは180cmのものである。一応袋状竪穴としてとりあつかったが、これとは異る性格のものかも知れない。

19号袋状竪穴

上面は崩壊や新墓に切られているため円形状の不整形を呈している。底面は楕円形を呈しており、径は230cm×290cmである。土層断面を見ると、花崗岩バイラン土の地山土が多量に見られており、竪穴内にある程度土砂が堆積後、袋状部が崩壊した事がうかがえる。従って現存する断面形は長方形状を呈している。深さは140cmであり、中からは甕形土器が出土している。

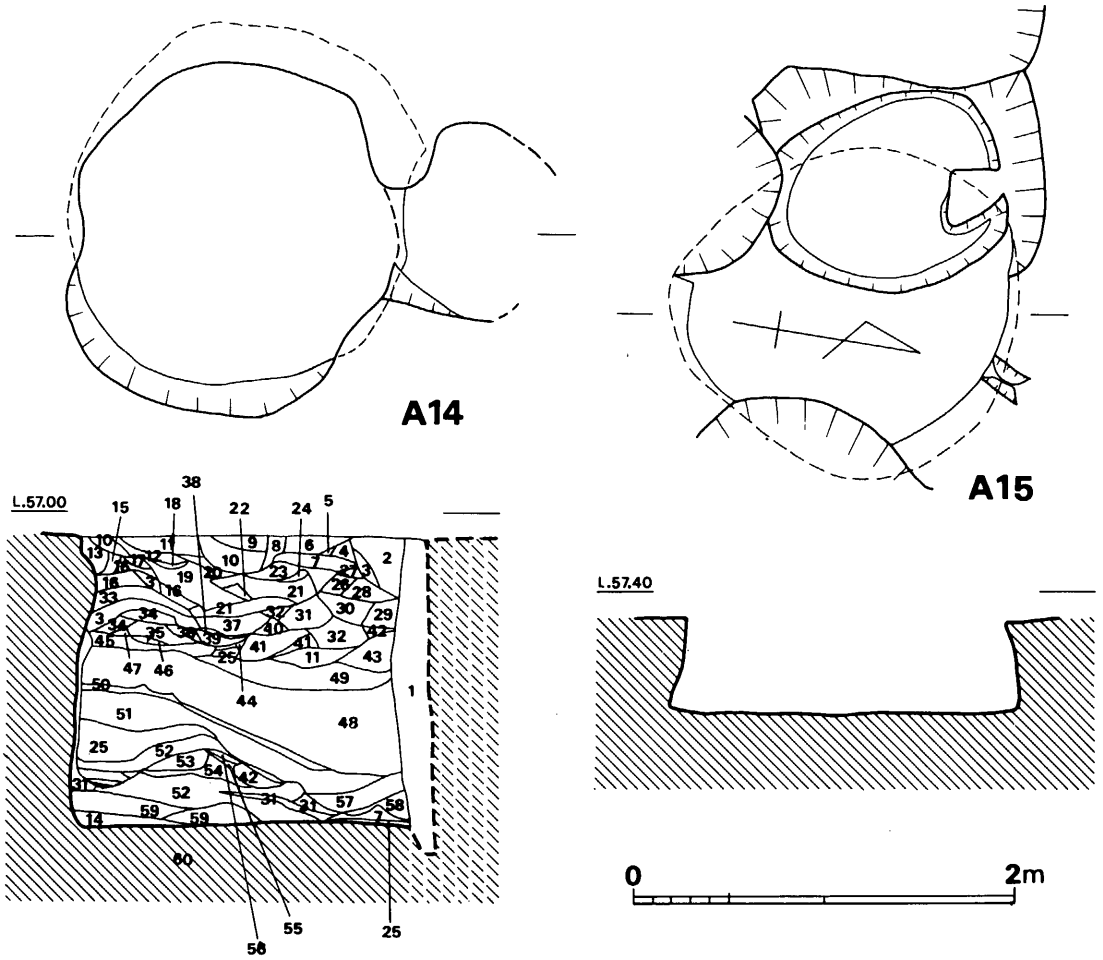


Fig. 138　14号・15号袋状竪穴実測図（縮尺１/40）

20号袋状竪穴

発掘区の西側端部にあたるため、半分しか調査できなかった。底面は径2.4 m の不整円形を呈するものと思われた。壁の断面は袋状を呈しており、高さは２ mである。遺物は何も出土していない。

21号袋状竪穴（Fig. 140）

丘陵頂部にあり、かなり削平されている。土坑は径120cm～130cmの不整円形を呈している。

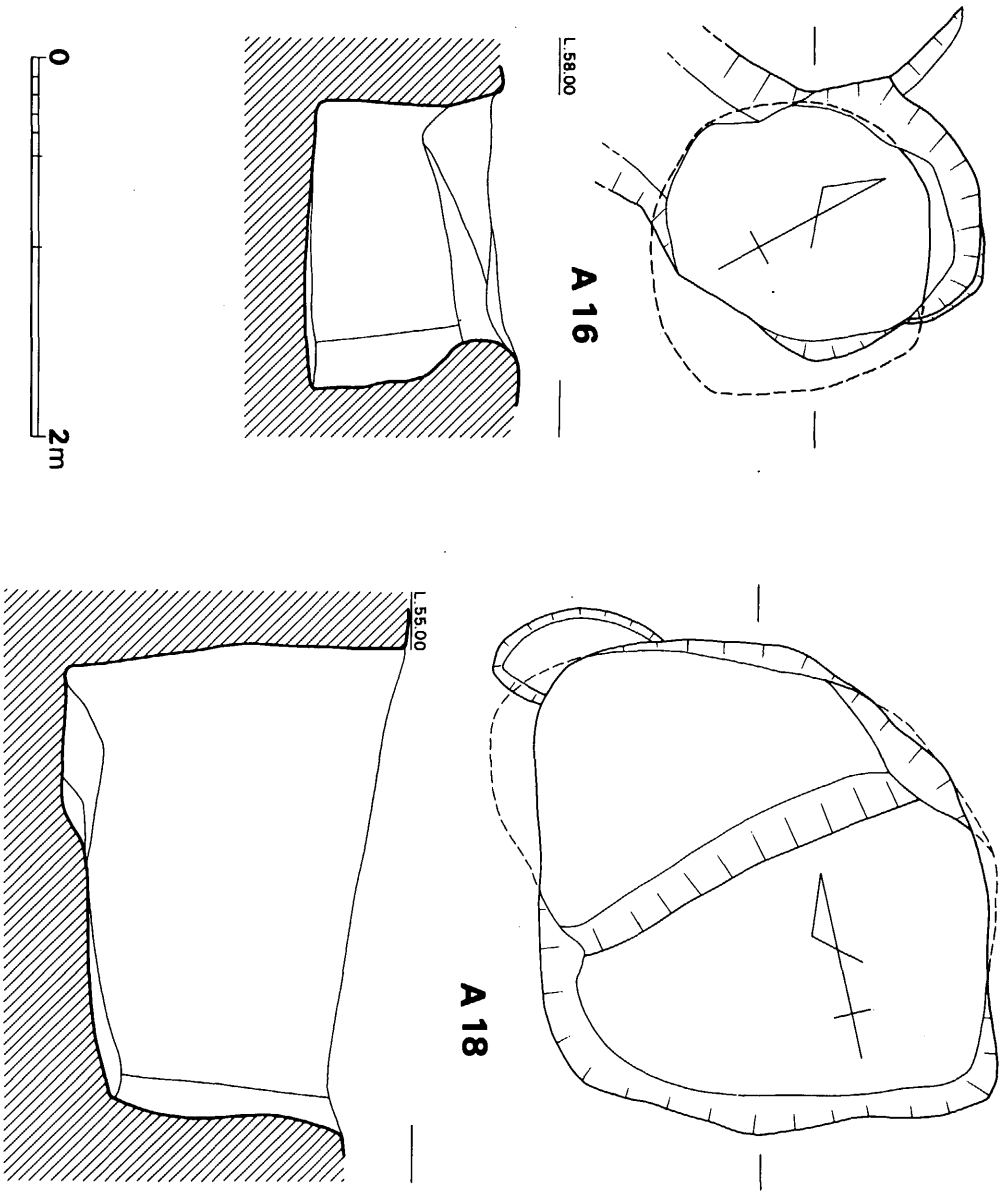


Fig. 139 16号・18号袋状竪穴実測図（縮尺1/40）

深さは25cm程の浅いものであり、底面に近い位置で弥生時代前期の甕形土器が検出された。

22号袋状竪穴（Fig. 140）

丘陵頂部に位置しており、大半を削平されている。新墓によって2ヵ所切られているがその平面形は円形状を呈している。径は145cmであり、深さは10cmの浅いものである。底部は平坦であり、これより5cm～7cm程浮いた状態で、弥生土器片を検出した。

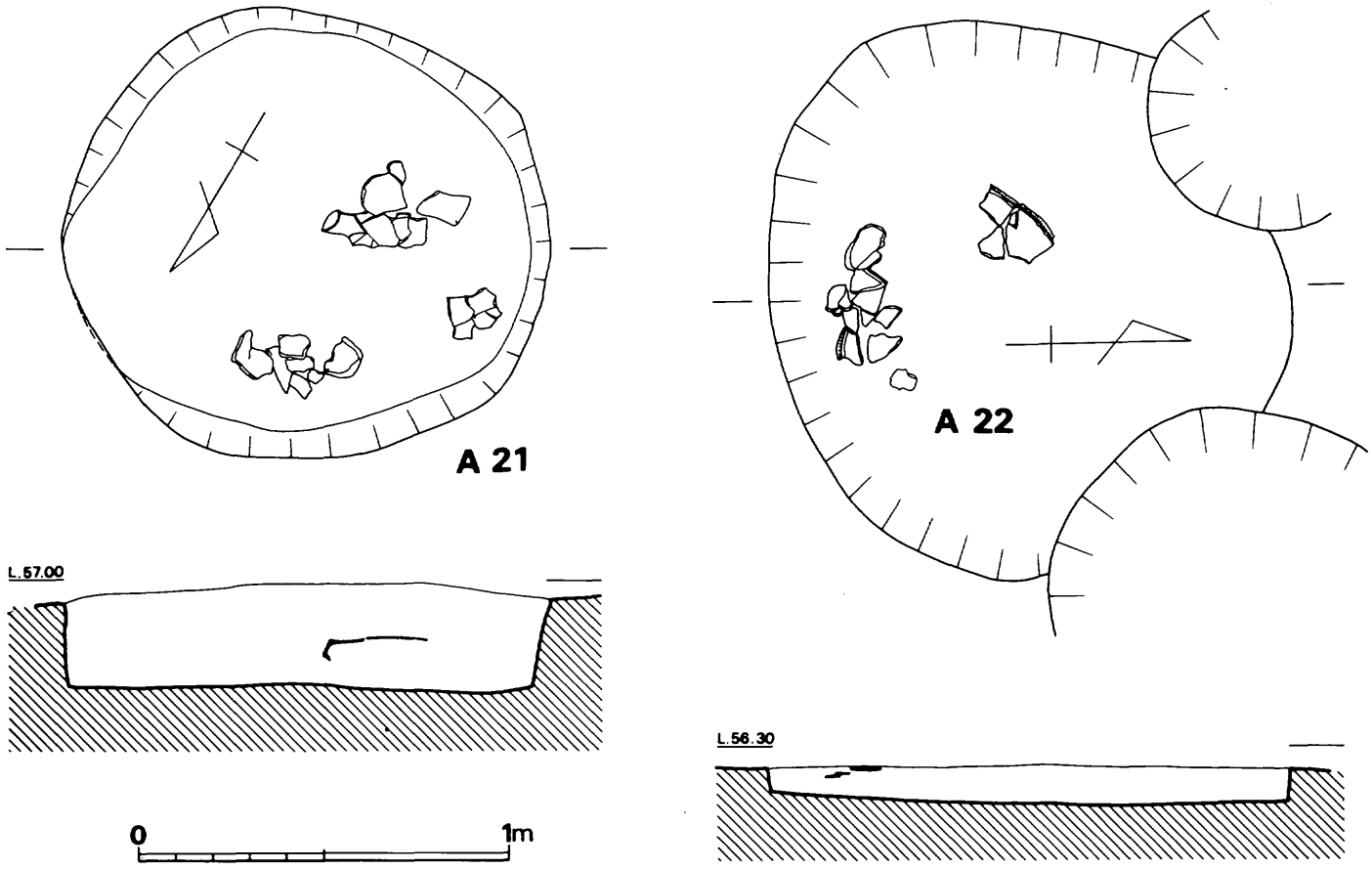


Fig. 140 21号・22号袋状竪穴実測図（縮尺 1/20）

Tab. 6　5号袋状竪穴層位名称表

1	混炭暗灰黄褐色土	15	混炭明灰黄褐色土	29	茶色土混入暗灰黄褐色土	43	灰黄茶色砂質土
2	茶混入明黄褐色土	16	明灰茶黒色土	30	明茶黒色粘質土	44	㊵の暗色
3	淡黄褐色土	17	灰茶色粘質土	31	暗灰赤褐色土	45	灰茶黄褐色土
4	木の根撹乱	18	明灰茶色土	32	暗茶黒色粘質土	46	灰黄褐色土
5	暗灰黄色土	19	灰赤色土	33	㉚の明色	47	暗灰茶色土
6	明灰黄色砂質土	20	暗茶褐色土	34	灰黄赤色土	48	灰赤色粘質土
7	微混炭灰茶褐色土	21	灰暗茶褐色土	35	淡赤褐色土	49	淡赤色土
8	灰黄黒色土	22	淡茶黒色粘質土	36	混炭淡灰黒色土	50	㊷の淡色
9	暗灰黄茶褐色土	23	灰赤褐色土	37	明赤褐色土	51	淡灰赤色土
10	暗灰黒褐色土	24	淡暗茶褐色土	38	㉜の淡色	52	暗灰黄褐色土
11	茶色土混入明褐色土	25	混炭灰黒色土	39	㊱の明	53	㊺の暗色
12	微混炭暗灰茶褐色土	26	混炭赤褐色土	40	赤色土混入灰黄褐色土	54	㊸の暗色
13	明灰黄褐色土	27	灰茶褐色土	41	暗黄褐色土	55	バイラン土地山
14	明灰褐色土	28	淡黄茶褐色土	42	㉒の暗色		

Tab. 7　7号袋状竪穴層位名称表

1	混礫暗赤褐色土	13	混炭灰黒色土	25	灰茶褐色弱粘質土	37	灰白褐色土（白砂混入灰褐色土）
2	灰茶黒色粘質土	14	明黄褐色土	26	灰赤茶色弱粘質土	38	淡白褐色土
3	淡茶黒色粘質土	15	淡黄褐色土	27	灰赤褐色土	39	淡灰褐色土
4	明褐色土	16	灰黄褐色土	28	明赤黄褐色土	40	灰赤黄褐色土
5	暗灰褐色土	17	白砂混入灰褐色土	29	明茶色粘質土	41	灰黄白褐色土
6	淡褐色土	18	白砂混入灰茶褐色土	30	淡茶色粘質土	42	褐色土（白味強し）
7	淡灰茶黒色粘質土	19	⑰の白色強し	31	明赤褐色土	43	灰褐色土
8	暗茶褐色粘質土	20	⑱の茶色強し	32	茶色混入明黄褐色土	44	灰茶褐色土
9	明茶黒色粘質土	21	⑰の明色	33	黄褐色土	45	バイラン土地山
10	暗灰黄褐色土	22	明灰茶色土	34	暗黄褐色土	46	⑫と同じ
11	混炭明灰黒色土	23	灰赤茶色粘質土	35	㉜よりも暗い		
12	灰茶色土	24	暗赤茶色粘質土	36	淡赤黄褐色土		

Tab. 8　14 号袋状竪穴層位名称表

1	新墓埋土	16	暗黄褐色土	31	灰茶褐色土	46	暗茶褐色土
2	明褐色土	17	暗灰黄褐色土	32	灰黄茶色土	47	㉟の暗色
3	暗灰褐色土	18	灰黄褐色土	33	茶色土混入暗黄褐色土	48	白砂混入暗黄褐色砂質土
4	淡灰茶褐色土	19	黄褐色土	34	明黄褐色土	49	白砂混入明黄褐色砂質土
5	淡灰黄黒色土	20	混炭灰黒色土	35	灰白色土	50	灰茶色粘質土
6	淡灰黒色土	21	混炭暗黒色土	36	灰褐色土	51	暗黄褐色砂質土
7	混炭灰茶褐色土	22	⑲の暗色	37	白色土混入黄褐色土	52	混炭暗灰黒色土
8	混炭暗灰色土	23	明赤褐色土	38	白色土混入茶褐色土	53	暗灰赤茶色土
9	暗灰色土	24	明灰黄色土	39	灰褐色土	54	赤茶色土
10	暗灰黄色土	25	混灰茶色土	40	黄白色土	55	暗赤茶色土
11	暗灰茶色土	26	茶色土混入暗灰黄色土	41	白色土混入灰茶褐色土	56	灰赤茶色土
12	混炭暗灰黄色土	27	茶色土混入灰黄褐色土	42	暗灰茶褐色土	57	㊶の灰色
13	混礫灰黄色土	28	茶色土混入暗灰黄白色土	43	茶色土混入暗黄褐色土	58	㊼の暗色
14	暗灰褐色土	29	明灰茶褐色土	44	茶白色土	59	混炭淡灰黒色土
15	明灰茶色土	30	明茶黒色土	45	暗茶色土	60	バイラン土地山

Tab. 9　袋状竪穴一覧表　　単位 cm

番号	口辺部		底面		深さ	断面形	出土遺物
	形	大きさ	形	大きさ			
1	台形	175×166	長方形	182×140	140	長方形	
3	不整形		円形	170	300	袋状	弥生土器片
5	台形状		台形	190×150	160	長方形	高杯
6	不整円形		不整円形	150×130	150	袋状	
7	円形		円形	180	160	袋状	
8	不整形		楕円形	220×180	160	袋状	
9	不整円形	228	不整円形	230×200	100	袋状	
10	不整円形		不整円形	190	80	台形	
11	不明		楕円形	180×140	160	袋状	
13	不明		円形	200×180	110	袋状	
14	円形		円形	180	150	袋状	
15	不明		不整円形	180×170	50	袋状	
16	不整形		不整円形	160×150	110	若干袋状	
18	隅丸方形		不整形	230	180	長方形状	
19	不整形		楕円形	290×230	140	長方形状	甕形土器
20	不明		不整円形	240	200	袋状	
21	円形	125	円形	130×120	25		甕形土器
22	円形		円形	145	10		弥生土器片

F　その他の遺構

1号竪穴状遺構（Fig. 141）

1号住居跡の北方に遺構は所在している。規模は長さ2.6m、中央部幅1.9mで長方形を呈するものである。深さは33cmと浅いものであり、住居跡のようでもあるが柱穴が検出されなかったため、住居跡とは決めがたい。また袋状竪穴とするには浅すぎる点と、他の袋状竪穴とは平面形が異なるため区別した。

中からは遺物は何ら検出されていない。

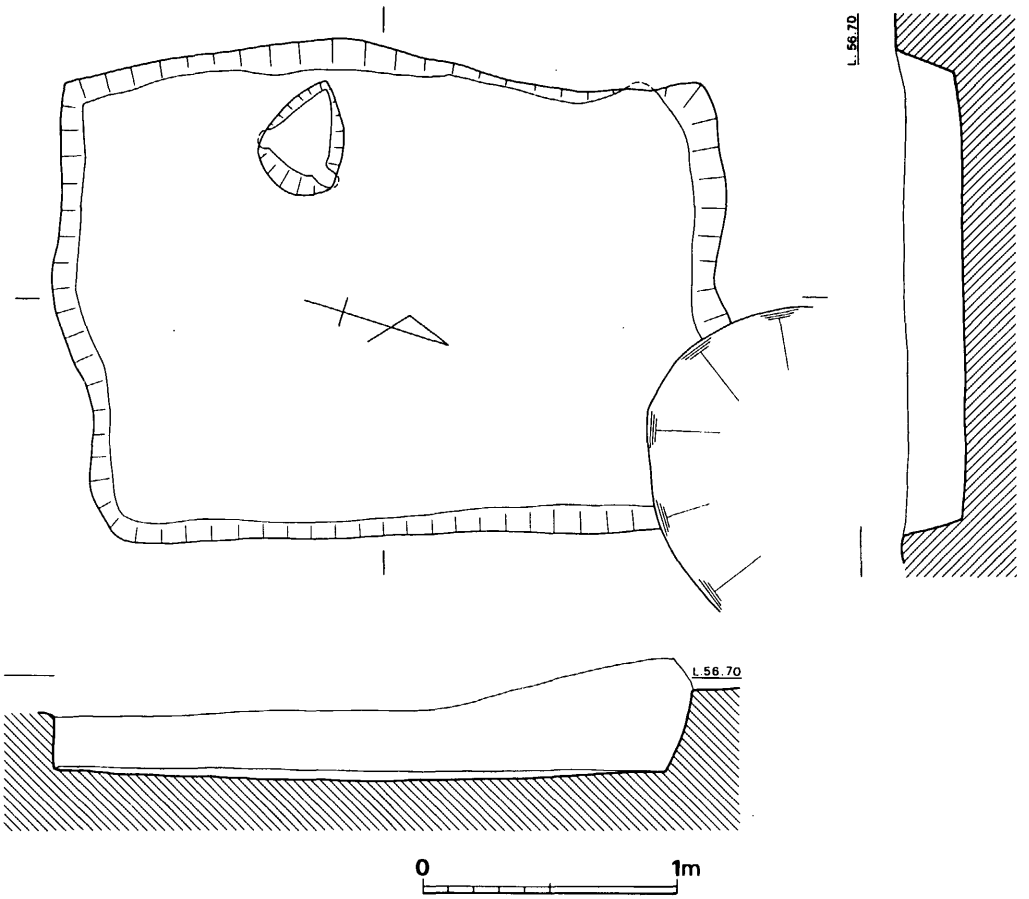


Fig. 141　1号竪穴状遺構実測図（縮尺1/30）

遺　物

土器

(イ)　木棺墓・土坑墓出土土器（Fig. 142, PL. 94）

1は1号木棺墓出土の壺形土器である。中央部からわずかにさがった位置に胴部最大径はあ

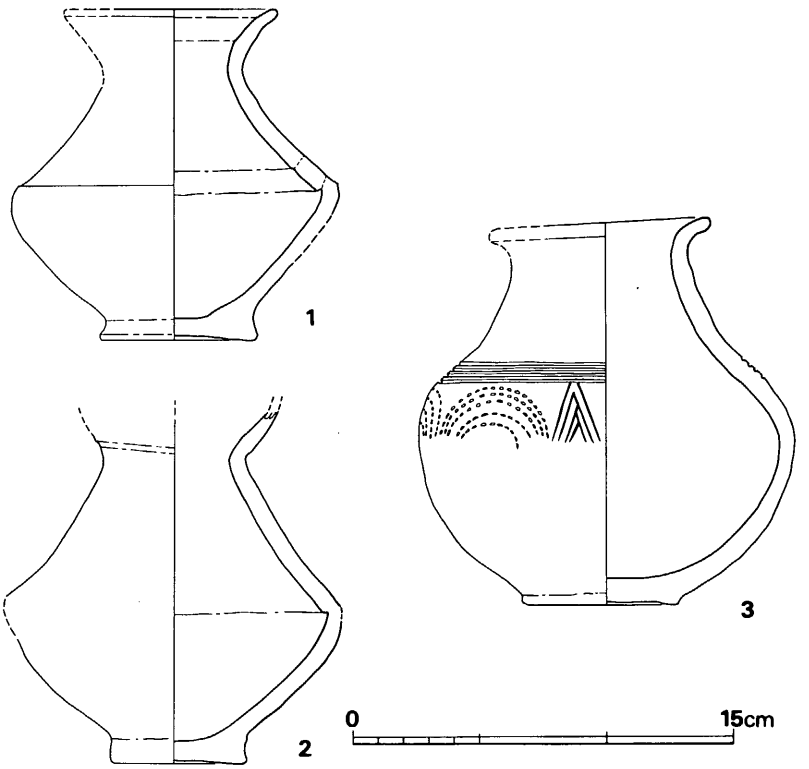


Fig. 142　木棺墓・土坑墓出土土器実測図（縮尺１/３）

り、境部は角張って稜線が入る。口頸部はやや長く外反し、肩部との境部は丸味をもつ。肩部はやや内湾気味に胴部と接合されている。内面には粘土紐の巻き上げ痕が見られ、接合部は段を有している。底部は若干上げ底となる。調整法は口頸部は内外面とも横ナデを施しており、胴部外面はヘラ研磨が顕著である。色調は赤褐色を呈しており、焼成はやや不良である。胎土には微砂粒を含むが良好である。口径8.4cm、器高13.1cm、胴部最大径12.9cm、底径6.2cmである。板付Ⅰ式である。

２は２号木棺墓出土の壺形土器である。口縁部を一部欠損している。最大径部は中央部からわずかにさがった所に位置している。器表は磨滅していて、特に肩部と胴部の境部が著しいため、稜線を消失しているが本来は１と同様に角張るものと思われる。全体に１をひとまわり大きくしたものであるが、口頸部は、肩部との境にわずかの段を有して外反している。従ってこの部分の内面は１よりも屈曲が大きい。胴部はやや丸味をもっている。色調は黄褐色を呈しており、焼成は不良である。胎土には細砂粒を含む。最大径13.2cm、器高14cm＋α、底径5.3cm。板付Ⅰ式である。

３は１号土坑墓出土の壺形土器である。短く外反する頸部をもち、頸基部は丸味を有する。肩部には４条の平行沈線が入り、この直下にヘラによる山形文が一ヵ所と、貝殻による重弧文

が8ヵ所に入る。胴部最大径は中央部からわずかにさがった所に位置しており、丸味を有してつくられている。平行沈線の直上部はわずかにくぼませているが稜はつかない。丈の低い底部がつき、若干上げ底となる。底部から胴部下半の一部に黒変しているのが見られる。調整法は口頸部内外面は横ナデをし、底部を除く外面はヘラ研磨を施す。内面の肩部は指圧痕が見られ、以下はナデを施している。色調は褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含んでいる。口径8.7cm、器高15.3cm、胴部最大径14.8cm、底径6.2cmである。板付II式に属するものである。

(ロ) 袋状竪穴出土土器（Fig. 143, PL. 95）

1は5号袋状竪穴（以下袋状竪穴を省略する）出土である。高杯の脚柱部である。杯部と脚部の境には一条の三角突帯を貼付しており、以下の外面は縦方向のヘラ削りを施す。脚部内面も同様のヘラ削りを施す。色調は茶褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には大粒の砂粒を多量に含んでいる。

2は10号から出土した甕形土器である。口縁部は短く外反し口唇部に刻み目を入れている。外面は幅広の刷毛目が長い単位で施されている。内面はナデ調整である。茶褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含んでいる。

3は10号から出土した壺形土器の底部である。底部は平坦である。胴部外面は磨滅により定かでないが、ヘラ研磨しているようである。明褐色を呈しており、外面は一部黒変している。胎土には多量の砂粒を含んでおり、焼成は良好である。

4～9は13号からの出土品である。4は甕形土器の口縁部近くの小片であり、口縁上面は平坦に近い。口唇部に刻み目が入る。茶黒色を呈しており、焼成は良好である。

5は甕形土器であり、胴部は内傾する。口唇部下半部に刻み目が入る。外面は目の細い刷毛目が入り、内面はナデを施している。茶黒色を呈しており、焼成は良好である。

6は甕形土器であり、口唇部下面に刻み目が入る。調整法は外面は刷毛目を、内面の口頸部には刷毛目が入り、その上をナデて消している。茶褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含んでいる。

7は壺形土器の口頸部で、口唇部の中ほどをくぼませている。黄褐色を呈しており、焼成は良好である。

8は壺形土器の底部と思われる。底部はわずかに上げ底である。内外面をヘラ磨きしている。暗茶褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。

9は甕形土器の底部と思われる。底部は平坦である。内外面をヘラ磨きしている。色調は黄褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の小砂粒を含む。

10は19号出土の甕形土器である。口縁部はなめらかに外反しており、口唇部に刻目が入る。内面は指圧痕がみられ、下半部分は煤が付着している。暗茶色を呈しており、焼成は良好であ

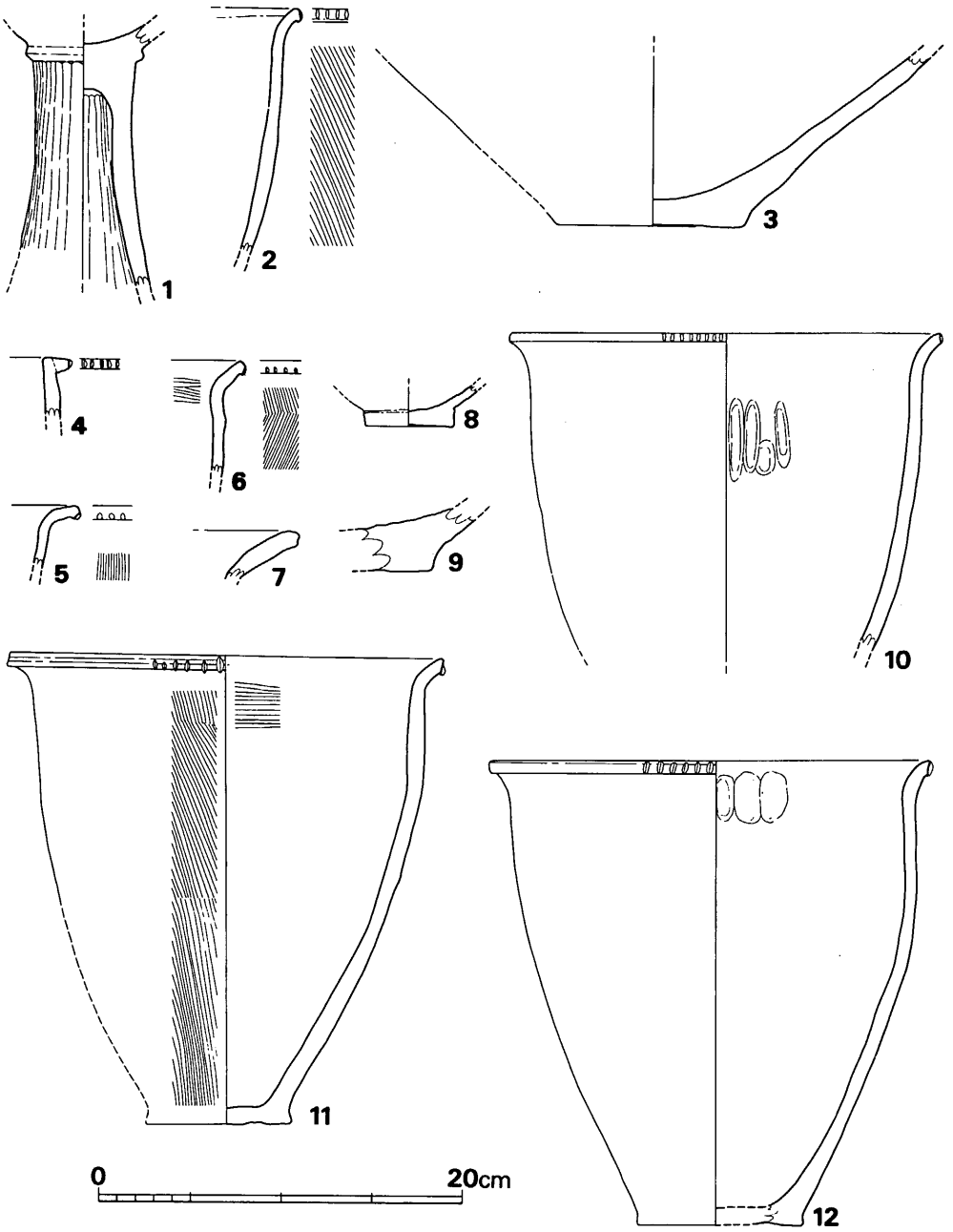


Fig. 143　袋状竪穴出土土器実測図（縮尺１/４）

る。胎土には砂粒を含む。

11は22号出土の甕形土器である。口縁部は外反しており、口唇部には刻み目が入る。全体に厚手造りである。底部は幅1cm程で弧状の浅い凹面を有する。外面は斜め方向に目のあらい刷

毛目を施し、内面は口縁部下に刷毛目が残る。以外はナデを施しており、中ほどの部分には煤が付着している。灰茶褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土に砂粒を含む。口径24.2cm、器高26cm、底径8cmである。

12は21号出土の甕形土器である。口縁部は短く外反しており、口唇部には刻み目が入る。外面の口縁直下には煤が付着している。内面の上部には指圧痕が見られる。底部には幅1cm程で弧状の凹面を有する。茶褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。口径24.5cm、器高25.8cm、底径9.1cmである。

出土遺物の時期はいずれも板付II式に属するものであり、その年代は弥生時代前期中頃に比定される。

(ハ) 住居跡出土土器

1 号住居跡出土土器（Fig. 144, PL. 95）

いずれも住居跡埋土中のものであり、床面に接して出土したものはない。1は甕形土器であり、口縁部は短かく外反しており、口唇部上面に刻み目が入る。内外面はナデ調整であり、器壁は厚い。色調は茶黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含んでいる。2は甕形土器であり、灰黒色土層から出土した。器壁はうす手であり、外面は丹塗りしている。3は甕形土器であり、灰黒色土層から出土した。口頸部は短く外反している。外面は目の細い刷毛目が入っており、内面はナデており、指圧痕がみられる。暗茶褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土に多量の砂粒を含む。4は甕形土器である。頸基部は内外面とも丸味を有して外反する。器表は磨滅しているため調整法は不明である。灰茶褐色を呈しており、焼成は良好である。5は甕形土器であり、口縁上面は若干外傾するも平坦に近い。口唇部には刻み目が入る。口縁部は内面にやや突き出している。外面の口縁直下は丹塗りであり、以下には曲線的な刷毛目が入る。黄褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含んでいる。6は甕形土器であり、灰黒色土層から出土した。口縁上面はやや内傾気味の平坦面を有したつくりであり、内面にわずかに突出している。外面は刷毛目を施しており、以外はナデ調整である。茶褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の小砂粒を含んでいる。7は甕形土器であり、底部周辺を欠損している。口縁端部を欠損する。外面は口縁部から$\frac{2}{3}$ほど煤が付着している。茶褐色を呈しており、焼成は良好である。8は甕形土器である。口縁部はわずかに外反しており、頸基部は凹湾する。口縁部はゆがんでいて水平でない。器表は磨滅しており、調整法は不明である。褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には大粒の砂粒を多量に含んでいる。9・11・12は灰黒色土層から出土した。底部はいずれも小片であり、壺形土器、甕形土器の区別のつきにくいものもあるが、判別できるものを挙げると、甕形土器と思われるものは9～12、16～19であり、壺形土器と思われるものは13、20、21である。17は内面に煤が付着している。

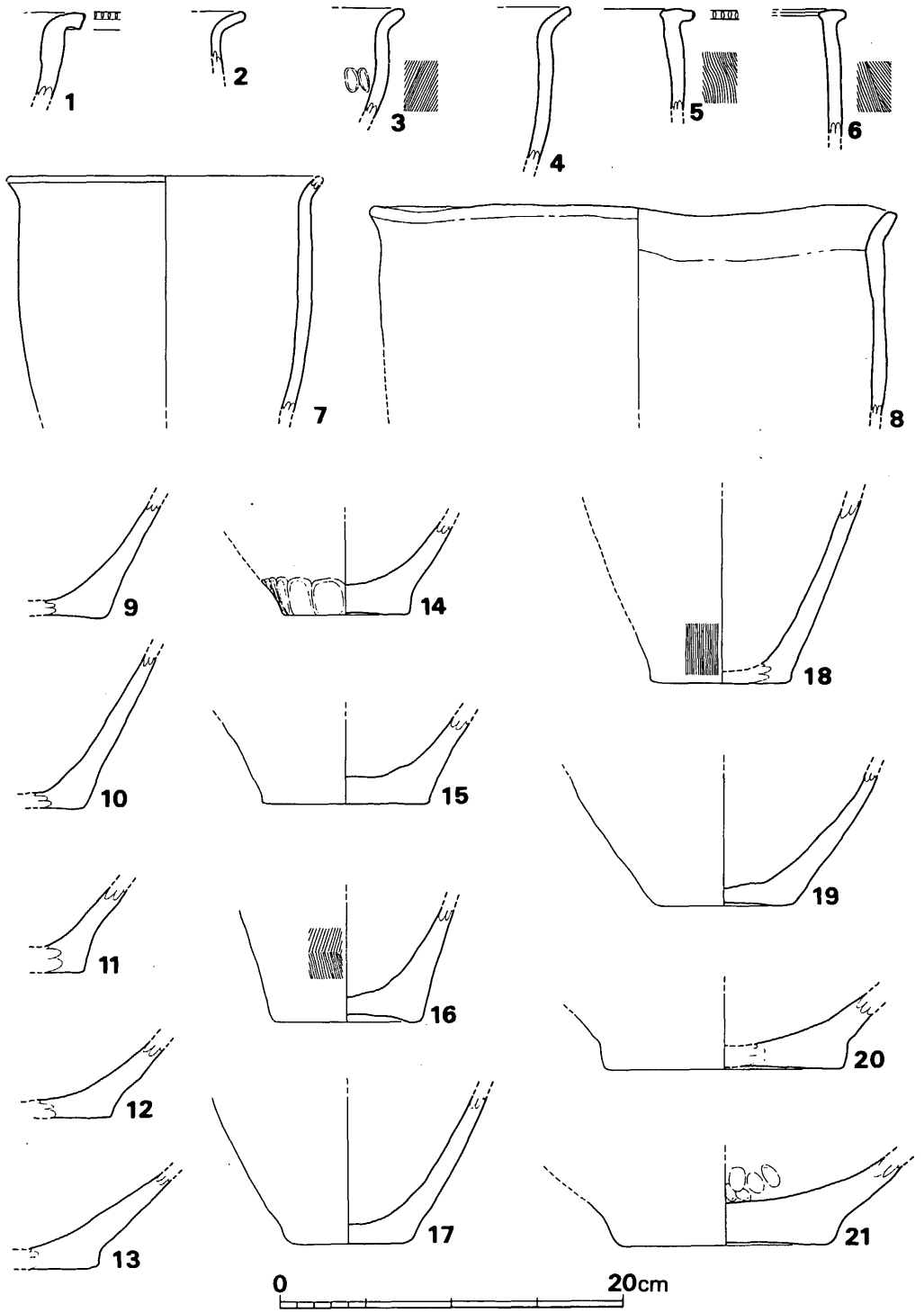


Fig. 144　１号住居跡出土土器実測図（縮尺１/４）

1～8は板付II式でも新しい方に属しており、底部もほとんどが板付II式に属すると思われる。従って、住居跡の年代は弥生時代の前期末に比定される。

3号住居跡出土土器（Fig. 145）

22・23は住居跡を切っている新墓の埋土中から出土したものであり、純粋に住居跡内から出土したものは24である。22は甕形土器であり、口縁部上端面は水平であり、端部から4.5cm下方に1条の三角突帯が配されている。外面には煤が付着しており、内面はナデを施す。茶褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含んでいる。23は甕形土器の底部であり、内面には煤が付着している。灰褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。24は壺形土器の底部であり、わずかにあげ底となる。底部と胴部の境部は凹湾する。茶褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含んでいる。

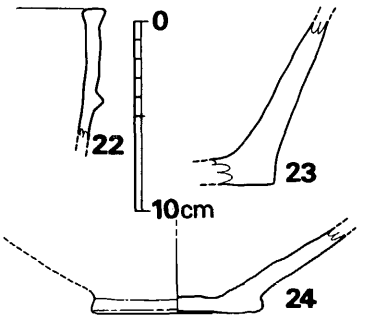


Fig. 145　3号住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）

22～24は板付II式に属するものである。

(二)　表採・ピット出土土器（Fig. 146）

1は1号袋状竪穴のそばのピットから出土した。口縁部はわずかに外反しており、この部分に煤が付着する。口唇部には刻み目が入っている。外面は器表が剥離しているため調整は不明であるが、底面部には目の細い刷毛目がみられる。内面はナデており、下面部には指圧痕がみられ、火を受けた痕跡がみられる。器壁は底部に至るに従って厚くなる。暗茶褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含んでいる。

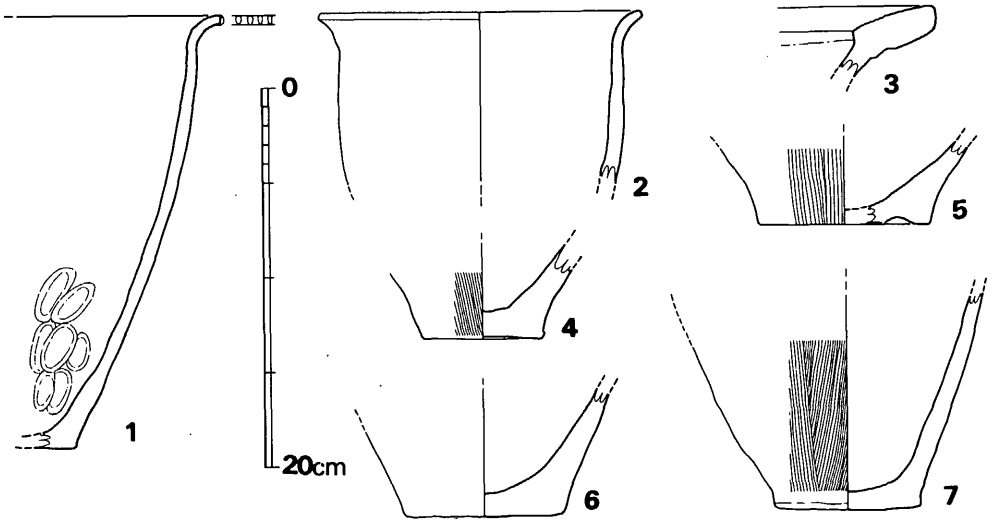


Fig. 146　表採・ピット出土土器実測図（縮尺1/4）

２～７はいずれも表採品である。２は甕形土器である。口縁部は短く外反する。器壁は下方へ行くに従って厚手造りとなる。黄褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含んでいる。３は口縁部のみである。内面の頸部との境部には段を有している。褐色を呈しており、焼成は良好である。４～７は甕形土器の底部である。５は底部に幅１*cm*程の弧状の凹面があるが他の土器は平担である。４、５、７は外面に刷毛目が入る。

１は板付Ⅰ式に属しており、２～７は板付Ⅱ式に属するものと思われる。　（川述昭人）

(ホ)　石器

１号住居跡出土石器（Fig. 147～152）

石鏃（Fig. 147・148－１～67, PL. 98・99）

１～９・11～13・15・16・18・20～23、25～34、45、55、56は、基部に浅い抉りを有するもので、最大幅に対し、最大長が勝るものである。

当住居跡より出土した石鏃中最[註(1)]も多い形態である。調整は、先端部から下位に向って連続して行なわれている。これは、１の石鏃の様なものである。中でも、２、20、23、28、56は大形の鏃である。これら大形のものは剥片によって若干左右されている様であり、２の様に厚めの剥片を用いた場合中央部に突起ができることもある。これら、抉りを有するものを仮にここではⅠ類とする。

Ⅱ類[註(2)]は、10・14・17・19・24・47・49等の様に最大幅と最大長との比が１：１もしくは、若干最大幅が勝るもので、形態は正三角形を呈するものである。調整は、前者同様上位より下位に向って連続して行なわれている。

Ⅲ類は、35・36・38～44等は最大幅と最大長の比から見れば、Ⅰ類と同じ範囲に納まるものであるが、基部に抉りを有しなく直線的であり、形態が二等辺三角形を呈するものである。

37は、ａ面、ｂ面、ｃ面の一部を研磨しており、大きさの割に厚さがある。上記の分類に入らないものである。

41は、基部を直線に仕上げるため、ｄ面に見られる様にａ面右下位を折断している。

46は、非常に小形で、一般に細石鏃と称されるものである。

48は、片脚鏃でａ面、ｃ面に見られる[註(3)]様に、入念な調整が施され、片脚を除去している。

51・63は、両側辺中央部に段を有するもので、俗に駒形鏃と称されているものである。63はｂ面に見られる様に、交互剥離が行なわれており、ａ面、ｃ面[註(4)]に見られる様に調整は雑である。

53・54は、形態的にはⅠ類に属するものであるが、最大長：最大幅の比は、１：２以上であり、脚が大きく開くものである。

57・58は、半月形を呈するもので、57は、ａ面上位の直線部、もしくは58の様にａ面右上位を先端として使用したものと思われる。ａ面右上位を先端として使用した場合48の片脚鏃と同様のものと考えられる。

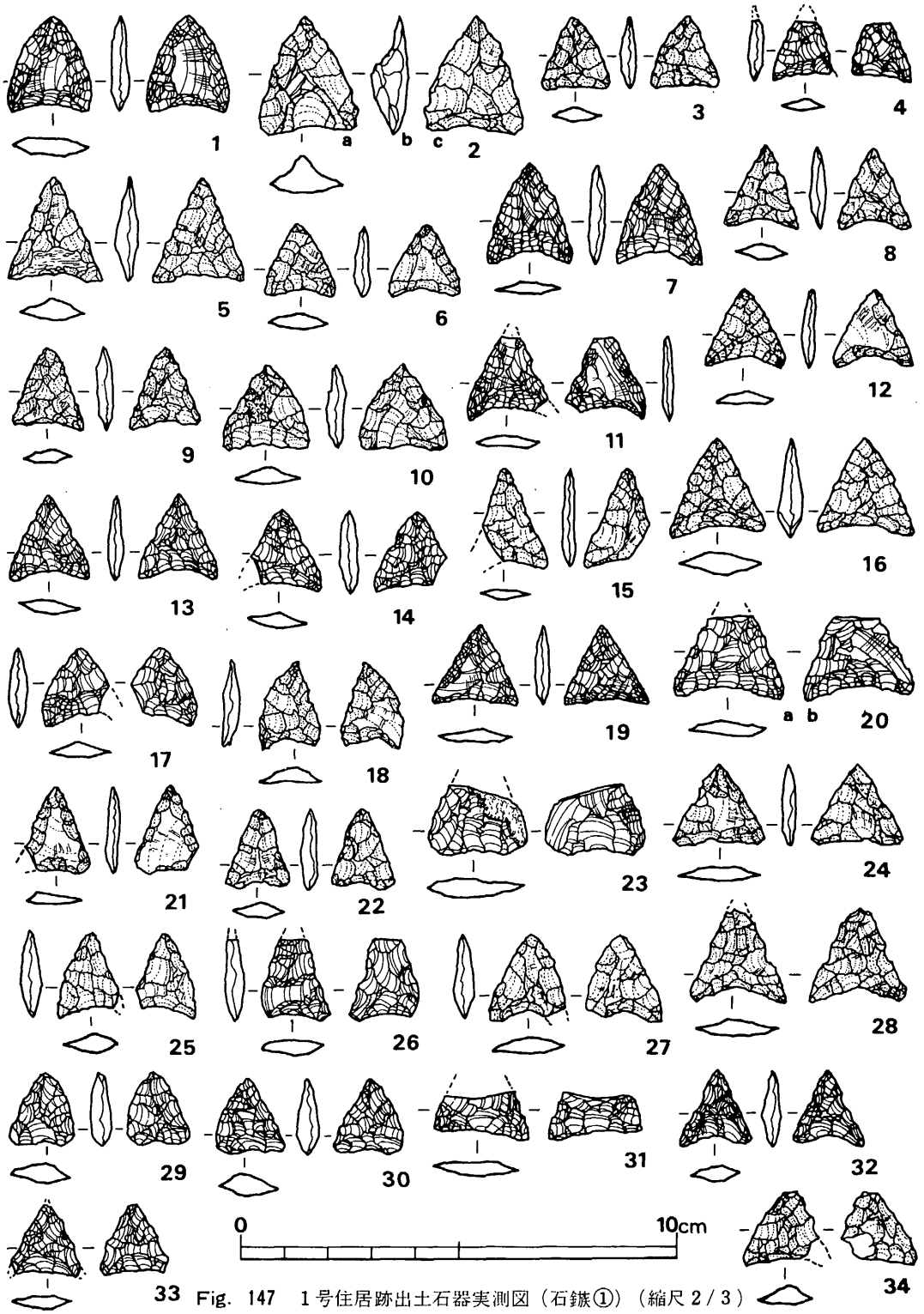


Fig. 147　1号住居跡出土石器実測図（石鏃①）（縮尺 2 / 3 ）

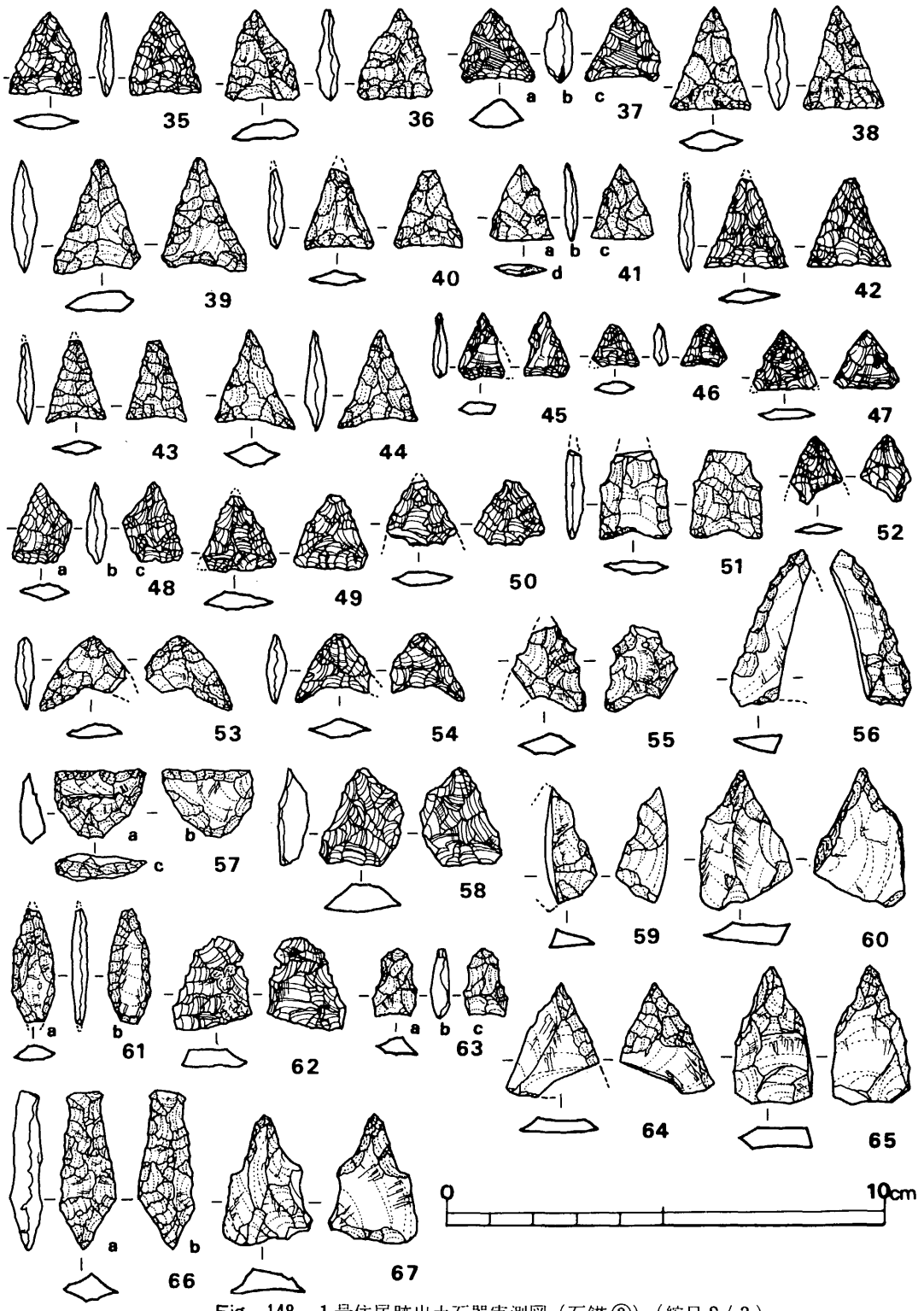


Fig. 148　１号住居跡出土石器実測図（石鏃②）（縮尺２/３）

61は、薄い不定形の剝片を用いており、周辺部のみに押圧剝離を施して、形状を柳葉形に仕上げている。[註(5)]

65は、大形の剝片を折断しその後先端より調整を行なっている。

66は、基部に舌を有するもので先端部が直線をなす。これは先端部に調整が必要であると思われる。

60・62・64・65・67は、未製品である。特に60・64・67は、剝片そのものが小形のものであり先端部より下位に向って調整が施されている。

スクレイパー（Fig. 149－2・5・8・13～17, PL. 100）

2は、横長の剝片のb面左側と右側にa面、c面に見られる様に、急角度の調整を行なっており、round、もしくはend－Scraper的機能を有するものと考えられる。[註(6)]

5は、2同様急角度の調整を有するものであるが、c面に入面な面的な剝離を施し、a面左側辺部を刃部として使用したものと思われる。

8は、上記のスクレイパーが小形であるのに対し、大形の剝片を用い、a面、b面の側辺部のみに刃部調整を施している。打面調整は行なわれていない。

13は、薄手の剝片を用いて周辺部に刃部調整を行なっている。

14・15は、小形の厚みのある不定形剝片を用いている。14は、周辺部に押圧剝離を施しており、打面は、調整の際もしくはそれ以前に取り除かれている。15は、打面の厚みを利用し、交互剝離によって打面部にも刃をつけている。両者とも、刃部が全周することから、round－Scraper的機能を有するものと思われる。

16は、縦長剝片の端部を折断し、主要剝離面の左右側辺部に若干の刃部調整を行なっている。

17は、縦長剝片を用い左右側辺部に表裏より刃部調整を施している。打面調整は行なわれていない。

ドリル（Fig. 149－7・9～12, PL. 100）

7・11は、小形で幅の広いもので、調整は、左右側辺部に交互に行なわれている。

10は、7・11同様に幅の広いものであるが、大形の剝片に芯の部分のみ調整を行なっているもので、オール的なものである。

9・12は、上記のものに比べて、芯が細く、調整は左右から行なわれており、断面形は三角形を呈するものである。

石核（Fig. 149－18, PL. 103）

黒曜石の原石の幅の狭い部分を剝取面とし、打面、側面等の調整を施さず、直接加撃し、縦長剝片を剝取している。

ナイフ形石器（Fig. 149－1・4, PL. 100）

1は、厚手の横長剝片の左右側辺に刃潰し加工を施し基部を形成している。d面には、左右

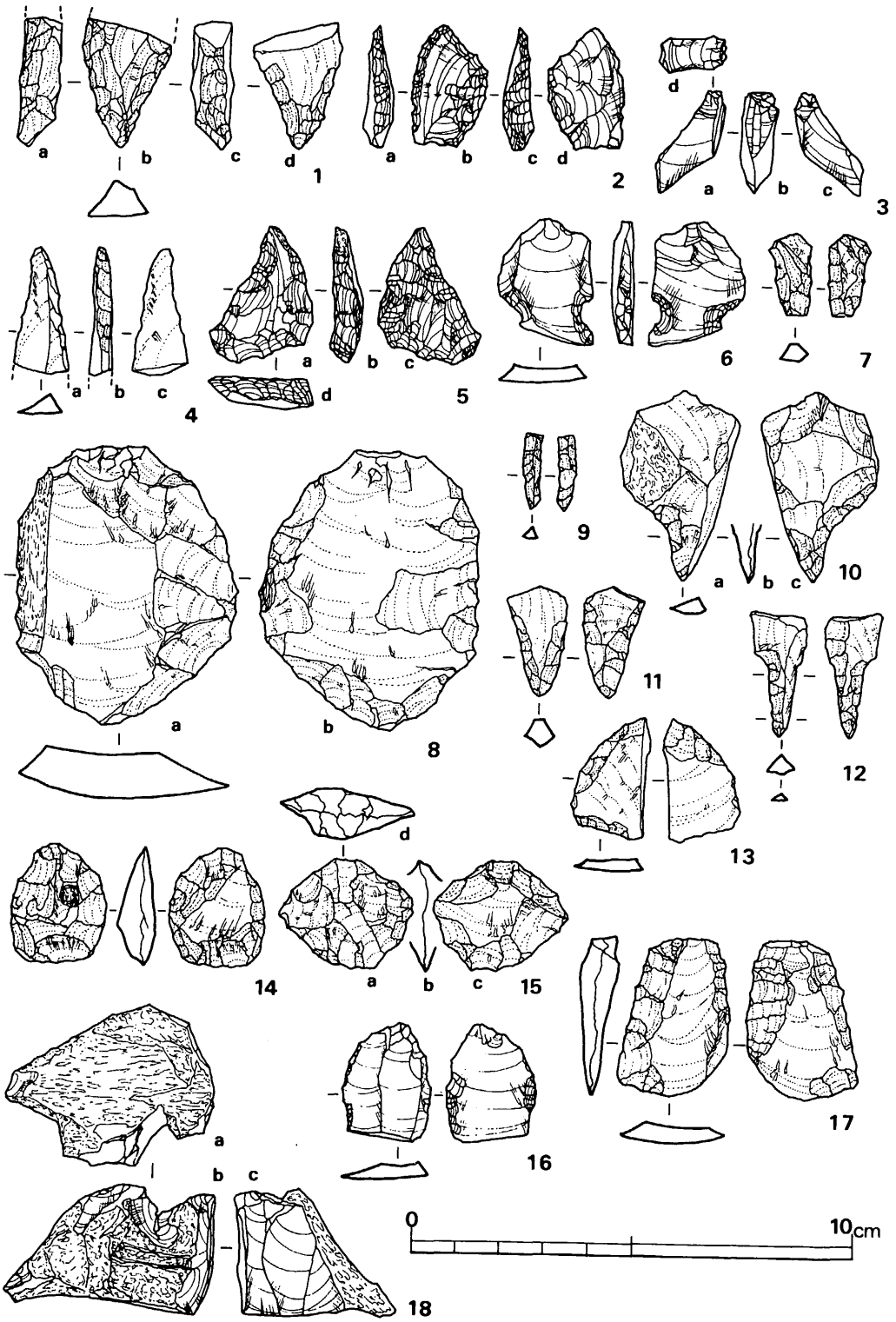


Fig. 149　１号住居跡出土石器実測図（縮尺２／３）

からの面的な調整が行なわれている。先端部は欠損している。4は、横長剝片を用い、a面右側辺部に刃潰し加工を施し背面を形成している。

a面左側辺部には若干の刃こぼれが見られることから刃部を使用したものと考えられる。註(7)

細石核（Fig. 149－3，PL. 103）

a面、c面の両側面は、上位からの加撃によって形成されている。d面の打面はb面からの加撃によって形成されており、すべて一撃の加撃によって、打面、側面は形成されている。註(8)

b面の剝取面は、3回のフルーティングが行なわれており、打面の状態から見て細石刃剝取のための加撃は、それ程多く行なわれていない様である。

つまみ形石器（Fig. 149－6，PL. 100）

縦長剝片の両側辺部にノッチを施し、中間部付近より折断している。註(9)

1、3、4は、先土器時代のものであり、6は縄文時代のものであり、流れ込んだものと思われる。

石斧（Fig. 150－2・3，PL. 100）

両2側面および表面は、敲打による調整後、研磨を施している。刃部欠損後は、敲石として使用している。刃部付近に火を受けている。

敲石（Fig. 150－2・3，PL. 100）

2は、全体を打撃によって調整し、部分的に研磨を行なっている。3は、全体を敲打によって調整を行なっている。頭部、側面を欠損している。

紡錘車（Fig. 150－4，PL. 100）

指頭によって調整が行なわれており、周辺部は研磨が施されている。

抉入片刃石斧（Fig. 150－5，PL. 100）

研磨によって調整されており、頭部を欠損している。風化が著しく進んでいる。

磨製石鏃（Fig. 150－6，PL. 100）

茎を有し、研磨によって仕上げられている。

石庖丁（Fig. 150－7・8，PL. 100）

7は、小型である。8は、大型のもので7に対して研磨が入念に行なわれている。

石核・剝片（Fig. 151・152－1～19，PL. 101）

石核　1・5・12・14・16

1は、a面、d面を打面とし、礫面に直接加撃を行ない、剝片を剝取している。剝片剝取面は、b面に限られている。5は、1同様礫面に直接加撃を行ない剝片を剝取しているが、剝取面は、b面、c面の両面に有している。

12・14は、平坦面を有してなくb面、c面に剝取面を有している。両者共に打面は、上下に持っている。

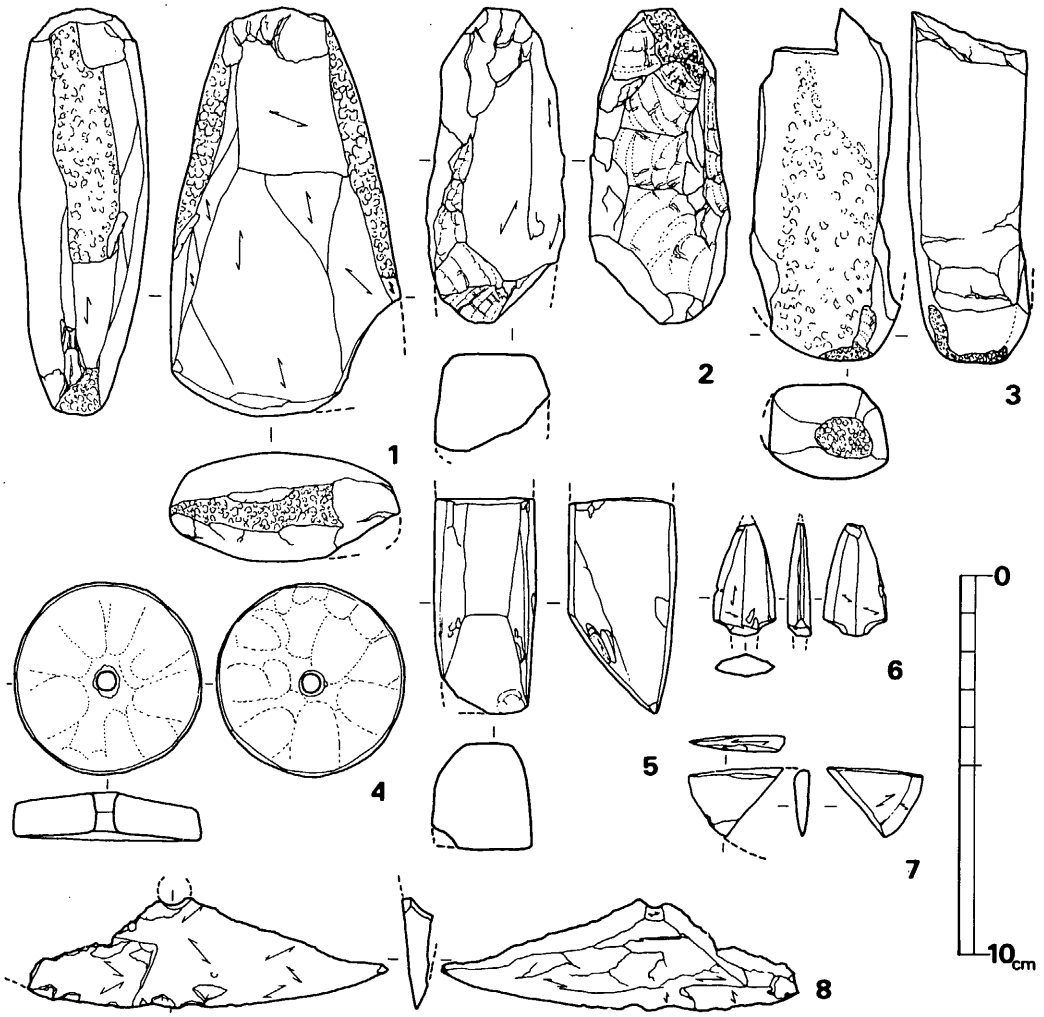


Fig. 150　１号住居跡出土石器・土製品実測図（縮尺１/２）

16は、前者の石核と異なり、一定の打面を持ってなく、礫の周辺部をすべて、打面としている。この石核より剝取された剝片は、前者の石核のものと比べ大形のものが多い。

これらの石核より剝取された剝片は、打面もしくは側面、端部に一部礫面を有している。

剝片　２～４・６～11・13・15・17～19

７は、石核の剝取面が剝ぎ取られたもので、本来ｂ面右斜上位に打面を有していたもの。８は７の様な石核から剝ぎ取られたものである。

13は、７同様縦長剝片を剝取していた石核から剝ぎ取られたものである。

黒曜石の剝片とサヌカイトの剝片を比べると一般にサヌカイトの方が大形の剝片である。

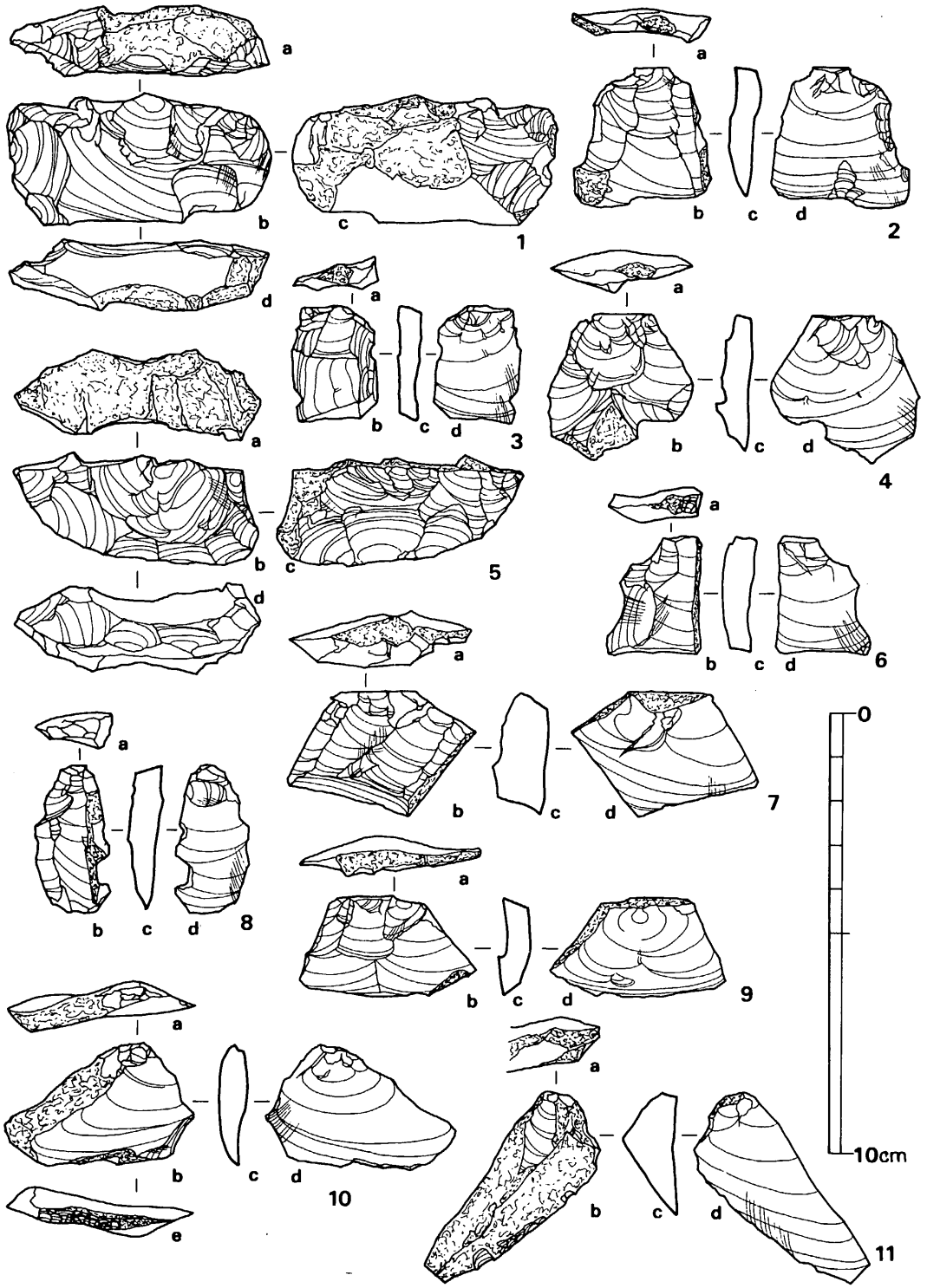


Fig. 151　1号住居跡出土石核・剥片実測図（縮尺 2 / 3 ）

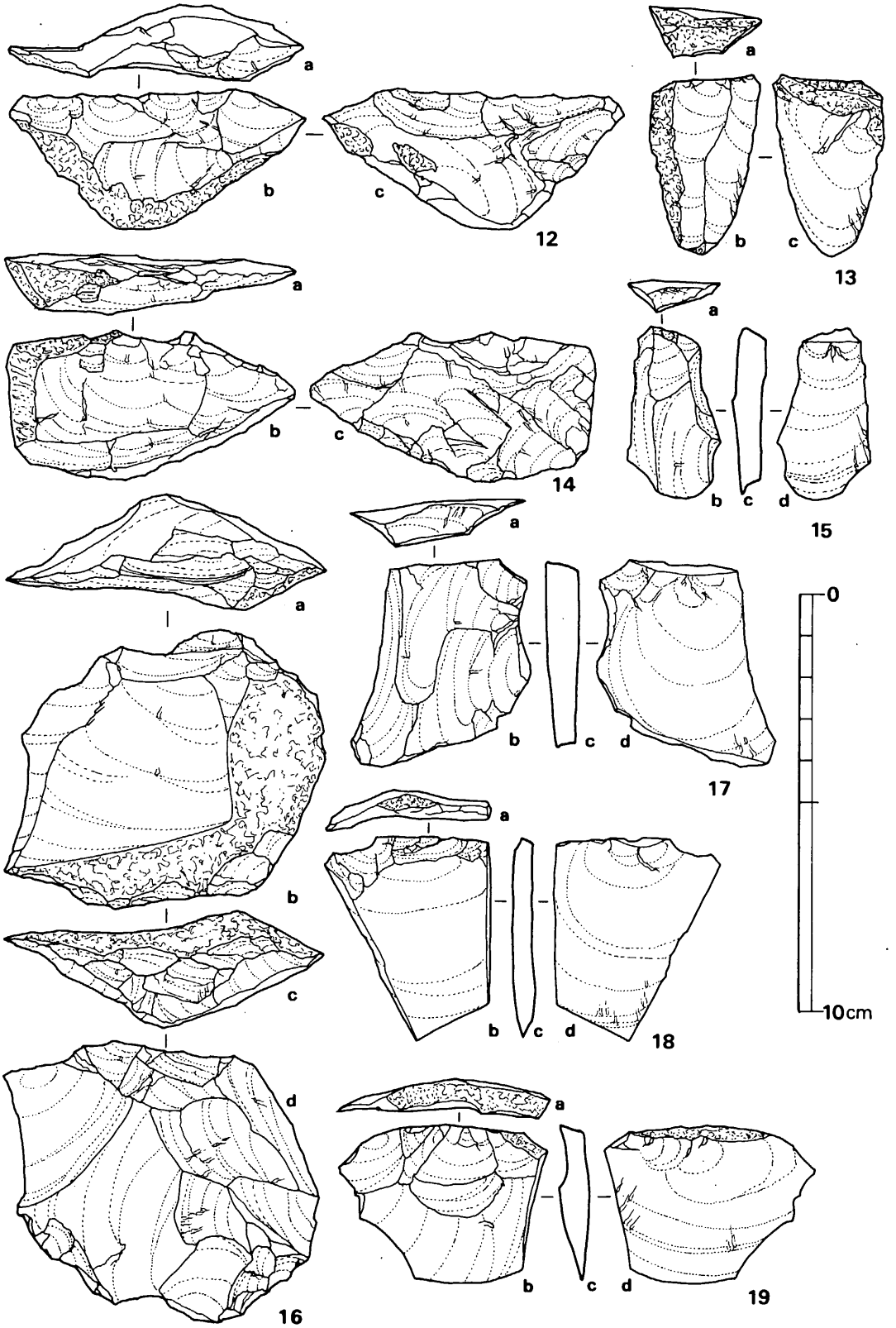


Fig. 152　１号住居跡出土石核・剥片実測図（縮尺２/３）

採集石器（Fig. 153・154, PL. 102）

石核（Fig. 153－1, PL. 102）

d面の平坦部を打面とし、a面、c面を剥取面とするもので、打面には、礫面を残しておりd面からの加撃による剥離は、急角度のものである。

スクレイパー（Fig. 153－2・4, PL. 102）

縦長剥片を用い、b面上位にバルブを残し、a面右側辺には礫面を残している。調整は、a面左側中央部に連続加撃によるノッチを形成し機能的には、concave－Scraper的なものと思われる。[註(6)]

4は、不定形の剥片を用い、端部にb面方向からの刃潰し状の調整を行なっており、roundもしくはend－Scraper 的な機能を有するものと考えられる。

グレーヴァー（Fig. 153－3, PL. 102）

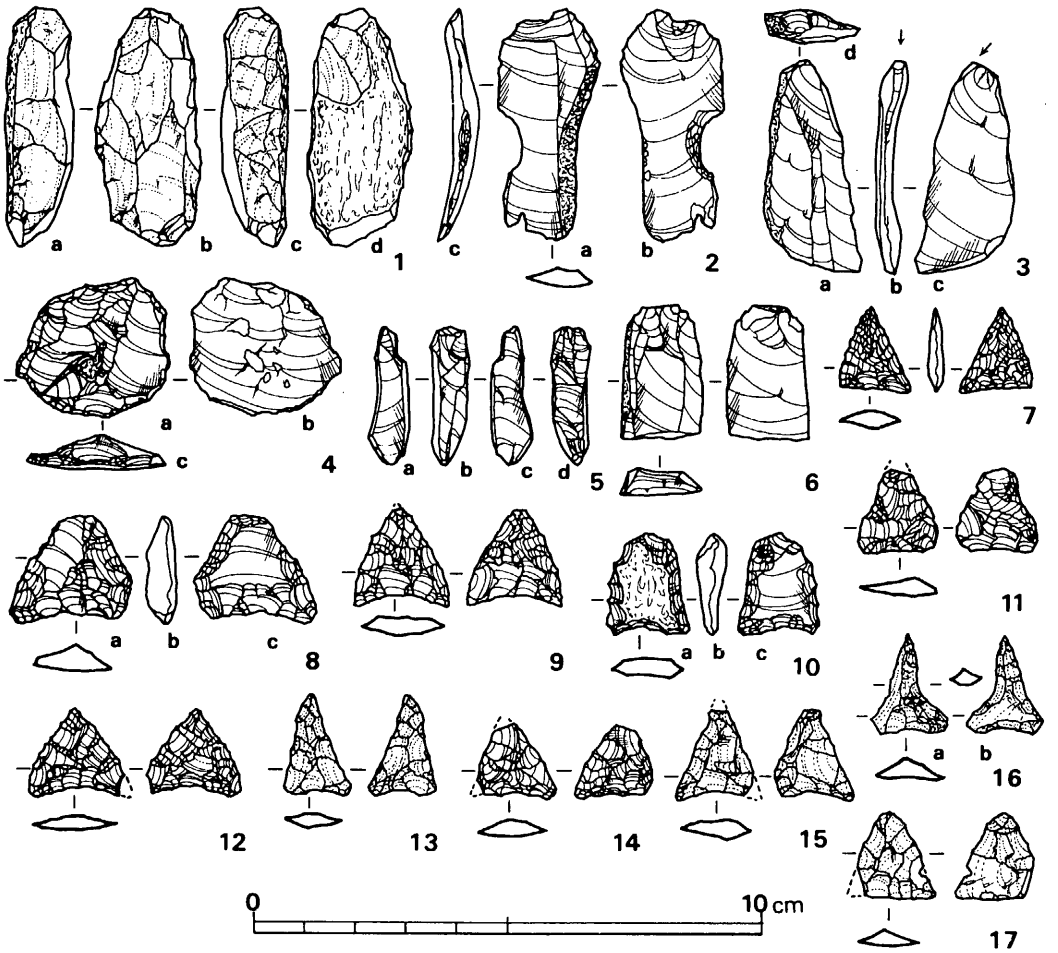


Fig. 153 道場山2地点採集石器実測図①（縮尺2/3）

縦長剝片を用いｄ面の打面部より、ａ面右側辺に１条のフルーティングを行ないシャフトを形成している。

石核（Fig. 153－５，PL. 102）

上下方向からの加撃によって剝離されている。

打面は、平坦面を有していない。ａ面は上位、ｂ面は上下より、ｃ面は下位、ｄ面は上下より加撃が行なわれており、形態的には、曽根型石核[註(10)]に類似するものである。

石鏃（Fig. 153－７～17，PL. 102）

１号住居跡出土のものとあまり大差は見られない。８は、先端部をａ面方向から調整し、先端部を直線的に仕上げている。また同様にａ面右脚部にも調整が行なわれており左脚に比べて短かくなっている。10は、ａ面に礫面を残し、調整は、周辺部に行なわれている。ｂ面、ｃ面で見られる様に、バルブを残しており、調整が打面側まで達していない。16は、不定形の細身の剝片を用いており、基部付近より先端部にかけ急に細くなる。ドリルとも考えられるが、基部に抉りを施していることからも石鏃の変形と思われる。

剝片（Fig. 153－６，PL. 103）

縦長剝片の中間部より折断されており、10の石鏃の様なものの未製品とも考えられる。

石斧（Fig. 154－１，PL. 102）

頭部および裏面を欠損している。刃部形は蛤刃で厚みがある。全体の調整は、風化が著しく進んでいるため不明である。刃部幅6.5*cm*を測る。

扁平片刃石斧（Fig. 154－２・３，PL. 102）

２は、頭部をｃ面方向より加撃によって調整を行なっている。３は、頭部を２同様加撃による調整後ｄ面に見られる様に左右方向に研磨を施している。両者共ａ面、ｂ面、ｃ面は、加撃によって調整後研磨を行なっている。刃部付近は両者共欠損している。

スクレイパー（Fig. 154－４・５，PL. 102）

４は、刃部形[註(6)]は「Ｕ」字状を呈し、ａ面右側に打面を有していたものを、ａ面からの加撃によって折断されている。５は、不定形剝片を用い、刃部形は「Ｖ」字状を呈し、刃部調整は、押圧剝離によって入念に行なわれている。

紡錘車（Fig. 154－６・７・８，PL. 102）

６・７は、礫を扁平に分割し、研磨によって仕上げている。８は、滑石を研磨によって調整している。

１号住居跡から多量に検出された石器、石核剝片等について若干考察を述べてみることにする。

石核は大きく分けて３タイプに分けられる。

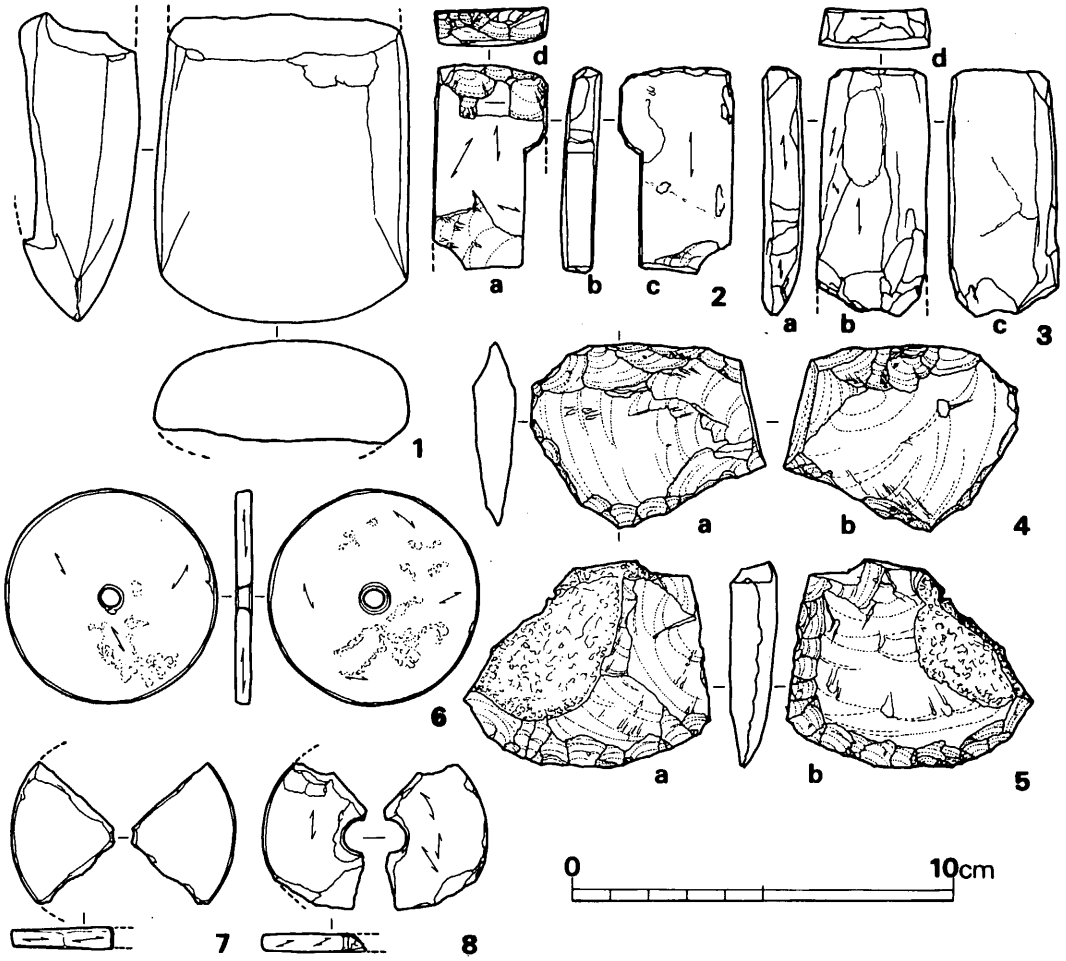


Fig. 154 道場山2地点採集石器実測図②（縮尺1/2）

1．縦長剥片を剥取する場合Fig. 149－18の様な剥取面を礫面幅の狭い部分に有するもの。

2．横長の剥片を剥取する場合はFig. 151－1、5の様に剥取面を礫面幅の広い部分に有するもの。これには2通りあり、Fig. 151－1、5の様に平坦打面を有するものと、Fig. 152－12、14の様に平坦打面を有しないものとがある。

3．大形の剥片はFig. 152－16の様に周辺部に打面を有し、交互剥離によって剥片剥取を行なっている。

上記の3つのタイプがみられるが、これらに共通することは、打面、側面に調整が施されてなく礫面に直接加撃が行なわれ剥片剥取がなされている。

剥片は、1のタイプの石核より剥取されたものは形が一定しているのに対し、2、3タイプのものは、扁平で幅広の不定形のものが多い。

石鏃の素材には、Fig. 148－60、64、67の未製品に見られる様に小形の不定型のものと、

Fig. 148－65の様に大形の扁平な剝片を折断して用いたものなどがある。

厚手の剝片などは、周辺部に刃部調整を施してスクレイパー等に使用されている。

当住居跡で検出された、石鏃、スクレイパー、ドリル等は、剝片の状態などから見て住居跡内で剝取された剝片を用いて加工されたものと思われる。

次に周辺遺構より検出された石器について若干述べてみる。

石鏃、スクレイパー等は、１号住居跡で検出されたものと同様に調整が施されている。

Fig. 153－５の小形の石核は、曽根型石核と称されるものに類似しており、この種の石核は福岡県内では大道端遺跡[註(11)]、法華原遺跡[註(12)]、蒲田遺跡[註(13)]で若干類似資料が確認されているだけである。

この石核の機能については、種々の用途が述べられているが現在のところ解決を見ていない。例を上げると「彫器」[註(14)]上下の打面部を彫刻面として使用すると言われるもの、「石核」[註(15)]上下に打面を有し加撃によって小形の剝片を剝取する等の説が出されているが、その機能については不明な点が多い。

以上の様に不明な点も多いが、当遺跡において弥生時代前期末から中期初頭の住居跡内で石器製作が行なわれていたことは興味をひく問題である。

また、縄文時代、先土器時代の資料も若干含まれているが、これらの資料が流れ込みであるため、共伴関係、層位等が確認されなかった。　（平ノ内幸治）

註１　最大幅、最大長は、石鏃の機能を考える場合、幅は、傷口の広さ、長さは、傷口の深さを示すことになる。

２　１類・２類・３類に分類しているがこれは、形態によって分けたものであり機能的意図はない。

３　賀川光夫「縄文式文化の起源と押捺文土器の発達」史学論叢第５号　別府大学史学研究会　1970

４　縄文時代後、晩期に出土例が多く形態が五角形を呈し将棋駒に似ているもの。

５　「津古内畑遺跡」小郡町教育委員会　1970

６　スクレイパーについては、刃部の機能によって、掻器、削器、石匙等に分類されるが、ここでは刃部に二次加工を施したものを総称した形で用いている。

７　二宮忠司「九州地方におけるナイフ形石器について」九州考古学の諸問題　1975

８　打面、両側面の調整および、剝取面等から見て、素雑なものであるが、半舟底形細石核に分類されるものである。

９　「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」4集、上巻、福岡県教育委員会　1977

10　藤森栄一「諏訪湖底曽根遺跡」信濃考古、No.24　長野県考古学会に曽根型石核として記されている。九州では、「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」XIV　福岡県教育委員会　1977に曽根型石核について若干述べられているが、曽根型石核に伴なう他

の石器などが明確でない。また当遺跡においても共伴関係が明らかでないため、類似資料と言うことでとどめる。

11 註10に同じ。

12 九州歴史資料館の横田義章氏の御教示による。

13 表採資料である。

14 森島稔「曽根型彫器考」長野県考古学会誌 121

15 滝沢浩「本州における細石刃文化の再検討」物質文化 第3号 物質文化研究会 1964 1964

Tab. 10 石鏃一覧表

Fig番号	石器番号	石材	最大幅(mm)	最大長(mm)	重さ(g)	欠損部	備考
147	1	黒曜石	19	22	1.3		
〃	2	サヌカイト	22.5	27	3.2		中央部に突起
〃	3	〃	16	17	0.7		
〃	4	黒曜石	15以上	14以上	0.6以上	先端脚部	
〃	5	サヌカイト	21	24	1.6		下部に切離面有り
〃	6	〃	16.5	16	0.7		
〃	7	黒曜石	19.5	23	1.0		
〃	8	サヌカイト	17	19	0.7		
〃	9	〃	16	19	0.9		
〃	10	〃	20	19	1.3		
〃	11	黒曜石	20以上	20以上	0.6以上	先端脚部	
〃	12	サヌカイト	18	18	0.7		
〃	13	黒曜石	18	19.5	0.75		
〃	14	〃	17以上	18	0.9以上	脚部	
〃	15	サヌカイト	15以上	23	0.6以上	〃	
〃	16	〃	22	23	1.65		
〃	17	黒曜石	15以上	18.5	0.7以上	脚部	
〃	18	サヌカイト	19.5	21	0.8		
〃	19	黒曜石	19.5	18.5	0.75		
〃	20	〃	20	20以上	1.6以上	先端	非常に大型

Fig番号	石器番号	石　材	最大幅(mm)	最大長(mm)	重さ(g)	欠損部	備　考
147	21	サヌカイト	15以上	20	0.6以上	脚部	
〃	22	〃	14	18.5	0.75		
〃	23	黒曜石	23	17以上	1.7以上	先端	礫面を残す
〃	24	サヌカイト	21	19	0.9		
〃	25	〃	15 以上	20	0.9以上	脚部	
〃	26	黒曜石	16	20以上	1.0以上	先端	
〃	27	サヌカイト	16以上	20	1.0以上	脚部	
〃	28	〃	23	23以上	1.5	先端	
〃	29	黒曜石	15	17	0.9		
〃	30	〃	16	17.5	0.9		
〃	31	〃	21.5	12以上	0.8以上	先端	
〃	32	黒曜石	16	18	0.6		
〃	33	〃	17以上	18以上	0.6以上	先端両脚部	
〃	34	サヌカイト	20以上	18.5以上	0.9以上	先端脚部	
2	35	黒曜石	16.5	19.5	0.85		
〃	36	ハリ質	17	21	1.3		
〃	37	黒曜石	19	17	1.3		研磨されている
〃	38	サヌカイト	18	24	1.2		
〃	39	〃	20以上	27	1.9以上	脚部	
〃	40	〃	16	20以上	0.8以上	先端	
〃	41	ハリ質	14.5	17.5	0.5		片脚は折断し底辺を直線に仕上げる
〃	42	黒曜石	19	20以上	0.8以上	先端	
〃	43	ハリ質	14	20以上	0.5以上	〃	
〃	44	〃	19	23	1.0		
〃	45	黒曜石	11以上	15.5	0.4以上	側辺脚部	非常に小型
〃	46	〃	11以上	10	0.25以上	脚部	
〃	47	〃	15以上	13.5	0.4以上	両脚部	
〃	48	〃	13	18	0.8		片脚がなく調整されている
〃	49	〃	17以上	19.5	1.0以上	先端脚部	

Fig番号	石器番号	石材	最大幅(mm)	最大長(mm)	重さ(g)	欠損部	備考
148	50	黒曜石	17以上	16以上	0.7以上	先端下半部	
〃	51	サヌカイト	16.5	20以上	1.4以上	先端	中部両側辺に段がつく
〃	52	黒曜石	12以上	16以上	0.3以上	下半部	
〃	53	サヌカイト	21以上	17	0.8以上	脚部	
〃	54	黒曜石	17以上	16	0.8以上	〃	
〃	55	サヌカイト	17以上	22以上	1.4以上	先端脚部	
〃	56	〃	25以上	36	2.0以上	側辺部半分	非常に大型
〃	57	〃	21	16	1.8		先端部は一直線をなす
〃	58	黒曜石	19	23	2.4		未製品
〃	59	サヌカイト	25以上	27以上	1.3以上	側辺部半分	
〃	60	〃	21	32	3.4		未製品
〃	61	〃	10	30以上	0.9以上	両端部	柳葉形
〃	62	黒曜石	17	22	1.9		未製品
〃	63	サヌカイト	10	15.5	0.7		
〃	64	〃	25以上	28以上	1.4以上	下半部	未製品
〃	65	〃	13	37	3.7		〃
〃	66	〃	18	32	2.9		舌部を有する
〃	67	〃	20.5	30	2.6		
153	7	黒曜石	14	17	0.55		
〃	8	〃	25	26	2.45		先端部に調整を加え直線的に仕上げる
〃	9	〃	19	20以上	1.1以上	先端	
〃	10	〃	16.5	20	1.6		礫面を有し、バルブを残す
〃	11	〃	16.5	17以上	0.8以上	先端	
〃	12	〃	20以上	17	0.8以上	脚部	
〃	13	サヌカイト	13	20	0.65		
〃	14	黒曜石	12以上	15以上	0.65以上	先端脚部	
〃	15	サヌカイト	20以上	20以上	0.8以上	〃	
〃	16	〃	15	20	0.75		先端から中央部まで細く仕上げている
〃	17	〃	17以上	7以上	0.7以上	脚部	

Tab. 11　石器・土製品一覧表

Fig 番号	石器番号	器　種	石　材	調　整	重さ（g）	備　考
149	1	ナイフ形石器	サヌカイト	両側辺にブランティング		基部のみ残っているため先端の形状不明の面に平坦調整が施されている
〃	2	スクレイパー	黒　曜　石	両側辺にブランティング状の調整	2.8	周辺部のみ加工が施されている
〃	4	ナイフ形石器	サヌカイト	ブランティング		c 面方向からブランティングが施されている a 面左側辺に若干の使用痕が見られる
〃	5	スクレイパー	黒　曜　石	ブランティング状及び平坦なプレッシャー加工	3.8	a 面下位と右側辺部にブランティング状の加工が施されている　平坦剥離が c 面に施されている
〃	6	つまみ形石器	黒　曜　石	両側辺に表裏よりノッチを施している	2.7	ノッチの下位で折断されている
〃	7	ド　リ　ル	サヌカイト	側辺部に加工		
〃	8	スクレイパー	〃	側辺部にプレッシャー加工	41.7	礫面を一部残している
〃	9	ド　リ　ル	〃	側辺部に加工		
〃	10	〃	〃	先端のみ加工	10.6	礫面を一部残している
〃	11	〃	〃	側辺部のみ加工		
〃	12	〃	〃	先端及び側辺部に加工	1.4	
〃	13	スクレイパー	〃	周辺部に加工	2.0	
〃	14	〃	〃	全周に加工を施している	6.5	
〃	15	〃	〃	全周に加工を施しバルブ調整	4.2	バルブ付近は交互剥離で調整されている
〃	16	U.フレイク	黒　曜　石	両側辺に使用痕		中央部より折断
〃	17	スクレイパー	サヌカイト	両側辺にプレッシャー加工	6.7	縦長剥片の両側辺部に入念に調整が施されている
150	1	石　　斧	花崗岩質	敲打の後研磨		石斧として使用後刃部を敲石として再利用
〃	2	敲　　石	頁　　岩	研磨と加撃による		敲面を欠損している

Fig番号	石器番号	器種	石材	調整	重さ(g)	備考
150	3	敲石	頁岩	敲打と研磨		
〃	4	紡錘車	土製	指頭による調整		
〃	5	抉入片刃石斧	頁岩	研磨		風化が進んでいる
〃	6	磨製石鏃	〃	〃	2..7	茎を欠損
〃	7	石庖丁	油質頁岩	〃		
〃	8	〃	粘板岩	〃		
153	2	スクレイパー	黒曜石	ノッチ	3.8	
〃	3	グレイバー	〃	一条のフルーティング	3.8	
〃	4	スクレイパー	〃	先端部に加工	5.6	
〃	6	フレイク	〃	中間部より折断		
154	1	石斧	玄武岩	研磨		風化が進んでいる
〃	2	扁平片刃石斧	油質頁岩	研磨打撃	26.1	頭部はc面方向より打撃による調整
〃	3	〃	〃	〃	31.5	頭部は打撃調整後研磨
〃	4	スクレイパー	サヌカイト	周辺部に打撃	38.3	バルブを折断している
〃	5	〃	〃	〃	50.3	礫面を残す
〃	6	紡錘車	粘板岩質	研磨	26.1	
〃	7	〃	雲母片岩	〃		
〃	8	〃	滑石	〃		

Tab. 12 石核観察表

Fig番号	石核番号	石材	a面	b面	c面	d面	備考
149	3	黒曜石	側面調整は一撃の分割	細石刃剥出のため3回のフルーティング	a面同様に上位からの分割	b面方向からの打撃で打面を形成	細石核と考えられる 側面及びすべて一撃の分割に形成されている
〃	18	〃	打面調整は施されていない	側面調整も施されていない	3回のフルティングが行なわれている		自然石に直接加撃を行ない、ブレイド状の剥片を剥出している
151	1	〃	打面は礫面を残す	上下、左右から剥片が剥出されている	礫面を残す		自然石に直接加撃を行ない、不定形の横広の剥片を剥出している

Fig番号	石核番号	石　材	a　面	b　面	c　面	d　面	備　　考
151	5	黒　曜　石	打面は礫面に直接	上下から剥片を剥出している	b面同様	打面には、礫面を残していない	b面は、d面から剥出後、a面から剥出している　c面は、a面から剥出後、d面から剥出している。
〃	7	〃	打面は礫面に直接	ブレイド状の剥片が剥出されていた			Fig. 149－18の石核同様のものと思われる　剥出面が、剥離したものと思う
152	12	サヌカイト	礫面加撃を行なう	剥出は上位から行なわれている	下位から剥出が行なわれている		下部に礫面を残し、上位からの剥出が主体である　上位に平坦面はない
〃	13	〃	礫面を残す	a面からの加撃で縦長剥片をとる			打面は礫面をそのまま残し、ブレイド状剥片を剥出していたものである　剥出面が剥離
〃	14	〃	礫面加撃を行なう	上位からのみ剥離されている	下部を打面にして剥離		1と同様である上位に平坦面がない
〃	16	〃	平坦面がない	上位より大型剥片を剥出	a面同様	周辺部より剥離を行なう	1、2、3と異なり、一定の打面を有していない周辺部より剥離されている　c面→b面
153	1	〃	剥出面、d面からの加撃	下位横位からの剥離	a面同様	礫をそのまました打面	d面の礫面に直接加撃を行ない、直角に近い角度で剥離
	5	黒　曜　石	下位からの剥離	下位と上位から剥離	下位から剥離	下位と上位から剥離	上位に階段状剥離が行なわれている

Tbi. 13　1号住居跡出土剥片一覧表

Fig番号	石器番号	石　材	打面幅(mm)	打面厚(mm)	最大長(mm)	最大幅(mm)	打　面　形　状
6	15	サヌカイト	14	5	41	22	礫面なし
〃	13	〃	30	10	44	22	礫面
〃	17	〃	27	8.5	49.5	43	礫面なし
〃	18	〃	15	3	49	39.5	礫面

Fig 番号	石器番号	石材	打面幅 (mm)	打面厚 (mm)	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	打面形状
6	19	サヌカイト	34	5	38	50	礫面
5	2	黒曜石	8.5	5	32	32	〃
〃	3	〃	9	5	26.5	19.5	〃
〃	4	〃	10	3	33.5	32.5	〃
〃	6	〃	9	5	27	21	礫面に調整有り
〃	7	〃	19	7	28.5	42.5	礫面
〃	8	〃	7	5	34	17	〃
〃	9	〃	20	6	23	41	〃
〃	10	〃	6	3	28	43	礫面なし
〃	11	〃	7	4	51	21	礫面

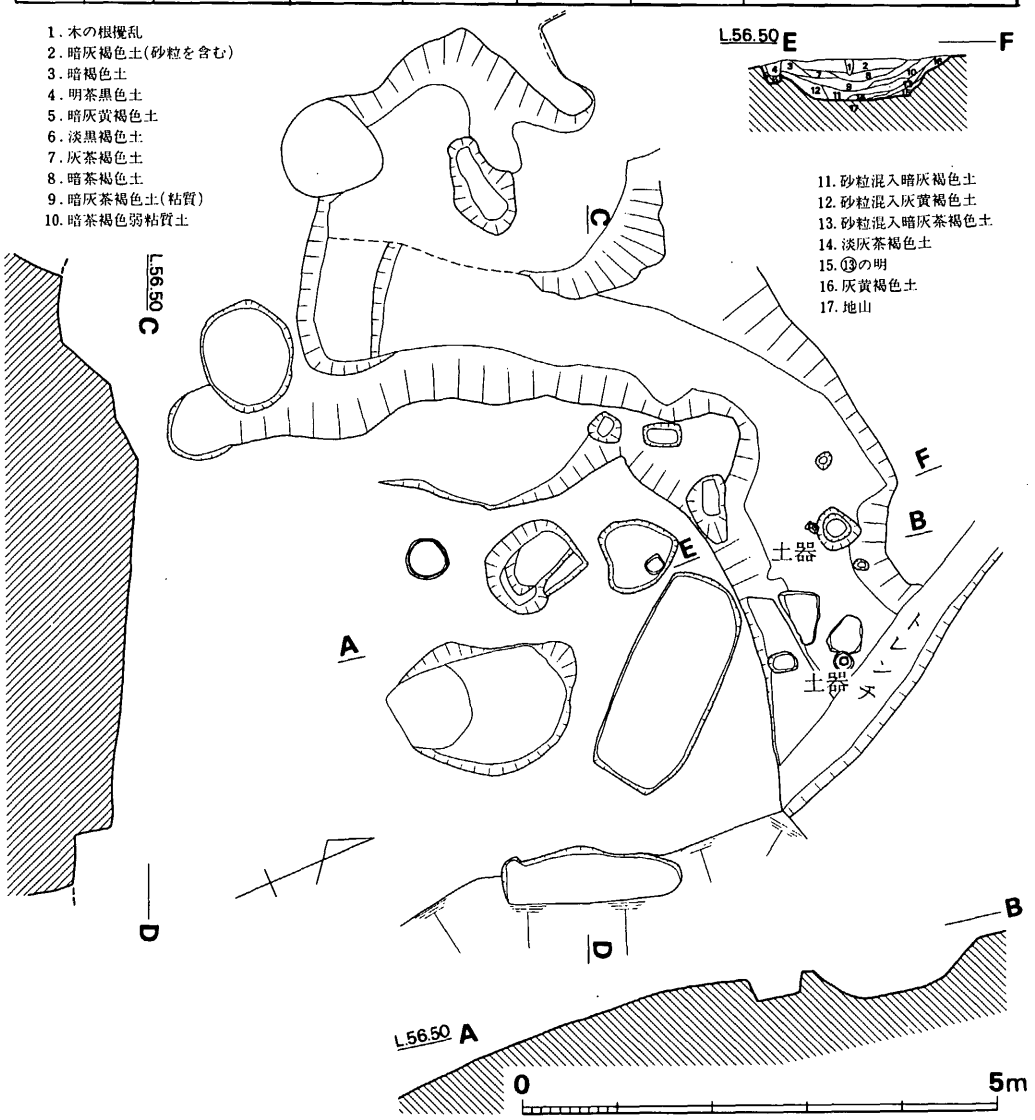


Fig. 155 方形周溝墓実測図（縮尺 1/40）

(2)　古墳時代の遺構と遺物

遺構

方形周溝墓（Fig. 155, PL. 86）

頂部の東側端部近くで検出された遺構であるが新墓を造る際に著しく破壊されている。さらに東半部は崖となっているため、詳しくはわからない。周溝は最も幅の広い所で幅2*m*、深さは40*cm*である。崖端面から 3.5*m*程西でコーナーとなりそこから南へ 2.5*m*程確認できたが、それ以外は不明である。周溝内では、周溝上端部より若干下面で40*cm*～60*cm*大の石が２個と、二重口縁壺の口縁部が裏返しの状態で検出された。この石材は主体部に用いられたものが破壊されて溝中に捨てられた可能性があり、これに伴うものと考えられる。これからわずかに離れた周溝内で底部穿孔の二重口縁壺も検出されている。主体部としては、現存するものの中にあえてそれをみつけるとすれば３号土坑墓（Fig. 126）くらいであろう。

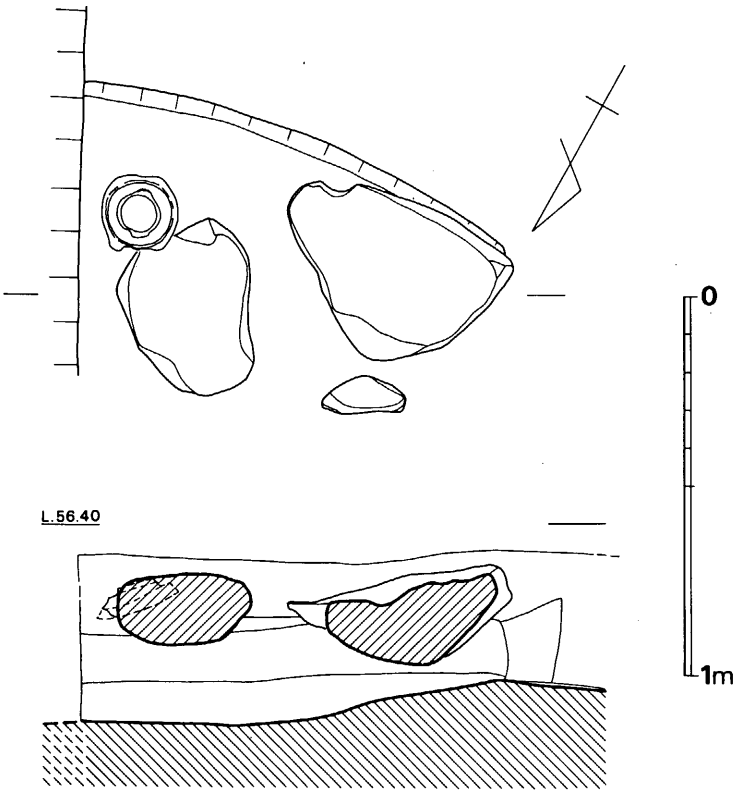


Fig. 156　周溝内での石材と土器出土状態（縮尺１/20）

遺物 (Fig. 157, PL. 97)

1は底部穿孔の二重口縁壺である。頸基部の境目は稜が入らずに丸味をもつ。口縁部に比して胴部は厚手造りである。底部の穿孔は焼成前に行なわれている。調整法は外面は磨滅により不明であるが、内面胴部は指圧痕がみられる。色調は褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。口径12.0cm、頸部径 6.7cm、胴部最大径12.3cm、器高13.5cmである。

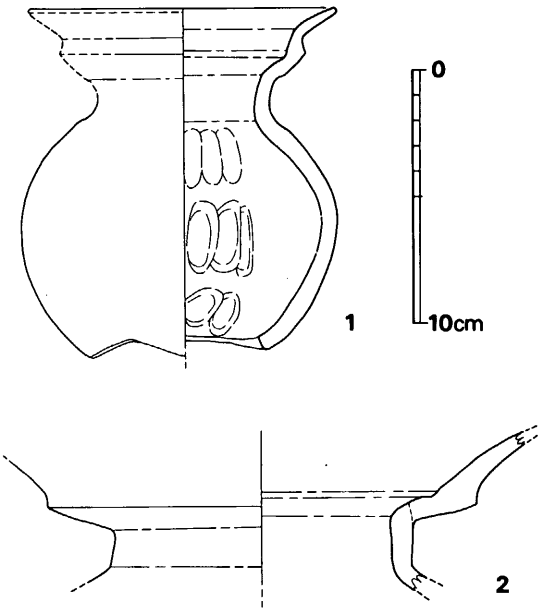


Fig. 157 方形周溝墓出土土師器実測図 (縮尺 1/3)

2は二重口縁壺の口頸部である。口縁端部をわずかに欠損している。頸部は1.8cm程垂直にのび、口縁部は段を有して外反する。器表が磨滅しているため調整法は不明である。色調は赤褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含んでいる。口径は21cm+α、頸基部径は11.8cmである。

(3) 歴史時代の遺構と遺物

遺構

歴史時代に属する土坑墓は3基検出されておりこれはいずれも発掘区域の西部地区の南緩傾斜面に占置している。このうち2基からは棺外副葬品と思われる土師器杯が検出されている。

4号土坑墓 (Fig. 158, PL. 88)

5号貯蔵穴上にあり、西側小口部は削平され、攪乱を受けていたため不明である。南側壁は165cmまで延びているが次第に幅が広がっている。墓坑は長さ 165cm+α 東小口幅55cm、西側幅65cmで長方形を呈する。墓坑上面は削平されていて深さは10cm程の浅いものであるが、本来もさほど深いものでないようである。主軸はN−70° −Wである。土坑墓内の床面からやや浮いた状態で土師器杯が2個体検出された。出土状態は1個は伏せた状態、1個は正常の状態であった。人骨は遺存していなかった。

5号土坑墓 (Fig. 158, PL. 89)

4号土坑墓の西側に接してあり、4号土坑墓の西壁は攪乱を受けているので定かでないがこれに接するような位置にある。墓坑は中央部で長さ 160cm、西小口幅 110cm、東小口幅80cm、深さ70cmで長方形に近い形をしている。墓坑壁は上面よりも下面が5cm程せまいが垂直に近い

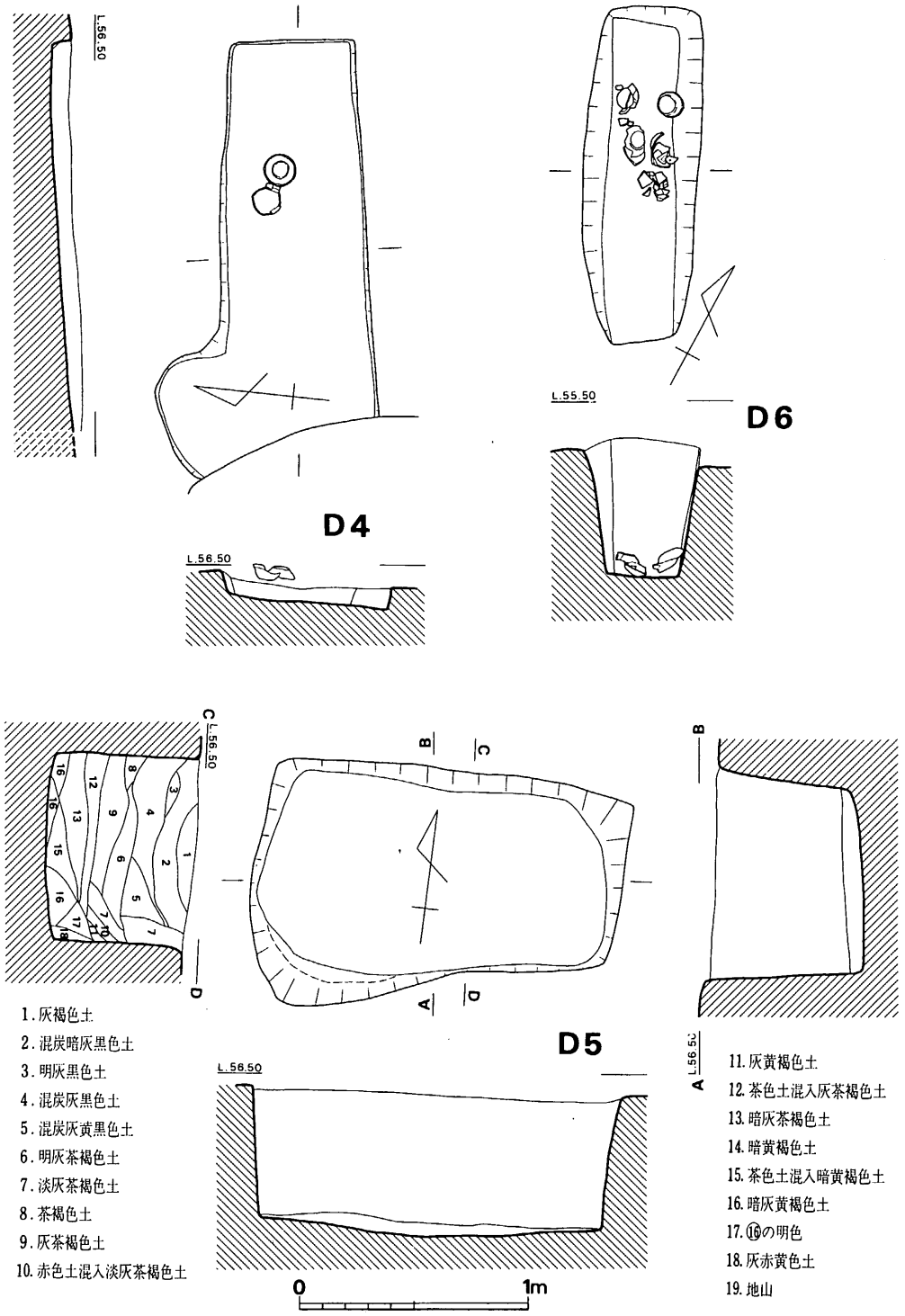


Fig. 158　4号・5号・6号土坑墓実測図（縮尺 1/30）

ものである。底面の縦断面は中央部がややくぼむが、横断面はほぼ水平である。下面には6号貯蔵穴があるため、底面は花崗岩バイラン土の地山ではない。

6号土坑墓（Fig. 158, PL. 90）

南斜面の裾部に位置しており、墓坑の西壁は段落ちにより欠損している。墓坑上面は長さ145cm、幅50cmであるが、下面は、長さ 140cm、幅30cmと狭くなる。主軸はN－3°－Wであり、頭位はほぼ真北である。墓坑は地山を60cm程掘り込んで造られており、底面は水平である。断面形は丈の高い逆台形を呈する。棺内からは浮いた状態で土師器杯が5個体分検出されたが破砕したものが多い。これは本来は土坑墓に木蓋をして、その上面に置いたのが木蓋の腐蝕とともに棺内に落込んだものであろう。なお、人骨は遺存していなかった。

遺物

土師器杯（Fig. 159, PL. 104）

4号土坑墓出土土器（4・5）

4はヘラ切り底である。体部はほぼ直線的に外反し、口縁部直下で若干くぼむ。端部は丸く造られている。赤褐色を呈しており、焼成は不良である。胎土に細砂粒を含む。口径13cm、器高 3.8cmである。5はヘラ切り底である。底部と体部の境部に段を有している。体部内外面には横ナデによる凹凸が著しく入る。底部内面はナデを施さない。黄褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含んでいる。口径13.0cm、器高 4.4cmである。

この4号土坑墓出土の土師器は、君畑遺跡の2号墓出土土器[註(1)]と似ているが口径、器高ともやや上回っている。従ってその年代は奈良時代末～平安時代初頭[註(2)]と考えられる。

6号土坑墓出土土器（1～3）

1はヘラ切り底である。底部外面中央はややふくらみを有している。底部と体部の境部は凹湾しており、体部中ほどが最も器壁がうすい。口縁部はわずかに外反しており、端部は丸く造られている。底部内面は未調整であり、他は横ナデを施す。黄褐色を呈していて、焼成は良好

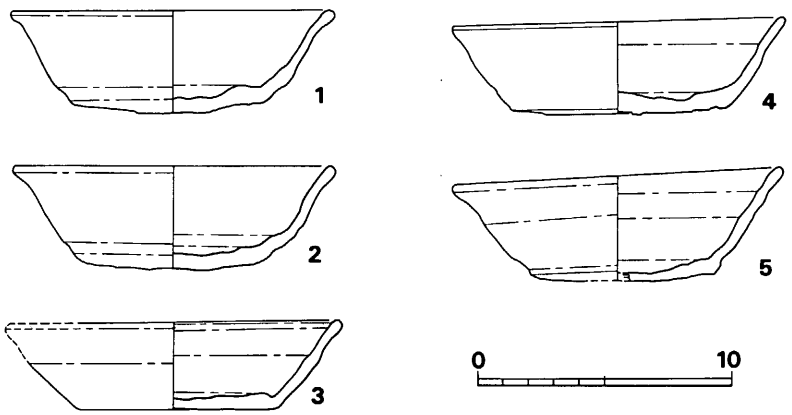


Fig. 159 4号・6号土坑墓出土土師器実測図（縮尺1/3）

である。胎土には小砂粒を含んでおり、若干鉄分が混入している。口径12.7　、器高 4.0cmである。２はヘラ切り底であり、底部と体部の境部は凹湾している。口縁部はわずかに外反しており、端部は丸い。調整法は底部内面は未調整であり、他は横ナデを施している。黄褐色を呈していて焼成は良好である。胎土に小砂粒と鉄分を含んでいる。口径12.7cm、器高 4.0cmである。３はヘラ切り底である。底部は平坦であり、体部は直線的に移行する。口縁部直下はわずかにくぼんでおり、端部は丸い。明黄褐色を呈していて、焼成は良好である。胎土には小砂粒と鉄分を含んでいる。口径13.3cm、器高 3.5cmである。

以上、個々の土器について述べたがこの６号土坑墓に副葬されている土師器は、前述の４号土坑墓出土土器と同じ奈良時代末～平安時代初頭の年代が比定されよう。

註１　「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第７集　福岡県教育委員会　1977年３月
　２　森田勉氏の御教示による。

(4)　その他の遺構と遺物

遺構

７号土坑墓（Fig. 160, PL. 92）

初見では袋状竪穴と他の遺構とが重複しているのかと思われたが、切り合い関係は見られず、一つのものである事が判った。その平面形は溝状遺構の前面に長方形状のものをつけたようなものであり、横穴の天井の陥没を思わせる形状を呈していた。これは上面幅 130cm、下面幅35cm、長さ 200cmの溝状の遺構を掘り、そこから横穴を穿ったものと思われ、これは一辺 200cm × 230cmで不整形ながらも長方形状を呈する。底面からの高さは 150cmであり、壁面はかなり袋状を呈している。中からは何らの遺物も検出していないので、その年代は不明である。これに似た構造の遺構は周辺では、山の口遺跡２区１号土坑（Fig. 161－１）[註(1)]、桶田山遺跡第40号土坑墓（Fig. 161－２）が挙げられる。

８号土坑墓[註(2)]（Fig. 162）

東部地区の南斜面下方に位置している。遺物は何ら検出されていないが墓坑のコーナーが非常に角張る点と埋土の相違から他の土坑墓と区別してとりあつかった。墓坑は長さ 145cm、幅80cm、深さ80cmの長方形を呈している。底面は中程が若干くぼんでおり、深さは５cm～10cmで不整形をした小穴がみられる。墓坑壁は垂直に近い勾配である。壁のコーナー部には若干の掘り込みがみられ、木棺を使用したものかも知れない。主軸はＮ－21°－Ｅである。

９号土坑墓（Fig. 162）

８号土坑墓の西１ｍに位置しており、埋土が他の土坑墓と異なるため８号土坑墓と同様に別

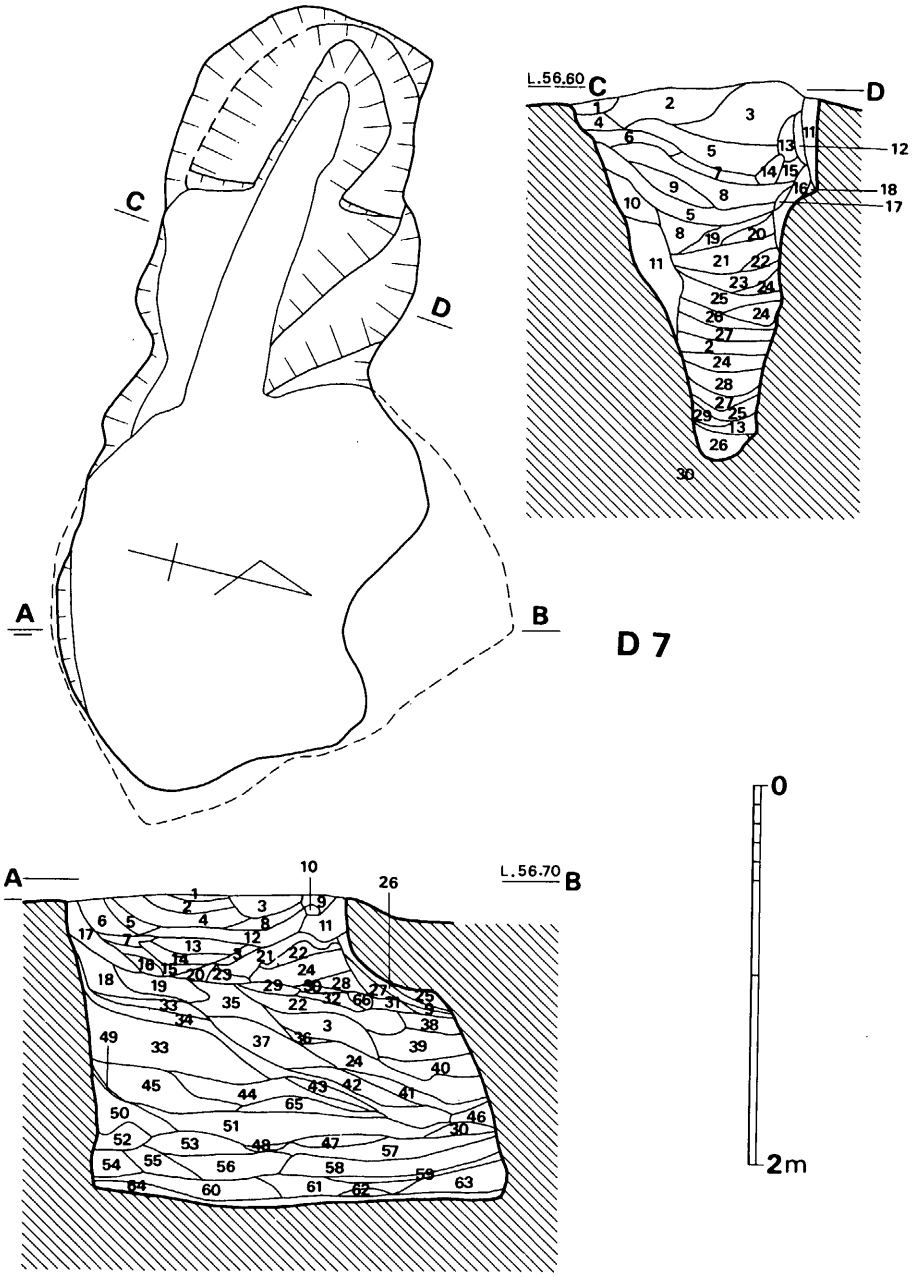


Fig. 160　7号土坑墓実測図（縮尺 1/40）

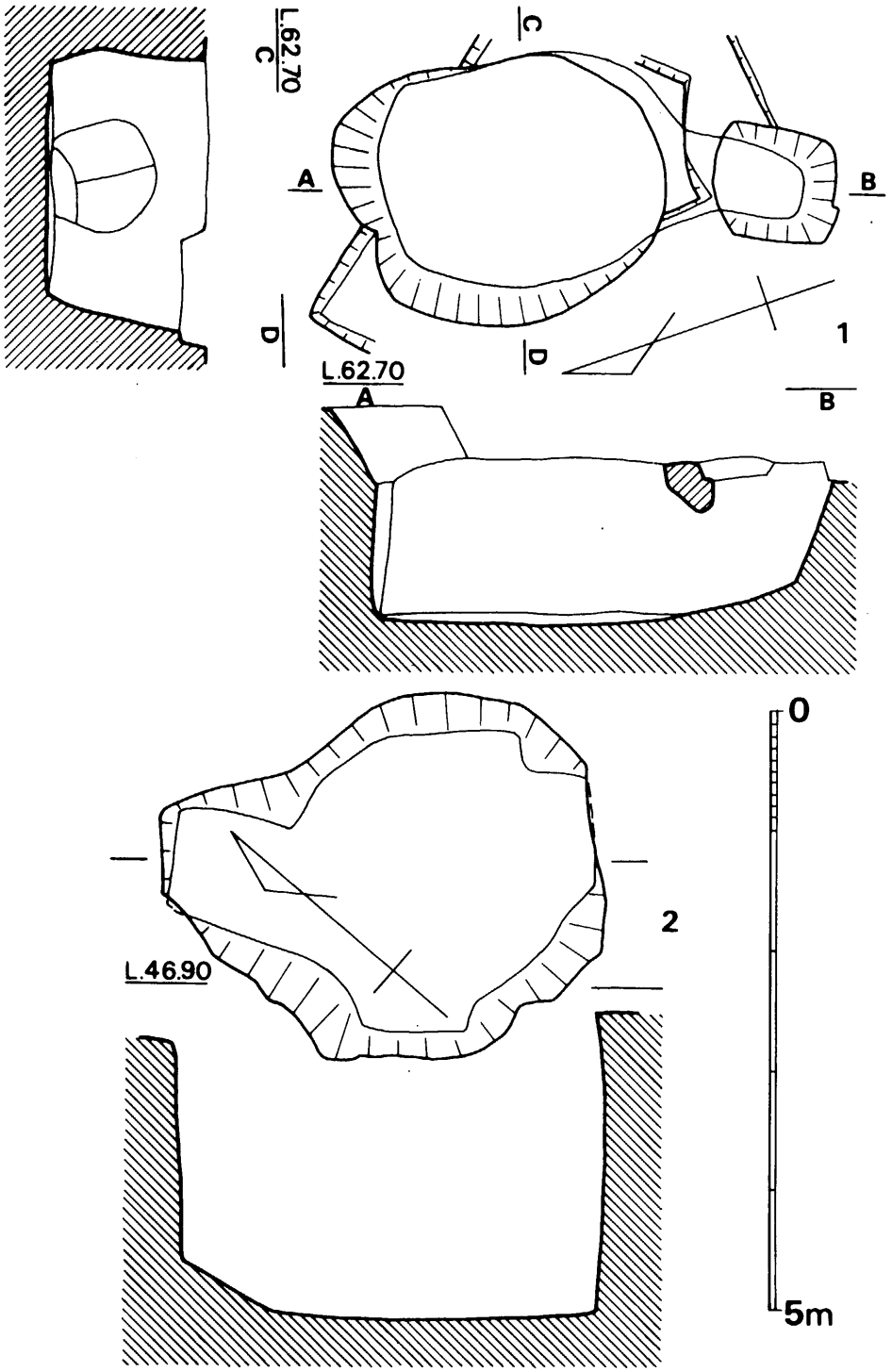


Fig. 161　山の口・桶田山遺跡出土土坑墓実測図（縮尺１/60）

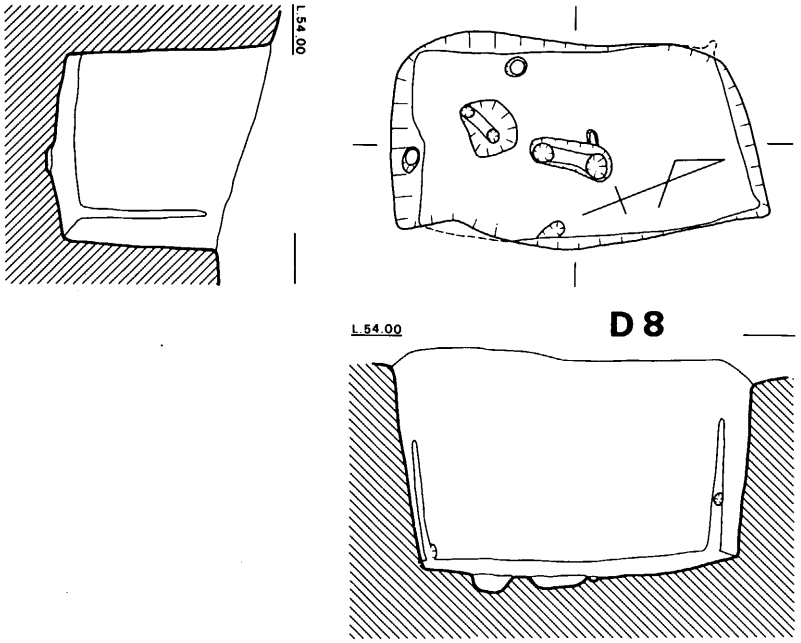
Tab. 14　7号土坑墓A－B層位名称表

1	灰黄褐色土	18	混炭茶褐色土	35	明茶色粘質土	52	灰黄白色砂質土
2	混炭灰黄黒色土	19	混炭暗黄褐色土	36	暗茶褐色粘質土	53	淡灰黄褐色土
3	明褐色土	20	灰茶黒色土	37	淡茶色粘質土	54	暗黄白色砂質土
4	混炭黄黒色土	21	灰黒色土	38	淡黄褐色土	55	茶色土混入黄白土
5	混炭暗黄黒色土	22	赤褐色土	39	黄赤褐色土	56	暗灰茶褐色土
6	灰褐色土	23	明黄褐色土	40	㊴＋赤色土	57	淡灰黄褐色土(混茶色土)
7	暗茶黒色土	24	明茶黒色粘質土	41	茶色土混入灰黄色土	58	暗灰黄褐色土
8	混炭明黄黒色土	25	灰白色土	42	混炭灰茶褐色粘質土	59	灰黄色粘質土
9	混炭茶黒色土	26	混炭灰茶黒色土	43	混炭灰黄色土	60	茶色土混入暗黄黒褐色土
10	赤色粘質土	27	暗赤褐色土	44	明黄褐色土	61	茶色土混入黒褐色土
11	暗赤色粘質土	28	明茶褐色土	45	褐色土	62	茶色土混入灰黄褐色土
12	混炭淡黒色土	29	淡灰黒色土	46	㉞＋茶色土	63	暗茶黄色土
13	混炭暗茶褐色土	30	赤褐色粘質土	47	茶色土混入灰黄色土	64	灰黒色土
14	混炭灰黄褐色土	31	淡赤褐色土	48	灰茶色粘質土	65	灰黄色粘質土
15	暗灰黄褐色土	32	暗茶色粘質土	49	灰黄褐色粘質土	66	淡灰黒色土
16	黒色土	33	混炭明灰黒色土	50	橙褐色土		
17	暗茶褐色土	34	混炭黒色土	51	茶色土混入混炭灰黒色土		

Tab. 15　7号土坑墓C－D層位名称表

1	褐色土	9	黄褐色土	17	⑯＋茶色土	25	暗茶黒色土
2	暗灰黄褐色土	10	明褐色土	18	暗灰黄白色土	26	淡茶褐色土
3	淡灰黄褐色土	11	灰黄白色土	19	茶黒色土	27	淡赤黄褐色土
4	灰褐色土	12	明灰茶褐色土	20	明茶黒色土	28	明赤黄褐色土
5	灰黄褐色土	13	暗茶褐色土	21	明灰褐色土（赤味を帯びる）	29	灰黄褐色土
6	暗褐色土	14	明黄褐色土	22	淡茶黒色土	30	バイラン土地山
7	暗灰黄褐色土	15	灰茶褐色土	23	淡灰茶黒色土		
8	淡灰茶褐色土	16	暗灰黄白色土	24	暗赤褐色土		

あつかいにした。主軸はN－26°－Eであり、8号土坑墓とほぼ同じ向きである。新墓により、墓坑を一部切られている。墓坑は長さ 165cm、幅 110cm、深さ80cmのものである。底面はほぼ水平であり、ピットが5個検出された。遺物は何も検出されていない。



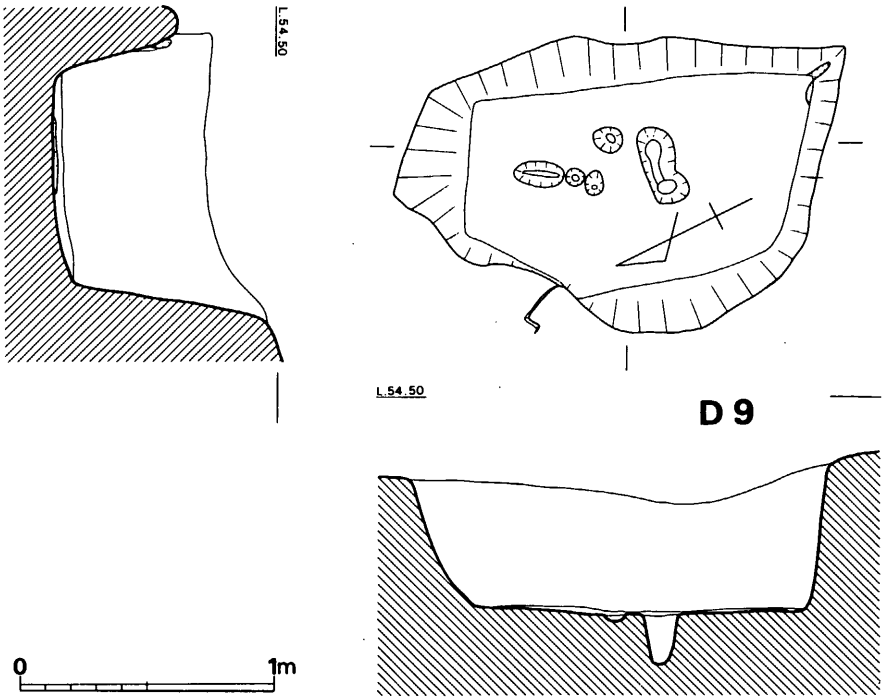


Fig. 162　8号・9号土坑墓実測図（縮尺１/30）

1号土坑（Fig. 163, PL. 93）

東側崖面近くから検出された。上面は中央部で幅 135*cm*、長さ 300*cm*を測り、不整形ながらも長方形を呈している。深さは 230*cm*であり、底面の平面形は、西方がやや幅の狭い長方形状を呈している。この底面での規模は長さ 185*cm*、幅は東辺は30*cm*、西辺は20*cm*で弧状を呈している。土層断面から、土砂流入による自然堆積でなく、ある程度まで埋めもどしを行なってい

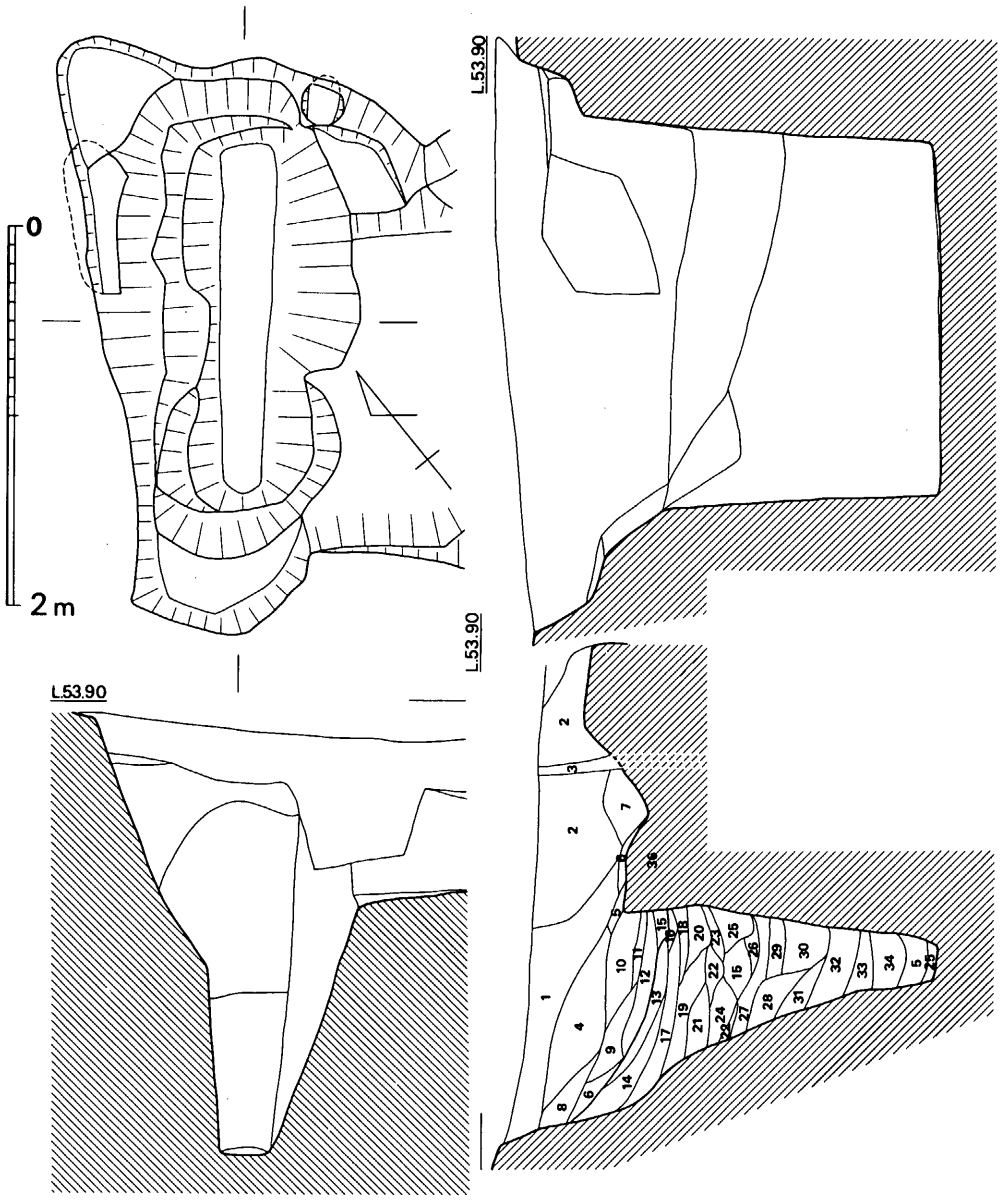


Fig. 163　1号土坑実測図（縮尺 1/40）

る事がわかる。遺構内からは何らの遺物も検出されておらず、年代や性格は不明である。

Tab. 16　１号土坑層位名称表

1	暗赤褐色土	10	混炭暗灰黄褐色粘質土	19	白色土混入褐色土	28	明灰褐色土
2	赤褐色土	11	混炭赤黄粘質土	20	暗茶褐色粘質土	29	暗灰褐色土
3	木の根痕	12	灰赤黄色粘質土	21	黄茶褐色土	30	暗黄褐色弱粘質土
4	混炭灰黄褐色土	13	混礫灰黄色土	22	暗茶褐色粘質土	31	黄褐色砂質土
5	灰黄褐色土	14	灰黄色土	23	灰茶褐色粘質土	32	黄褐色砂質土
6	黄褐色土	15	明黄褐色土	24	淡黄褐色土	33	灰黄褐色砂質土
7	明赤褐色土	16	暗黄褐色土	25	淡茶褐色土	34	灰黄茶褐色弱粘質土
8	赤黄褐色土	17	淡灰黄色土	26	淡褐色土	35	灰黄褐色砂質土
9	明赤黄色粘質土	18	淡褐色土	27	明褐色土	36	地　山

北側裾部検出遺構（Fig. 164, PL. 69）

丘陵北側の斜面と裾部平坦面の調査を実施した。発掘区域の西側端部の斜面にトレンチを設定して、土層断面を観察した。ここは斜面であるため堆積土が厚かったが、盛土は見られなかった。北側裾部平坦面の調査では、南側斜面で検出された弥生時代を中心とした各遺構は何ら検出されなかった。

裾部から 3.5*m*北側の位置までは東西方向に深さ50*cm*～90*cm*程の溝状の遺構が検出された。この溝状遺構の底面は平坦であり、北辺部には上幅約１*m* で東西方向に延びる溝状の掘り込みが設けられていた。

遺物は何ら検出されておらず、また遺構の性格、年代についても不明である。

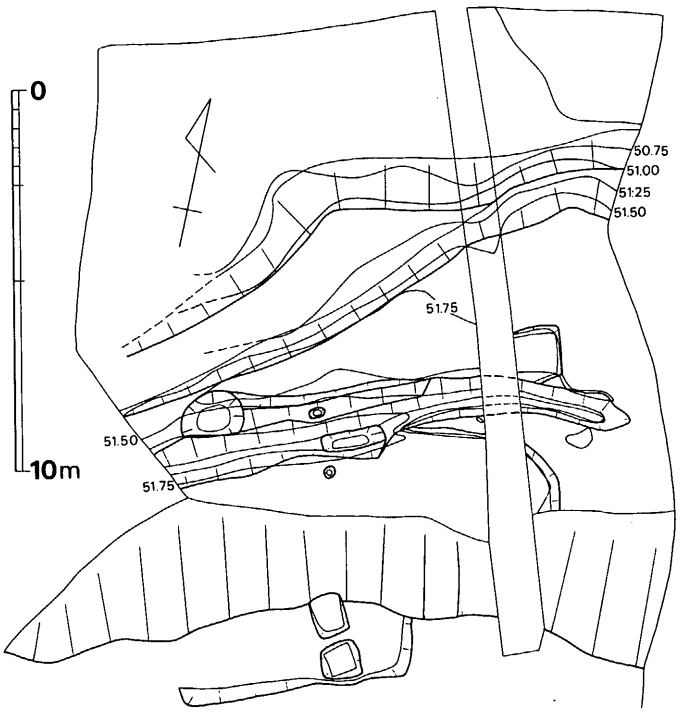


Fig. 164　北側裾部遺構実測図（縮尺１/200）

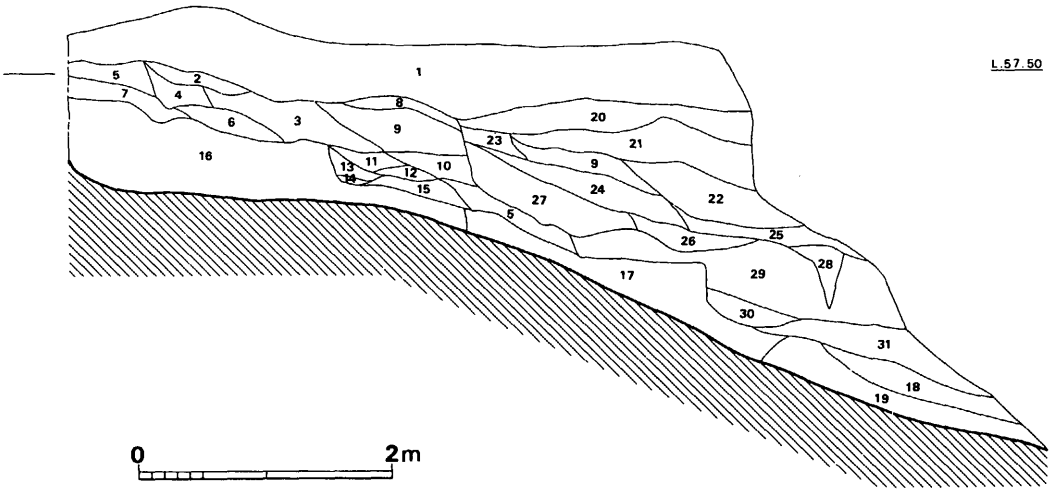


Fig. 165 北側斜面部土層断面図（縮尺 1/60）

Tab. 17 北側斜面部層位名称表

1	表　土	9	明赤褐色土	17	淡緑黄褐色砂質土（赤味を帯びる）	25	㉒より砂粒多し
2	淡黄褐色砂質土	10	赤褐色土	18	⑲よりも赤味を帯びる	26	灰赤褐色砂質土
3	②＋砂礫	11	明赤褐色土	19	暗緑褐色土	27	暗黄褐色粘質土
4	黄褐色砂質土	12	黄褐色土	20	暗緑黄褐色土	28	暗緑黄褐色砂質土
5	明黄褐色砂質土	13	淡黄褐色土	21	暗灰赤褐色土	29	明赤褐色弱粘質土
6	④＋砂礫	14	暗黄褐色土	22	暗赤褐色砂質土	30	明赤褐色弱粘質土
7	濃黄褐色砂質土	15	灰赤褐色土	23	暗黄褐色土	31	淡赤褐色弱粘質土
8	暗赤褐色土	16	緑黄褐色砂質土	24	淡赤褐色土		

遺物

鉄釘（Fig. 166－1・2）

13号袋状竪穴は半分以上を墓地遺構で切られており、鉄釘はこの墓地遺構の棺材に使われていたものと思われる。2本出土しており、頭部は方形で、釘断面も方形である。釘の下半部には長軸と平行に木質が遺存しており、頭部にはこれと直角方向に木質が遺存している。

刀子（Fig. 166－3）

茎部を欠損している。現存長85㎜、身幅14㎜、身厚4㎜である。身の先端部は細身となる。墓地遺構と思われる12号竪穴から出土した。

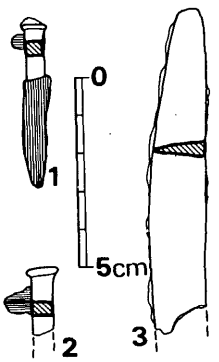


Fig. 166 鉄器実測図（縮尺 1/2）

住居跡埋土・周溝出土土器（Fig. 167, PL. 104）

土師器

１～４は１号住居跡覆土中から５・６は周溝から出土した。すべてヘラ切り底のものである。

皿（１～４）

１・２は１カ所からまとまって出土しており、土坑墓が壊されたものと思われる。１は底部と体部の境部は丸味を有している。器壁は一様に厚手造りであり、口縁端部は丸く造られている。内面の底部と体部の境は段がつく。調整は内外面の半分以上をヘラ磨きしている。褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土に小砂粒を含んでいる。口径13.3cm、器高3.9cmである。２は口径に比して器高が低い。口縁端部は丸く造られており、直下は凹湾する。底部と体部の境はシャープであり稜が入る。体部の底面近くはヘラ削りを施している。色調は茶褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土に多量の小砂粒を含む。口径14.2cm、器高3.0cmである。

３・４は住居跡覆土中の灰黒色土層から出土した。３の底面は平坦であり、体部は内湾気味に外反する。調整法は体部外面下半部はヘラ削りを施しており、これを除く体部内外面は横ナデを施している。色調は茶褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土は小砂粒を含む。口径13.1cm、器高3.0cmである。４の底部は若干上げ底気味であり、体部との境は鋭く稜がつく。体部外面下半部はヘラ削りを施しており、これを除く体部全面には横ナデを施す。色調は茶褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土に小砂粒を含む。口径13.9cm、器高2.7cmである。

杯（５・６）

５の底面はやや凹凸があり、体部は横ナデによる凹凸がみられる。調整法は底部内面はナデを、他は横ナデを施す。黄褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。口径12.7cm、器高3.6cmである。６は底部内面にヘラ記号を有している。体部はゆるやかに外反

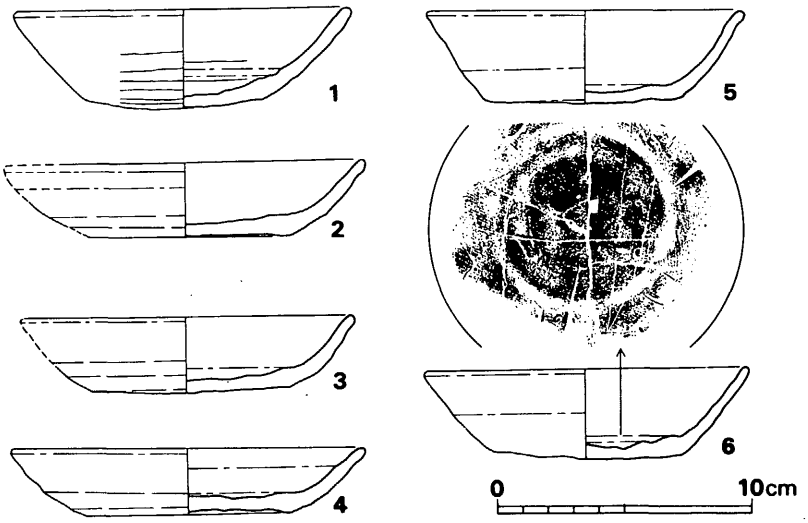


Fig. 167　住居跡埋土・周溝出土土師器（縮尺１/３）

し、口縁部のみ特に短く外反させている。黄褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含んでいる。口径12.7cm、器高3.5cm である。

1号住居跡覆土中出土の土師器皿は器形の相似する点や体部を横ナデ調整した上をさらにヘラ磨きしているものと、横ナデ調整のものとがあることからＳＥ1081・ＳＫ1084出土土師器と相似している。このことから1号住居跡覆土中の4個体の土師器は奈良時代に比定される。註(3)

つぎに周溝出土の土師器は前述の4号・6号土坑墓と同一時期のものであり、奈良時代末～平安時代初頭に比定される。

註1 「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」Ⅵ 福岡教育委員会 1975

2 「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」Ⅵ 福岡教育委員会 1975

3 「大宰府史跡」昭和51年度発掘調査概報 九州歴史資料館 1977

Tab. 18 道場山2地点出土土師器計測表

単位 cm

挿図番号		図版番号		口径	底径	器高	出土地
Fig.159	1	PL. 104	1	12.7	7.5	4.0	6号土坑墓
〃	2		2	12.7	7.0	4.0	〃
〃	3		3	13.3	7.7	3.5	〃
〃	4		4	13.0	8.4	3.8	4号土坑墓
〃	5		5	13.0	7.2	4.4	〃
167	1		8	13.3	6.8	3.9	1号住居跡覆土中
〃	2		9	14.2	7.9	3.0	〃
〃	3		10	13.1	7.8	3.0	〃
〃	4		11	13.9	8.0	2.7	〃
〃	5		6	12.7	7.9	3.6	周溝
〃	6		7	12.7	7,3	3.5	〃

表採須恵器・磁器 (Fig. 168)

須恵器

1は皿の小片である。器高1.3cmと浅いものである。底部外面は未調整であり、内面はナデを施す。他の部分は横ナデ調整である。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には大粒の砂粒を含んでおり、器表はザラつく。

白磁

２は椀の口縁部の小片である。口縁端部は短く外反し、上端面は平坦である。灰白色の胎土であり、乳白色の釉がかかる。

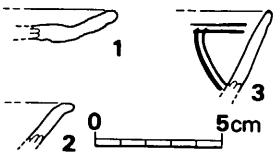


Fig. 168　表採須恵器・磁器実測図（縮尺１/３）

青磁

３は椀であり、口縁部から体部をわずかに残すのみである。内面にはヘラ削よる文様が入る。胎土は精選されていて良好であり、深緑色釉がかかる。

磁器は12世紀代のものと思われるが、遺構は何も検出されていない。また出土点数も少数であった。

銭貨（Fig. 169）

銅銭が全部で８枚検出されたが、いずれも表採品であった。その内訳は寛永通宝１枚と文久永宝３枚、それに宋銭の皇宋通宝２枚、熙寧元宝１枚、不明１枚である。それぞれの西暦年代又は初鋳造年代はつぎのとおりである。

皇宋通宝　初鋳造年代は宋代の1039年である。

熙寧元宝　初鋳造年代は宋代の1068年である。

寛永通宝　江戸時代であり、1624年～1643年が寛永年間である。

文久永宝　江戸時代であり、1861～1863年が文久年間である。

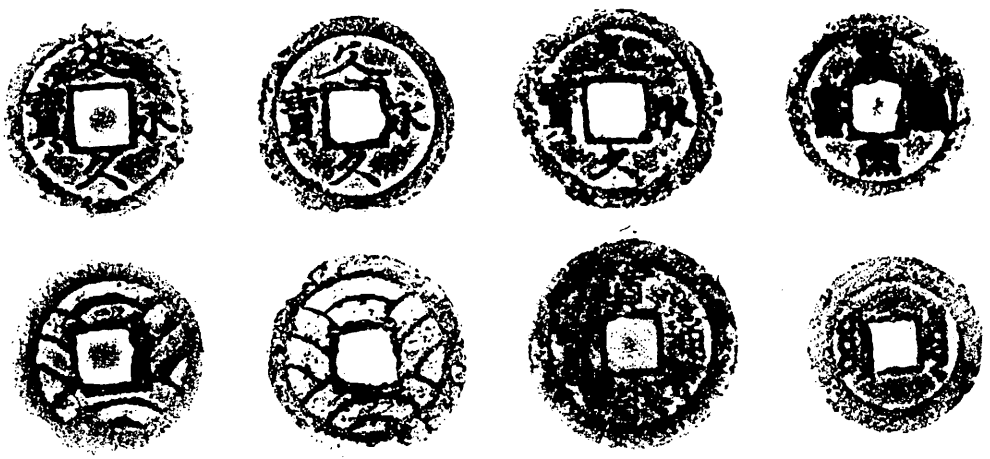


Fig. 169　銭貨拓影（実大）

3 小　結

道場山2地点からは、弥生時代前期、古墳時代前期、奈良時代、平安時代初頭、中世の遺構が検出された。

弥生時代の遺構としては前期の前半には木棺墓が営まれており、後半には土坑墓が所在する。前期末になると甕棺墓が営まれており10基検出された。さらに前期末の円形住居跡1軒と、これと同時期頃と思われる住居跡1軒、それに18基からなる貯蔵穴群。古墳時代前期のものとしては、方形周溝墓が1基検出された。奈良時代～平安時代前期には土坑墓が営まれており3基ほど確認された。中世のものとしては土坑墓が1基検出されている。

木棺墓

5基検出されており、そのうち副葬小壺を有するものは2基であった。木棺墓としたのは、墓坑底面に小口板や側板を使用したと思われる幅5*cm*程の粘土の詰った掘り込みがみられたためと、小口板や側板が炭化して残っていたためである。粘土帯は墓壙底面には見られたが、注意深く土層断面をみても側部・上部の構造を思わせる、土層の変化はみられなかった。木棺の組合せ方を考えるための底面の掘り込みや、木材の遺存状態をみると、側板のみの掘り込みは1号・3号・5号の3基であり、側板と小口板の掘り込みは2号に見られ、小口と側板の一部の炭化材は4号から検出された。これらから見た木棺の組み合わせ方は、両小口板が側板の外方にあってこれを挾む形態のもの（A式とする）は2号と4号である。なお、4号は小口板が側板の幅よりも長いものであるが、2号に関しては、側板の幅と同じなのか、長いのかの区別はつかない。1号・3号に関しては小口板の掘り込みが見られないので、組合せの形態は定かではないが、A式の可能性が大である。つぎに、両側板が小口を挾む形態のもの（B式とする）としては側板か墓坑のぎりぎり近くまでのびるという点から5号が相当するかも知れない。

主軸の方位は、1号・2号は同方向の東～西であるが、他はまちまちである。地形との関係は丘陵に平行に位置するものが3基、直交するものが1基である。

副葬品としては2基から板付I式に属する副葬小壺が原位置を保って出土している。出土位置から1つは棺内の可能性があり、1つは棺外に副葬されたものと考える。

土坑墓

3基検出されており、そのうち1基からは副葬小壺が出土した。1号・2号は長方形の平面形を呈しており、底面には方形状の小ピットを有している。3号は崖面となり半分程を欠損するが、前述の2基とは平面形がやや異なっておりりこれらと同時期のものがどうか疑わしいが、一応同時期のものとしてとりあつかった。副葬小壺は板付II式に属するものであり、底面からういた状態で出土しており、土坑墓の木蓋上面に置いたものが落ち込んだものと思われる。

甕棺墓

全部で10基検出されたが、保存の状態は良くなかった。このうち６号と９号甕棺墓は４号木棺墓を切っている。この４号木棺墓からは遺物が検出されたわけではないが、他の木棺墓、土坑墓から板付Ⅰ式、板付Ⅱ式の壺形土器を検出しており、これより後出するものと思われる。比較的保存状態のよいものからその特徴をみてみると、甕棺は壺形土器の大形化したものであり、その時期は前期の金海式や中・寺尾遺跡などの甕棺よりも若干古い時期に位置づけられよう。[註(1)][註(2)]

住居跡

円形と方形の住居跡が１軒づつ検出されたが、遺物の出土したのは、円形住居跡だけである。出土遺物を見ると、弥生時代前期末の土器多数と、石器が多数点である。石器の種類と点数を列記すると、石鏃68点（そのうち未製品は６点）・スクレイパー７点・ドリル６点・石核20数点・剥片数百点の夥しい量である。興味深い事は石斧の刃部を敲石として再利用しているものが数点みられる事であり、また石鏃の異様なまでの多さと未製品を含む事、さらには多量の石核・剥片を出土している事などから、この住居跡は石器の製作跡であったと言えよう。

袋状竪穴

貯蔵穴と考えられる袋状竪穴は18基検出された。平面形はおおむね方形と円形とに大別される。そのうちわけは方形のもの２基と円形のもの16基である。ほとんどが削平されているため正確な数値を知りえないが、深さはおおむね50cm～300cm の間である。断面形は、その平面形が方形のものは垂直の壁であり、円形のものは袋状を呈している。遺物はほとんどみられず、出土したものでも土器片程度であって、年代の決め手となるものは少なかった。

方形周溝墓

周溝は北から西にかけての二辺にのみ見られる。南の溝は傾斜面にあるため当初から存在しなかったのか、または新墓造営のため削られてしまったのか定かでないが、現存しない。東側は崖面となっているため旧状を知り得ないが、地形的には高所にあたるため溝を有していても不思議でない。

このように現況では、北と西にのみ溝の存在する形態が最小限考えられ、大塚初重、井上裕弘氏の言うⅦ類に相当するものである。しかしこの二辺の溝だけでは墓域を形成しえないが、東側の崖面で不明な部分は若干の地形の変化はあっても、本来から崖となっていたため必要なかったのか、それとも、消失したのかのどちらかであろう。[註(3)]そして前述の南辺は傾斜面のため溝を必要としなかったものと思われる。もしも、東側に溝が所在していたとなればⅥ類となる。

周溝墓の内部主体としては、積極的な根拠はないが、３号土坑墓はその可能性があろうか。

周溝墓の時期であるが、形態の上から見るとⅥ類・Ⅶ類はともに古墳時代前期に比定されており、Ⅵ類よりⅦ類、すなわち三辺に溝を有するものよりも、二辺にのみ溝を有するものが後[註(4)]

出する形態とされている。

つぎに周溝内出土の土器をみると、炭焼古墳群出土で4世紀中葉に位置づけられている炭焼3・4号墳出土の二重口縁の壺形土器よりも若干新[註(5)]しい様相を呈する。従ってこれよりは若干下った時期を比定できよう。さらに同報告書に掲載されている東小田塚本遺跡出土の二重口縁の土器は当遺跡出土Fig.157－1の土器に類似している。

以上の如く、出土土器から見た年代は4世紀後半頃に比定されよう。これと同時期のものとしては、当遺跡の北西1㎞の至近の距離に所在する唐人塚遺跡2－4号石蓋土坑墓出土の土師器甕があり、ここでは1つの墳丘中に箱式石棺墓・石蓋土坑墓・土坑墓が営まれ[註(6)]ていた。

歴代時代の土坑墓

3基検出されており、平面形はいずれも長方形を呈している。そのうち2基からは副葬品の土師器が検出されたが、いずれも床面からういており、棺外に副葬されていたものが、木蓋の腐蝕とともに落ち込んだ可能性が強い。

出土土器は太宰府町君畑遺跡2号墓出土品と形は似ている。この土器は御笠川南条坊遺跡土師器分類のⅠ－1B類土師器の時代[註(7)]に相当し、その年代は9世紀前半～9世紀中頃に比定されている。法量を見ると口径11.5㎝～12.2㎝、器高3.05㎝～3.0㎝である。しかるに道場山2地点4号・6号土坑墓出土土器は口経、器高ともに大きく、君畑2号墓とは若干異なる。

道場山2地点出土の4号～6号土坑墓は奈良時代末～平安時代初頭に比定されるものである。

註1　「中・寺尾遺跡」大野城市文化財調査報告書第1集　大野城市教育委員会　1977

2　橋口達也氏の御教示による。

3　「方形周溝墓の研究」大塚初重・井上裕弘　駿台史学24号

4　註3に同じ。

5　「岩焼古墳群」福岡県文化財調査報告書　第37集　1968

6　「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」　XⅧ　福岡県教育委員会　1977

7　「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第7集　福岡県教育委員会　1977

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 —XXV—
（本 文 篇）

昭和53年3月31日

発 行 福 岡 県 教 育 委 員 会
福岡市中央区西中洲6番29号

印 刷 赤 坂 印 刷 株 式 会 社
福岡市中央区大手門1丁目8番34号